# 芥川龍之介全集

第五巻

芥川龍之介全集

昭和二年五月二十四日撮影
（新潟高等學校に於て）

闇中問答　芥川龍之介

一

或声　お前は俺の思惑とは全然違つた人間だつた。

僕　それは僕の責任ではない。

或声　しかしお前はその誤解にお前自身も協力してゐる。

い。ではさやうなら。いつか又お前に会ひに来るから。

僕（一人になる。）芥川龍之介！芥川龍之介、お前の根をしつかりおろせ。お前は風に吹かれてゐる葦だ。空模様はいつ何時変るかも知れない。唯しつかり踏んばつてゐろ。それはお前自身の為だ。同時に又お前の子供たちの為だ。うぬ惚れるな。同時に卑屈にもなるな。これからお前はやり直すのだ。

「闇中問答」原稿

# 第五卷目錄

# 大導寺信輔の半生

——或精神的風景畫——

## 一　本所

大導寺信輔の生まれたのは本所の回向院の近所だつた。彼の記憶に殘つてゐるものに美しい町は一つもなかつた。美しい家も一つもなかつた。殊に彼の家のまはりは穴藏大工だの駄菓子屋だの古道具屋だのばかりだつた。それ等の家々に面した道も泥濘の絶えたことは一度もなかつた。おまけに又その道の突き當りはお竹倉の大溝だつた。南京藻の浮かんだ大溝はいつも惡臭を放つてゐた。彼は勿論かう言ふ町々に憂鬱を感ぜずにはゐられなかつた。しかし又、本所以外の町々は更に彼には不快だつた。しもた家の多い山の手を始め小綺麗な商店の軒を竝べた、江戸傳來の下町も何か彼を壓迫した。彼は本鄕や日本橋よりも寧ろ寂しい本所を――回向院を、駒止め橋を、横網を、割り下水を、榛の木馬場を、お竹倉の大溝を愛した。それは或は愛よりも憐みに近いものだつたかも知れない。が、憐みだつたにもせよ、三十年後の今日さへ時々彼の夢に入るものは

未だにそれ等の場所ばかりである……

　信輔はもの心を覺えてから、絶えず本所の町々を愛した。並み木もない本所の町々はいつも砂埃りにまみれてゐた。が、幼い信輔に自然の美しさを教へたのはやはり本所の町々だつた。彼はごみごみした往來に駄菓子を食つて育つた少年だつた。田舍は――殊に水田の多い、本所の東に開いた田舍はかう言ふ育ちかたをした彼には少しも興味を與へなかつた。それは自然の美しさよりも寧ろ自然の醜さを目のあたりに見せるばかりだつた。けれども本所の町々はたとひ自然には乏しかつたにもせよ、花をつけた屋根の草や水たまりに映つた春の雲に何かいぢらしい美しさを示した。彼はそれ等の美しさの爲にいつか自然を愛し出した。尤も自然の美しさに次第に彼の目を開かせたものは本所の町々には限らなかつた。本も、――彼の小學時代に何度も熱心に讀み返した蘆花の「自然と人生」やラボツクの飜譯「自然美論」も勿論彼を啓發した。しかし彼の自然を見る目に最も影響を與へたのは確かに本所の町々だつた。家々も樹木も往來も妙に見すぼらしい町町だつた。

　實際彼の自然を見る目に最も影響を與へたのは見すぼらしい本所の町々だつた。彼は後年本州

の國々へ時々短い旅行をした。が、荒あらしい木曾の自然は常に彼を不安にした。又優しい瀬戸内の自然も常に彼を退屈にした。彼はそれ等の自然よりも遙かに見すぼらしい自然を愛した。殊に人工の文明の中にかすかに息づいてゐる自然を愛した。三十年前の本所は割り下水の柳を、回向院の廣場を、お竹倉の雜木林を、——かう言ふ自然の美しさをまだ至る所に殘してゐた。彼は彼の友だちのやうに日光や鎌倉へ行かれなかつた。けれども毎朝父と一しよに彼の家の近所へ散歩に行つた。それは當時の信輔には確かに大きい幸福だつた。しかし又彼の友だちの前に得々と話して聞かせるには何か氣のひける幸福だつた。

　或朝焼けの消えかかつた朝、父と彼とはいつものやうに百本杭へ散歩に行つた。百本杭は大川の河岸でも特に釣り師の多い場所だつた。しかしその朝は見渡した所、一人も釣り師は見えなかつた。廣い河岸には石垣の間に舟蟲の動いてゐるばかりだつた。彼は父に今朝に限つて釣り師の見えぬ訣を尋ねようとした。が、まだ口を開かぬうちに忽ちその答を發見した。朝焼けの揺らめいた川波には坊主頭の死骸が一人、磯臭い水草や五味のからんだ亂杭の間に漂つてゐた。——彼は未だにありありとこの朝の百本杭を覺えてゐる。三十年前の本所は感じ易い信輔の心に無數の

追憶的風景畫を殘した。けれどもこの朝の百本杭は――この一枚の風景畫は同時に又本所の町々の投げた精神的陰影の全部だつた。

## 二　牛乳

信輔は全然母の乳を吸つたことのない少年だつた。元來體の弱かつた母は一粒種の彼を產んだ後さへ、一滴の乳も與へなかつた。のみならず乳母を養ふことも貧しい彼の家の生計には出來ない相談の一つだつた。彼はその爲に生まれ落ちた時から牛乳を飲んで育つて來た。それは當時の信輔には憎まずにはゐられぬ運命だつた。彼は每朝臺所へ來る牛乳の壜を輕蔑した。又何を知らぬにもせよ、母の乳だけは知つてゐる彼の友だちを羨望した。現に小學へはひつた頃、年の若い彼の叔母は年始か何かに來てゐるうちに乳の張つたのを苦にし出した。乳は眞鍮の嗽ひ茶碗へいくら絞つても出て來なかつた。叔母は眉をひそめたまま、半ば彼をからかふやうに「信ちやんに吸つて貰はうか？」と言つた。けれども牛乳に育つた彼は勿論吸ひかたを知る筈はなかつた。叔母はとうとう隣の子に――穴藏大工の女の子に固い乳房を吸つて貰つた。乳房は盛り上つた半球

の上へ青い靜脈をかがつてゐた。はにかみ易い信輔はたとひ吸ふことは出來たにもせよ、到底叔母の乳などを吸ふことは出來ないのに違ひなかつた。が、それにも關らずやはり隣の女の子を憎んだ。同時に又隣の女の子に乳を吸はせる叔母を憎んだ。この小事件は彼の記憶に重苦しい嫉妬ばかり殘してゐる。が、或はその外にも彼の Vita sexualis は當時にはじまつてゐたのかも知れない。……

信輔は壜詰めの牛乳の外に母の乳を知らぬことを恥ぢた。これは彼の祕密だつた。誰にも決して知らせることの出來ぬ彼の一生の祕密だつた。この祕密は又當時の彼には或迷信をも伴つてゐた。彼は只頭ばかり大きい、無氣味なほど瘦せた少年だつた。のみならずはにかみ易い上にも、磨ぎ澄ました肉屋の庖丁にさへ動悸の高まる少年だつた。その點は――殊にその點は伏見鳥羽の役に銃火をくぐつた、日頃膽勇自慢の父とは似ても似つかぬのに違ひなかつた。彼は一體何歳からか、又どう言ふ論理からか、この父に似つかぬことを牛乳の爲と確信してゐた。いや、體の弱いことをも牛乳の爲と確信してゐた。若し牛乳の爲とすれば、少しでも弱みを見せたが最後、彼の友だちは彼の祕密を看破してしまふのに違ひなかつた。彼はその爲にどう言ふ時でも彼の友だ

ちの挑戰に應じた。挑戰は勿論一つではなかつた。或時はお竹倉の大溝を棹も使はずに飛ぶことだつた。或時は回向院の大銀杏へ梯子もかけずに登ることだつた。或時は又彼等の一人と毆り合ひの喧嘩をすることだつた。信輔は大溝を前にすると、もう膝頭の震へるのを感じた。けれどもしつかり目をつぶつたまま、南京藻の浮かんだ水面を一生懸命に跳り越えた。この恐怖や逡巡は回向院の大銀杏へ登る時にも、彼等の一人と喧嘩をする時にもやはり彼を襲來した。しかし彼はその度に勇敢にそれ等を征服した。それは迷信に發したにもせよ、確かにスパルタ式の訓練だつた。このスパルタ式の訓練は彼の右の膝頭へ一生消えない傷痕を殘した。恐らくは彼の性格へも、——信輔は未だに威丈高になつた父の小言を覺えてゐる。——「貴樣は意氣地もない癖に、何をする時でも剛情でいかん。」

しかし彼の迷信は幸にも次第に消えて行つた。のみならず彼は西洋史の中に少くとも彼の迷信には反證に近いものを發見した。それは羅馬の建國者ロミュルスに乳を與へたものは狼であると言ふ一節だつた。彼は母の乳を知らぬことに爾來一層冷淡になつた。いや、牛乳に育つたことは寧ろ彼の誇りになつた。信輔は中學へはひつた春、年とつた彼の叔父と一しよに、當時叔父が經

營してゐた牧場へ行つたことを覺えてゐる。殊にやつと柵の上へ制服の胸をのしかけたまま、目の前へ歩み寄つた白牛に干し草をやつたことを覺えてゐる。牛は彼の顏を見上げながら、靜かに干し草へ鼻を出した。彼はその顏を眺めた時、ふとこの牛の瞳の中に何にか人間に近いものを感じた。空想?――或は空想かも知れない。が、彼の記憶の中には未だに大きい白牛が一頭、花を盛つた杏の枝の下に柵によつた彼を見上げてゐる。しみじみと、懷しさうに。……

## 三　貧困

信輔の家庭は貧しかつた。尤も彼等の貧困は棟割長屋に雜居する下流階級の貧困ではなかつた。が、體裁を繕ふ爲により苦痛を受けなければならぬ中流下層階級の貧困だつた。退職官吏だつた彼の父は多少の貯金の利子を除けば、一年に五百圓の恩給に女中とも家族五人の口を餬して行かなければならなかつた。その爲には勿論節儉の上にも節儉を加へなければならなかつた。彼等は玄關とも五間の家に――しかも小さい庭のある門構への家に住んでゐた。けれども新らしい着物などは誰一人滅多に造らなかつた。父は常に客にも出されぬ惡酒の晩酌に甘んじてゐた。母もや

はり羽織の下にはぎだらけの帯を隱してゐた。信輔も――信輔は未だにニスの臭い彼の机を覺えてゐる。机は古いのを買つたものの、上へ張つた綠色の羅紗も、銀色に光つた抽斗の金具も一見小綺麗に出來上つてゐた。が、實は羅紗も薄いし、抽斗も素直にあいたことはなかつた。これは彼の机よりも彼の家の象徵だつた。體裁だけはいつも繕はなければならぬ彼の家の生活の象徵だつた。……

信輔はこの貧困を憎んだ。いや、今もなほ當時の憎惡は彼の心の奧底に消し難い反響を殘してゐる。彼は本を買はれなかつた。夏期學校へも行かれなかつた。新らしい外套も着られなかつた。が、彼の友だちはいづれもそれ等を受用してゐた。彼は彼等を羨んだ。時には彼等を妬みさへした。しかしその嫉妬や羨望を自認することは肯じなかつた。それは彼等の才能を輕蔑してゐる爲だつた。けれども貧困に對する憎惡は少しもその爲に變らなかつた。彼は古疊を、薄暗いランプを、蔦の畫の剝げかかつた唐紙を、――あらゆる家庭の見すぼらしさを憎んだ。が、それはまだ好かつた。彼は只見すぼらしさの爲に彼を生んだ兩親を憎んだ。殊に彼よりも脊の低い、頭の禿げた父を憎んだ。父は度たび學校の保證人會議に出席した。信輔は彼の友だちの前にかう言ふ父

を見ることを恥ぢた。同時にまた肉身の父を恥ぢる彼自身の心の卑しさを恥ぢた。國木田獨歩を模倣した彼の「自ら欺かざるの記」はその黄ばんだ罫紙の一枚にかう言ふ一節を殘してゐる。——「予は父母を愛する能はず。否、愛する能はざるに非ず。父母その人は愛すれども、父母の外見を愛する能はず。貌を以て人を取るは君子の恥づる所也。況や父母の貌を云々するをや。然れども予は如何にするも父母の外見を愛する能はず。……」

けれどもかう言ふ見すぼらしさよりも更に彼の憎んだのは貧困に發した僞りだつた。母は「風月」の菓子折につめたカステラを親戚に進物にした。が、その中味は「風月」所か、近所の菓子屋のカステラだつた。父も、——如何に父は眞事しやかに「勤儉尚武」を敎へたであらう。父の敎へた所によれば、古い一冊の玉篇の外に漢和辭典を買ふことさへ、やはり「奢侈文弱」だつた! のみならず信輔自身も亦嘘に嘘を重ねることは必しも父母に劣らなかつた。それは一月五十錢の小遣ひを一錢でも餘計に貰つた上、何よりも彼の餓ゑてゐた本や雜誌を買ふ爲だつた。彼はつり錢を落したことにしたり、ノオト・ブツクを買ふことにしたり、學友會の會費を出すことにしたり、——あらゆる都合の好い口實のもとに父母の金錢を盜まうとした。それでもまだ金の足りない時

には巧みに兩親の歡心を買ひ、翌月の小遣ひを捲き上げようとした。就中彼に甘かつた老年の母に媚びようとした。勿論彼には彼自身の噓も兩親の噓のやうに不快だつた。しかし彼は噓をついた。大膽に狡猾に噓をついた。それは彼には何よりも先に必要だつたのに違ひなかつた。が、同時に又病的な愉快を、――何か神を殺すのに似た愉快を與へたのにも違ひなかつた。彼は確かにこの點だけは不良少年に接近してゐた。彼の「自ら欺かざるの記」はその最後の一枚にかう言ふ數行を殘してゐる。――

「獨歩は戀を戀すと言へり。予は憎惡を憎惡せんとす。貧困に對する、虛僞に對する、あらゆる憎惡を憎惡せんとす。……」

これは信輔の衷情だつた。彼はいつか貧困に對する憎惡そのものをも憎んでゐた。かう言ふ二重に輪を描いた憎惡は二十前の彼を苦しめつづけた。尤も多少の幸福は彼にも全然ない訣ではなかつた。彼は試驗の度ごとに三番か四番の成績を占めた。又或下級の美少年は求めずとも彼に愛を示した。しかしそれ等も信輔には曇天を洩れる日の光だつた。憎惡はどう言ふ感情よりも彼の心を壓してゐた。のみならずいつか彼の心へ消し難い痕跡を殘してゐた。彼は貧困を脫した後も、

貧困を憎まずにはゐられなかつた。同時に又貧困と同じやうに豪奢をも憎まずにはゐられなかつた。豪奢をも、——この豪奢に對する憎惡は中流下層階級の貧困の與へる烙印だつた。或は中流下層階級の貧困だけの與へる烙印だつた。彼は今日も彼自身の中にこの憎惡を感じてゐる。この貧困と鬪はなければならぬPetty Bourgeoisの道德的恐怖を。……

丁度大學を卒業した秋、信輔は法科に在學中の或友だちを訪問した。彼等は壁も唐紙も古びた八疊の座敷に話してゐた。その後へ顏を出したのは六十前後の老人だつた。信輔はこの老人の顏に、——アルコオル中毒の老人の顏に退職官吏を直覺した。

「僕の父。」

彼の友だちは簡單にかうその老人を紹介した。老人は寧ろ傲然と信輔の挨拶を聞き流した。それから奧へはひる前に、「どうぞ御ゆつくり。あすこに椅子もありますから」と言つた。成程二脚の肘かけ椅子は黑ずんだ緣側に竝んでゐた。が、それ等は腰の高い、赤いクッションの色の褪めた半世紀前の古椅子だつた。信輔はこの二脚の椅子に全中流下層階級を感じた。同時に又彼の友だちも彼のやうに父を恥ぢてゐるのを感じた。かう言ふ小事件も彼の記憶に苦しいほどはつきり

と殘つてゐる。思想は今後も彼の心に雜多の陰影を與へるかも知れない。しかし彼は何よりも先に退職官吏の息子だつた。下層階級の貧困よりもより虛僞に甘んじなければならぬ中流下層階級の貧困の生んだ人間だつた。

## 四　學校

學校も亦信輔には薄暗い記憶ばかり殘してゐる。彼は大學に在學中、ノオトもとらずに出席した二三の講義を除きさへすれば、どう言ふ學校の授業にも興味を感じたことは一度もなかつた。が、中學から高等學校、高等學校から大學と幾つかの學校を通り拔けることは僅かに貧困を脫出するたつた一つの救命袋だつた。尤も信輔は中學時代にはかう言ふ事實を認めなかつた。少くともはつきりとは認めなかつた。しかし中學を卒業する頃から、貧困の脅威は曇天のやうに信輔の心を壓しはじめた。彼は大學や高等學校にゐる時、何度も廢學を計畫した。けれどもこの貧困の脅威はその度に薄暗い將來を示し、無造作に實行を不可能にした。彼は勿論學校を憎んだ。殊に拘束の多い中學を憎んだ。如何に門衞の喇叭の音は刻薄な響を傳へたであらう。如何に又グラウ

ンドのポプラアは憂鬱な色に茂つてゐたであらう。信輔は其處に西洋歴史のデエトを、實驗もせぬ化學の方程式を、歐米の一都市の住民の數を、――あらゆる無用の小知識を學んだ。それは多少の努力さへすれば、必しも苦しい仕事ではなかつた。が、無用の小知識と言ふ事實をも忘れるのは困難だつた。ドストエフスキイは「死人の家」の中にたとへば第一のバケツの水をまづ第二のバケツへ移し、更に又第二のバケツの水を第一のバケツへ移すと言ふやうに、無用の勞役を強ひられた囚徒の自殺することを語つてゐる。信輔は鼠色の校舍の中に、――丈の高いポプラアの戰ぎの中にかう言ふ囚徒の經驗する精神的苦痛を經驗した。のみならず――

のみならず彼の教師と言ふものを最も憎んだのも中學だつた。教師は皆個人としては惡人ではなかつたに違ひなかつた。しかし「教育上の責任」は――殊に生徒を處罰する權利はおのづから彼等を暴君にした。彼等は彼等の偏見を生徒の心へ種痘する爲には如何なる手段をも選ばなかつた。現に彼等の或ものは、――達磨と言ふ諢名のある英語の教師は「生意氣である」と言ふ爲に度たび信輔に體刑を課した。が、その「生意氣である」所以は畢竟信輔の獨歩や花袋を讀んでゐることに外ならなかつた。又彼等の或ものは――それは左の眼に義眼をした國語漢文の教師だつた。この

教師は彼の武藝や競技に興味のないことを喜ばなかつた。その爲に何度も信輔を「お前は女か？」と嘲笑した。信輔は或時赫とした拍子に、「先生は男ですか？」と反問した。教師は勿論彼の不遜に嚴罰を課せずには措かなかつた。その外もう紙の黄ばんだ「自ら欺かざるの記」を讀み返して見れば、彼の屈辱を蒙つたことは枚擧し難い位だつた。自尊心の強い信輔は意地にも彼自身を守る爲に、いつもかう言ふ屈辱を反撥しなければならなかつた。さもなければあらゆる不良少年のやうに彼自身を輕んずるのに了るだけだつた。彼はその自彊術の道具を當然「自ら欺かざるの記」に求めた。――

「予の蒙れる惡名は多けれども、分つて三と爲すことを得べし。

「その一は文弱也。文弱とは肉體の力よりも精神の力を重んずるを言ふ。

「その二は輕佻浮薄也。輕佻浮薄とは功利の外に美なるものを愛するを言ふ。

「その三は傲慢也。傲慢とは妄に他の前に自己の所信を屈せざるを言ふ。」

しかし教師も悉く彼を迫害した訣ではなかつた。彼等の或ものは家族を加へた茶話會に彼を招待した。又彼等の或ものは彼に英語の小說などを貸した。彼は四學年を卒業した時、かう言ふ借

りものの小說の中に「獵人日記」の英譯を見つけ、歡喜して讀んだことを覺えてゐる。が、「教育上の責任」は常に彼等と人間同士の親しみを交へる妨害をした。それは彼等の好意を得ることにも何か彼等の權力に媚びる卑しさの潛んでゐる爲だつた。さもなければ彼等の同性愛に媚びる醜さの潛んでゐる爲だつた。彼は彼等の前へ出ると、どうしても自由に振舞はれなかつた。のみならず時には不自然に卷煙草の箱へ手を出したり、立ち見をした芝居を吹聽したりした。彼等は勿論この無作法を不遜の爲と解釋した。解釋するのも亦尤もだつた。彼は元來人好きのする生徒ではないのに違ひなかつた。彼の筐底の古寫眞は體と不吊合に頭の大きい、徒らに目ばかり赫かせた、病弱らしい少年を映してゐる。しかもこの顏色の惡い少年は絕えず毒を持つた質問を投げつけ、人の好い教師を惱ませることを無上の愉快としてゐるのだつた！

信輔は試驗のある度に學業はいつも高點だつた。が、所謂操行點だけは一度も六點を上らなかつた。彼は6と言ふアラビア數字に教員室中の冷笑を感じた。實際又教師の操行點を楯に彼を嘲つてゐるのは事實だつた。彼の成績はこの六點の爲にいつも三番を越えなかつた。彼はかう言ふ復讐を憎んだ。かう言ふ復讐をする教師を憎んだ。今も、――いや、今はいつのまにか當時の憎

惡を忘れてゐる。中學は彼には惡夢だつた。けれども惡夢だつたことは必しも不幸とは限らなかつた。彼はその爲に少くとも孤獨に堪へる性情を生じた。さもなければ彼の半生の歩みは今日よりもつと苦しかつたであらう。彼は彼の夢みてゐたやうに何冊かの本の著者になつた。しかし彼に與へられたものは畢竟落寞とした孤獨だつた。この孤獨に安んじた今日、――或はこの孤獨に安んずるより外に仕かたのないことを知つた今日、二十年の昔をふり返つて見れば、彼を苦しめた中學の校舍は寧ろ美しい薔薇色をした薄明りの中に横はつてゐる。尤もグラウンドのポプラアだけは不相變鬱々と茂つた梢に寂しい風の音を宿しながら。……

## 五　本

本に對する信輔の情熱は小學時代から始まつてゐた。この情熱を彼に敎へたものは父の本箱の底にあつた帝國文庫本の水滸傳だつた。頭ばかり大きい小學生は薄暗いランプの光のもとに何度も「水滸傳」を讀み返した。のみならず本を開かぬ時にも替天行道の旗や景陽岡の大虎や菜園子張靑の梁に吊つた人間の腿を想像した。想像？――しかしその想像は現實よりも一層現實的だ

つた。彼は又何度も木劍を提げ、干し菜をぶら下げた裏庭に「水滸傳」中の人物と、——一丈青扈三娘や花和尚魯智深と格闘した。この情熱は三十年間、絶えず彼を支配しつづけた。彼は度たび本を前に夜を徹したことを覺えてゐる。いや、几上、車上、厠上、——時には路上にも熱心に本を讀んだことを覺えてゐる。木劍は勿論「水滸傳」以來二度と彼の手に取られなかつた。が、彼は本の上に何度も笑つたり泣いたりした。それは言はば轉身だつた。本の中の人物に變ることだつた。彼は天竺の佛のやうに無數の過去生を通り拔けた。イヴアン・カラマゾフを、ハムレツトを、公爵アンドレエを、ドン・ジユアンを、メフイストフエレスを、ライネツケ狐を、——しかもそれ等の或ものは一時の轉身には限らなかつた。現に或晩秋の午後、彼は小遣ひを貰ふ爲に年とつた叔父を訪問した。叔父は長州萩の人だつた。彼はことさらに叔父の前に滔々と維新の大業を論じ、上は村田清風から下は山縣有朋に至る長州の人材を讃嘆した。が、この虚僞の感激に充ちた顏色の蒼白い高等學校の生徒は當時の大導寺信輔よりも寧ろ若いジユリアン・ソレル——「赤と黑」の主人公だつた。

かう言ふ信輔は當然又あらゆるものを本の中に學んだ。少くとも本に負ふ所の全然ないものには

一つもなかつた。實際彼は人生を知る爲に街頭の行人を眺めなかつた。寧ろ行人を眺める爲に本の中の人生を知らうとした。それは或は人生を知るには迂遠の策だつたのかも知れなかつた。が、街頭の行人は彼には只行人だつた。彼は彼等を知る爲には、――彼等の愛を、彼等の憎惡を、彼等の虛榮心を知る爲には本を讀むより外はなかつた。本を、――殊に世紀末の歐羅巴の產んだ小說や戲曲を。彼はその冷たい光の中にやつと彼の前に展開する人間喜劇を發見した。いや、或は善惡を分たぬ彼自身の魂をも發見した。それは人生には限らなかつた。彼は本所の町々に自然の美しさを發見した。しかし彼の自然を見る目に多少の鋭さを加へたのはやはり何冊かの愛讀書、――就中元祿の俳諧だつた。彼はそれ等を讀んだ爲に「都に近き山の形」を、「鬱金畠の秋の風」を、「沖の時雨の眞帆片帆」を、「闇のかた行く五位の聲」を、――本所の町々の敎へなかつた自然の美しさをも發見した。この「本から現實へ」は常に信輔には眞理だつた。彼は彼の半生の間に何人かの女に戀愛を感じた。けれども彼等は誰一人女の美しさを敎へなかつた。少くとも本に學んだ以外の女の美しさを敎へなかつた。彼は日の光を透かした耳や頰に落ちた睫毛の影をゴオティエやバルザツクやトルストイに學んだ。女は今も信輔にはその爲に美しさを傳へてゐる。若しそれ等に

學ばなかつたとすれば、彼は或は女の代りに牝ばかり發見してゐたかも知れない。……

尤も貧しい信輔は到底彼の讀むだけの本を自由に買ふことは出來なかつた。彼のかう言ふ困難をどうにかかうにか脫したのは第一に圖書館のおかげだつた。第二に貸本屋のおかげだつた。第三に吝嗇の譏さへ招いた彼の節儉のおかげだつた。彼ははつきりと覺えてゐる。――大溝に面した貸本屋を、人の好い貸本屋の婆さんを、婆さんの內職にする花簪を。婆さんはやつと小學へ入つた「坊ちやん」の無邪氣を信じてゐた。が、その「坊ちやん」はいつの間にか本を探がす風を裝ひながら、偸み讀みをすることを發明してゐた。彼は又はつきりと覺えてゐる。――古本屋ばかりごみごみ竝んだ二十年前の神保町通りを、その古本屋の屋根の上に日の光を受けた九段坂の斜面を。勿論當時の神保町通りは電車も馬車も通じなかつた。彼は――十二歲の小學生は辨當やノオト・ブツクを小脇にしたまま、大橋圖書館へ通ふ爲に何度もこの通りを往復した。道のりは往復一里半だつた。大橋圖書館から帝國圖書館へ。彼は帝國圖書館の與へた第一の感銘をも覺えてゐる。――高い天井に對する恐怖を、大きい窓に對する恐怖を、無數の椅子を埋め盡した無數の人々に對する恐怖を。が、恐怖は幸ひにも二三度通ふうちに消滅した。彼は忽ち閱覽室に、鐵の

階段に、カタロオグの箱に、地下の食堂に親しみ出した。それから大學の圖書館や高等學校の圖書館へ。彼はそれ等の圖書館に何百冊とも知れぬ本を借りた。又それ等の本の中に何十冊とも知れぬ本を愛した。しかし――

しかし彼の愛したのは――殆ど内容の如何を問はずに本そのものを愛したのはやはり彼の買つた本だつた。信輔は本を買ふ爲めにカフエへも足を入れなかつた。が、彼の小遣ひは勿論常に不足だつた。彼はその爲めに一週に三度、親戚の中學生に數學(!)を敎へた。それでもまだ金の足りぬ時はやむを得ず本を賣りに行つた。けれども賣り價は新らしい本でも買ひ價の半ば以上になつたことはなかつた。のみならず永年持つてゐた本を古本屋の手に渡すことは常に彼には悲劇だつた。彼は或薄雪の夜、神保町通りの古本屋を一軒一軒覗いて行つた。その内に或古本屋に「ツアラトストラ」を一冊發見した。それも只の「ツアラトストラ」ではなかつた。二月ほど前に彼の賣つた手垢だらけの「ツアラトストラ」だつた。彼は店先きに佇んだまま、この古い「ツアラトストラ」を所どころ讀み返した。すると讀み返せば讀み返すほど、だんだん懷しさを感じだした。

「これはいくらですか?」

十分ばかり立つた後、彼は古本屋の女主人にもう「ツアラトストラ」を示してゐた。

「一圓六十錢、――御愛嬌に一圓五十錢にして置きませう。」

信輔はたつた七十錢にこの本を賣つたことを思ひ出した。が、やつと賣り價の二倍、――一圓四十錢に値切つた末、とうとうもう一度買ふことにした。雪の夜の往來は家々も電車も何か微妙に靜かだつた。彼はかう言ふ往來をはるばる本所へ歸る途中、絶えず彼の懷ろの中に鋼鐵色の表紙をした「ツアラトストラ」を感じてゐた。しかし又同時に口の中には何度も彼自身を嘲笑してゐた。……

## 六　友だち

信輔は才能の多少を問はずに友だちを作ることは出來なかつた。たとひどう言ふ君子にもせよ、素行以外に取り柄のない青年は彼には用のない行人だつた。いや、寧ろ顏を見る度に揶揄せずにはゐられぬ道化者だつた。それは操行點六點の彼には當然の態度に違ひなかつた。彼は中學から高等學校、高等學校から大學と幾つかの學校を通りぬける間に絶えず彼等を嘲笑した。勿論彼等

の或ものは彼の嘲笑を憤つた。しかし又彼等の或ものは彼の嘲笑を感ずる爲にも餘りに模範的君子だつた。彼は「厭な奴」と呼ばれることには常に多少の愉快を感じた。が、如何なる嘲笑も更に手答へを與へないことには彼自身憤らずにはゐられなかつた。現にかう言ふ君子の一人――或高等學校の文科の生徒はリヴイングストンの崇拜者だつた。同じ寄宿舍にゐた信輔は或時彼に眞事しやかにバイロンも亦リヴイングストン傳を讀み、泣いてやまなかつたと言ふ出たらめを話した。爾來二十年を閲した今日、このリヴイングストンの崇拜者は或基督教會の機關雜誌に不相變リヴイングストンを讚美してゐる。のみならず彼の文章はかう言ふ一行に始まつてゐる。――「惡魔的詩人バイロンさへ、リヴイングストンの傳記を讀んで涙を流したと言ふことは何を我々に教へるであらうか?」!

信輔は才能の多少を問はずに友だちを作ることは出來なかつた。たとひ君子ではないにもせよ、智的貪慾を知らない青年はやはり彼には路傍の人だつた。彼は彼の友だちに優しい感情を求めなかつた。彼の友だちは青年らしい心臟を持たぬ青年でも好かつた。いや、所謂親友は寧ろ彼には恐怖だつた。その代りに彼の友だちは頭腦を持たなければならなかつた。頭腦を、――がつしり

と出來上つた頭腦を。彼はどう言ふ美少年よりもかう言ふ頭腦の持ち主を愛した。同時に又どう言ふ君子よりもかう言ふ頭腦の持ち主を憎んだ。實際彼の友情はいつも幾分か愛の中に憎悪を孕んだ情熱だつた。信輔は今日もこの情熱以外に友情のないことを信じてゐる。少くともこの情熱以外に Herr und Knecht の臭味を帶びない友情のないことを信じてゐる。況んや當時の友だちは一面には相容れぬ死敵だつた。彼は彼の頭腦を武器に、絶えず彼等と格鬪した。ホイツトマン、自由詩、創造的進化、――戰場は殆ど到る所にあつた。彼はそれ等の戰場に彼の友だちを打ち倒したり、彼の友だちに打ち倒されたりした。この精神的格鬪は何よりも殺戮の歡喜の爲に行はれたものに違ひなかつた。しかしおのづからその間に新しい觀念や新らしい美の姿を現したことも事實だつた。如何に午前三時の蠟燭の炎は彼等の論戰を照らしてゐたか、如何に又武者小路實篤の作品は彼等の論戰を支配してゐたか、――信輔は鮮かに九月の或夜、何匹も蠟燭へ集つて來た、大きい灯取蟲を覺えてゐる。灯取蟲は深い闇の中から突然きらびやかに生まれて來た。が、炎に觸れるが早いか、嘘のやうにぱたぱたと死んで行つた。これは何も今更のやうに珍しがる價のないことかも知れない。しかし信輔は今日もなほこの小事件を思ひ出す度に、――この不思議に美

しい灯取蟲の生死を思ひ出す度に、なぜか彼の心の底に多少の寂しさを感ずるのである。……

信輔は才能の多少を問はずに友だちを作ることは出來なかつた。標準は只それだけだつた。しかしやはりこの標準にも全然例外のない訣ではなかつた。それは彼の友だちと彼との間を截斷する社會的階級の差別だつた。信輔は彼と育ちの似寄つた中流階級の青年には何のこだはりも感じなかつた。が、纔かに彼の知つた上流階級の青年には、――時には中流上層階級の青年にも妙に他人らしい憎惡を感じた。彼等の或ものは怠惰だつた。彼等の或ものは臆病だつた。又彼等の或ものは官能主義の奴隷だつた。けれども彼の憎んだのは必しもそれ等の爲ばかりではなかつた。いや、寧ろそれ等よりも何か漠然としたものの爲だつた。尤も彼等の或ものも彼等自身意識せずにこの「何か」を憎んでゐた。その爲に又下流階級に、――彼等の社會的對蹠點に病的な憧憬を感じてゐた。彼は彼等に同情した。しかし彼の同情も畢竟役には立たなかつた。この「何か」は握手する前にいつも針のやうに彼の手を刺した。或風の寒い四月の午後、高等學校の生徒だつた彼は彼等の一人、――或男爵の長男と江の島の崖の上に佇んでゐた。目の下はすぐに荒磯だつた。彼等は「潜り」の少年たちの爲に何枚かの銅貨を投げてやつた。少年たちは銅貨の落ちる度にぽんぽ

ん海の中へ跳りこんだ。しかし一人海女だけは崖の下に焚いた芥火の前に笑つて眺めてゐるばかりだつた。

「今度はあいつも飛びこませてやる。」

彼の友だちは一枚の銅貨を卷煙草の箱の銀紙に包んだ。それから體を反らせたと思ふと、精一ばい銅貨を投げ飛ばした。銅貨はきらきら光りながら、風の高い浪の向うへ落ちた。するともう海女はその時にはまつ先に海へ飛びこんでゐた。信輔は未だにありありと口もとに殘酷な微笑を浮べた彼の友だちを覺えてゐる。彼の友だちは人並み以上に語學の才能を具へてゐた。しかし又確かに人並み以上に鋭い犬齒をも具へてゐた。……

附記。この小説はもうこの三四倍續けるつもりである。今度揭げるだけに「大導寺信輔の半生」と言ふ題は相當しないのに違ひないが、他に替る題もない爲にやむを得ず用ひることにした。「大導寺信輔の半生」の第一篇と思つて頂けば幸甚である。大正十三年十二月九日、作者記。

（大正十三年十二月）

# 早春

大學生の中村は薄い春のオヴア・コオトの下に彼自身の體溫を感じながら、仄暗い石の階段を博物館の二階へ登つていつた。階段を登りつめた左にあるのは爬蟲類の標本室である。中村は其處へはひる前に、ちよつと金の腕時計を眺めた。腕時計の針は幸ひにもまだ二時になつてゐない。存外遲れずにすんだものだ、――中村はかう思ふうちにも、ほつとすると言ふよりは損をした氣もちに近いものを感じた。

　爬蟲類の標本室はひつそりしてゐる。看守さへ今日は歩いてゐない。その中に唯薄ら寒い防蟲劑の臭ひばかり漂つてゐる。中村は室内を見渡した後、深呼吸をするやうに體を伸ばした。それから大きい硝子戸棚の中に太い枯れ木をまいてゐる南洋の大蛇の前に立つた。この爬蟲類の標本室は丁度去年の夏以來、三重子と出合ふ場所に定められてゐる。これは何も彼等の好みの病的だつた爲ではない。只人目を避ける爲にやむを得ず此處を選んだのである。公園、カフエ、ステエ

ション——それ等はいづれも氣の弱い彼等に當惑を與へるばかりだつた。殊に肩上げをおろしたばかりの三重子は當惑以上に思つたかも知れない。彼等は無數の人々の視線の彼等の背中に集まるのを感じた。いや、彼等の心臟さへはつきりと人目に映ずるのを感じた。しかしこの標本室へ來れば、剝製の蛇や蜥蜴の外に誰一人彼等を見るものはない。たまに看守や觀覽人に遇つても、じろじろ顏を見られるのはほんの數秒の間だけである。……

落ち合ふ時間は二時である。腕時計の針もいつの間にか丁度二時を示してゐた。けふも十分と待たせる筈はない。——中村はかう考へながら、爬蟲類の標本を眺めて行つた。しかし生憎彼の心は少しも喜びに躍つてゐない。寧ろ何か義務に對する諦めに似たものに充たされてゐる。彼もあらゆる男性のやうに三重子に倦怠を感じ出したのであらうか？　けれども倦怠を生ずる爲には同一のものに面しなければならぬ。今日の三重子は幸か不幸か全然昨日の三重子ではない。昨日の三重子は、——山手線の電車の中に彼と目禮だけ交換した三重子は如何にもしとやかな女學生だつた。いや、最初に彼と一しよに井の頭の公園へ出かけた三重子もまだ何處かもの優しい寂しさを帶びてゐたものである。……

中村はもう一度腕時計を眺めた。腕時計は二時五分過ぎである。彼はちよつとためらつた後、隣り合つた鳥類の標本室へはひつた。カナリヤ、錦鷄鳥、蜂雀、——美しい大小の剝製の鳥は硝子越しに彼を眺めてゐる。三重子もかう言ふ鳥のやうに形骸だけを殘したまま、魂の美しさを失つてしまつた。彼ははつきり覺えてゐる。三重子はこの前會つた時にはチウイン・ガムばかりしやぶつてゐた。その又前に會つた時にもオペラの唄ばかり歌つてゐた。殊に彼を驚かせたのは一月ほど前に會つた三重子である。三重子はさんざんにふざけた揚句、フツト・ボオルと稱しながら、枕を天井へ蹴上げたりした。……

腕時計は二時十五分である。中村はため息を洩らしながら、爬蟲類の標本室へ引返した。が、三重子は何處にも見えない。彼は何か氣輕になり、目の前の大蜥蜴に「失敬」をした。大蜥蜴は明治何年か以來、永久に小蛇を啣へてゐる。永久に——しかし彼は永久にではない。腕時計の二時半になつたが最後、さつさと博物館を出るつもりである。櫻はまださいてゐない。が、兩大師前にある木などは曇天を透かせた枝々に赤い蕾を綴つてゐる。かういふ公園を散歩するのは三重子と何處かへ出かけるよりも數等幸福といはなければならぬ。……

二時二十分！　もう十分待ちさへすれば好い。彼は歸りたさをこらへたまま、標本室の中を歩きまはつた。熱帶の森林を失つた蜥蜴や蛇の標本は妙にはかなさを漂はせてゐる。これは或は象徴かも知れない。いつか情熱を失つた彼の戀愛の象徴かも知れない。彼は三重子に忠實だつた。が、三重子は半年の間に少しも見知らぬ不良少女になつた。彼の熱情を失つたのは全然三重子の責任である。少くとも幻滅の結果である。決して倦怠の結果などではない。……

中村は二時半になるが早いか、爬蟲類の標本室を出ようとした。しかし戸口へ來ないうちにくるりと靴の踵を返した。三重子は或ひはひと足違ひにこの部屋へはひつて來るかも知れない。それでは三重子に氣の毒である。氣の毒？――いや、氣の毒ではない。彼は三重子に同情するよりも彼自身の義務感に惱まされてゐる。この義務感を安んずる爲にはもう十分ばかり待たなければならぬ。なに、三重子は必ず來ない。待つても待たなくてもけふの午後は愉快に獨り暮らせる筈である。……

爬蟲類の標本室は今も不相變ひつそりしてゐる。看守さへ未だにまはつて來ない。その中に只薄ら寒い防蟲劑の臭ひばかり漂つてゐる。中村はだんだん彼自身に或苛立たしさを感じ出した。

三重子は畢竟不良少女である。が、彼の戀愛は全然冷え切つてゐないのかも知れない。さもなければ彼はとうの昔に博物館の外を歩いてゐたのであらう。尤も情熱は失つたにもせよ、慾望は殘つてゐる筈である。慾望？――しかし慾望ではない。彼は今になつて見ると、確に三重子を愛してゐる。三重子は枕を蹴上げたりした。けれどもその足は色の白いばかりか、しなやかに指を反らせてゐる。殊にあの時の笑ひ聲は――彼は小首を傾けた三重子の笑ひ顔を思ひ出した。

二時四十分。

二時四十五分。

三時。

三時五分。

三時十分になつた時である。中村は春のオヴア・コオトの下にしみじみと寒さを感じながら、人氣のない爬蟲類の標本室を後ろに石の階段を下りて行つた。いつも丁度日の暮のやうに仄暗い石の階段を。

×　×　×　×　×　×

その日も電燈のともり出した時分、中村は或カフエの隅に彼の友だちと話してゐた。彼の友だちは堀川といふ小說家志望の大學生である。彼等は一杯の紅茶を前に自動車の美的價値を論じたり、セザンヌの經濟的價値を論じたりした。が、それ等にも疲れた後、中村は金口に火をつけながら、殆ど他人の身の上のやうにけふの出來事を話し出した。

「莫迦だね、俺は。」

話しを終つた中村はつまらなさうにかうつけ加へた。

「ふん、莫迦がるのが一番莫迦だね。」

堀川は無造作に冷笑した。それから又忽ち朗讀するやうにこんなことをしやべり出した。

「君はもう歸つてしまふ。爬蟲類の標本室はがらんとしてゐる。其處へ、——時間はいくらもたたない。やつと三時十五分位だね、其處へ顏の靑白い女學生が一人はひつて來る。勿論看守も誰もゐない。女學生は蛇や蜥蜴の中にいつまでもぢつと佇んでゐる。あすこは存外暮れ易いだらう。

そのうちに光は薄れて來る。閉館の時刻もせまつて來る。けれども女學生は同じやうにいつまでもぢつと佇んでゐる。——と考へれば小說だがね。尤も氣の利いた小說ぢやない。三重子なぞものは好いとしても、君を主人公にしてゐた日には……」

中村はにやにや笑ひ出した。

「三重子も生憎肥つてゐるのだよ。」

「君よりもか?」

「莫迦を言へ。俺は二十三貫五百目さ。三重子は確か十七貫位だらう。」

十年はいつか流れ去つた。中村は今ベルリンの三井か何かに勤めてゐる。三重子もとうに結婚したらしい。小說家堀川保吉は或婦人雜誌の新年號の口繪に偶然三重子を發見した。三重子はその寫眞の中に大きいピアノを後ろにしながら、男女三人の子供と一しよにいづれも幸福さうに頰笑んでゐる。容色はまだ十年前と大した變りも見えないのであらう。目かたも、——保吉はひそかに惧れてゐる、目かただけはことによると、二十貫を少し越えたかも知れない。……

(大正十四年一月)

# 馬の脚

この話の主人公は忍野半三郎と言ふ男である。生憎大した男ではない。北京の三菱に勤めてゐる三十前後の會社員である。半三郎は商科大學を卒業した後、二月目に北京へ來ることになつた。同僚や上役の評判は格別善いと言ふほどではない。しかし又惡いと言ふほどでもない。まづ平々凡々たることは半三郎の風采の通りである。もう一つ次手につけ加へれば、半三郎の家庭生活の通りである。

半三郎は二年前に或令孃と結婚した。令孃の名前は常子である。これも生憎戀愛結婚ではない。或親戚の老人夫婦に仲人を頼んだ媒妁結婚である。常子は美人と言ふほどではない。尤も又醜婦と言ふほどでもない。只まるまる肥つた頰にいつも微笑を浮かべてゐる。奉天から北京へ來る途中、寢臺車の南京蟲に螫された時の外はいつも微笑を浮かべてゐる。しかももう今は南京蟲に二度と螫される心配はない。それは××胡同の社宅の居間に蝙蝠印の除蟲菊が二罐、ちやんと具へ

つけてあるからである。

わたしは半三郎の家庭生活は平々凡々を極めてゐると言つた。實際その通りに違ひない。彼は只常子と一しよに飯を食つたり、蓄音機をかけたり、活動寫眞を見に行つたり、――あらゆる北京中の會社員と變りのない生活を營んでゐる。しかし彼等の生活も運命の支配に漏れる訣には行かない。運命は或眞晝の午後、この平々凡々たる家庭生活の單調を一撃のもとにうち碎いた。三菱會社員忍野半三郎は腦溢血の爲に頓死したのである。

半三郎はやはりその午後にも東單牌樓の社の机にせつせと書類を調べてゐた。机を向かひ合はせた同僚にも格別異狀などは見えなかつたさうである。が、一段落ついたと見え、卷煙草を口へ啣へたまま、マツチをすらうとする拍子に突然俯伏しになつて死んでしまつた。如何にもあつけない死にかたである。しかし世間は幸ひにも死にかたには餘り批評をしない。批評をするのは生きかただけである。半三郎もその爲に格別非難を招かずにすんだ。いや、非難所ではない。上役や同僚は未亡人常子にいづれも深い同情を表した。

同仁病院長山井博士の診斷に從へば、半三郎の死因は腦溢血である。が、半三郎自身は不幸

にも腦溢血とは思つてゐない。第一死んだとも思つてゐない。只いつか見たことのない事務室へ來たのに驚いてゐる。――

事務室の窓かけは日の光の中にゆつくりと風に吹かれてゐる。尤も窓の外は何も見えない。事務室のまん中の大机には白い大掛兒を着た支那人が二人、差し向かひに帳簿を檢らべてゐる。一人はまだ二十前後であらう。もう一人はやや黄ばみかけた、長い口髭をはやしてゐる。

そのうちに二十前後の支那人は帳簿へペンを走らせながら、目も擧げずに彼へ話しかけた。

「アアル・ユウ・ミスタア・ヘンリイ・バレツト・アアント・ユウ?」

半三郎はびつくりした。が、出來るだけ悠然と北京官話の返事をした。「我は是日本三菱公司の忍野半三郎」と答へたのである。

「おや、君は日本人ですか?」

やつと目を擧げた支那人はやはり驚いたやうにかう言つた。年とつたもう一人の支那人も帳簿へ何か書きかけたまま、茫然と半三郎を眺めてゐる。

「どうしませう? 人違ひですが。」

「困る。實に困る。第一革命以來一度もないことだ。」

年とつた支那人は怒つたと見え、ぶるぶる手のペンを震はせてゐる。

「兎に角早く返してやり給へ。」

「君は――ええ、忍野君ですね。ちよつと待つて下さいよ。」

二十前後の支那人は新らたに厚い帳簿をひろげ、何か口の中に讀みはじめた。が、その帳簿をとざしたと思ふと、前よりも一層驚いたやうに年とつた支那人へ話しかけた。

「駄目です。忍野半三郎君は三日前に死んでゐます。」

「三日前に死んでゐる?」

「しかも脚は腐つてゐます。兩脚とも腿から腐つてゐます。」

半三郎はもう一度びつくりした。彼等の問答に從へば、第一に彼は死んでゐる。第二に死後三日を經てゐる。第三に脚は腐つてゐる。そんな莫迦げたことのある筈はない。現に彼の脚はこの通り、――彼は脚を眺めるが早いか、思はずあつと大聲を出した。大聲を出したのも不思議ではない。折り目の正しい白ズボンに白靴をはいた彼の脚は窓からはひる風の爲めに二つとも斜めに

靡いてゐる！　彼はかう言ふ光景を見た時、殆ど彼の目を信じなかつた。が、兩手にさはつて見ると、實際兩脚とも腿から下は空氣を摑むのと同じことである。半三郎はとうとう尻もちをついた。同時に又脚は――と言ふよりもズボンは丁度ゴム風船のしなびたやうにへなへなと床の上へ下りた。

「よろしい。よろしい。どうにかして上げますから。」

年とつた支那人はかう言つた後、まだ餘憤の消えないやうに若い下役へ話しかけた。

「これは君の責任だ。好いかね。君の責任だ。早速上申書を出さなければならん。そこでだ。そこでヘンリイ・バレツトは現在どこに行つてゐるかね？」

「今調べた所によると、急に漢口へ出かけたやうです。」

「では漢口へ電報を打つてヘンリイ・バレツトの脚を取り寄せよう。」

「いや、それは駄目でせう。漢口から脚の來るうちには忍野君の胴が腐つてしまひます。」

「困る。實に困る。」

年とつた支那人は歎息した。何だか急に口髭さへ一層だらりと下つたやうである。

「これは君の責任だ。早速上申書を出さなければならん。生憎乗客は殘つてゐまいね？」
「ええ、一時間ばかり前に立つてしまひました。尤も馬ならば一匹ゐますが。」
「何處の馬かね？」
「德勝門外の馬市の馬です。今しがた死んだばかりですから。」
「ぢやその馬の脚をつけよう。馬の脚でもないよりは好い。ちよつと脚だけ持つて來給へ。」
二十前後の支那人は大机の前を離れると、すうつと何處かへ出て行つてしまつた。半三郎は三度びつくりした。何でも今の話によると、馬の脚をつけられるらしい。馬の脚などになつた日には大變である。彼は尻もちをついたまま、年とつた支那人に歎願した。
「もしもし、馬の脚だけは勘忍して下さい。わたしは馬は大嫌ひなのです。どうか後生一生のお願ひですから、人間の脚をつけて下さい。ヘンリイ何とかの脚でもかまひません。少々位毛脛でも人間の脚ならば我慢しますから。」
年とつた支那人は氣の毒さうに半三郎を見下しながら、何度も點頭を繰り返した。
「それはあるならばつけて上げます。しかし人間の脚はないのですから。――まあ、災難とお諦

めなさい。しかし馬の脚は丈夫ですよ。時々蹄鐵を打ちかへれば、どんな山道でも平氣ですよ。……」

するともう若い下役は馬の脚を二本ぶら下げたなり、すうつと又どこかからはひつて來た。丁度ホテルの給仕などの長靴を持つて來るのと同じことである。半三郎は逃げようとした。しかし兩脚のない悲しさには容易に腰を上げることも出來ない。そのうちに下役は彼の側へ來ると、白靴や靴下を外し出した。

「それはいけない。馬の脚だけはよしてくれ給へ。第一僕の承諾を經ずに僕の脚を修繕する法はない。……」

半三郎のかう喚いてゐるうちに下役はズボンの右の穴へ馬の脚を一本さしこんだ。馬の脚は齒でもあるやうに右の腿へ食らひついた。それから今度は左の穴へもう一本の脚をさしこんだ。これも亦かぷりと食らひついた。

「さあ、それでよろしい。」

二十前後の支那人は滿足の微笑を浮かべながら、爪の長い兩手をすり合せてゐる。半三郎はぼ

んやり彼の脚を眺めた。するといつか白ズボンの先には太い栗毛の馬の脚が二本、ちやんともう蹄を並べてゐる。——

半三郎は此處まで覺えてゐる。少くともその先は此處までのやうにはつきりと記憶には殘つてゐない。何だか二人の支那人と喧嘩したやうにも覺えてゐる。又嶮しい梯子段を轉げ落ちたやうにも覺えてゐる。が、どちらも確かではない。兎に角彼はえたいの知れない幻の中を彷徨した後やつと正氣を恢復した時には××胡同の社宅に据ゑた寢棺の中に橫たはつてゐた。のみならず丁度寢棺の前には若い本願寺派の布教師が一人、引導か何かを渡してゐた。

かう言ふ半三郎の復活の評判になつたのは勿論である。「順天時報」はその爲に大きい彼の寫眞を出したり、三段拔きの記事を揭げたりした。何でもこの記事に從へば、喪服を着た常子はふだんよりも一層にこにこしてゐたさうである。或上役や同僚は無駄になつた香奠を會費に復活祝賀會を開いたさうである。尤も山井博士の信用だけは危險に瀕したのに違ひない。が、博士は悠然と葉卷の煙を輪に吹きながら、巧みに信用を恢復した。それは醫學を超越する自然の神祕を力說したのである。つまり博士自身の信用の代りに醫學の信用を拋棄したのである。

けれども當人の半三郎だけは復活祝賀會へ出席した時さへ、少しも浮いた顏を見せなかつた。見せなかつたのも勿論、不思議ではない。彼の脚は復活以來いつの間にか馬の脚に變つてゐたのである。指の代りに蹄のついた栗毛の馬の脚に變つてゐたのである。彼はこの脚を眺める度に何とも言はれぬ情なさを感じた。萬一この脚の見つかつた日には會社も必ず半三郎を馘首してしまふのに違ひない。同僚も今後の交際は御免を蒙るのにきまつてゐる。常子も――おお、「弱きものよ汝の名は女なり」！　常子も恐らくはこの例に洩れず、馬の脚などになつた男を御亭主に持つてはゐないであらう。――半三郎はかう考へる度に、どうしても彼の脚だけは隱さなければならぬと決心した。和服を廢したのもその爲である。長靴をはいたのもその爲である。浴室の窓や戸じまりを嚴重にしたのもその爲である。しかし彼はそれでもなほ絶えず不安を感じてゐた。又不安を感じたのも無理ではなかつたのに違ひない。なぜと言へば、――

半三郎のまづ警戒したのは同僚の疑惑を避けることである。これは彼の苦心の中でも比較的樂な方だつたかも知れない。が、彼の日記によれば、やはりいつも多少の危險と闘はなければならなかつたやうである。

「七月×日　どうもあの若い支那人のやつは怪しからぬ脚をくつけたものである。俺の脚は兩方とも蚤の巣窟と言つても好い。俺は今日も事務を執りながら、氣違ひになる位痒い思ひをした。兎に角當分は全力を擧げて蚤退治の工夫をしなければならぬ。……

「八月×日　俺は今日マネエヂヤアの所へ商賣のことを話しに行つた。するとマネエヂヤアは話の中にも絶えず鼻を鳴らせてゐる。どうも俺の脚の臭ひは長靴の外にも發散するらしい。……

「九月×日　馬の脚を自由に制御することは確かに馬術よりも困難である。俺は今日午休み前に急ぎの用を言ひつけられたから、小走りに梯子段を走り下りた。誰でもかう言ふ瞬間には用のことしか思はぬものである。俺もその爲にいつの間にか馬の脚を忘れてゐたのであらう。あつと言ふ間に俺の脚は梯子段の七段目を踏み拔いてしまつた。……

「十月×日　俺はだんだん馬の脚を自由に制御することを覺え出した。これもやつと體得して見ると、畢竟腰の吊り合一つである。が、今日は失敗した。尤も今日の失敗は必しも俺の罪ばかりではない。俺は今朝九時前後に人力車に乘つて會社へ行つた。すると車夫は十二錢の賃錢をどうしても二十錢よこせと言ふ。おまけに俺をつかまへたなり、會社の門内へはひらせまいとする。

俺は大いに腹が立つたから、いきなり車夫を蹴飛ばしてやつた。車夫の空中へ飛び上つたことはフツト・ボオルかと思ふ位である。俺は勿論後悔した。同時に又思はず噴飯した。兎に角脚を動かす時には一層細心に注意しなければならぬ。……」

　しかし同僚を瞞着するよりも常子の疑惑を避けることは遙かに困難に富んでゐたらしい。半三郎は彼の日記の中に絶えずこの困難を痛嘆してゐる。

「七月×日　俺の大敵は常子である。俺は文化生活の必要を楯に、たつた一つの日本間をとうとう西洋間にしてしまつた。かうすれば常子の目の前でも靴を脱がずにゐられるからである。常子は疊のなくなつたことを大いに不平に思つてゐるらしい。が、靴足袋をはいてゐるにもせよ、この脚で日本間を歩かせられるのは到底俺には不可能である。……

「九月×日　俺は今日道具屋にダブル・ベツドを賣り拂つた。このベツドを買つたのは或亞米利加人のオオクションである。俺はあのオオクションへ行つた歸りに租界の並み木の下を歩いて行つた。並み木の槐は花盛りだつた。運河の水明りも美しかつた。しかし――今はそんなことに戀戀としてゐる場合ではない。俺は昨夜もう少しで常子の横腹を蹴る所だつた。……

「十一月×日　俺は今日洗濯物を俺自身洗濯屋へ持つて行つた。尤も出入りの洗濯屋ではない。東安市場の側の洗濯屋である。これだけは今後も實行しなければならぬ。猿股やズボン下や靴下にはいつも馬の毛がくつついてゐるから。……

「十二月×日　靴下の切れることは非常なものである。實は常子に知られぬやうに靴下代を工面するだけでも並み大抵の苦勞ではない。……

「二月×日　俺は勿論寢る時でも靴下やズボン下を脫いだことはない。その上常子に見られぬやうに脚の先を毛布に隱してしまふのはいつも容易ならぬ冒險である。常子は昨夜寢る前に「あなたはほんとうに寒がりね。腰へも毛皮を卷いていらつしやるの？」と言つた。ことによると俺の馬の脚も露見する時が來たのかも知れない。……」

半三郎はこの外にも幾多の危險に遭遇した。それを一一枚擧するのは到底わたしの堪へる所ではない。が、半三郎の日記の中でも最もわたしを驚かせたのは下に揭げる出來事である。

「二月×日　俺は今日午休みに隆福寺の古本屋を覗きに行つた。古本屋の前の日だまりには馬車が一臺止まつてゐる。尤も西洋の馬車ではない。藍色の幌を張つた支那馬車である。馭者も勿論

馬車の上に休んでゐたのに違ひない。が、俺は格別氣にも止めずに古本屋の店へはひらうとした。するとその途端である。馭者は鞭を鳴らせながら、「スオ、スオ」と聲をかけた。「スオ」は馬を後にやる時に支那人の使ふ言葉である。馬車はこの言葉の終らぬうちにがたがた後へ下り出した。と同時に驚くまいことか！　俺も古本屋を前に見たまま、一足づつ後へ下り出した。この時の俺の心もちは恐怖と言ふか、驚愕と言ふか、到底筆舌に盡すことは出來ない。俺は徒らに一足でも前へ出ようと努力しながら、しかも恐しい不可抗力のもとにやはり後へ下つて行つた。そのうちに馭者の「スオ」と言つたのはまだしも俺の爲には幸福である。俺は馬車の止まる拍子にやつと後ずさりをやめることが出來た。しかし不思議はそれだけではない。俺はほつと一息しながら、思はず馬車の方へ目を轉じた。すると馬は――馬車を牽いてゐた葦毛の馬は何とも言はれぬ嘶きかたをした。何とも言はれぬ？――いや、何とも言はれぬではない。俺はその疳走つた聲の中に確かに馬の笑つたのを感じた。馬のみならず俺の喉もとにも嘶きに似たものをこみ上げるのを感じた。この聲を出しては大變である。俺は兩耳へ手をやるが早いか、一散に其處を逃げ出してしまつた。……」

けれども運命は半三郎の爲に最後の打擊を用意してゐた。と言ふのは外でもない。三月の末の或午頃、彼は突然彼の脚の躍つたり跳ねたりするのを發見したのである。なぜ彼の馬の脚はこの時急に騷ぎ出したか？　その疑問に答へる爲には半三郎の日記を調べなければならぬ。が、不幸にも彼の日記は丁度最後の打擊を受ける一日前に終つてゐる。只前後の事情により、大體の推測は下せぬこともない。わたしは馬政紀、馬記、元亨療牛馬駝集、伯樂相馬經等の諸書に從ひ、彼の脚の興奮したのはかう言ふ爲だつたと確信してゐる。――

當日は烈しい黃塵だつた。黃塵とは蒙古の春風の北京へ運んで來る砂埃りである。「順天時報」の記事によれば、當日の黃塵は十數年來未だ嘗見ない所であり、「五步の外に正陽門を仰ぐも、既に門樓を見る可からず」と言ふのであるから、餘程烈しかつたのに違ひない。然るに半三郎の馬の脚は德勝門外の馬市の斃馬についてゐた脚であり、その又斃馬は明らかに張家口、錦州を通つて來た蒙古產の庫倫馬である。すると彼の馬の脚の蒙古の空氣を感ずるが早いか、忽ち躍つたり跳ねたりし出したのは寧ろ當然ではないであらうか？　且又當時は塞外の馬の必死に交尾を求めながら、縱橫に駈けまはる時期である。して見れば彼の馬の脚がぢつとしてゐるのに忍びなかつ

たのも同情に價すると言はなければならぬ。……

この解釋の是非は兎も角、半三郎は當日會社にゐた時も、舞踏か何かするやうに絶えず跳ねまはつてゐたさうである。又社宅へ歸る途中も、たつた三町ばかりの間に人力車を七臺踏みつぶしたさうである。最後に社宅へ歸つた後も、——何でも常子の話によれば、彼は犬のやうに喘ぎながら、よろよろ茶の間へはひつて來た。それからやつと長椅子にかけると、あつけにとられた細君に細引を持つて來いと命令した。常子は勿論夫の容子に大事件の起つたことを想像した。第一顏色も非常に惡い。のみならず苛立たしさに堪へないやうに長靴の脚を動かしてゐる。彼女はその爲めにいつものやうに微笑することも忘れたなり、一體細引を何にするつもりか、聞かしてくれと歎願した。しかし夫は苦しさうに額の汗を拭ひながら、かう繰り返すばかりである。

「早くしてくれ。早く。——早くしないと、大變だから。」

常子はやむを得ず荷造りに使ふ細引を一束夫へ渡した。すると彼はその細引に長靴の兩脚を縛りはじめた。彼女の心に發狂と言ふ恐怖のきざしたのはこの時である。常子は夫を見つめたまま、震へる聲に山井博士の來診を請ふことを勸め出した。しかし彼は熱心に細引を脚へからげながら、

どうしてもその勸めに從はない。
「あんな藪醫者に何がわかる？　あいつは泥棒だ！　大詐僞師だ！　それよりもお前、此處へ來て俺の體を抑へてゐてくれ。」
彼等は互に抱き合つたなり、ぢつと長椅子に坐つてゐた。北京を蔽つた黃塵は愈烈しさを加へるのであらう。今は入り日さへ窓の外に全然光と言ふ感じのしない、濁つた朱の色を漂はせてゐる。半三郎の脚はその間も勿論靜かにしてゐる訣ではない。細引にぐるぐる括られたまま、目に見えぬペダルを踏むやうにやはり絕えず動いてゐる。常子は夫を劬はるやうに、又夫を勵ますやうにいろいろのことを話しかけた。
「あなた、あなた、どうしてそんなに震へていらつしやるんです？」
「何でもない。何でもないよ。」
「だつてこんなに汗をかいて、――この夏は內地へ歸りませうよ。ねえ、あなた、久しぶりに內地へ歸りませうよ。」
「うん、內地へ歸ることにしよう。內地へ歸つて暮らすことにしよう。」

五分、十分、二十分、——時はかう言ふ二人の上に遅い歩みを運んで行つた。常子は「順天時報」の記者にこの時の彼女の心もちは丁度鎖に繋がれた囚人のやうだつたと話してゐる。が、彼是三十分の後、畢に鎖の斷たれる時は來た。尤もそれは常子の所謂鎖の斷たれる時ではない。半三郎を家庭へ縛りつけた人間の鎖の斷たれる時である。濁つた朱の色を透かせた窓は流れ風にでも煽られたのか、突然がたがたと鳴り渡つた。と同時に半三郎は何か大聲を出すが早いか、三尺ばかり宙へ飛び上つた。常子はその時細引のばらりと切れるのを見たさうである。半三郎は、——これは常子の話ではない。彼女は夫の飛び上るのを見たぎり、長椅子の上に失神してしまつた。しかし社宅の支那人のボオイはかう同じ記者に話してゐる。——半三郎は何かに追はれるやうに社宅の玄關へ躍り出した。それからほんの一瞬間、玄關の先に佇んでゐた。が、身震ひを一つすると、丁度馬の嘶きに似た、氣味の惡い聲を殘しながら、往來を罩めた黃塵の中へまつしぐらに走つて行つてしまつた。……

その後の半三郎はどうなつたか？　それは今日でも疑問である。尤も「順天時報」の記者は當日の午後八時前後、黃塵に煙つた月明りの中に帽子をかぶらぬ男が一人、萬里の長城を見るのに名

高い八達嶺下の鐵道線路を走つて行つたことを報じてゐる。が、この記事は必しも確實な報道ではなかつたらしい。現に又同じ新聞の記者はやはり午後八時前後、黄塵を沾した雨の中に帽子をかぶらぬ男が一人、石人石馬の列をなした十三陵の大道を走つて行つたことを報じてゐる。すると半三郎は××胡同の社宅の玄關を飛び出した後、全然何處へどうしたか、判然しないと言はなければならぬ。

半三郎の失踪も彼の復活と同じやうに評判になつたのは勿論である。しかし常子、マネエヂヤア、同僚、山井博士、「順天時報」の主筆等はいづれも彼の失踪を發狂の爲と解釋した。尤も發狂の爲と解釋するのは馬の脚の爲と解釋するのよりも容易だつたのに違ひない。難を去つて易に就くのは常に天下の公道である。この公道を代表する「順天時報」の主筆牟多口氏は半三郎の失踪した翌日、その椽大の筆を揮つて下の社説を公にした。――

「三菱社員忍野半三郎氏は昨夕五時十五分、突然發狂したるが如く、常子夫人の止むるを聽かず、單身いづこにか失踪したり。同仁病院長山井博士の説によれば、忍野氏は昨夏腦溢血を患ひ、三日間人事不省なりしより、爾來多少精神に異狀を呈せるものならんと言ふ。又常子夫人の發見

したる忍野氏の日記に徴するも、氏は常に奇怪なる恐迫觀念を有したるが如し。然れども吾人の問はんと欲するは忍野氏の病名如何にあらず。常子夫人の夫たる忍野氏の責任如何にあり。

「夫れわが金甌無缺の國體は家族主義の上に立つものなり。家族主義の上に立つものとせば、一家の主人たる責任の如何に重大なるかは問ふを待たず。この一家の主人にして妄に發狂する權利ありや否や？　吾人は斯る疑問の前に斷乎として否と答ふるものなり。試みに天下の夫にして發狂する權利を得たりとせよ。彼等は悉家族を後に、或は道塗に行吟し、或は山澤に逍遙し、或は又精神病院裡に飽食暖衣するの幸福を得べし。然れども世界に誇るべき二千年來の家族主義は土崩瓦解するを免れざるなり。語に曰、其罪を惡んで其人を惡まずと。吾人は素より忍野氏に酷ならんとするものにあらざるなり。然れども輕忽に發狂したる罪は鼓を鳴らして責めざるべからず。否、忍野氏の罪のみならんや。發狂禁止令を等閑に附せる歴代政府の失政をも天に替つて責めざるべからず。

「常子夫人の談によれば、夫人は少くとも一ケ年間、××胡同の社宅に止まり、忍野氏の歸るを待たんとするよし。吾人は貞淑なる夫人の爲に滿腔の同情を表すると共に、賢明なる三菱當事者

の爲に夫人の便宜を考慮するに吝かならざらんことを切望するものなり。……」
しかし少くとも常子だけは半年ばかりたつた後、この誤解に安んずることの出來ぬ或新事實に遭遇した。それは北京の柳や槐も黄ばんだ葉を落としはじめる十月の或薄暮である。常子は茶の間の長椅子にぼんやり追憶に沈んでゐた。彼女の脣はもう今では永遠の微笑を浮かべてゐない。彼女の頰もいつの間にかすつかり肉を失つてゐる。彼女は失踪した夫のことだの、賣り拂つてしまつたダブル・ベツドのことだの、南京蟲のことだのを考へつづけた。すると誰かためらひ勝ちに社宅の玄關のベルを押した。彼女はそれでも氣にもせずにボオイの取り次ぎに任かせて措いた。が、ボオイはどこへ行つたか、容易に姿を現さない。ベルはその内にもう一度鳴つた。常子はやつと長椅子を離れ、靜かに玄關へ歩いて行つた。
落ち葉の散らばつた玄關には帽子をかぶらぬ男が一人、薄明りの中に佇んでゐる。帽子を、――いや、帽子をかぶらぬばかりではない。男は確かに砂埃りにまみれたぼろぼろの上衣を着用してゐる。常子はこの男の姿に殆ど恐怖に近いものを感じた。
「何か御用でございますか？」

男は何とも返事をせずに髪の長い頭を垂れてゐる。常子はその姿を透かして見ながら、もう一度恐る恐る繰り返した。

「何か、……何か御用でございますか？」

男はやつと頭を擡げた。

「常子、……」

それはたつた一ことだつた。しかし丁度月光のやうにこの男を、――この男の正體を見る見る明らかにする一ことだつた。常子は息を呑んだまま、少時は聲を失つたやうに男の顔を見つめつづけた。男は髭を伸ばした上、別人のやうに窶れてゐる。が、彼女を見てゐる瞳は確かに待ちに待つた瞳だつた。

「あなた！」

常子はかう叫びながら、夫の胸へ縋らうとした。けれども一足出すが早いか、熱鐵か何かを踏んだやうに忽ち又後ろへ飛びすさつた。夫は破れたズボンの下に毛だらけの馬の脚を露はしてゐる。薄明りの中にも毛色の見える栗毛の馬の脚を露してゐる。

「あなた！」

常子はこの馬の脚に名狀の出來ぬ嫌惡を感じた。しかし今を逸したが最後、二度と夫に會はれぬことを感じた。夫はやはり悲しさうに彼女の顏を眺めてゐる。常子はもう一度夫の胸へ彼女の體を投げかけようとした。が、嫌惡はもう一度彼女の勇氣を壓倒した。

「あなた！」

彼女は三度目にかう言つた時、夫はくるりと背を向けたと思ふと、靜かに玄關をおりて行つた。常子は最後の勇氣を振ひ、必死に夫へ追ひ縋らうとした。が、まだ一足も出さぬうちに彼女の耳にはひつたのは戞々と蹄の鳴る音である。常子は青い顏をしたまま、呼びとめる勇氣も失つたやうにぢつと夫の後ろ姿を見つめた。それから、――玄關の落ち葉の中に昏々と正氣を失つてしまつた。……

常子はこの事件以來、夫の日記を信ずるやうになつた。しかしマネエヂヤア、同僚、山井博士、半多口氏等の人びとは未だに忍野半三郎の馬の脚になつたことを信じてゐない。のみならず常子の馬の脚を見たのも幻覺に陷つたことと信じてゐる。わたしは北京滯在中、山井博士や半多口氏

に會ひ、度たびその妄を破らうとした。が、いつも反對の嘲笑を受けるばかりだつた。その後も、――いや、最近には小說家岡田三郞氏も誰かからこの話を聞いたと見え、どうも馬の脚になつたことは信ぜられぬと言ふ手紙をよこした。岡田氏は若し事實とすれば、「多分馬の前脚をとつてつけたものと思ひますが、スペイン速步とか言ふ妙技を演じ得る逸足ならば、前脚で物を蹴る位の變り藝もするか知れず、それとても湯淺少佐あたりが乘るのでなければ、果して馬自身でやり了せるかどうか、疑問に思はれます」と言ふのである。わたしも勿論その點には多少の疑惑を抱かざるを得ない。けれどもそれだけの理由の爲に半三郞の日記ばかりか、常子の話をも否定するのは聊か早計に過ぎないであらうか？　現にわたしの調べた所によれば、彼の復活を報じた「順天時報」は同じ面の二三段下にかう言ふ記事をも揭げてゐる。――

「美華禁酒會長ヘンリイ・バレツト氏は京漢鐵道の汽車中に頓死したり。同氏は藥罎を手に死しゐたるより、自殺の疑ひを生ぜしが、罎中の水藥は分析の結果、アルコオル類と判明したるよし。」

（大正十四年一月）

# 春

# 一

或花曇りの朝だつた。廣子は京都の停車場から東京行の急行列車に乗つた。それは結婚後二年ぶりに母親の機嫌を伺ふ爲もあれば、母かたの祖父の金婚式へ顏をつらねる爲もあつた。しかしまだその外にもまん更用のない體ではなかつた。彼女は丁度この機會に、妹の辰子の戀愛問題にも解決をつけたいと思つてゐた。妹の希望をかなへるにしろ、或は又かなへないにしろ、兎に角或解決だけはつけなければならぬと思つてゐた。

この問題を廣子の知つたのは四五日前に受け取つた辰子の手紙を讀んだ時だつた。廣子は年ごろの妹に戀愛問題の起つたことは格別意外にも思はなかつた。豫期したと言ふほどではなかつたにしろ、當然とは確かに思つてゐた。けれどもその戀愛の相手に篤介を選んだと言ふことだけは意外に思はずにはゐられなかつた。廣子は汽車に揺られてゐる今でも、篤介のことを考へると、

何か急に妹との間に谷あひの出來たことを感ずるのだつた。

篤介は廣子にも顏馴染みのある或洋畫研究所の生徒だつた。處女時代の彼女は妹と一しよに、この畫の具だらけの青年をひそかに「猿」と諢名してゐた。彼は實際顏の赤い、妙に目ばかり赫かせた、――つまり猿じみた青年だつた。のみならず身なりも貧しかつた。彼は冬も金釦の制服に古いレエン・コオトをひつかけてゐた。廣子は勿論篤介に何の興味も感じなかつた。辰子も――辰子は姉に比べると、一層彼を好まぬらしかつた。或は寧ろ積極的に憎んでゐたとも云はれるほどだつた。一度なども辰子は電車に乘ると、篤介の隣りに坐ることになつた。それだけでも彼女には愉快ではなかつた。其處へ又彼は膝の上の新聞紙包みを擴げると、せつせとパンを嚙ぢり出した。電車の中の人々の目は云ひ合せたやうに篤介へ向つた。彼女は彼女自身の上にも殘酷にその目の注がれるのを感じた。しかし彼は目じろぎもせずに悠々とパンを食ひつづけるのだつた。

……

「野蠻人よ、あの人は。」

廣子はこのことのあつて後、かう辰子の罵つたのを今更のやうに思ひ出した。なぜその篤介を

愛するやうになつたか？——それは廣子には不可解だつた。けれども妹の氣質を思へば、一旦篤介を愛し出したが最後、どの位情熱に燃えてゐるかは大抵想像出來るやうな氣がした。辰子は物故した父のやうに、何ごとにも一圖になる氣質だつた。たとへば油畫を始めた時にも、彼女の夢中になりさ加減は家族中の豫想を超越してゐた。彼女は華奢な畫の具箱を小脇に、篤介と同じ研究所へ毎日せつせと通ひ出した。同時に又彼女の居間の壁には一週に必ず一枚づつ新しい油畫がかかり出した。油畫は六號か八號のカンヴアスに人體ならば顏ばかりを、風景ならば西洋風の建物を描いたのが多いやうだつた。廣子は結婚前の何箇月か、——殊に深い秋の夜などにはさう云ふ油畫の並んだ部屋に何時間も妹と話しこんだ。辰子はいつも熱心にゴオグとかセザンヌとかの話をした。當時何處かに上演中だつた武者小路氏の戲曲の話もした。廣子も美術だの文藝だのに全然興味のない訣ではなかつた。しかし彼女の空想は藝術とは殆ど緣のない未來の生活の上に休み勝ちだつた。目はその間も額緣に入れた机の上の玉葱だの、繃帶をした少女の顏だの、芋畠の向うに連つた監獄の壁だのを眺めながら。……

「何と言ふの、あなたの畫の流儀は？」

廣子はそんなことを尋ねた爲に辰子を怒らせたのを思ひ出した。尤も妹に怒られることは必ずしも珍らしい出來事ではなかつた。彼等は藝術の見かたは勿論、生活上の問題などにも意見の違ふことは度たびあつた。現に或時は武者小路氏の戲曲さへ言ひ合ひの種になつた。その戲曲は失明した兄の爲に犧牲的の結婚を敢てする妹のことを書いたものだつた。廣子はこの上演を見物した時から、(彼女はよくよく退屈しない限り、小說や戲曲を讀んだことはなかつた。)藝術家肌の兄を好まなかつた。たとひ失明してゐたにしろ、按摩にでも何にでもなれば好いのに、妹の犧牲を受けてゐるのは利己主義者であるとも極言した。辰子は姉とは反對に兄にも妹にも同情してゐた。姉の意見は嚴肅な悲劇をわざと喜劇に飜譯する世間人の遊戲であるなどとも言つた。かう言ふ言ひ合ひのつのつた末には二人ともきつと怒り出した。けれどもさきに怒り出すのはいつも辰子にきまつてゐた。廣子は其處に彼女自身の優越を感ぜずにはゐられなかつた。それは辰子よりも人間の心を看破してゐると言ふ優越だつた。或は辰子ほど空疎な理想に捉はれてゐないと言ふ優越だつた。

「姉さん。どうか今夜だけはほんたうの姉さんになつて下さい。聰明ないつもの姉さんではなし

に。」
三度目に廣子の思ひ出したのは妹の手紙の一行だつた。その手紙は不相變白い紙を細かいペンの字に埋めてゐた。しかし篤介との關係になると、殆ど何ごとも書いてなかつた。唯念入りに繰り返してあるのは彼等は互に愛し合つてゐると云ふ、簡單な事實ばかりだつた。廣子は勿論行の間に彼等の關係を讀まうとした。實際又さう思つて讀んで行けば、疑はしい個所もないではなかつた。けれども再應考へて見ると、それも皆彼女の邪推らしかつた。廣子は今もとりとめのない苛立たしさを感じながら、もう一度何か憂鬱な篤介の姿を思ひ浮べた。すると急に篤介の匂――篤介の體の發散する匂は干し草に似てゐるやうな氣がし出した。彼女の經驗に誤りがなければ、干し草の匂のする男性は大抵淺ましい動物的の本能に富んでゐるらしかつた。廣子はさう云ふ篤介と一しよに純粹な妹を考へるのは考へるのに堪へない心もちがした。
廣子の聯想はそれからそれへと、とめどなしに流れつづけた。彼女は汽車の窓側にきちりと膝を重ねたまま、時どき窓の外へ目を移した。汽車は美濃の國境に近い近江の山峽を走つてゐた。山峽には竹藪や杉林の間に白じろと櫻の咲いてゐるのも見えた。「この邊は餘ほど寒いと見える。」

――廣子はいつか嵐山の櫻も散り出したことなどを思ひ出してゐた。

## 二

廣子は東京へ歸つた後、何かと用ばかり多かつた爲に二三日の間は妹とも話をする機會を捉へなかつた。それをやつと捉へたのは母かたの祖父の金婚式から歸つて來た夜の十時ごろだつた。妹の居間には例の通り壁と云ふ壁に油畫がかゝり、疊に据ゑた圓卓の上にも黄色い笠をかけた電燈が二年前の光りを放つてゐた。廣子は寢間着に着換へた上へ、羽織だけ紋のあるのをひつかけたまま、圓卓の前の安樂椅子へ坐つた。

「唯今お茶をさし上げます。」

辰子は姉の向うに坐ると、わざと眞面目にこんなことを言つた。

「いえ、もうどうぞ。――ほんたうにお茶なんぞ入らないことよ。」

「ぢや紅茶でも入れませうか？」

「紅茶も澤山。――それよりもあの話を聞かせて頂戴。」

廣子は妹の顏を見ながら、出來るだけ氣輕にかう言つた。と言ふのは彼女の感情を、――可也複雜な陰影を帶びた好奇心だの非難だの或は又同情だのを見透かされない爲もあれば、被告じみた妹の心もちを樂にしてやりたい爲もあつたのだつた。しかし辰子は思ひの外、困つたらしいけはひも見せなかつた。いや、その時の彼女のそぶりに少しでも變化があつたとすれば、それは淺黑い顏の何處かに殆ど目にも止らぬ位、緊張した色が動いただけだつた。

「ええ、是非わたしも姉さんに聞いて頂きたいの。」

廣子は內心プロロオグの簡單にすんだことに滿足した。けれども辰子はさう言つたぎり、少時口を開かなかつた。廣子は妹の沈默を話し惡い爲と解釋した。しかし妹を促すことはちよつと殘酷な心もちがした。同時に又さう云ふ妹の羞恥を享樂したい心もちもした。かたがた廣子は安樂椅子の背に西洋髮の頭を靠せたまま、全然當面の問題とは緣のない詠嘆の言葉を落した。

「何だか昔に返つたやうな氣がするわね、この椅子にかうやつて坐つてゐると。」

廣子は彼女自身の言葉に少女じみた感動を催しながら、うつとり部屋の中を眺めまはした。成程椅子も、電燈も、圓卓も、壁の油畫も昔の記憶の通りだつた。が、何かその間に不思議な變化

が起つてゐた。何か?――廣子は忽ちこの變化を油畫の上に發見した。机の上の玉葱だの、繃帶をした少女の顏だの、芋畠の向うの監獄だのはいつの間にか何處かへ消え失せてゐた。或は消え失せてしまはないまでも、二年前には見られなかつた、柔かい明るさを呼吸してゐた。殊に廣子は正面にある一枚の油畫に珍らしさを感じた。それは何處かの庭を描いた六號ばかりの小品だつた。白茶けた苔に掩はれた木木と木末に咲いた藤の花と木木の間に仄めいた池と、――畫面にはその外に何もなかつた。しかし其處にはどの畫よりもしつとりした明るさが漂つてゐた。

「あなたの畫、あすこにあるのも?」

辰子は後ろを振り向かずに、姉の指した畫を推察した。

「あの畫? あれは大村の。」

大村は篤介の苗字だつた。廣子は「大村の」に微笑を感じた。が、一瞬間羨ましさに似た何ものかを感じたのも事實だつた。しかし辰子は無頓着に羽織の紐をいぢりいぢり、落ち着いた聲に話しつづけた。

「田舍の家の庭を描いたのですつて。――大村の家は舊家なんですつて。」

「今は何をしてゐるの？」
「縣會議員か何かでせう。銀行や會社も持つてゐるやうよ。」
「あの人は次男か三男かなの？」
「長男――つて云ふかしら？　一人きりしかゐないんですつて。」
廣子はいつか彼等の話が當面の問題へはひり出した、――と言ふよりも寧ろその一部を解決してゐたのに氣がついた。今度の事件を聞かされて以來、彼女の氣がかりになつてゐたのはやはり篤介の身分だつた。殊に貧しげな彼の身なりはこの世俗的な問題に一層の重みを加へてゐた。それを今彼等の問答は無造作に片づけてしまつたのだつた。ふとその事實に氣のついた廣子は急に常談を言ふ寛ぎを感じた。
「ぢや立派な若旦那様なのね。」
「ええ、只そりやボエエムなの。下宿も妙なところにゐるのよ。羅紗屋の倉庫の二階を借りてゐるの。」
辰子は殆ど狡猾さうにちらりと姉へ微笑を送つた。廣子はこの微笑の中に突然一人前の女を捉

へた。尤もこれは東京驛へ出迎へた妹を見た時から、時々意識へ上ることだつた。けれどもまだ今のやうに、はつきり焦點の合つたことはなかつた。廣子はその意識と共に忽ち篤介との關係にも多少の疑惑を抱き出した。

「あなたも其處へ行つたことがあるの？」

「ええ、度たび行つたことがあるわ。」

廣子の聯想は結婚前の或夜の記憶を呼び起した。母はその夜風呂にはひりながら、彼女に日どりのきまつたことを話した。それから常談とも眞面目ともつかずに體の具合を尋ねたりした。生憎その夜の母のやうに淡白な態度に出られなかつた彼女は、今も唯ぢつと妹の顏を見守るより外に仕かたはなかつた。しかし辰子は不相變落ち着いた微笑を浮べながら、眩しさうに黄色い電燈の笠へ目をやつてゐるばかりだつた。

「そんなことをしてもかまはないの？」

「大村が？」

「いいえ、あなたがよ。誤解でもされたら、迷惑ぢやなくつて？」

「どうせ誤解はされ通しよ。何しろ研究所の連中と來たら、そりや口がうるさいんですもの。」

廣子はちよつと苛立たしさを感じた。のみならず取り澄ました妹の態度も芝居ではないかと言ふ猜疑さへ生じた。すると辰子は弄んでゐた羽織の紐を投げるやうにするなり、突然から言ふ間を發した。

「母さんは許して下さるでせうか？」

廣子はもう一度苛立たしさを感じた。それは恬然と切りこんで來る妹に對する苛立たしさでもあれば、だんだん受太刀になつて來る彼女自身に對する苛立たしさでもあつた。彼女は篤介の油畫へ浮かない目を遊ばせたまま「さうねえ」と煮え切らない返事をした。

「姉さんから話して頂けない？」

辰子はやや甘えるやうに廣子の視線を捉へようとした。

「わたしから話すつたつて、――わたしもあなたたちのことは知らないぢやないの？」

「だから聞いて頂戴つて言つてゐるのよ。それをちつとも姉さんは聞く氣になつてくれないんですもの。」

廣子はこの話のはじまつた時、辰子の少時沈默したのを話し惡い爲と解釋した。が、今になつて見ると、その沈默は話し惡いよりも、寧ろ話したさをこらへながら、姉の勸めるのを待つてゐたいだつた。廣子は勿論後ろめたい氣がした。

しかし又咄嗟に妹の言葉を利用することも忘れなかつた。

「あら、あなたこそ話さないんぢやないの？　――ぢやすつかり聞かせて頂戴。その上でわたしも考へて見るから。」

「さう？　ぢや兎に角話して見るわ。その代りひやかしたり何かしちや厭よ。」

辰子はまともに姉の顏を見たまま、彼女の戀愛問題を話し出した。廣子は小首を傾けながら、時々返事をする代りに靜かな點頭を送つてゐた。が、內心はこの間も絕えず二つの問題を解決しようとあせつてゐた。その一つは彼等の戀愛の何の爲に生じたかと言ふことであり、もう一つは彼等の關係のどの位進んでゐるかと言ふことだつた。しかし正直な妹の話も殆ど第一の問題には何の解決も與へなかつた。辰子は只篤介と每日顏を合せてゐるうちにいつか彼と懇意になり、いつか又彼を愛したのだつた。のみならず第二の問題もやはり判然とはわからなかつた。辰子は他

人の身の上のやうに彼の求婚した時のことを話した。しかもそれは抒情詩よりも寧ろ喜劇に近いものだつた。――

「大村は電話で求婚したの。可笑しいでせう？　何でも畫に失敗して、疊の上にころがつてゐたら、急にそんな氣になつたんですつて。だつていきなりどうだつて言つたつて、返事に困つてしまふぢやないの？　おまけにその時は電話室の外へ母さんも探しものに來てゐるんでせう？　わたし、仕かたがなかつたから、只ウイ、ウイつて言つて置いたの。……」

それから？――それから先も妹の話は輕快に事件を追つて行つた。彼等は一しよに展覽會を見たり、植物園へ寫生に行つたり、或獨逸のピアニストを聽いたりしてゐた。が、彼等の關係は辰子の言葉を信用すれば、友だち以上に出ないものだつた。廣子はそれでも油斷せずに妹の顏色を窺つたり、話の裏を考へたり、一二度は鎌さへかけて見たりした。しかし辰子は電燈の光に落ち着いた瞳を澄ませたまま、少しも臆した色を見せないのだつた。

「まあ、ざつとかう言ふ始末なの。――ああ、それから姉さんにわたしから手紙を上げたことね、あのことは大村にも話して置いたの。」

廣子は妹の話し終つた時、勿論齒痒いもの足らなさを感じた。けれども一通り打ち明けられて見ると、これ以上第二の問題には深入り出來ないのに違ひなかつた。彼女はその爲にやむを得ず第一の問題に縋りついた。

「だつてあなたはあの人は大嫌ひだつて言つてゐたぢやないの？」

廣子はいつか聲の中にはひつた挑戰の調子を意識してゐた。が、辰子はこの間にさへ笑顏を見せたばかりだつた。

「大村もわたしは大嫌ひだつたんですつて。ヂン・コクテル位は飮みさうな氣がしたんですつて。」

「そんなものを飮む人がゐるの？」

「そりやゐるわ。男のやうに胡坐をかいて花を引く人もゐるんですもの。」

「それがあなたがたの新時代？」

「かも知れないと思つてゐるの。……」

辰子は姉の豫想したよりも遙かに眞面目に返事をした。と思ふと忽ち微笑と一しよにもう一度話頭を引き戻した。

「それよりもわたしの問題だわね、姉さんから話して頂けない？」

「そりや話して上げないこともないわ。上げないこともないけれども、――」

廣子はあらゆる姉のやうに忠告の言葉を加へようとした。すると辰子はそれよりも先にかう話を截斷した。

「兎に角大村を知らないぢやね。――ぢや姉さん、二三日中に大村に會つちや下さらない？　大村も喜んでお目にかかると思ふの。」

廣子はこの話頭の變化に思はず大村の油畫を眺めた。藤の花は苔ばんだ木木の間になぜか前よりもほのぼのとしてゐた。彼女は一瞬間心の中に昔の「猿」を髣髴しながら、曖昧に「さうねえ」を繰り返した。が、辰子は「さうねえ」位に滿足する氣色も見せなかつた。

「ぢや會つて下さるわね。大村の下宿へ行つて下さる？」

「だつて下宿へも行かれないぢやないの？」

「ぢや此處へ來て貰ひませうか？　それも何だか可笑しいわね。」

「あの人は前にも來たことはあるの？」

「いいえ、まだ一度もないの。それだから何だか可笑しいのよ。ぢやあと、――ぢやかうして下さらない？　大村は明後日表慶館へ畫を見に行くことになつてゐるの。その時刻に姉さんも表慶館へ行つて大村に會つちや下さらない？」

「さうねえ、わたしも明後日ならば、丁度お墓參りをする次手もあるし。……」

廣子はうつかりかう言つた後、忽ち輕率を後悔した。けれども辰子はその時にはもう別人かと思ふ位、顏中に喜びを漲らせてゐた。

「さうお？　ぢやさうして頂戴。大村へはわたしから電話をかけて置くわ。」

廣子は妹の顏を見るなり、いつか完全に妹の意志の凱歌を擧げてゐたことを發見した。この發見は彼女の義務心よりも彼女の自尊心にこたへるものだつた。彼女は最後にもう一度妹の喜びに乘じながら、彼等の祕密へ切りこまうとした。が、辰子はその途端に、――姉の脣の動かうとした途端に突然體を伸べるが早いか、白粉を刷いた廣子の頰へ音の高いキスを贈つた。廣子は妹のキスを受けた記憶を殆ど持ち合せてゐなかつた。若し一度でもあつたとすれば、それはまだ辰子の幼稚園へ通つてゐた時代のことだけだつた。彼女はかう言ふ妹のキスに驚きよりも寧ろ羞し

さを感じた。このショックは勿論浪のやうに彼女の落ち着きを打ち崩した。彼女は半ば微笑した目にわざと妹を睨める外はなかつた。

「いやよ。何をするの？」

「だつてほんたうに嬉しいんですもの。」

辰子は圓卓の上へのり出したまま、黄色い電燈の笠越しに淺黒い顏を赫かせてゐた。

「けれども始めからさう思つてゐたのよ。姉さんはきつとわたしたちの爲には何でもして下さるのに違ひないつて。――實は昨日も大村と一日姉さんの話をしたの。それでね、……」

「それで？」

辰子はちよつと目の中に惡戲つ兒らしい閃きを宿した。

「それでもうおしまひだわ。」

## 三

廣子は化粧道具や何かを入れた銀細工のバッグを下げたまま、何年にも殆ど來たことのない長

慶館の廊下を歩いて行つた。彼女の心は彼女自身の豫期してゐたよりも靜かだつた。のみならず彼女はその落ち着きの底に多少の遊戯心を意識してゐた。數年前の彼女だつたとすれば、それは或は後めたい意識だつたかも知れなかつた。が、今は後めたいよりも寧ろ誇らしい位だつた。彼女はいつか肥り出した彼女の肉體を感じながら、明るい廊下の突き當りにある螺旋狀の階段を登つて行つた。

螺旋狀の階段を登りつめた所は晝も薄暗い第一室だつた。彼女はその薄暗い中に青貝を鏤めた古代の樂器や古代の屛風を發見した。が、肝腎の篤介の姿は生憎この部屋には見當らなかつた。廣子はちよつと陳列棚の硝子に彼女の髮形を映して見た後、やはり格別急ぎもせずに隣の第二室へ足を向けた。

第二室は天井から明りを取つた、横よりも竪の長い部屋だつた。その又長い部屋の兩側を硝子越しに埋めてゐるのは藤原とか鎌倉とか言ふらしい、もの寂びた佛畫ばかりだつた。篤介は今日も制服の上に狐色になつたクレヴァア・ネツトをひつかけ、この伽藍に似た部屋の中をぶらぶら一人歩いてゐた。廣子は彼の姿を見た時、咄嗟に敵意の起るのを感じた。しかしそれは掛け値な

しにほんの咄嗟の出來事だつた。彼はもうその時にはまともにこちらを眺めてゐた。廣子は彼の顏や態度に忽ち昔の「猿」を感じた。同時に又氣安い輕蔑を感じた。彼はこちらを眺めたなり、禮をしたものかしないものか判斷に迷つてゐるらしかつた。その妙に落ち着かない容子は確かに戀愛だのロマンスだのと緣の遠いものに違ひなかつた。廣子は目だけ微笑しながら、かう言ふ妹の戀人の前へ心もち足早に歩いて行つた。

「大村さんでいらつしやいますわね？　わたしは――御存知でございませう？」

篤介は只「ええ」と答へた。彼女はこの「ええ」の中にはつきり彼の狼狽を感じた。のみならずこの一瞬間に彼の段鼻だの、金歯だの、左の揉み上げの剃刀傷だの、ズボンの膝のたるんでゐることだの、――その外一一數へるにも足らぬ無數の事實を發見した。しかし彼女の顏色は何も氣づかぬやうに冴え冴えしてゐた。

「今日は勝手なことをお願ひ申しまして、さぞ御迷惑でございませう。そんな失禮なことをとは思つたんでございますが、何でもと妹が申すもんでございますから。……」

廣子はかう話しかけたまま、靜かにあたりを眺めまはした。リノリウムの床には何脚かのベン

子も背中合せに並んでゐた。けれども其處に腰をかけるのは却つて人目に立ち兼ねなかつた。人目は？――彼等の前後には觀覽人が三四人、今も普賢や文珠の前にそつと立ち止まつたり歩いたりしてゐた。

「いろいろ伺ひたいこともあるんでございますけれども、――ぢやぶらぶら歩きながら、お話しすることに致しませうか？」

「ええ、どうでも。」

廣子は少時無言のまま、ゆつくり草履を運んで行つた。この沈默は確かに篤介には精神的拷問に比しいらしかつた。彼は何か言はうとするやうにちよつと一度咳拂ひをした。が、咳拂ひは大井の硝子に忽ち大きい反響を生じた。彼はその反響に恐れたのか、やはり何も言はずに歩きつづけた。廣子はかう言ふ彼の苦痛に多少の憐憫を感じてゐた。けれども又何の矛盾もなしに多少享樂をも感じてゐた。尤も守衛や觀覽人に時々一瞥を與へられるのは勿論彼女にも不快だつた。しかし彼等も年齢の上から、――と言ふよりも更に服裝の上から決して二人の關係を誤解したいには違ひなかつた。彼女はその氣安さの上から不安らしい篤介を見下してゐた。彼は或は彼女に

は敵であるかも知れなかつた。が、敵であるにもしろ、世慣れぬ妹と五十歩百歩の敵であることは確かだつた。……

「伺ひたいと申しますのは大したことではないんでございますけれどもね、——」

彼女は第二室を出ようとした時、ことさら彼へ目をやらずにやつと本文へはひり出した。

「あれにも母親が一人ございますし、あなたも亦、——あなたは御兩親ともおありなんでございますか？」

「いいえ、親父だけです。」

「お父樣だけ。御兄弟は確かございませんでしたね？」

「ええ、僕だけです。」

彼等は第二室を通り越した。第二室の外は圓天井の下に左右へ露臺を開いた部屋だつた。部屋も勿論圓形をしてゐた。その又圓形は廊下ほどの幅をぐるりと周圍へ餘したまま、白い大理石の欄干越しにずつと下の玄關を覗かれるやうに出來上つてゐた。彼等は自然と大理石の欄干の外をまはりながら、篤介の家族や親戚や交友のことを話し合つた。彼女は微笑を含んだまま、可也綿

ね悪い局所にも巧に話を進めて行つた。しかしその割に彼女や辰子の家庭の事情などには沈默してゐた。それは必ずしも最初から相手を坊ちやんと見縊つた上の打算ではないのに違ひなかつた。けれども又坊ちやんと見縊らなければ、彼女ももつとこちらの内輪を窺はせてゐたことは確かだつた。

「ぢや餘りお友だちはおありにならないんでございますね？」（未完）

（大正十四年四月）

# 溫泉だより

……わたしはこの溫泉宿にもう一月ばかり滯在してゐます。が、肝腎の「風景」はまだ一枚も仕上げません。まづ湯にはひつたり、講談本を讀んだり、狹い町を散歩したり、――そんなことを繰り返して暮らしてゐるのです。我ながらだらしのないのには呆れますが。（作者註。この間に櫻の散つてゐること、鶺鴒の屋根へ來ること、射的に七圓五十錢使つたこと、田舍藝者のこと、安來節芝居に驚いたこと、蕨狩りに行つたこと、消防の演習を見たこと、蟇口を落したことなどを記せる十數行あり。）それから次手に小說じみた事實談を一つ報告しませう。尤もわたしは素人ですから、小說になるかどうかはわかりません。唯この話を聞いた時に丁度小說か何か讀んだやうな心もちになつたと言ふだけのことです。どうかそのつもりで讀んで下さい。

何でも明治三十年代に萩野半之丞と言ふ大工が一人、この町の山寄りに住んでゐました。萩野半之丞と言ふ名前だけ聞けば、如何なる優男かと思ふかも知れません。しかし身の丈六尺五寸、

體重三十七貫と言ふのですから、太刀山にも負けない大男だつたのです。いや、恐らくは太刀山も一籌を輸する位だつたのでせう。現に同じ宿の客の一人、――「な」の字さんと言ふ(これは國木田獨歩の使つた國粹的省略法に從つたのです。)藥種問屋の若主人は子供心にも大砲よりは大きいと思つたと言ふことです。同時に又顏は稻川にそつくりだと思つたと言ふことです。

半之丞は誰に聞いて見ても、極人の好い男だつた上に腕も相當にあつたと言ふことです。けれども半之丞に關する話はどれも多少可笑しい所を見ると、或はあらゆる大男並に總身に智慧が廻り兼ねると言ふ趣があつたのかも知れません。ちよつと本筋へはひる前にその一例を擧げておきませう。わたしの宿の主人の話によれば、いつか凩の烈しい午後にこの溫泉町を五十戶ばかり燒いた地方的大火のあつた時のことです。半之丞は丁度一里ばかり離れた「か」の字村の或家へ建前か何かに行つてゐました。が、この町が火事だと聞くが早いか、尻を端折る間も惜しいやうに「お」の字街道へ飛び出したさうです。すると或農家の前に栗毛の馬が一匹繫いである、それを見た半之丞は後で斷れば好いとでも思つたのでせう。いきなりその馬に跨つて遮二無二街道を走り出しました。そこまでは勇ましかつたのに違ひありません。しかし馬は走り出したと思ふと、忽ち麥

畑へ飛びこみました。それから麥畑をぐるぐる廻る、鍵の手に大根畑を走り拔ける、蜜柑山をまつ直に驅け下りる、――とうとうしまひには芋の穴の中へ大男の半之丞を振り落したまま、何處かへ行つてしまひました。かう言ふ災難に遇つたのですから、勿論火事などには間に合ひません。のみならず半之丞は傷だらけになり、這ふやうにこの町へ歸つて來ました。何でも後で聞いて見れば、それは誰も手のつけられぬ盲馬だつたと言ふことです。

丁度この大火のあつた時から二三年後になるでせう、「お」の字町の「た」の字病院へ半之丞の體を賣つたのは。しかし體を賣つたと云つても、何も昔風に一生奉公の約束をした訣ではありません。唯何年かたつて死んだ後、死體の解剖を許す代りに五百圓の金を貰つたのです。いや、五百圓の金を貰つたのではない、二百圓は死後に受けとることにし、差し當りは契約書と引き換へに三百圓だけ貰つたのです。ではその死後に受けとる二百圓は一體誰の手へ渡るのかと言ふと、――何でも契約書の文面によれば、「遺族又は本人の指定したるもの」に支拂ふことになつてゐました。實際又さうでもしなければ、殘金二百圓云々は空文に了る外はなかつたでせう。何しろ半之丞は妻子は勿論、親戚さへ一人もなかつたのですから。

當時の三百圓は大金だつたでせう。少くとも田舍大工の半之丞には大金だつたのに違ひありません。半之丞はこの金を握るが早いか、腕時計を買つたり、背廣を拵へたり、「青ペン」のお松と「お」の字町へ行つたり、忽ち豪奢を極め出しました。「青ペン」と言ふのは亞鉛屋根に青ペンキを塗つた達磨茶屋です。當時は今ほど東京風にならず、軒には絲瓜なども下つてゐたさうですから、女も皆田舍じみてゐたことでせう。が、お松は「青ペン」でも兎に角第一の美人になつてゐました。尤もどの位の美人だつたか、それはわたしにはわかりません。唯鮨屋に鰻屋を兼ねた「お」の字亭のお上の話によれば、色の淺黑い、髮の毛の縮れた、小がらな女だつたと言ふことです。

わたしはこの婆さんにいろいろの話を聞かせて貰ひました。就中妙に氣の毒だつたのはいつも蜜柑を食つてゐなければ手紙一本書けぬと言ふ蜜柑中毒の客の話です。しかしこれは又いつか報告する機會を待つことにしませう。唯半之丞の夢中になつてゐたお松の猫殺しの話だけはつけ加へておかなければなりません。お松は何でも「三太」と云ふ烏猫を飼つてゐました。或日その「三太」が「青ペン」のお上の一張羅の上へ粗忽をしたのです。ところが「青ペン」のお上と言ふのは大來猫が嫌ひだつたものですから、苦情を言ふの言はないのではありません。しまひには飼ひ主の

お松にさへ、さんざん惡態をついたさうです。するとお松は何も言はずに「三太」を懷に入れたまま、「か」の字川の「き」の字橋へ行き、青あをと澱んだ淵の中へ烏猫を抛りこんでしまひました。それから、――それから先は誇張かも知れません。が、兎に角婆さんの話によれば、發頭人のお上は勿論「青ペン」中の女の顏を蚯蚓腫れだらけにしたと言ふことです。

半之丞の豪奢を極めたのは精々一月か半月だつたでせう。何しろ背廣は着て歩いてゐても、靴の出來上つて來た時にはもうその代も拂へなかつたさうです。下の話もほんたうかどうか、それはわたしには保證出來ません。しかしわたしの髮を刈りに出かける「ふ」の字軒の主人の話によれば、靴屋は半之丞の前に靴を並べ、「では棟梁、元價に買つておくんなさい。これが誰にでも穿ける靴ならば、わたしもこんなことを言ひたくはありません。が、棟梁、お前さんの靴は仁王樣の草鞋も同じなんだから」と頭を下げて賴んだと言ふことです。けれども勿論半之丞は元價にも買ふことは、出來なかつたのでせう。この町の人人には誰に聞いて見ても、半之丞の靴をはいてゐるのは一度も見かけなかつたと言つてゐますから。

けれども半之丞は靴屋の拂ひに不自由したばかりではありません。それから一月とたたないう

ちに今度は折角の腕時計や背廣までも賣るやうになつて來ました。ではその金はどうしたかと言へば、前後の分別も何もなしにお松につぎこんでしまつたのです。が、お松も半之丞に使はせてゐたばかりではありません。やはり「お」の字のお上の話によれば、元來この町の達磨茶屋の女は年々夷講の晩になると、客をとらずに內輪ばかりで三味線を彈いたり踊つたりする、その割り前の算段さへ一時はお松には苦しかつたさうです。しかし半之丞もお松には餘ほど夢中になつてゐたのでせう。何しろお松は癇癪を起すと、半之丞の胸ぐらをとつて引きずり倒し、麥酒罎で擲りなどもしたものです。けれども半之丞はどう言ふ目に遇つても、大抵は却つて機嫌をとつてゐました。尤も前後にたつた一度、お松が或別莊番の伜と「お」の字町へ行つたとか聞いた時には別人のやうに怒つたさうです。これも或は幾分か誇張があるかも知れません。けれども婆さんの話したままを書けば、半之丞は（作者註。田園的嫉妬の表白としてさもあらんとは思はるれども、この間に割愛せざる可らざる數行あり）と言ふことです。

前に書いた「な」の字さんの知つてゐるのは丁度この頃の半之丞でせう。當時まだ小學校の生徒だつた「な」の字さんは半之丞と一しよに釣に行つたり、「み」の字峠へ登つたりしました。勿論半

之丞がお松に通ひつめてゐたり、金に困つてゐたりしたことは全然「な」の字さんにはわからなかつたのでせう。「な」の字さんの話は本筋にはいづれも關係はありません。唯ちよつと面白かつたことには「な」の字さんは東京へ歸つた後、差出し人萩野半之丞の小包みを一つ受けとりました。嵩は半紙の一しめ位ある、が、目かたは莫迦に輕い、何かと思つてあけて見ると、「朝日」の二十入りの空き箱に水を打つたらしい青草がつまり、それへ首筋の赤い螢が何匹もすがつてゐたと言ふことです。尤もその又「朝日」の空き箱には空氣を通はせるつもりだつたと見え、べた一面に錐の穴をあけてあつたと云ふのですから、やはり半之丞らしいのには違ひないのですが。

「な」の字さんは翌年の夏にも半之丞と遊ぶことを考へてゐたさうです。が、それは不幸にもすつかり當が外れてしまひました。と言ふのはその秋の彼岸の中日、萩野半之丞は「青ペン」のお松に一通の遺書を殘したまま、突然風變りの自殺をしたのです。では又なぜ自殺をしたかと言へば、――この說明はわたしの報告よりもお松宛の遺書に讓ることにしませう。尤もわたしの寫したのは實物の遺書ではありません。しかしわたしの宿の主人が切拔帖に貼つておいた當時の新聞に載つてゐたものですから、大體間違ひはあるまいと思ひます。

「わたくし儀、金がなければお前様とも夫婦になれず、お前様の腹の子の始末も出來ず、うき世がいやになり候間、死んでしまひます。わたくしの死がいは「た」の字病院へ送り、（向うからとりに來てもらつてもよろしく御座候。）このけい約書とひきかへに二百圓おもらひ下され度、その金で「あ」の字の旦那（これはわたしの宿の主人です。）のお金を使ひこんだだけはまどふ（償ふ。）やうに賴み入り候。「あ」の字の旦那にはまことに、まことに面目ありません。のこりの金はみなお前様のものにして下され。一人旅うき世をあとに半之丞。（これは辭世でせう。）おまつどの。」

半之丞の自殺を意外に思つたのは「な」の字さんばかりではありません。この町の人々もそんなことは夢にも考へなかつたと言ふことです。若し少しでもその前に前兆らしいことがあつたとすれば、それはかう言ふ話だけでせう。何でも彼岸前の或暮れがた、「ふ」の字軒の主人は半之丞と店の前の緣臺に話してゐました。其處へふと通りかかつたのは「青ペン」の女の一人です。その女は二人の顏を見るなり、今しがた「ふ」の字軒の屋根の上を火の玉が飛んで行つたと言ひました。すると半之丞は大眞面目に「あれは今おらが口から出て行つただ」と言つたさうです。自殺と言ふことはこの時にもう半之丞の肚にあつたのかも知れません。しかし勿論「青ペン」の女は笑つて通

り過ぎたと言ふことです。「ふ」の字軒の主人も、――いや、「ふ」の字軒の主人は笑ふうちにも「縁起でもねえ」と思つたと言つてゐました。

それから幾日もたたないうちに半之丞は急に自殺したのです。その又自殺も首を縊つたとか、喉を突いたとか言ふのではありません。「か」の字川の瀬の中に板圍ひをした、「獨鈷の湯」と言ふ共同風呂がある、その溫泉の石槽の中にまる一晩沈んでゐた揚句、心臟痲痺を起して死んだのです。やはり「ふ」の字軒の主人の話によれば、隣の煙草屋の上さんが一人、當夜彼是十二時頃に共同風呂へはひりに行きました。この煙草屋の上さんは血の道か何かだつたものですから、宵のうちにも其處へ來てゐたのです。半之丞はその時も溫泉の中に大きい體を沈めてゐました。が、今もまだはひつてゐる、これにはふだんまつ晝間でも湯巻一つになつたまま、川の中の石傳ひに風呂へ這つて來る女丈夫もさすがに驚いたと言ふことです。のみならず半之丞は上さんの言葉にうんだともつぶれたとも返事をしない、唯薄暗い湯氣の中にまつ赤になつた顏だけ露はしてゐる。それも瞬き一つせずにぢつと屋根裏の電燈を眺めてゐたと言ふのですから、無氣味だつたのに違ひありません。上さんはその爲に長湯も出來ず、匆々風呂を出てしまつたさうです。

共同風呂のまん中には「獨鈷の湯」の名前を生じた、大きい石の獨鈷があります。半之丞はこの獨鈷の前にちやんと着物を袖だたみにし、遺書は側の下駄の鼻緒に括りつけてあつたと言ふことです。何しろ死體は裸のまま、溫泉の中に浮いてゐたのですから、若しその遺書でもなかつたとすれば、恐らくは自殺かどうかさへわからずにしまつたことでせう。わたしの宿の主人の話によれば、半之丞がかう言ふ死にかたをしたのは苟くも「た」の字病院へ賣り渡した以上、解剖用の體に傷をつけてはすまないと思つたからに違ひないさうです。尤もこれがこの町の定說と言ふ訣ではありません。口の惡い「ふ」の字軒の主人などは「何、すむやすまねえぢやねえ。あれは體に傷をつけては二百兩にならねえと思つたんです。」と大いに異說を唱へてゐました。

半之丞の話はそれだけです。しかしわたしは昨日の午後、わたしの宿の主人や「な」の字さんと狹苦しい町を散步する次手に半之丞の話をしましたから、そのことをちよつとつけ加へませう。尤もこの話に興味を持つてゐたのはわたしよりも寧ろ「な」の字さんです。「な」の字さんはカメラをぶら下げたまま、老眼鏡をかけた宿の主人に熱心にこんなことを尋ねてゐました。

「ぢやそのお松と言ふ女はどうしたんです？」

「お松ですか？　お松は半之丞の子を生んでから、……」
「しかしお松の生んだ子はほんたうに半之丞の子だつたんですか？」
「やつぱり半之丞の子だつたですな。瓜二つと言つても好かつたですから。」
「さうしてそのお松と言ふ女は？」
「お松は「い」の字と言ふ酒屋に嫁に行つたです。」
熱心になつてゐた「な」の字さんは多少失望したらしい顔をしました。
「半之丞の子は？」
「連れつ子をして行つたです。その子供が又チブスになつて、……」
「死んだんですか？」
「いいや、子供は助かつた代りに看病したお松が患ひついたです。もう死んで十年になるですが、……」
「やつぱりチブスで？」
「チブスぢやないです。醫者は何とか言つてゐたですが、まあ看病疲れですな。」

丁度その時我々は郵便局の前に出てゐました。小さい日本建の郵便局の前には若楓が枝を伸ばしてゐます。その枝に半ば遮られた、埃だらけの硝子窓の中にはづんぐりした小倉服の青年が一人、事務を執つてゐるのが見えました。

「あれですよ。半之丞の子と言ふのは。」

「な」の字さんもわたしも足を止めながら、思はず窓の中を覗きこみました。その青年が片頬に手をやつたなり、ペンか何かを動かしてゐる姿は妙に我々には嬉しかつたのです。しかしどうも世の中はうつかり感心も出來ません。二三歩先に立つた宿の主人は眼鏡越しに我々を振り返ると、いつか薄笑ひを浮かべてゐるのです。

「あいつももう仕かたがないのですよ。「青ペン」通ひばかりしてゐるのですから。」

我々はそれから「き」の字橋まで口をきかずに歩いて行きました。……

（大正十四年四月）

# 海のほとり

# 一

……雨はまだ降りつづけてゐた。僕等は午飯をすませた後、敷島を何本も灰にしながら、東京の友だちの噂などした。

僕等のゐるのは何もない庭へ葭簾の日除けを差しかけた六疊二間の離れだつた。庭には何もないと言つても、この海邊に多い弘法麥だけは疎らに砂の上に穗を垂れてゐた。その穗は僕等の來た時にはまだすつかり出揃はなかつた。出てゐるのも大抵はまつ青だつた。が、今はいつの間にかどの穗も同じやうに狐色に變り、穗先ごとに滴をやどしてゐた。

「さあ、仕事でもするかな。」

Mは長ながと寢ころんだまま、糊の強い宿の湯帷子の袖に近眼鏡の玉を拭つてゐた。仕事と言ふのは僕等の雜誌へ毎月何か書かなければならぬ、その創作のことを指すのだつた。

Ｍの次の間へ引きとつた後、僕は座蒲團を枕にしながら、里見八犬傳を讀みはじめた。きのふ僕の讀みかけたのは信乃、現八、小文吾などの莊助を救ひに出かける所だつた。「その時蜑崎照文は懷ろより用意の沙金を五包みとり出しつ。先づ三包みを扇にのせたるそが儘に、……三犬士、この金は三十兩をひと包みとせり。尤も些少の東西なれども、こたびの路用を資くるのみ。わが私の餞別ならず、里見殿の賜ものなるに、辭はで納め給へと言ふ。」――僕はそこを讀みながら、をととひ屆いた原稿料の一枚四十錢だつたのを思ひ出した。僕等は二人ともこの七月に大學の英文科を卒業してゐた。從つて衣食の計を立てることは僕等の目前に迫つてゐた。僕はだんだん八犬傳を忘れ、教師になることなどを考へ出した。が、そのうちに眠つたと見え、いつかかう言ふ短い夢を見てゐた。

――それは何でも夜更けらしかつた。僕は兎に角雨戶をしめた座敷にたつた一人橫になつてゐた。すると誰か戶を叩いて「もし、もし」と僕に聲をかけた。僕はその雨戶の向うに池のあることを承知してゐた。しかし僕に聲をかけたのは誰だか少しもわからなかつた。

「もし、もし、お願ひがあるのですが、……」

雨戸の外の聲はかう言つた。僕はその言葉を聞いた時、「ははあ、Kのやつだな」と思つた。Kと言ふのは僕等よりも一年後の哲學科にゐた、箸にも棒にもかからぬ男だつた。僕は横になつたまま、可也大聲に返事をした。

「哀れつぽい聲を出したつて駄目だよ。又君、金のことだらう?」

「いいえ、金のことぢやありません。唯わたしの友だちに會はせたい女があるんですが、……」

その聲はどうもKらしくなかつた。のみならず誰か僕のことを心配してくれる人らしかつた。僕は急にわくわくしながら、雨戸をあけに飛び起きて行つた。實際庭は緣先からずつと廣い池になつてゐた。けれどもそこにはKは勿論、誰も人かげは見えなかつた。

僕は暫く月の映つた池の上を眺めてゐた。池は海草の流れてゐるのを見ると、潮入りになつてゐるらしかつた。そのうちに僕はすぐ目の前にさざ波のきらきら立つてゐるのを見つけた。さざ波は足もとへ寄つて來るにつれ、だんだん一匹の鮒になつた。鮒は水の澄んだ中に悠々と尾鰭を動かしてゐた。

「ああ、鮒が聲をかけたんだ。」

僕はかう思つて安心した。——

僕の目を覺ました時にはもう軒先の葭簾の日除けは薄日の光を透かしてゐた。僕は洗面器を持つて庭へ下り、裏の井戸ばたへ顏を洗ひに行つた。しかし顏を洗つた後でも、今しがた見た夢の記憶は妙に僕にこびりついてゐた。「つまりあの夢の中の鮒は識域下の我と言ふやつなんだ。」——そんな氣も多少はしたのだつた。

二

……一時間ばかりたつた後、手拭を頭に卷きつけた僕等は海水帽に貸下駄を突つかけ、半町ほどある海へ泳ぎに行つた。道は庭先をだらだら下りると、すぐに濱へつづいてゐた。

「泳げるかな？」

「けふは少し寒いかも知れない。」

僕等は弘法麥の茂みを避け避け、（滴をためた弘法麥の中へうつかり足を踏み入れると、ふくら脛の痒くなるのに閉口したから。）そんなことを話して歩いて行つた。氣候は海へはひるには涼し

過ぎるのに違ひなかつた。けれども僕等は上總の海に、――と言ふよりも寧ろ暮れかかつた夏に未練を持つてゐたのだつた。

海には僕等の來た頃は勿論、きのふさへまだ七八人の男女は浪乘りなどを試みてゐた。しかしけふは人かげもなければ、海水浴區域を指定する赤旗も立つてゐなかつた。唯廣びろとつづいた渚に浪の倒れてゐるばかりだつた。葭簾圍ひの着もの脱ぎ場にも、――そこには茶色の犬が一匹、細かい羽蟲の群れを追ひかけてゐた。が、それも僕等を見ると、すぐに向うへ逃げて行つてしまつた。

僕は下駄だけは脱いだものの、到底泳ぐ氣にはなれなかつた。しかしMはいつの間にか湯帷子や眼鏡を着もの脱ぎ場へ置き、海水帽の上へ頰かぶりをしながら、ざぶざぶ淺瀬へはひつて行つた。

「おい、はひる氣かい？」

「だつて折角來たんぢやないか？」

Mは膝ほどある水の中に幾分か腰をかがめたなり、日に燒けた笑顏をふり向けて見せた。

「君もはひれよ。」

「僕は厭だ。」

「へん、『嫣然』がゐりやはひるだらう。」

「莫迦を言へ。」

「嫣然」と言ふのはここにゐるうちに挨拶ぐらゐはし合ふやうになつた或十五六の中學生だつた。彼は格別美少年ではなかつた。しかしどこか若木に似た水々しさを具へた少年だつた。丁度十日ばかり以前の或午後、僕等は海から上つた體を熱い砂の上へ投げ出してゐた。そこへ彼も潮に濡れたなり、すたすた板子を引きずつて來た。が、ふと彼の足もとに僕等の轉がつてゐるのを見ると、鮮かに齒を見せて一笑した。Mは彼の通り過ぎた後、ちよつと僕に微苦笑を送り、

「あいつ、嫣然として笑つたな。」と言つた。それ以來彼は僕等の間に「嫣然」と言ふ名を得てゐたのだつた。

「どうしてもはひらないか？」

「どうしてもはひらない。」

「イゴイストめ！」

Ｍは體を濡らし濡らし、ずんずん沖へ進みはじめた。僕はＭには頓着せず、着もの脱ぎ場から少し離れた、小高い砂山の上へ行つた。それから貸下駄を臀の下に敷き、敷島でも一本吹はうとした。しかし僕のマッチの火は存外強い風の爲に容易に卷煙草に移らなかつた。

「おうい。」

Ｍはいつ引つ返したのか、向うの淺瀬に佇んだまま、何か僕に聲をかけてゐた。けれども生憎その聲も絶え間のない浪の音の爲にはつきり僕の耳へはひらなかつた。

「どうしたんだ？」

僕のかう尋ねた時にはＭはもう湯帷子を引つかけ、僕の隣に腰を下ろしてゐた。

「何、水母にやられたんだ。」

海にはこの數日來、俄に水母が殖えたらしかつた。現に僕もをととひの朝、左の肩から上膊へかけてずつと針の痕をつけられてゐた。

「どこを？」

「頸のまはりを。やられたなと思つてまはりを見ると、何匹も水の中に浮いてゐるんだ。」

「だから僕ははひらなかつたんだ。」

「譃をつけ。——だがもう海水浴もおしまひだな。」

渚はどこも見渡す限り、打ち上げられた海草の外は白じらと日の光に煙つてゐた。そこには唯雲の影の時々大走りに通るだけだつた。僕等は敷島を啣へながら、暫くは默つてかう言ふ渚に寄せて來る浪を眺めてゐた。

「君は教師の口はきまつたのか？」

Mは唐突とこんなことを尋ねた。

「まだだ。君は？」

「僕か？　僕は……」

Mの何か言ひかけた時、僕等は急に笑ひ聲やけたたましい足音に驚かされた。それは海水着に海水帽をかぶつた同年輩の二人の少女だつた。彼等は殆ど傍若無人に僕等の側を通り抜けながら、まつすぐに渚へ走つて行つた。僕等はその後姿を、——一人は眞紅の海水着を着、もう一人は丁

度虎のやうに黑と黃とだんだらの海水着を着た、輕快な後姿を見送ると、いつか言ひ合せたやうに微笑してゐた。

「彼女たちもまだ歸らなかつたんだな。」

Ｍの聲は常談らしい中にも多少の感慨を託してゐた。

「どうだ、もう一ぺんはひつて來ちや？」

「あいつ一人ならばはひつて來るがな。何しろ『ジンゲジ』も一しよぢや、……」

僕等は前の「嫣然」のやうに彼等の一人に、――黑と黃との海水着を着た少女に「ジンゲジ」と言ふ諢名をつけてゐた。「ジンゲジ」とは彼女の顏だち（ゲジヒト）の肉感的（ジンリツヒ）なことを意味するのだつた。僕等は二人ともこの少女にどうも好意を持ち惡かつた。もう一人の少女にも、――Ｍはもう一人の少女には比較的興味を感じてゐた。のみならず「君は『ジンゲジ』にしろよ。僕はあいつにするから」などと都合の好いことを主張してゐた。

「そこを彼女の爲にはひつて來いよ。」

「ふん、犧牲的精神を發揮してか？――だがあいつも見られてゐることはちやんと意識してゐる

んだからな。」

「意識してゐたつて好いぢやないか。」

「いや、どうも少し癪だね。」

彼等は手をつないだまま、もう淺瀨へはひつてゐた。浪は彼等の足もとへ絶えず水吹きを打ち上げに來た。彼等は濡れるのを惧れるやうにその度にきつと飛び上つた。かう言ふ彼等の戲れはこの寂しい殘暑の渚と不調和に感ずるほど花やかに見えた。それは實際人間よりも蝶の美しさに近いものだつた。僕等は風の運んで來る彼等の笑ひ聲を聞きながら、暫く又渚から遠ざかる彼等の姿を眺めてゐた。

「感心に中々勇敢だな。」

「まだ脊は立つてゐる。」

「もう——いや、まだ立つてゐるな。」

彼等はとうに手をつながず、別々に沖へ進んでゐた。彼等の一人は、——眞紅の海水着を着た少女は特にずんずん進んでゐた。と思ふと乳ほどの水の中に立ち、もう一人の少女を招きながら、

何か甲高い聲をあげた。その顔は大きい海水帽のうちに遠目にも活き活きと笑つてゐた。

「水母かな？」

「水母かも知れない。」

しかし彼等は前後したまま、更に沖へ出て行くのだつた。

僕等は二人の少女の姿が海水帽ばかりになつたのを見、やつと砂の上の腰を起した。それから餘り話もせず、（腹も減つてゐたのに違ひなかつた。）宿の方へぶらぶら歸つて行つた。

三

……日の暮も秋のやうに涼しかつた。僕等は晩飯をすませた後、この町に歸省中のHと言ふ友だちやNさんと言ふ宿の若主人ともう一度濱へ出かけて行つた。それは何も四人とも一しよに散歩をする爲に出かけたのではなかつた。HはS村の伯父を尋ねに、Nさんは又同じ村の籠屋へ、庭鳥を伏せる籠を註文しにそれぞれ足を運んでゐたのだつた。

濱傳ひにS村へ出る途は高い砂山の裾をまはり、丁度海水浴區域とは反對の方角に向つてゐた。

海は勿論砂山に隠れ、浪の音もかすかにしか聞えなかつた。しかし疎らに生え伸びた草は何か黒い穂に出ながら、絶えず潮風にそよいでゐた。

「この邊に生えてゐる草は弘法麥ぢやないね。——Nさん、これは何と言ふの？」

僕は足もとの草をむしり、甚平一つになつたNさんに渡した。

「さあ、蓼ぢやなし、——何と言ひますかね。Hさんは知つてゐるでせう。わたしなどとは違つて土地つ子ですから。」

僕等もNさんの東京から聟に來たことは耳にしてゐた。のみならず家附の細君は去年の夏とかに男を拵へて家出したことも耳にしてゐた。

「魚のこともHさんはわたしよりはずつと詳しいんです。」

「へええ、Hはそんなに學者かね。僕は又知つてゐるのは劍術ばかりかと思つてゐた。」

Hは Mにかう言はれても、弓の折れの杖を引きずつたまま、唯にやにや笑つてゐた。

「Mさん、あなたも何かやるでせう？」

「僕？　僕はまあ泳ぎだけですね。」

Nさんはバットに火をつけた後、去年水泳中に虎魚に刺された東京の株屋の話をした。その株屋は誰が何と言つても、いや、虎魚などの刺す訣はない、確かにあれは海蛇だと強情を張つてゐたとか言ふことだつた。

「海蛇なんてほんたうにゐるの？」

しかしその問に答へたのはたつた一人海水帽をかぶつた、脊の高いHだつた。

「海蛇か？　海蛇はほんたうにこの海にもゐるさ。」

「今頃もか？」

「何、滅多にやゐないんだ。」

僕等は四人とも笑ひ出した。そこへ向うからながらみ取りが二人、（ながらみと言ふのは螺の一種である。）魚籃をぶら下げて歩いて來た。彼等は二人とも赤褌をしめた、筋骨の逞しい男だつた。が、潮に濡れ光つた姿はもの哀れと言ふよりも見すぼらしかつた。Nさんは彼等とすれ違ふ時、ちよつと彼等の挨拶に答へ、「風呂にお出で」と聲をかけたりした。

「ああ言ふ商賣もやり切れないな。」

僕は何か僕自身もながらみ取りになり兼ねない氣がした。

「ええ、全くやり切れませんよ。何しろ沖へ泳いで行つちや、何度も海の底へ潜るんですからね。」

「おまけに澪に流されたら、十中八九は助からないんだよ。」

Ｈは弓の折れの杖を振り振り、いろいろ澪の話をした。大きい澪は渚から一里半も沖へつづいてゐる、──そんなことも話にまじつてゐた。

「そら、Ｈさん、ありやいつでしたかね、ながらみ取りの幽靈が出るつて言つたのは？」

「去年──いや、をととしの秋だ。」

「ほんたうに出たの？」

Ｈさんは Ｍに答へる前にもう笑ひ聲を洩らしてゐた。

「幽靈ぢやなかつたんです。しかし幽靈が出るつて言つたのは磯つ臭い山のかげの卵塔場でしたし、おまけにその又ながらみ取りの死骸は蝦だらけになつて上つたもんですから、誰でも始のうちは眞に受けなかつたにしろ、氣味惡がつてゐたことだけは確かなんです。そのうちに海軍の兵

曹上りの男が宵のうちから卵塔場に張りこんでゐて、とうとう幽靈を見とどけたんですがね。とつつかまへて見りや何のことはない。唯そのながらみ取りと夫婦約束をしてゐたこの町の達磨茶屋の女だつたんです。それでも一時は火が燃えるの人を呼ぶ聲が聞えるのつて、ずゐぶん大騷ぎをしたもんですよ。」

「ぢや別段その女は人を嚇かす氣で來てゐたんぢやないの？」

「ええ、唯毎晩十二時前後にながらみ取りの墓の前へ來ちや、ぼんやり立つてゐただけなんです。」

Nさんの話はかう言ふ海邊に如何にもふさはしい喜劇だつた。が、誰も笑ふものはなかつた。のみならず皆なぜともなしに默つて足ばかり運んでゐた。

「さあこの邊から引つ返すかな。」

僕等はMのかう言つた時、いつの間にかもう風の落ちた、人氣のない渚を歩いてゐた。あたりは廣い砂の上にまだ千鳥の足跡さへかすかに見えるほど明るかつた。しかし海だけは見渡す限り、はるかに弧を描いた浪打ち際に一すぢの水沫を殘したまま、一面に黑ぐろと暮れかかつてゐた。

「ぢや失敬。」

「さやうなら。」

　HやNさんに別れた後、僕等は格別急ぎもせず、冷びえした渚を引き返した。渚には打ち寄せる浪の音の外に時々澄み渡つた蜩の聲も僕等の耳へ傳はつて來た。それは少くとも三町は離れた松林に鳴いてゐる蜩だつた。

「おい、M！」

　僕はいつかMよりも五六歩あとに歩いてゐた。

「何だ？」

「僕等ももう東京へ引き上げようか？」

「うん、引き上げるのも惡くはないな。」

　それからMは氣輕さうにティッペラリイの口笛を吹きはじめた。

（大正十四年八月七日）

尼提

舍衞城は人口の多い都である。が、城の面積は人口の多い割に廣くはない。從つて又厠溷も多くはない。城中の人々はその爲に大抵はわざわざ城外へ出、大小便をすることに定めてゐる。唯波羅門や刹帝利だけは便器の中に用を足し、特に足を勞することをしない。しかしこの便器の中の糞尿もどうにか始末をつけなければならぬ。その始末をつけるのが除糞人と呼ばれる人々である。

もう髪の黄ばみかけた尼提はかう言ふ除糞人の一人である。舍衞城の中でも最も貧しい、同時に最も心身の清淨に緣の遠い人々の一人である。

或日の午後、尼提はいつものやうに諸家の糞尿を大きい瓦器の中に集め、その又瓦器を背に負つたまま、いろいろの店の軒を並べた、狹苦しい路を步いてゐた。すると向うから步いて來たのは鉢を持つた一人の沙門である。尼提はこの沙門を見るが早いか、これは大變な人に出會つたと

思つた。沙門はちよつと見た所では當り前の人と變りはない。が、その眉間の白毫や青紺色の目を知つてゐるものには確かに祇園精舍にゐる釋迦如來に違ひなかつたからである。

釋迦如來は勿論三界六道の教主、十方最勝、光明無礙、億々衆生平等引導の能化である。けれどもその何ものたるかは尼提の知つてゐる所ではない。唯彼の知つてゐるのはこの舍衞國の波斯匿王さへ如來の前には臣下のやうに禮拜すると言ふことだけである。或は又名高い給孤獨長者も祇園精舍を造る爲に祇陀童子の園苑を買つた時には黄金を地に布いたと言ふことだけである。尼提はかう言ふ如來の前に糞器を背負つた彼自身を羞ぢ、萬が一にも無禮のないやうに倉皇と他の路へ曲つてしまつた。

しかし如來はその前に尼提の姿を見つけてゐた。のみならず彼が他の路へ曲つて行つた動機をも見つけてゐた。その動機が思はず如來の頰に微笑を漂はさせたのは勿論である。微笑を?――いや、必ずしも「微笑を」ではない。無智愚昧の衆生に對する、海よりも深い憐憫の情はその青紺色の目の中にも一滴の涙さへ浮べさせたのである。かう言ふ大慈悲心を動かした如來は忽ち平生の神通力により、この年をとつた除糞人をも弟子の數に加へようと決心した。

尼提の今度曲つたのもやはり前のやうに狹い路である。彼は後を振り返つて如來の來ないのを確めた上、始めてほつと一息した。如來は摩迦陀國の王子であり、如來の弟子たちも大抵は身分の高い人々である。罪業の深い彼などは妄りに咫尺することを避けなければならぬ。しかし今は幸ひにも無事に如來の目を晦ませ、――尼提ははつとして立ちどまつた。如來はいつか彼の向うに威嚴のある微笑を浮べたまま、安庠とこちらへ歩いてゐる。

尼提は糞器の重いのを厭はず、もう一度他の路へ曲つて行つた。如來が彼の面前へ姿を現したのは不可思議である。が、或は一刻も早く祇園精舍へ歸る爲にぬけ道か何かしたのかも知れない。彼は今度も咄嗟の間に如來の金身に近づかずにすんだ。それだけはせめてもの仕合せである。けれども尼提はかう思つた時、又如來の向うから歩いて來るのに喫驚した。

三度目に尼提の曲つた路にも如來は悠々と歩いてゐる。

四たび目に尼提の曲つた道にも如來は獅子王のやうに歩いてゐる。

五たび目に尼提の曲つた路にも、――尼提は狹い路を七たび曲り、七たびとも如來の歩いて來るのに出合つた。殊に七たび目に曲つたのはもう逃げ道のない袋路である。如來は彼の狼狽する

のを見ると、路のまん中に佇んだなり、徐ろに彼をさし招いた。「その指は纖長にして、爪は赤銅の如く、掌は蓮華に似たる」手を擧げて「恐れるな」と言ふ意味を示したのである。が、尼提は愈驚き、とうとう瓦器をとり落した。

「まことに恐れ入りますが、どうかここをお通し下さいまし。」

進退共に窮まつた尼提は糞汁の中に跪いたまま、かう如來に歎願した。しかし如來は不相變威嚴のある微笑を湛へながら、靜かに彼の顏を見下してゐる。

「尼提よ、お前もわたしのやうに出家せぬか！」

如來が雷音に呼びかけた時、尼提は途方に暮れた餘り、合掌して如來を見上げてゐた。

「わたくしは賤しいものでございまする。到底あなた樣のお弟子たちなどと御一しよにをることは出來ませぬ。」

「いやいや、佛法の貴賤を分たぬのはたとへば猛火の大小好惡を燒き盡してしまふのと變りはない。……」

それから、――それから如來の偈を說いたことは經文に書いてある通りである。

半月ばかりたつた後、祇園精舍に參つた給孤獨長者は竹や芭蕉の中の路を尼提が一人步いて來るのに出會つた。彼の姿は佛弟子になつても、餘り除糞人だつた時と變つてゐない。が、彼の頭だけはとうに髮の毛を落してゐる。尼提は長者の來るのを見ると、路ばたに立ちどまつて合掌した。

「尼提よ。お前は仕合せものだ。一たび如來のお弟子となれば、永久に生死を躍り越えて常寂光土に遊ぶことが出來るぞ。」

尼提はかう言ふ長者の言葉に愈慇懃に返事をした。

「長者よ。それはわたくしが惡かつた訣ではございませぬ。唯どの路へ曲つても、必ずその路へお出になつた如來がお惡かつたのでございまする。」

しかし尼提は經文によれば、一心に聽法をつづけた後、遂に初果を得たと言ふことである。

（大正十四年八月十三日）

# 湖南の扇

廣東に生れた孫逸仙等を除けば、目ぼしい支那の革命家は、――黄興、蔡鍔、宋教仁等はいづれも湖南に生れてゐる。これは勿論曾國藩や張之洞の感化にもよつたのであらう。しかしその感化を說明する爲にはやはり湖南の民自身の負けぬ氣の強いことも考へなければならぬ。僕は湖南へ旅行した時、偶然ちよつと小說じみた下の小事件に遭遇した。この小事件もことによると、情熱に富んだ湖南の民の面目を示すことになるのかも知れない。……

× × × × × ×

大正十年五月十六日の午後四時頃、僕の乘つてゐた沅江丸は長沙の棧橋へ橫着けになつた。

僕はその何分か前に甲板の欄干へ凭りかかつたまま、だんだん左舷へ迫つて來る湖南の府城を眺めてゐた。高い曇天の山の前に白壁や瓦屋根を積み上げた長沙は豫想以上に見すぼらしかつた。

殊に狹苦しい埠頭のあたりは新しい赤煉瓦の西洋家屋や葉柳なども見えるだけに殆ど飯田河岸と變らなかつた。僕は當時長江に沿うた大抵の都會に幻滅してゐたから、長沙にも勿論豚の外に見るもののないことを覺悟してゐた。しかしかう言ふ見すぼらしさはやはり僕には失望に近い感情を與へたのに違ひなかつた。

沅江丸は運命に從ふやうにじりじり棧橋へ近づいて行つた。同時に又蒼い湘江の水もじりじり幅を縮めて行つた。すると薄汚い支那人が一人、提籃か何かをぶら下げたなり、突然僕の目の下からひらりと棧橋へ飛び移つた。それは實際人間よりも蝗に近い早業だつた。が、あつと思ふうちに今度は天秤棒を横たへたのが見事に又水を跳り越えた。續いて二人、五人、八人、――見る見る僕の目の下はのべつに棧橋へ飛び移る無數の支那人に埋まつてしまつた。と思ふと船はいつの間にかもう赤煉瓦の西洋家屋や葉柳などの並んだ前にどつしりと横着けに錏えてゐた。

僕はやつと欄干を離れ、同じ「社」のBさんを物色し出した。長沙に六年もゐるBさんはけふも特に沅江丸へ出迎ひに來てくれる筈になつてゐた。が、Bさんらしい姿は容易に僕には見つからなかつた。のみならず舷梯を上下するのは老若の支那人ばかりだつた。彼等は互に押し合ひへし

合ひ、口々に何か騷いでゐた。殊に一人の老紳士などは舷梯を下りざまにふり返りながら、後ろにゐる苦力を擲つたりしてゐた。それは長江を溯つて來た僕には決して珍しい見ものではなかつた。けれども亦格別見慣れたことを長江に感謝したい見ものでもなかつた。

僕はだんだん苛立たしさを感じ、もう一度欄干によりかかりながら、やはり人波の去來する埠頭の前後を眺めまはした。そこには肝腎のBさんは勿論、日本人は一人も見當らなかつた。しかし僕は棧橋の向うに、――枝のつまつた葉柳の下に一人の支那美人を發見した。彼女は水色の夏衣裳の胸にメダルか何かをぶら下げた、如何にも子供らしい女だつた。僕の目は或はそれだけでも彼女に惹かれたかも知れなかつた。が、彼女はその上に高い甲板を見上げたまま、紅の濃い口もとに微笑を浮かべ、誰かに合ひ圖でもするやうに半開きの扇をかざしてゐた。……

「おい、君。」

僕は驚いてふり返つた。僕の後ろにはいつの間にか鼠色の大掛兒を着た支那人が一人、顏中に愛嬌を漲らせてゐた。僕はちよつとこの支那人の誰であるかがわからなかつた。けれども忽ち彼の顏に、――就中彼の薄い眉毛に舊友の一人を思ひ出した。

「やあ、君か。さうさう、君は湖南の産だつたつけね。」
「うん、ここに開業してゐる。」
譚永年は僕と同期に一高から東大の醫科へはひつた留學生中の才人だつた。
「けふは誰かの出迎ひかい?」
「うん、誰かの、――誰だと思ふ?」
「僕の出迎ひぢやないだらう?」
譚はちよつと口をすぼめ、ひよつとこに近い笑ひ顔をした。
「ところが君の出迎ひなんだよ。Bさんは生憎五六日前からマラリヤ熱に罹つてゐる。」
「ぢやBさんに頼まれたんだね?」
「頼まれないでも來るつもりだつた。」
僕は彼の昔から愛想の好いのを思ひ出した。譚は僕等の寄宿舍生活中、誰にも惡感を與へたことはなかつた。若し又多少でも僕等の間に不評判になつてゐたとすれば、それはやはり同室だつた菊池寛の言つたやうに餘りに誰にもこれと言ふほどの惡感を與へてゐないことだつた。……

「だが君の厄介になるのは氣の毒だな。僕は實は宿のこともBさんに任かせつきりになつてゐるんだが、……」

「宿は日本人倶樂部に話してある。半月でも一月でも差支へない。」

「一月でも？　常談言つちやいけない。僕は三晩泊めて貰へりや好いんだ。」

譚は驚いたと言ふよりも急に愛嬌のない顏になつた。

「たつた三晩しか泊らないのか？」

「さあ、土匪の斬罪か何か見物でも出來りや格別だが、……」

僕はかう答へながら、內心長沙の人譚永年の顏をしかめるのを豫想してゐた。しかし彼はもう一度愛想の好い顏に返つたぎり、少しもこだはらずに返事をした。

「ぢやもう一週間前に來りや好いのに。あすこに少し空き地が見えるね。――」

それは赤煉瓦の西洋家屋の前、――丁度あの枝のつまつた葉柳のある處に當つてゐた。が、さつきの支那美人はいつかもうそこには見えなくなつてゐた。

「あすこでこの間五人ばかり一時に首を斬られたんだがね。そら、あの犬の步いてゐる處で、…

……」

「そりや惜しいことをしたな。」

「斬罪だけは日本ぢや見る訣に行かない。」

譚は大聲に笑つた後、ちよつと眞面目になつたと思ふと、無造作に話頭を一轉した。

「ぢやそろそろ出かけようか？　車ももうあすこに待たせてあるんだ。」

×　　×　　×　　×　　×　　×

僕は翌々十八日の午後、折角の譚の勸めに從ひ、湘江を隔てた嶽麓へ麓山寺や愛晩亭を見物に出かけた。

僕等を乘せたモオタア・ボオトは在留日本人の「中の島」と呼ぶ三角洲を左にしながら、二時前後の湘江を走つて行つた。からりと晴れ上つた五月の天氣は兩岸の風景を鮮かにしてゐた。僕等の右に連つた長沙も白壁や瓦屋根の光つてゐるだけにきのふほど憂鬱には見えなかつた。まして柑類の木の茂つた、石垣の長い三角洲はところどころに小ぢんまりした西洋家屋を覗かせたり、

その又西洋家屋の間に綱に吊つた洗濯ものを閃かせたり、如何にも活き活きと横たはつてゐた。譚は若い船頭に命令を與へる必要上、ボオトの艫に陣どつてゐた。が、命令を與へるよりもの べつに僕に話しかけてゐた。

「あれが日本領事館だ。……このオペラ・グラスを使ひ給へ。……その右にあるのは日清汽船會社。」

僕は葉卷を啣へたまま、舟ばたの外へ片手を下ろし、時々僕の指先に當る湘江の水勢を樂しんでゐた。譚の言葉は僕の耳に唯一つづりの騷音だつた。しかし彼の指さす通り、兩岸の風景へ目をやるのは勿論僕にも不快ではなかつた。

「この三角洲は橘洲と言つてね。……」

「ああ、鳶が鳴いてゐる。」

「鳶が？……うん、鳶も澤山ゐる。そら、いつか張繼堯と譚延闓との戰爭があつた時だね、あの時にや張の部下の死骸がいくつもこの川へ流れて來たもんだ。すると又鳶が一人の死骸へ二羽も三羽も下りて來てね……」

丁度譚のかう言ひかけた時、僕等の乗つてゐたモオクア・ボオトはやはり一艘のモオタア・ボオトと五六間隔てゝすれ違つた。それは支那服の青年の外にも見事に粧つた支那美人を二三人乗せたボオトだつた。僕はこれ等の支那美人よりも寧ろそのボオトの大辷りに浪を越えるのを見守つてゐた。けれども譚は話半ばに彼等の姿を見るが早いか、殆ど仇にでも遇つたやうに倉皇と僕にオペラ・グラスを渡した。

「あの女を見給へ。あの艫に坐つてゐる女を。」

僕は誰にでも急つつかれると、一層何かとこだはり易い親譲りの片意地を持合せてゐた。のみならずそのボオトの残した浪はこちらの舟ばたを洗ひながら、僕の手をカフスまでずぶ濡れにしてゐた。

「なぜ？」

「まあ、なぜでも好いから、あの女を見給へ。」

「美人かい？」

「ああ、美人だ。美人だ。」

彼等を乘せたモオタア・ボオトはいつかもう十間ほど離れてゐた。僕はやつと體を扭ぢまげ、オペラ・グラスの度を調節した。同時に又突然向うのボオトのぐいと後ずさりをする錯覺を感じた。「あの女」は圓い風景の中にちよつと顏を横にしたまま、誰かの話を聞いてゐると見え、時々微笑を洩らしてゐた。頤の四角い彼女の顏は唯目の大きいと言ふ以外に格別美しいとは思はれなかつた。が、彼女の前髮や薄い黃色の夏衣裳の川風に波を打つてゐるのは遠目にも綺麗に違ひなかつた。

「見えたか？」

「うん、睫毛まで見える。しかしあんまり美人ぢやないな。」

僕は何か得意らしい譚ともう一度顏を向ひ合せた。

「あの女がどうかしたのかい？」

譚はふだんのおしやべりにも似ず、悠々と卷煙草に火をつけてから、あべこべに僕に問ひ返した。

「きのふ僕はさう言つたね、——あの棧橋の前の空き地で五人ばかり土匪の首を斬つたつて？」

「うん、それは覺えてゐる。」

「その仲間の頭目は黃六一と言つてね。——ああ、そいつも斬られたんだ。——これが又右の手には小銃を持ち、左の手にはピストルを持つて一時に二人射殺すと言ふ、湖南でも評判の惡黨だつたんだがね。……」

譚は忽ち黃六一の一生の惡業を話し出した。彼の話は大部分新聞記事の受け賣りらしかつた。しかし幸ひ血の匂よりもロマンティックな色彩に富んだものだつた。黃の平生密輸入者たちに黃老爺と呼ばれてゐた話、又湘潭の或商人から三千元を強奪した話、又腿に彈丸を受けた樊阿七と言ふ副頭目を肩に蘆林潭を泳ぎ越した話、又岳州の或山道に十二人の歩兵を射倒した話、——譚は殆ど黃六一を崇拜してゐるのかと思ふ位、熱心にそんなことを話しつづけた。

「何しろ君、そいつは殺人擄人百十七件と言ふんだからね。」

彼は時々話の合ひ間にかう言ふ註釋も加へたりした。僕も勿論僕自身に何の損害も受けない限り、決して土匪は嫌ひではなかつた。が、いづれも大差のない武勇談ばかり聞かせられるのには多少の退屈を感じ出した。

「そこであの女はどうしたんだね？」
譚はやつとにやにやしながら、内心僕の豫想したのと餘り變らない返事をした。
「あの女は黄の情婦だつたんだよ。」
僕は彼の註文通り、驚嘆する訣には行かなかつた。けれども浮かない顔をしたまま、葉卷を啣へてゐるのも氣の毒だつた。
「ふん、土匪も洒落れたもんだね。」
「何、黄などは知れたものさ。何しろ前清の末年にゐた強盗蔡などと言ふやつは月收一萬元を越してゐたんだからね。こいつは上海の租界の外に堂々たる洋館を構へてゐたもんだ。細君は勿論、妾までも、……」
「ぢやあの女は藝者か何かかい？」
「うん、玉蘭と言ふ藝者でね、あれでも黄の生きてゐた時には中々幅を利かしてゐたもんだよ。
……」
譚は何か思ひ出したやうに少時口を噤んだまま、薄笑ひばかり浮かべてゐた。が、やがて卷煙

草を投げると、眞面目にかう言ふ相談をしかけた。

「嶽麓には湘南工業學校と言ふ學校も一つあるんだがね、そいつをまつ先に參觀しようぢやないか？」

「うん、見ても差支へない。」

僕は煮え切らない返事をした。それはついきのふの朝、或女學校を參觀に出かけ、存外烈しい排日的空氣に不快を感じてゐた爲だつた。しかし僕等を乘せたボオトは僕の氣もちなどには頓着せず、「中の島」の鼻を大まはりに不相變晴れやかな水の上をまつ直に嶽麓へ近づいて行つた。……

×　　×　　×　　×　　×

僕はやはり同じ日の晩、或妓館の梯子段を譚と一しよに上つて行つた。

僕等の通つた二階の部屋は中央に据ゑたテエブルは勿論、椅子も、唾壺も、衣裳箪笥も、上海や漢口の妓館にあるのと殆ど變りは見えなかつた。が、この部屋の天井の隅には針金細工の鳥籠が一つ、硝子窓の側にぶら下げてあつた。その又籠の中には栗鼠が二匹、全然何の音も立てずに

止まり木を上つたり下つたりしてゐた。それは窓や戸口に下げた、赤い更紗の布と一しよに珍しい見ものに違ひなかつた。しかし少くとも僕の目には氣味の惡い見ものにも違ひなかつた。

この部屋に僕等を迎へたのは小肥りに肥つた鴇婦だつた。譚は彼女を見るが早いか、雄辯に何か話し出した。彼女も愛嬌そのもののやうに滑かに彼と應對してゐた。が、彼等の話してゐる言葉は一言も僕にはわからなかつた。（これは勿論僕自身の支那語に通じてゐない爲である。しかし元來長沙の言葉は北京官話に通じてゐる耳にも決して容易にはわからないらしい。）

譚は鴇婦と話した後、大きい紅木のテエブルへ僕と差向ひに腰を下ろした。それから彼女の運んで來た活版刷の局票の上へ藝者の名前を書きはじめた。張湘娥、王巧雲、含芳、醉玉樓、愛媛媛、——それ等はいづれも旅行者の僕には支那小說の女主人公にふさはしい名前ばかりだつた。

「玉蘭も呼ばうか？」

僕は返事をしたいにもしろ、生憎鴇婦の火を擦つてくれる卷煙草の一本を吸ひつけてゐた。が、譚はテエブル越しにちよつと僕の顏を見たぎり、無頓着に筆を揮つたらしかつた。

そこへ濶達にはひつて來たのは細い金緣の眼鏡をかけた、血色の好い圓顏の藝者だつた。彼女

は白い夏衣裳にダイアモンドを幾つも輝かせてゐた。のみならずテニスか水泳かの選手らしい體格も具へてゐた。僕はかう言ふ彼女の姿に美醜や好惡を感ずるよりも妙に痛切な矛盾を感じた。彼女は實際この部屋の空氣と、――殊に鳥籠の中の栗鼠とは吊り合はない存在に違ひなかつた。

彼女はちよつと目禮したぎり、躍るやうに譚の側へ歩み寄つた。しかも彼の隣に坐ると、片手を彼の膝の上に置き、宛轉と何かしやべり出した。譚も、――譚は勿論得意さうに是了是了などと答へてゐた。

「これはこの家にゐる藝者でね、林大嬌と言ふ人だよ。」

僕は譚にかう言はれた時、おのづから彼の長沙にも少ない金持の子だつたのを思ひ出した。

それから十分ばかりたつた後、僕等はやはり向ひ合つたまま、木の子だの鷄だの白菜だのの多い四川料理の晩飯をはじめてゐた。藝者はもう林大嬌の外にも大勢僕等をとり卷いてゐた。のみならず彼等の後ろには鳥打帽子などをかぶつた男も五六人胡弓を構へてゐた。藝者は時々坐つたなり、丁度胡弓の音に吊られるやうに甲高い唄をうたひ出した。それは僕にも必ずしも全然面白味のないものではなかつた。しかし僕は京調の黨馬や西皮調の汾河灣よりも僕の左に坐つた藝者

に遙かに興味を感じてゐた。
僕の左に坐つたのは僕のをととひ沅江丸の上から僅かに一瞥した支那美人だつた。彼女は水色の夏衣裳の胸に不相變メダルをぶら下げてゐた。が、間近に來たのを見ると、たとひ病的な弱々しさはあつても、存外うひうひしい處はなかつた。僕は彼女の横顏を見ながら、いつか日かげの土に育つた、小さい球根を考へたりしてゐた。
「おい、君の鄰に坐つてゐるのはね、――」
譚は老酒に赤らんだ顏に人懷こい微笑を浮かべたまま、蝦を盛り上げた皿越しに突然僕へ聲をかけた。
「それは含芳と言ふ人だよ。」
僕は譚の顏を見ると、なぜか彼にはをととひのことを打ち明ける心もちを失つてしまつた。
「この人の言葉は綺麗だね。Rの音などは佛蘭西人のやうだ。」
「うん、その人は北京生まれだから。」
僕等の話題になつたことは含芳自身にもわかつたらしかつた。彼女は現に僕の顏へ時々素早い

目をやりながら、早口に譚と問答をし出した。けれども啞に變らない僕はこの時もやはりいつもの通り、唯二人の顏色を見比べてゐるより外はなかつた。

「君はいつ長沙へ來たと尋くからね、をととひ來たばかりだと返事をすると、その人もをととひは誰かの出迎ひに埠頭まで行つたと言つてゐるんだ。」

譚はかう言ふ通譯をした後、もう一度含芳へ話しかけた。が、彼女は頰笑んだぎり、子供のやうにいやいやをしてゐた。

「ふん、どうしても白狀しない。誰の出迎ひに行つたと尋いてゐるんだが。……」

すると突然林大嬌は持つてゐた卷煙草に含芳を指さし、嘲るやうに何か言ひ放つた。含芳は確かにはつとしたと見え、いきなり僕の膝を抑へるやうにした。しかしやつと微笑したと思ふと、すぐに又一こと言ひ返した。僕は勿論この芝居に、——或はこの芝居のかげになつた、存外深いらしい彼等の敵意に好奇心を感ぜずにはゐられなかつた。

「おい、何と言つたんだい？」

「その人は誰の出迎ひでもない、お母さんの出迎ひに行つたんだと言ふんだ。何、今ここにゐる

先生がね、×××と言ふ長沙の役者の出迎ひか何かだらうと言つたもんだから。」（僕は生憎その名前だけはノオトにとる訣に行かなかつた。）

「お母さん？」

「お母さんと言ふのは義理のお母さんだよ。つまりその人だの玉蘭だのを抱へてゐる家の鴇婦のことだね。」

譚は僕の問を片づけると、老酒を一杯煽つてから、急に滔々と辯じ出した。それは僕には這箇這箇の外には一こともわからない話だつた。が、藝者や鴇婦などの熱心に聞いてゐるだけでも、何か興味のあることらしかつた。のみならず時々僕の顔へ彼等の目をやる所を見ると、少くとも幾分かは僕自身にも關係を持つたことらしかつた。僕は人目には平然と卷煙草を啣へてゐたものの、だんだん苛立たしさを感じはじめた。

「莫迦！　何を話してゐるんだ？」

「何、けふ嶽麓へ出かける途中、玉蘭に遇つたことを話してゐるんだ。それから……」

譚は上脣を嘗めながら、前よりも上機嫌につけ加へた。

「それから君は斬罪と言ふものを見たがつてゐることを話してゐるんだ。」
「何だ、つまらない。」
僕はかう言ふ説明を聞いても、未だに顔を見せない玉蘭は勿論、彼女の友だちの含芳にも格別氣の毒とは思はなかつた。けれども含芳の顔を見た時、理智的には彼女の心もちを可也はつきりと了解した。彼女は耳環を震はせながら、テエブルのかげになつた膝の上に手巾を結んだり解いたりしてゐた。
「ぢやこれもつまらないか？」
譚は後にゐた鴇婦の手から小さい紙包みを一つ受け取り、得々とそれをひろげだした。その又紙の中には煎餅位大きい、チヨコレエトの色に干からびた、妙なものが一枚包んであつた。
「何だ、それは？」
「これか？　これは唯のビスケツトだがね。……そら、さつき黄六一と云ふ土匪の頭目の話をしたらう？　あの黄の首の血をしみこませてあるんだ。これこそ日本ぢや見ることは出來ない。」
「そんなものを又何にするんだ？」

「何にするもんか？　食ふだけだよ。この邊ぢや未だにこれを食へば、無病息災になると思つてゐるんだ。」

譚は晴れ晴れと微笑したまま、丁度この時テエブルを離れた二三人の藝者に挨拶した。が、含芳の立ちかかるのを見ると、殆ど憐みを乞ふやうに何か笑つたりしやべつたりした。のみならずしまひには片手を擧げ、正面の僕を指さしたりした。含芳はちよつとためらつた後、もう一度やつと微笑を浮かべ、テエブルの前に腰を下した。僕は大いに可愛かつたから、一座の人目に觸れないやうにそつと彼女の手を握つてゐてやつた。

「こんな迷信こそ國辱だね。僕などは醫者と言ふ職業上、ずゐぶんやかましくも言つてゐるんだが……」

「それは斬罪があるからだけさ。腦味噌の黑燒きなどは日本でも嚥んでゐる。」

「まさか。」

「いや、まさかぢやない。僕も嚥んだ。尤も子供のうちだつたが。……」

僕はかう言ふ話の中に玉蘭の來たのに氣づいてゐた。彼女は鴇婦と立ち話をした後、含芳の鄰

に腰を下ろした。

譚は玉蘭の來たのを見ると、又僕をそつちのけに彼女に愛嬌をふりまき出した。彼女は外光に眺めるよりも幾分かは美しいのに違ひなかつた。少くとも彼女の笑ふ度にエナメルのやうに齒の光るのは見事だつたのに違ひなかつた。しかし僕はその齒並みにおのづから栗鼠を思ひ出した。栗鼠は今でも不相變、赤い更紗の布を下げた硝子窓に近い鳥籠の中に二匹とも滑らかに上下してゐた。

「ぢや一つこれをどうだ?」

譚はビスケットを折つて見せた。ビスケットは折り口も同じ色だつた。

「莫迦を言へ。」

僕は勿論首を振つた。譚は大聲に笑つてから、今度は鄰の林大嬌へビスケットの一片を勸めようとした。林大嬌はちよつと顏をしかめ、斜めに彼の手を押し戻した。彼は同じ常談を何人かの藝者と繰り返した。が、そのうちにいつの間にか、やはり愛想の好い顏をしたまま、身動きもしない玉蘭の前へ褐色の一片を突きつけてゐた。

僕はちよつとそのビスケツトの匂だけ嗅いで見たい誘惑を感じた。
「おい、僕にもそれを見せてくれ。」
「うん、こつちにまだ半分ある。」
譚は殆ど左利きのやうに殘りの一片を投げてよこした。僕は小皿や箸の間からその一片を拾ひ上げた。けれども折角拾ひ上げると、急に嗅いで見る氣もなくなつたから、默つてテエブルの下へ落してしまつた。
すると玉蘭は譚の顏を見つめ、二こと三こと問答をした。それからビスケツトを受け取つた後、彼女を見守つた一座を相手に早口に何かしやべり出した。
「どうだ、通譯しようか？」
譚はテエブルに頰杖をつき、そろそろ呂律の怪しい舌にから僕へ話しかけた。
「うん、通譯してくれ。」
「好いか？　逐語譯だよ。わたしは喜んでわたしの愛する……黃老爺の血を味はひます。……」
僕は體の震へるのを感じた。それは僕の膝を抑へた含芳の手の震へるのだつた。

「あなたがたもどうかわたしのやうに、……あなたがたの愛する人を、……」

玉蘭は譚の言葉の中にいつかもう美しい歯にビスケツトの一片を嚙みはじめてゐた。……

× × × × × ×

僕は三泊の豫定通り、五月十九日の午後五時頃、前と同じ沅江丸の甲板の欄干によりかかつてゐた。白壁や瓦屋根を積み上げた長沙は何か僕には無氣味だつた。それは次第に迫つて來る暮色の影響に違ひなかつた。僕は葉卷を啣へたまま、何度もあの愛嬌の好い譚永年の顏を思ひ出した。が、譚は何の爲か、僕の見送りには立たなかつた。

沅江丸の長沙を發したのは確か七時か七時半だつた。僕は食事をすませた後、薄暗い船室の電燈の下に僕の滯在費を計算し出した。僕の目の前には扇が一本、二尺に足りない机の外へ桃色の流蘇を垂らしてゐた。この扇は僕のここへ來る前に誰かの置き忘れて行つたものだつた。僕は鉛筆を動かしながら、時々又譚の顏を思ひ出した。彼の玉蘭を苦しめた理由ははつきりとは僕にもわからなかつた。しかし僕の滯在費は――僕は未だに覺えてゐる、日本の金に換算すると、丁度

十二圓五十錢だつた。

（大正十四年十二月？）

# 年末の一日

……僕は何でも雜木の生えた、寂しい崖の上を歩いて行つた。崖の下はすぐに沼になつてゐた。その又沼の岸寄りには水鳥が二羽泳いでゐた。どちらも薄い苔の生えた石の色に近い水鳥だつた。僕は格別その水鳥に珍しい感じは持たなかつた。が、餘り翼などの鮮かに見えるのは無氣味だつた。――

――僕はかう言ふ夢の中からがたがた言ふ音に目をさました。それは書齋と鍵の手になつた座敷の硝子戸の音らしかつた。僕は新年號の仕事中、書齋に寢床をとらせてゐた。三軒の雜誌社に約束した仕事は三篇とも僕には不滿足だつた。しかし兎に角最後の仕事はけふの夜明け前に片づいてゐた。

寢床の裾の障子には竹の影もちらちら映つてゐた。僕は思ひ切つて起き上り、一まづ後架へ小便をしに行つた。近頃この位小便から水蒸氣の盛んに立つたことはなかつた。僕は便器に向ひた

がら、今日はふだんよりも寒いぞと思つた。
伯母や妻は座敷の縁側にせつせと硝子戸を磨いてゐた。がたがた言ふのはこの音だつた。袖無しの上へ襷をかけた伯母はバケツの雜巾を絞りながら、多少僕にからかふやうに「お前、もう十二時ですよ」と言つた。成程十二時に違ひなかつた。廊下を拔けた茶の間にはいつか古い長火鉢の前に晝飯の支度も出來上つてゐた。のみならず母は次男の多加志に牛乳やトオストを養つてゐた。しかし僕は習慣上朝らしい氣もちを持つたまま、人氣のない臺所へ顏を洗ひに行つた。
朝飯兼晝飯をすませた後、僕は書齋の置き炬燵へはひり、二三種の新聞を讀みはじめた。新聞の記事は諸會社のボオナスや羽子板の賣れ行きで持ち切つてゐた。けれども僕の心もちは少しも陽氣にはならなかつた。僕は仕事をすませる度に妙に弱るのを常としてゐた。それは房後の疲勞のやうにどうすることも出來ないものだつた。……
K君の來たのは二時前だつた。僕はK君を置き炬燵に請じ、差し當りの用談をすませることにした。縞の背廣を着たK君はもとは奉天の特派員、――今は本社詰めの新聞記者だつた。
「どうです？　暇ならば出ませんか？」

僕は用談をすませた頃、ぢつと家にとぢこもつてゐるのはやり切れない氣もちになつてゐた。
「ええ、四時頃までならば。……どこかお出かけになる先はおきまりになつてゐるんですか？」
Ｋ君は遠慮勝ちに問ひ返した。
「いいえ、どこでも好いんです。」
「お墓はけふは駄目でせうか？」
Ｋ君のお墓と言つたのは夏目先生のお墓だつた。僕はもう半年ほど前に先生の愛讀者のＫ君にお墓を教へる約束をしてゐた。年の暮にお墓參りをする、――それは僕の心もちに必ずしもぴつたりしないものではなかつた。
「ぢやお墓へ行きませう。」
僕は早速外套をひつかけ、Ｋ君と一しよに家を出ることにした。
天氣は寒いなりに晴れ上つてゐた。狹苦しい動坂の往來もふだんよりは人あしが多いらしかつた。門に立てる松や竹も田端青年團詰め所とか言ふ板葺きの小屋の側に寄せかけてあつた。僕はかう言ふ町を見た時、幾分か僕の少年時代に抱いた師走の心もちのよみ返るのを感じた。

僕等は少時待つた後、護國寺前行の電車に乘つた。電車は割り合ひにこまなかつた。K君は外套の襟を立てたまま、この頃先生の短尺を一枚やつと手に入れた話などをしてゐた。

すると富士前を通り越した頃、電車の中ほどの電球が一つ、偶然拔け落ちてこなごなになつた。

そこには顏も身なりも惡い二十四五の女が一人、片手に大きい包を持ち、片手に吊り革につかまつてゐた。電球は床へ落ちる途端に彼女の前髮をかすめたらしかつた。彼女は妙な顏をしたなり、電車中の人々を眺めまはした。それは人々の同情を、――少くとも人々の注意だけは惹かうとする顏に違ひなかつた。が、誰も言ひ合せたやうに全然彼女には冷淡だつた。僕はK君と話しながら、何か拍子拔けのした彼女の顏に可笑しさよりも寧ろはかなさを感じた。

僕等は終點で電車を下り、注連飾りの店など出來た町を雜司ケ谷の墓地へ歩いて行つた。

大銀杏の葉の落ち盡した墓地は不相變けふもひつそりしてゐた。幅の廣い中央の砂利道にも墓參りの人さへ見えなかつた。僕はK君の先に立つたまま、右側の小みちへ曲つて行つた。小みちは要冬青の生け垣や赤錆のふいた鐵柵の中に大小の墓を並べてゐた。が、いくら先へ行つても、先生のお墓は見當らなかつた。

「もう一つ先の道ぢやありませんか？」

「さうだつたかも知れませんね。」

僕はその小みちを引き返しながら、毎年十二月九日には新年號の仕事に追はれる爲、滅多に先生のお墓參りをしなかつたことを思ひ出した。しかし何度か來ないにしても、お墓の所在のわからないことは僕自身にも信じられなかつた。

その次の稍廣い小みちもお墓のないことは同じだつた。僕等は今度は引き返す代りに生け垣の間を左へ曲つた。けれどもお墓は見當らなかつた。のみならず僕の見覺えてゐた幾つかの空き地さへ見當らなかつた。

「聞いて見る人もなし、……困りましたね。」

僕はかう言ふK君の言葉にはつきり冷笑に近いものを感じた。しかし教へると言つた手前、腹を立てる訣にも行かなかつた。

僕等はやむを得ず大銀杏を目當てにもう一度横みちへはひつて行つた。が、そこにもお墓はなかつた。僕は勿論苛ら苛らして來た。しかしその底に潜んでゐるのは妙に佗しい心もちだつた。

僕はいつか外套の下に僕自身の體溫を感じながら、前にもかう言ふ心もちを知つてゐたことを思ひ出した。それは僕の少年時代に或餓鬼大將にいぢめられ、しかも泣かずに我慢して家へ歸つた時の心もちだつた。

何度も同じ小みちに出入した後、僕は古榕を焚いてゐた墓地掃除の女に途を教はり、大きい先生のお墓の前へやつとK君をつれて行つた。

お墓はこの前に見た時よりもずつと古びを加へてゐた。おまけにお墓のまはりの土もずつと霜に荒されてゐた。それは九日に手向けたらしい寒菊や南天の束の外に何か親しみの持てないものだつた。K君はわざわざ外套を脫ぎ、丁寧にお墓へお時宜をした。しかし僕はどう考へても、今更恬然とK君と一しよにお時宜をする勇氣は出惡かつた。

「もう何年になりますかね？」

「丁度九年になる訣です。」

僕等はそんな話をしながら、護國寺前の終點へ引き返して行つた。

僕はK君と一しよに電車に乘り、僕だけ一人富士前で下りた。それから東洋文庫にゐる或友だ

ちを尋ねた後、日の暮に動坂へ歸り着いた。

動坂の往來は時刻がらだけに前よりも一層混雜してゐた。が、庚申堂を通り過ぎると、人通りもだんだん減りはじめた。僕は受け身になりきつたまま、爪先ばかり見るやうに風立つた路を步いて行つた。

すると墓地裏の八幡坂の下に箱車を引いた男が一人、楫棒に手をかけて休んでゐた。箱車はちよつと眺めた所、肉屋の車に近いものだつた。が、側へ寄つて見ると、横に廣いあと口に東京胞衣會社と書いたものだつた。僕は後から聲をかけた後、ぐんぐんその車を押してやつた。それは多少押してやるのに穢い氣もしたのに違ひなかつた。しかし力を出すだけでも助かる氣もしたのに違ひなかつた。

北風は長い坂の上から時々まつ直に吹き下ろして來た。墓地の樹木もその度にさあつと葉の落ちた梢を鳴らした。僕はかう言ふ薄暗がりの中に妙な興奮を感じながら、まるで僕自身と闘ふやうに一心に箱車を押しつづけて行つた。……

（大正十四年十二月）

# カルメン

革命前だつたか、革命後だつたか、——いや、あれは革命前ではない。なぜ又革命前ではないかと言へば、僕は當時小耳に挾んだダンチエンコの洒落を覺えてゐるからである。

或蒸し暑い雨もよひの夜、舞臺監督のT君は、帝劇の露臺に佇みながら、炭酸水のコップを片手に詩人のダンチエンコと話してゐた。あの亞麻色の髮の毛をした盲目詩人のダンチエンコとである。

「これもやつぱり時勢ですね。はるばる露西亞のグランド・オペラが日本の東京へやつて來ると言ふのは。」

「それはボルシェヴィツキはカゲキ派ですから。」

この問答のあつたのは確か初日から五日目の晩、——カルメンが舞臺へ登つた晩である。僕はカルメンに扮する筈のイイナ・ブルスカアヤに夢中になつてゐた。イイナは目の大きい、小鼻の

張つた、肉感の強い女である。僕は勿論カルメンに扮するイイナを觀ることを樂しみにしてゐた。が、第一幕が上つたのを見ると、カルメンに扮したのはイイナではない。水色の目をした、鼻の高い、何とか云ふ貧相な女優である。僕はT君と同じボツクスにタキシイドの胸を並べながら、落膽しない訣には行かなかつた。

「カルメンは僕等のイイナぢやないね。」

「イイナは今夜は休みださうだ。その原因が又頗るロマンティツクでね。——」

「どうしたんだ？」

「何とか云ふ舊帝國の侯爵が一人、イイナのあとを追つかけて來てね、をととひ東京へ着いたんださうだ。所がイイナはいつの間にか亞米利加人の商人の世話になつてゐる。そいつを見た侯爵は絶望したんだね、ゆうべホテルの自分の部屋で首を縊つて死んぢまつたんださうだ。」

僕はこの話を聞いてゐるうちに、或場景を思ひ出した。それは夜の更けたホテルの一室に大勢の男女に圍まれたまま、トランプを弄んでゐるイイナである。黑と赤との着物を着たイイナはヂプシイ占ひをしてゐると見え、T君にほほ笑みかけながら、「今度はあなたの運を見て上げませ

う」と言つた。（或は言つたのだと云ふことである。ダア以外の露西亞語を知らない僕は勿論十二箇國の言葉に通じたT君に飜譯して貰ふ外はない。）それからトランプをまくつて見た後、「あなたはあの人よりも幸福ですよ。あなたの愛する人と結婚出來ます」と言つた。あの人と云ふのはイイナの側に誰かと話してゐた露西亞人である。僕は不幸にも「あの人」の顏だの服裝だのを覺えてゐない。僅かに僕が覺えてゐるのは胸に插してゐた石竹だけである。イイナの愛を失つた爲に首を縊つて死んだと云ふのはあの晩の「あの人」ではなかつたであらうか？……

「それぢや今夜は出ない筈だ。」

「好い加減に外へ出て一杯やるか？」

T君も勿論イイナ黨である。

「まあ、もう一幕見て行かうぢやないか？」

僕等がダンチエンコと話したりしたのは恐らくはこの幕合ひだつたであらう。

次の幕も僕等には退屈だつた。しかし僕等が席に就いてまだ五分とたたないうちに外國人が五六人丁度僕等の正面に當る向う側のボックスへはひつて來た。しかも彼等のまつ先に立つたのは

紛れもないイイナ・ブルスカアヤである。イイナはボックスの一番前に坐り、孔雀の羽根の扇を使ひながら、悠々と舞臺を眺め出した。のみならず同件の外國人の男女と(その中には必ず彼女の檀那の亞米利加人も交つてゐたのであらう。)愉快さうに笑つたり話したりし出した。

「イイナだね。」

「うん、イイナだ。」

僕等はとうとう最後の幕まで、――カルメンの死骸を擁したホセが、「カルメン! カルメン!」と慟哭するまで僕等のボックスを離れなかつた。それは勿論舞臺よりもイイナ・ブルスカアヤを見てゐた爲である。この男を殺したことを何とも思つてゐないらしい露西亞のカルメンを見てゐた爲である。

× × × × × ×

それから二三日たつた或晩、僕は或レストランの隅にT君とテエブルを圍んでゐた。

「君はイイナがあの晩以來、確か左の藥指に繃帶してゐたのに氣がついてゐるかい?」

「さう云へば繃帶してゐたやうだね。」

「イイナはあの晩ホテルへ歸ると、……」

「駄目だよ、君、それを飮んぢや。」

僕はT君に注意した。薄い光のさしたグラスの中にはまだ小さい黄金蟲が一匹、仰向けになつてもがいてゐた。T君は白葡萄酒を床へこぼし、妙な顏をしてつけ加へた。

「皿を壁へ叩きつけてね、その又缺片をカスタネットの代りにしてね、指から血の出るのもかまはずにね、……」

「カルメンのやうに踊つたのかい？」

そこへ僕等の興奮とは全然つり合はない顏をした、頭の白い給仕が一人、靜に鮭の皿を運んで來た。……

（大正十五年四月十日）

# 三つのなぞ

## 一　なぜファウストは悪魔に出會つたか？

ファウストは神に仕へてゐた。從つて林檎はかういふ彼にはいつも「智慧の果」それ自身だつた。彼は林檎を見る度に地上樂園を思ひ出したり、アダムやイヴを思ひ出したりしてゐた。

しかし或雪上りの午後、ファウストは林檎を見てゐるうちに一枚の油畫を思ひ出した。それはどこかの大伽藍にあつた、色彩の水々しい油畫だつた。從つて林檎はこの時以來、彼には昔の「智慧の果」の外にも近代の「靜物」に變り出した。

ファウストは敬虔の念のためか、一度も林檎を食つたことはなかつた。が、或嵐の烈しい夜、ふと腹の減つたのを感じ、一つの林檎を燒いて食ふことにした。林檎は又この時以來、彼には食物にも變り出した。從つて彼は林檎を見る度に、モオゼの十戒を思ひ出したり、油繪具の調合を考へたり、胃袋の鳴るのを感じたりしてゐた。

最後に或薄ら寒い朝、ファウストは林檎を見てゐるうちに突然林檎も商人には商品であることを發見した。現に又それは十二賣れば、銀一枚になるのに違ひなかつた。林檎はもちろんこの時以來、彼には金錢にも變り出した。

或どんより曇つた午後、ファウストはひとり薄暗い書齋に林檎のことを考へてゐた。林檎とは一體何であるか？——それは彼には昔のやうに手輕には解けない問題だつた。彼は机に向つたまま、いつかこの謎を口にしてゐた。

「林檎とは一體何であるか？」

すると、か細い黑犬が一匹、どこからか書齋へはひつて來た。のみならずその犬は身震ひをすると、忽ち一人の騎士に變り、丁寧にファウストにお時宜をした。——

なぜファウストは惡魔に出會つたか？——それは前に書いた通りである。しかし惡魔に出會つたことはファウストの悲劇の五幕目ではない。或寒さの嚴しい夕、ファウストは騎士になつた惡魔と一しよに林檎の問題を論じながら、人通りの多い街を步いて行つた。すると瘦せ細つた子供が一人、顏中淚に濡らしたまま貧しい母親の手をひつぱつてゐた。

「あの林檎を買つておくれよう！」
惡魔はちよつと足を休め、ファウストにこの子供を指し示した。
「あの林檎を御覽なさい。あれは拷問の道具ですよ。」
ファウストの悲劇はかういふ言葉にやつと五幕目の幕を擧げはじめたのである。

## 二　なぜソロモンはシバの女王とたつた一度しか會はなかつたか？

ソロモンは生涯にたつた一度シバの女王に會つただけだつた。それは何もシバの女王が遠い國にゐたためではなかつた。タルシシの船や、ヒラムの船は三年に一度金銀や象牙や猿や孔雀を運んで來た。が、ソロモンの使者の駱駝はエルサレムを圍んだ丘陵や沙漠を一度もシバの國へ向つたことはなかつた。

ソロモンはけふも宮殿の奧にたつた一人坐つてゐた。ソロモンの心は寂しかつた。モアブ人、アンモニ人、エドミ人、シドン人、ヘテ人等の妃たちも彼の心を慰めなかつた。彼は生涯に一度會つたシバの女王のことを考へてゐた。

シバの女王は美人ではなかつた。のみならず彼よりも年をとつてゐた。しかし珍しい才女だつた。ソロモンはかの女と問答をするたびに彼の心の飛躍するのを感じた。それはどういふ魔術師と星占ひの祕密を論じ合ふ時でも感じたことのない喜びだつた。彼は二度でも三度でも、――或は一生の間でもあの威嚴のあるシバの女王と話してゐたいのに違ひなかつた。

けれどもソロモンは同時に又シバの女王を恐れてゐた。それはかの女に會つてゐる間は彼の智慧を失ふからだつた。少くとも彼の誇つてゐたものは彼の智慧かかの女の智慧か見分けのつかなくなるためだつた。ソロモンはモアブ人、アンモニ人、エドミ人、シドン人、ヘテ人等の妃たちを蓄へてゐた。が、彼女等は何といつても彼の精神的奴隷だつた。ソロモンは彼女等を愛撫する時でも、ひそかに彼女等を輕蔑してゐた。しかしシバの女王だけは時には反つて彼自身を彼女の奴隷にしかねなかつた。

ソロモンは彼女の奴隷になることを恐れてゐたのに違ひなかつた。しかし又一面には喜んでゐたのにも違ひなかつた。この矛盾はいつもソロモンには名狀の出來ぬ苦痛だつた。彼は純金の獅子を立てた、大きい象牙の玉座の上に度々太い息を洩らした。その息は又何かの拍子に一篇の抒

情詩に變ることもあつた。

わが愛する者の男の子等の中にあるは
林の樹の中に林檎のあるがごとし。

⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯

その我上に翻したる旗は愛なりき。
請ふ、なんぢら乾葡萄をもてわが力を補へ。
林檎をもて我に力をつけよ。
我は愛によりて疾みわづらふ。

或日の暮、ソロモンは宮殿の露臺にのぼり、はるかに西の方を眺めやつた。シバの女王の住んでゐる國はもちろん見えないのに違ひなかつた。それは何かソロモンに安心に近い心もちを與へた。しかし又同時にその心もちは悲しみに近いものも與へたのだつた。

すると突然幻は誰も見たことのない獸を一匹、入り日の光の中に現じ出した。獸は獅子に似て翼を擴げ、頭を二つ具へてゐた。しかもその頭の一つはシバの女王の頭であり、もう一つは彼の

自身の頭だつた。頭は二つとも噛み合ひながら、不思議にも涙を流してゐた。幻は暫く漂つてゐた後、大風の吹き渡る音と一しよに忽ち又空中へ消えてしまつた。そのあとには唯かがやかしい、銀の鎖に似た雲が一列、斜めにたなびいてゐるだけだつた。

ソロモンは幻の消えた後もぢつと露臺に佇んでゐた。幻の意味は明かだつた。たとひそれはソロモン以外の誰にもわからないものだつたにも世よ。

エルサレムの夜も更けた後、まだ年の若いソロモンは大勢の妃たちや家來たちと一しよに葡萄の酒を飲み交してゐた。彼の用ひる杯や皿はいづれも純金を用ひたものだつた。しかしソロモンはふだんのやうに笑つたり話したりする氣はなかつた。唯けふまで知らなかつた、妙に息苦しい感慨の漲つて來るのを感じただけだつた。

番紅花の紅なるを咎むる勿れ。
桂枝の匂へるを咎むる勿れ。
されど我は悲しいかな。
番紅花は餘りに紅なり。

桂枝は餘りに匂ひ高し。

ソロモンはかう歌ひながら、大きい竪琴を搔き鳴らした。のみならず絶えず涙を流した。彼の歌は彼に似げない激越の調べを漲らせてゐた。妃たちや家來たちはいづれも顏を見合せたりした。が、誰もソロモンにこの歌の意味を尋ねるものはなかつた。ソロモンはやつと歌ひ終ると、王冠を頂いた頭を垂れ、少時はぢつと目を閉ぢてゐた。それから、――それから急に笑顏を擧げ、妃たちや家來たちとふだんのやうに話し出した。

タルシシの船やヒラムの船は三年に一度金銀や象牙や猿や孔雀を運んで來た。が、ソロモンの使者の駱駝はエルサレムを圍んだ丘陵や沙漠を一度もシバの國へ向つたことはなかつた。

（大正十五年四月十二日）

### 三　なぜロビンソンは猿を飼つたか？

なぜロビンソンは猿を飼つたか？　それは彼の目のあたりに彼のカリカチュアを見たかつたからである。わたしはよく承知してゐる。銃を抱いたロビンソンはぼろぼろのズボンの膝をかかへ

ながら、いつも猿を眺めてはもの凄い微笑を浮かべてゐた。鉛色の顔をしかめたまま、憂鬱に空を見上げた猿を。

（大正十五年七月十五日）

# 春の夜

これは近頃Nさんと云ふ看護婦に聞いた話である。Nさんは中々利かぬ氣らしい。いつも乾いた脣のかげに鋭い犬齒の見える人である。

僕は當時僕の弟の轉地先の宿屋の二階に大腸加答兒を起して横になつてゐた。下痢は一週間たつてもとまる氣色は無い。そこで元來は弟の爲にそこに來てゐたNさんに厄介をかけることになつたのである。

或五月雨のふり續いた午後、Nさんは雪平に粥を煮ながら、如何にも無造作にその話をした。

× × × × × ×

或年の春、Nさんは或看護婦會から牛込の野田と云ふ家へ行くことになつた。野田と云ふ家には男主人はゐない。切り髮にした女隱居が一人、嫁入り前の娘が一人、その又娘の弟が一人、

——あとは女中のゐるばかりである。Nさんはこの家へ行つた時、何か妙に氣の滅入るのを感じた。それは一つには姉も弟も肺結核に罹つてゐた爲であらう。けれども又一つには四疊半の離れの抱へこんだ、飛び石一つ打つてない庭に木賊ばかり茂つてゐた爲である。實際その夥しい木賊はNさんの言葉に從へば、「胡麻竹を打つた濡れ縁さへ突き上げるやうに」茂つてゐた。

女隱居は娘を雪さんと呼び、息子だけは清太郎と呼び捨てにしてゐた。雪さんは氣の勝つた女だつたと見え、熱の高低を計るのにさへ、Nさんの見たのでは承知せずに一々檢溫器を透かして見たさうである。清太郎は雪さんとは反對にNさんに世話を燒かせたことはない。何でも言ふなりになるばかりか、Nさんにものを言ふ時には顔を赤めたりする位である。女隱居はかう云ふ清太郎よりも雪さんを大事にしてゐたらしい。その癖病氣の重いのは雪さんよりも寧ろ清太郎だつた。

「あたしはそんな意氣地なしに育てた覺えはないんだがね。」

女隱居は離れへ來る度に(清太郎は離れに床に就いてゐた。)いつもつけつけと口小言を言つた。が、二十一になる清太郎は滅多に口答へもしたこともない。唯仰向けになつたまま、大抵はぢつ

と目を閉ぢてゐる。その又顔も透きとほるやうに白い。Nさんは氷嚢を取り換へながら、時々その頬のあたりに庭一ぱいの木賊の影が映るやうに感じたと云ふことである。

或晩の十時前に、Nさんはこの家から二町離れた、灯の多い町へ氷を買ひに行つた。その歸りに人通りの少ない屋敷續きの登り坂へかかると、誰か一人ぶらさがるやうに後ろからNさんに抱きついたものがある。Nさんは勿論びつくりした。が、その上にも驚いたことには思はずたぢたぢとなりながら、肩越しに相手をふり返ると、闇の中にもちらりと見えた顔が清太郎と少しも變らないことである。いや、變らないのは顔ばかりではない。五分刈りに刈つた頭でも、紺飛白らしい着物でも、殆ど清太郎とそつくりである。しかしをととひも喀血した患者の清太郎が出て來る筈はない。況やそんな眞似をしたりする筈はない。

「姐さん、お金をおくれよう。」

その少年はやはり抱きついたまま、甘えるやうにかう聲をかけた。その聲も亦不思議にも清太郎の聲ではないかと思ふくらゐである。氣丈なNさんは左の手にしつかり相手の手を抑へながら、

「何です、失禮な。あたしはこの屋敷のものですから、そんなことをおしなさると、門番の爺や

さんを呼びますよ」と言つた。

けれども相手は不相變「お金をおくれよう」を繰り返してゐる。Nさんはぢりぢり引き戻されながら、もう一度この少年をふり返つた。今度も亦相手の目鼻立ちは確かに「はにかみや」の清太郎である。Nさんは急に無氣味になり、抑へてゐた手を緩めずに出來るだけ大きい聲を出した。

「爺やさん、來て下さい！」

相手はNさんの聲と一しよに、抑へられてゐた手を振りもぎらうとした。同時に又Nさんも左の手を離した。それから相手がよろよろする間に一生懸命に走り出した。

Nさんは息を切らせながら、(後になつて氣がついて見ると、風呂敷に包んだ何斤かの氷をしつかり胸に當ててゐたさうである。)野田の家の玄關へ走りこんだ。家の中は勿論ひつそりしてゐる。Nさんは茶の間へ顏を出しながら、夕刊をひろげてゐた女隱居にちよつと間の悪い思ひをした。

「Nさん、あなた、どうなすつた？」

女隱居はNさんを見ると、殆ど詰るやうにかう言つた。それは何もけたたましい足音に驚いた爲ばかりではない。實際又Nさんは笑つてはゐても、體の震へるのは止まらなかつたからである。

「いえ、今そこの坂へ來ると、いたづらをした人があつたものですから、……」
「あなたに？」
「ええ、後からかじりついて、『姐さん、お金をおくれよう』つて言つて、……」
「ああ、さう言へばこの界隈には小堀とか云ふ不良少年があつてね、……」
すると次の間から聲をかけたのはやはり床についてゐる雪さんである。しかもそれはNさんには勿論、女隱居にも意外だつたらしい、妙に險のある言葉だつた。
「お母様、少し靜かにして頂戴。」
Nさんはかう云ふ雪さんの言葉に輕い反感――と云ふよりも寧ろ侮蔑を感じながら、その機會に茶の間を立つて行つた。が、清太郎に似た不良少年の顏は未だに目の前に殘つてゐる。いや、不良少年の顏ではない。唯どこか輪廓のぼやけた清太郎自身の顏である。
五分ばかりたつた後、Nさんは又濡れ緣をまはり、離れへ氷嚢を運んで行つた。清太郎はそこにゐないかも知れない、少くとも死んでゐるのではないか？――そんな氣もNさんにはしないではなかつた。が、離れへ行つて見ると、清太郎は薄暗い電燈の下に靜かにひとり眠つてゐる。顏は

も亦不相變透きとほるやうに白い。丁度庭に一ぱいに伸びた木賊の影の映つてゐるやうに。

「氷嚢をお取り換へ致しませう。」

Nさんはかう言ひかけながら、後ろが氣になつてならなかつた。

× × × × × ×

僕はこの話の終つた時、Nさんの顏を眺めたまま多少惡意のある言葉を出した。

「淸太郎？――ですね。あなたはその人が好きだつたんでせう？」

「ええ、好きでございました。」

Nさんは僕の豫想したよりも遙かにさつぱりと返事をした。

（大正十五年八月十二日）

# 點鬼簿

# 一

僕の母は狂人だつた。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。僕の母は髮を櫛卷きにし、いつも芝の實家にたつた一人坐りながら、長煙管ですぱすぱ煙草を吸つてゐる。顏も小さければ體も小さい。その又顏はどう云ふ訣か、少しも生氣のない灰色をしてゐる。僕はいつか西廂記を讀み、土口氣泥臭味の語に出合つた時に忽ち僕の母の顏を、――痩せ細つた横顏を思ひ出した。

かう云ふ僕は僕の母に全然面倒を見て貰つたことはない。何でも一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行つたら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覺えてゐる。しかし大體僕の母は如何にももの靜かな狂人だつた。僕や僕の姉などに畫を描いてくれと迫られると、四つ折の半紙に畫を描いてくれる。畫は墨を使ふばかりではない。僕の姉の水繪の具を行樂の子女の衣服だの草木

の花だのになすつてくれる。唯それ等の畫中の人物はいづれも狐の顔をしてゐた。

僕の母の死んだのは僕の十一の秋である。それは病の爲よりも衰弱の爲に死んだのであらう。その死の前後の記憶だけは割り合にはつきりと殘つてゐる。

危篤の電報でも來た爲であらう。僕は或風のない深夜、僕の養母と人力車に乘り、本所から芝まで駈けつけて行つた。僕はまだ今日でも襟巻と云ふものを用ひたことはない。が、特にこの夜だけは南畫の山水か何かを描いた、薄い絹の手巾をまきつけてゐたことを覺えてゐる。それからその手巾には「アヤメ香水」と云ふ香水の匂のしてゐたことも覺えてゐる。

僕の母は二階の眞下の八疊の座敷に横たはつてゐた。僕は四つ違ひの僕の姉と僕の母の枕もとに坐り、二人とも絶えず聲を立てて泣いた。殊に誰か僕の後ろで「御臨終御臨終」と言つた時には一層切なさのこみ上げるのを感じた。しかし今まで瞑目してゐた、死人にひとしい僕の母は突然目をあいて何か言つた。僕等は皆悲しい中にも小聲でくすくす笑ひ出した。

僕はその次の晩も僕の母の枕もとに夜明近くまで坐つてゐた。が、なぜかゆうべのやうに少しも涙は流れなかつた。僕は殆ど泣き聲を絶たない僕の姉の手前を恥ぢ、一生懸命に泣く眞似をし

てゐた。同時に又僕の泣かれない以上、僕の母の死ぬことは必ずないと信じてゐた。

僕の母は三日目の晩に殆ど苦しまずに死んで行つた。死ぬ前には正氣に返つたと見え、僕等の顔を眺めてはとめ度なしにぽろぽろ涙を落した。が、やはりふだんのやうに何とも口は利かなかつた。

僕は納棺を終つた後にも時々泣かずにはゐられなかつた。すると「王子の叔母さん」と云ふ或遠縁のお婆さんが一人「ほんたうに御感心でございますね」と言つた。しかし僕は妙なことに感心する人だと思つただけだつた。

僕の母の葬式の出た日、僕の姉は位牌を持ち、僕はその後ろに香爐を持ち二人とも人力車に乘つて行つた。僕は時々居睡りをし、はつと思つて目を醒ます拍子に危く香爐を落しさうにする。けれども谷中へは中々來ない。可也長い葬列はいつも秋晴れの東京の町をしづしづと練つてゐるのである。

僕の母の命日は十一月二十八日である。又戒名は歸命院妙乘日進大姉である。僕はその癖僕の實父の命日や戒名を覺えてゐない。それは多分十一の僕には命日や戒名を覺えることも誇りの一つ

つだつた爲であらう。

## 二

僕は一人の姉を持つてゐる。しかしこれは病身ながらも二人の子供の母になつてゐる。僕の「點鬼簿」に加へたいのは勿論この姉のことではない。丁度僕の生まれる前に突然夭折した姉のことである。僕等三人の姉弟の中でも一番賢かつたと云ふ姉のことである。

この姉を初子と云つたのは長女に生まれた爲だつたであらう。僕の家の佛壇には未だに「初ちやん」の寫眞が一枚小さい額縁の中にはひつてゐる。初ちやんは少しもか弱さうではない。小さい笑窪のある兩頰なども熟した杏のやうにまるまるしてゐる。……

僕の父や母の愛を一番餘計に受けたものは何と云つても「初ちやん」である。「初ちやん」は芝の新錢座からわざわざ築地のサンマアズ夫人の幼稚園か何かへ通つてゐた。が、土曜から日曜へかけては必ず僕の母の家へ――本所の芥川家へ泊りに行つた。「初ちやん」はかう云ふ外出の時にはまだ明治二十年代でも今めかしい洋服を着てゐたのであらう。僕は小學校へ通つてゐた頃、「初ち

やん」の着物の端巾を貰ひ、ゴム人形に着せたのを覺えてゐる。その又端巾は言ひ合せたやうに細かい花や樂器を散らした舶來のキヤラコばかりだつた。

或春先の日曜の午後、「初ちやん」は庭を歩きながら、座敷にゐる伯母に聲をかけた。(僕は勿論この時の姉も洋服を着てゐたやうに想像してゐる。)

「伯母さん、これは何と云ふ樹?」

「どの樹?」

「この莟のある樹。」

僕の母の實家の庭には脊の低い木瓜の樹が一株、古井戸へ枝を垂らしてゐた。髮をお下げにした「初ちやん」は恐らくは大きな目をしたまま、この枝のとげとげしい木瓜の樹を見つめてゐたことであらう。

「これはお前と同じ名前の樹。」

伯母の洒落は生憎通じなかつた。

「ぢや莫迦の樹と云ふ樹なのね。」

伯母は「初ちやん」の話さへ出れば、未だにこの問答を繰り返してゐる。實際又「初ちやん」の話と云つてはその外に何も殘つてゐない。「初ちやん」はそれから幾日もたたずに柩にはひつてしまつたのであらう。僕は小さい位牌に彫つた「初ちやん」の戒名は覺えてゐない。が、「初ちやん」の命日が四月五日であることだけは妙にはつきりと覺えてゐる。

僕はなぜかこの姉に、——全然僕の見知らない姉に或親しみを感じてゐる。「初ちやん」は今も存命するとすれば、四十を越してゐることであらう。四十を越した「初ちやん」の顏は或は芝の實家の二階に茫然と煙草をふかしてゐた僕の母の顏に似てゐるかも知れない。僕は時々幻のやうに僕の母とも姉ともつかない四十恰好の女人が一人、どこかから僕の一生を見守つてゐるやうに感じてゐる。これは珈琲や煙草に疲れた僕の神經の仕業であらうか？　それとも又何かの機會に實在の世界へも面かげを見せる超自然の力の仕業であらうか？

## 三

僕は母の發狂した爲に生まれるが早いか養家に來たから、（養家は母かたの伯父の家だつた。）僕

の父にも冷淡だつた。僕の父は牛乳屋であり、小さい成功者の一人らしかつた。僕に當時新らしかつた果物や飲料を教へたのは悉く僕の父である。バナナ、アイスクリイム、パイナアツプル、ラム酒、――まだその外にもあつたかも知れない。僕は當時新宿にあつた牧場の外の槲の葉かげにラム酒を飲んだことを覺えてゐる。ラム酒は非常にアルコオル分の少ない、橙黄色を帶びた飲料だつた。

僕の父は幼い僕にかう云ふ珍らしいものを勸め、養家から僕を取り戻さうとした。僕は一夜大森の魚榮でアイスクリイムを勸められながら、露骨に實家へ逃げて來いと口説かれたことを覺えてゐる。僕の父はかう云ふ時には頗る巧言令色を弄した。が、生憎その勸誘は一度も效を奏さなかつた。それは僕が養家の父母を、――殊に伯母を愛してゐたからだつた。

僕の父は又短氣だつたから、度々誰とでも喧嘩をした。僕は中學の三年生の時に僕の父と相撲をとり、僕の得意の大外刈りを使つて見事に僕の父を投げ倒した。僕の父は起き上つたと思ふと、「もう一番」と言つて僕に向つて來た。僕は又造作もなく投げ倒した。僕の父は三度目には「もう一番」と言ひながら、血相を變へて飛びかかつて來た。この相撲を見てゐた僕の叔母――僕の母

の妹であり、僕の父の後妻だつた叔母は二三度僕に目くばせをした。僕は僕の父と揉み合つた後、わざと仰向けに倒れてしまつた。が、もしあの時に負けなかつたとすれば、僕の父は必ず僕にも摑みかからずにはゐなかつたであらう。

僕は二十八になつた時、――まだ教師をしてゐた時に「チチニウイン」の電報を受けとり、倉皇と鎌倉から東京へ向つた。僕の父はインフルエンザの爲に東京病院にはひつてゐた。僕は彼是三日ばかり、養家の伯母や實家の叔母と病室の隅に寢泊りしてゐた。そのうちにそろそろ退屈し出した。そこへ僕の懇意にしてゐた或愛蘭土の新聞記者が一人、築地の或待合へ飯を食ひに來ないかと云ふ電話をかけた。僕はその新聞記者が近く渡米するのを口實にし、垂死の僕の父を殘したまま、築地の或待合へ出かけて行つた。

僕等は四五人の藝者と一しよに愉快に日本風の食事をした。食事は確か十時頃に終つた。僕はその新聞記者を殘したまま、狹い段梯子を下つて行つた。すると誰か後ろから「ああさん」と僕に聲をかけた。僕は中段に足をとめながら、段梯子の上をふり返つた。そこには來合せてゐた藝者が一人、ぢつと僕を見下ろしてゐた。僕は默つて段梯子を下り、玄關の外のタクシイに乘つた。

タクシイはすぐに動き出した。が、僕は僕の父よりも水々しい西洋髪に結つた彼女の顔を、――殊に彼女の目を考へてゐた。

僕が病院へ歸つて來ると、僕の父は僕を待ち兼ねてゐた。のみならず二枚折の屏風の外に悉く餘人を引き下らせ、僕の手を握つたり撫でたりしながら、僕の知らない昔のことを、――僕の母と結婚した當時のことを話し出した。それは僕の母と二人で簞笥を買ひに出かけたとか、鮨をとつて食つたとか云ふ、瑣末な話に過ぎなかつた。しかし僕はその話のうちにいつか瞼が熱くなつてゐた。僕の父も肉の落ちた頰にやはり淚を流してゐた。

僕の父はその次の朝に餘り苦しまずに死んで行つた。死ぬ前には頭も狂つたと見え「あんなに旗を立てた軍艦が來た。みんな萬歲を唱へろ」などと言つた。僕は僕の父の葬式がどんなものだつたか覺えてゐない。唯僕の父の死骸を病院から實家へ運ぶ時、大きい春の月が一つ、僕の父の柩車の上を照らしてゐたことを覺えてゐる。

## 四

僕は今年の三月の半ばにまだ懷爐を入れたまま、久しぶりに妻と墓參りをした。久しぶりに、――しかし小さい墓は勿論、墓の上に枝を伸ばした一株の赤松も變らなかつた。

「點鬼簿」に加へた三人は皆この谷中の墓地の隅に、――しかも同じ石塔の下に彼等の骨を埋めてゐる。僕はこの墓の下へ靜かに僕の母の柩が下された時のことを思ひ出した。これは又「初ちやん」も同じだつたであらう。唯僕の父だけは、――僕は僕の父の骨が白じらと細かに碎けた中に金齒の交つてゐたのを覺えてゐる。……

僕は墓參りを好んではゐない。若し忘れてゐられるとすれば、僕の兩親や姉のことも忘れてゐたいと思つてゐる。が、特にその日だけは肉體的に弱つてゐたせゐか、春先の午後の日の光の中に黑ずんだ石塔を眺めながら、一體彼等三人の中では誰が幸福だつたらうと考へたりした。

　かげろふや塚より外に住むばかり

僕は實際この時ほど、かう云ふ丈艸の心もちが押し迫つて來るのを感じたことはなかつた。

（大正十五年九月九日）

# 悠々莊

十月の或る午後、僕等三人は話し合ひながら、松の中の小みちを歩いてゐた。小みちにはどこにも人かげはなかつた。ただ時々松の梢に鶸の聲のするだけだつた。

「ゴオグの死骸を載せた玉突臺だね、あの上では今でも玉を突いてゐるがね。……」

西洋から歸つて來たSさんはそんなことを話して聞かせたりした。

そのうちに僕等は薄苔のついた御影石の門の前へ通りかかつた。石に嵌めこんだ標札には「悠々莊」と書いてあつた。が、門の奥にある家は、——茅葺き屋根の西洋館はひつそりと硝子窓を鎖してゐた。僕は日頃この家に愛着を持たずにはゐられなかつた。それは一つには家自身のいかにも瀟洒としてゐるためだつた。しかし又その外にも荒廢を極めたあたりの景色に——伸び放題伸びた庭芝や水の干上つた古池に風情の多いためもない訣ではなかつた。

「一つ中へはひつて見るかな。」

た。
僕は先に立つて門の中へはひつた。敷石を挾んだ松の下には姫路茸などもかすかに赤らんでゐた。
「この別莊を持つてゐる人も震災以來來なくなつたんだね。……」
するとT君は考へ深さうに玄關前の萩に目をやつた後、かう僕の言葉に反對した。
「いや、去年までは來てゐたんだね。去年ちやんと刈りこまなけりや、この萩はかうは咲くもんぢやない。」
「しかしこの芝の上を見給へ。こんなに壁土も落ちてゐるだらう。これは君、震災の時に落ちたままになつてゐるのに違ひないよ。」
僕は實際震災のために取り返しのつかない打擊を受けた年少の實業家を想像してゐた。それは又木蔦のからみついたコツテエヂ風の西洋館と――殊に硝子窓の前に植ゑた棕櫚や芭蕉の幾株かと調和してゐるのに違ひなかつた。
しかしT君は腰をかがめ、芝の上の土を拾ひながら、もう一度僕の言葉に反對した。
「これは壁土の落ちたのぢやない。園藝用の腐蝕土だよ。しかも上等な腐蝕土だよ。」

僕等はいつか窓かけを下した硝子窓の前に佇んでゐた。窓かけは、もちろん蠟引だつた。

「家の中は見えないかね。」

僕等はそんなことを話しながら、幾つかの硝子窓を覗いて歩いた。窓かけはどれも嚴重に「悠々莊」の内部を隱してゐた。が、丁度南に向いた硝子窓の框の上には藥壜が二本並んでゐた。

「ははあ、沃度劑を使つてゐたな。――」

Sさんは僕等をふり返つて言つた。

「この別莊の主人は肺病患者だよ。」

僕等は芒の穗を出した中を「悠々莊」の後ろへ廻つて見た。そこにはもう赤錆のふいた亞鉛葺の納屋が一棟あつた。納屋の中にはストオヴが一つ、西洋風の机が一つ、それから頭や腕のない石膏の女人像が一つあつた。殊にその女人像は一面に埃におほはれたまま、ストオヴの前に横になつてゐた。

「するとその肺病患者は慰みに彫刻でもやつてゐたのかね。」

「これもやつぱり園藝用のものだよ。頭へ蘭などを植ゑるものでね。……あの机やストオヴもさ

うだよ。この納屋は窓も硝子になつてゐるから、溫室の代りに使つてゐたんだらう。」

T君の言葉は尤もだつた。現にその小さい机の上には蘭科植物を植ゑるのに使ふコルク板の破片も載せてあつた。

「おや、あの机の脚の下にヴイクトリア月經帶の罐もころがつてゐる。」

「あれは細君の……さあ、女中のかも知れないよ。」

Sさんは、ちよつと苦笑して言つた。

「ぢやこれだけは確實だね。――この別莊の主人は肺病になつて、それから園藝を樂しんでゐて、……」

「それから去年あたり死んだんだらう。」

僕等は又松の中を「悠々莊」の玄關へ引き返した。花芒はいつか風立つてゐた。

「僕等の住むには廣過ぎるが、――しかし兎に角好い家だね。……」

T君は階段を上りながら、獨言のやうにかう言つた。

「このベルは今でも鳴るかしら。」

ベルは木蔦の葉の中に僅に釦をあらはしてゐた。僕はそのベルの釦へ――象牙の釦へ指をやつた。ベルは生憎鳴らなかつた。が、萬一鳴つたとしたら、――僕は何か無氣味になり、二度と押す氣にはならなかつた。

「何と言つたつけ、この家の名は？」

Ｓさんは玄關に佇んだまま、突然誰にともなしに尋ねかけた。

「悠々莊？」

「うん、悠々莊。」

僕等三人は暫くの間、何の言葉も交さずに茫然と玄關に佇んでゐた、伸び放題伸びた庭芝だの干上つた古池だのを眺めながら。

（大正十五年十月二十六日・鵠沼）

彼

## 一

僕はふと舊友だつた彼のことを思ひ出した。彼の名前などは言はずとも好い。彼は叔父さんの家を出てから、本郷の或印刷屋の二階の六疊に間借りをしてゐた。階下の輪轉機のまはり出す度に丁度小蒸汽の船室のやうにがたがた身震ひをする二階である。まだ一高の生徒だつた僕は寄宿舍の晩飯をすませた後、度たびこの二階へ遊びに行つた。すると彼は硝子窓の下に人一倍細い頸を曲げながら、いつもトランプの運だめしをしてゐた。その又彼の頭の上には眞鍮の油壺の吊りランプが一つ、いつも圓い影を落してゐた。……

## 二

彼は本郷の叔父さんの家から僕と同じ本所の第三中學校へ通つてゐた。彼が叔父さんの家にゐ

たのは兩親のゐなかつた爲である。兩親のゐなかつた爲と云つても、母だけは死んではゐなかつたらしい。彼は父よりもこの母に、——このどこかへ再緣した母に少年らしい情熱を感じてゐた。彼は確か或年の秋、僕の顏を見るが早いか、吃るやうに僕に話しかけた。

「僕はこの頃僕の妹が（妹が一人あつたことはぼんやり覺えてゐるんだがね。）緣づいた先を聞いて來たんだよ。今度の日曜にでも行つて見ないか？」

僕は早速彼と一しよに龜井戶に近い場末の町へ行つた。彼の妹の緣づいた先は存外見つけるのに暇どらなかつた。それは床屋の裏になつた棟割り長屋の一軒だつた。主人は近所の工場か何かへ勤めに行つた留守だつたと見え、造作の惡い家の中には赤兒に乳房を含ませた細君、——彼の妹の外に人かげはなかつた。彼の妹は妹と云つても、彼よりもずつと大人じみてゐた。のみならず切れの長い目尻の外は殆ど彼に似てゐなかつた。

「その子供は今年生れたの？」

「いいえ、去年。」

「結婚したのも去年だらう？」

「いいえ、一昨年の三月ですよ。」

彼は何かにぶつかるやうに一生懸命に話しかけてゐた。が、彼の妹は時々赤兒をあやしながら、愛想の善い應對をするだけだつた。僕は番茶の澁のついた五郎八茶碗を手にしたまま、勝手口の外を塞いだ煉瓦塀の苔を眺めてゐた。同時に又ちぐはぐな彼等の話に或寂しさを感じてゐた。

「兄さんはどんな人？」

「どんな人つて……やつぱり本を讀むのが好きなんですよ。」

「どんな本を？」

「講談本や何かですけれども。」

實際その家の窓の下には古机が一つ据ゑてあつた。古机の上には何冊かの本も、――講談本など も載つてゐたであらう。しかし僕の記憶には生憎本のことは殘つてゐない。唯僕は筆立ての中に孔雀の羽根が二本ばかり鮮かに插してあつたのを覺えてゐる。

「ぢや又遊びに來る。兄さんによろしく。」

彼の妹は不相變赤兒に乳房を含ませたまま、しとやかに僕等に挨拶した。

「さやうですか？　では皆さんによろしく。どうもお下駄も直しませんで。」

僕等はもう日の暮に近い本所の町を歩いて行つた。彼も始めて顏を合せた彼の妹の心もちに失望してゐるのに違ひなかつた。が、僕等は言ひ合せたやうに少しもその氣もちを口にしなかつた。彼は、――僕は未だに覺えてゐる。彼は唯道に沿うた建仁寺垣に指を觸れながら、こんなことを僕に言つただけだつた。

「かうやつてずんずん歩いてゐると、妙に指が震へるもんだね。まるでエレキでもかかつて來るやうだ。」

## 三

彼は中學を卒業してから、一高の試驗を受けることにした。が、生憎落第した。彼があの印刷屋の二階に間借りをはじめたのはそれからである。同時に又マルクスやエンゲルスの本に熱中しはじめたのもそれからである。僕は勿論社會科學に何の知識も持つてゐなかつた。が、資本だの搾取だのと云ふ言葉に或尊敬――と云ふよりも或恐怖を感じてゐた。彼はその恐怖を利用し、度

たび僕を論難した。ヴェルレェン、ラムボオ、ボォドレェル、――それ等の詩人は當時の僕には偶像以上の偶像だつた。が、彼にはハッシッシュや鴉片の製造者に外ならなかつた。

僕等の議論は今になつて見ると、殆ど議論にはならないものだつた。しかし僕等は本氣になつて互に反駁を加へ合つてゐた。唯僕等の友だちの一人、――Kと云ふ醫科の生徒だけはいつも僕等を冷評してゐた。

「そんな議論にむきになつてゐるよりも僕と一しよに洲崎へでも來いよ。」

Kは僕等を見比べながら、にやにや笑つてから言つたりした。僕は勿論内心では洲崎へでも何でも行きたかつた。けれども彼は超然と（それは實際「超然」と云ふ外には形容の出來ない態度だつた。）ゴルデン・バットを銜へたまま、Kの言葉に取り合はなかつた。のみならず時々は先手を打つてKの鋒先を挫きなどした。

「革命とはつまり社會的なメンスツラチオンと云ふことだね。……」

彼は翌年の七月には岡山の六高へ入學した。それから彼是半年ばかりは最も彼には幸福だつたのであらう。彼は絶えず手紙を書いては彼の近狀を報告してよこした。（その手紙はいつも彼の讀

んだ社會科學の本の名を列記してゐた。)しかし彼のゐないことは多少僕にはもの足らなかつた。僕はKと會ふ度に必ず彼の噂をした。Kも、――Kは彼に友情よりも殆ど科學的興味に近い或興味を感じてゐた。

「あいつはどう考へても、永遠に子供でゐるやつだね。しかしああ云ふ美少年の癖に少しもホモ・エロティッシュな氣を起させないだらう。あれは一體どう云ふ訣かしら?」

Kは寄宿舍の硝子窓を後ろに眞面目にこんなことを尋ねたりした、敷島の煙を一つづつ器用に輪にしては吐き出しながら。

四

彼は六高へはひつた後、一年とたたぬうちに病人となり、叔父さんの家へ歸るやうになつた。病名は確かに腎臟結核だつた。僕は時々ビスケットなどを持ち、彼のゐる書生部屋へ見舞ひに行つた。彼はいつも床の上に細い膝を抱いたまま、存外快濶に話したりした。しかし僕は部屋の隅に置いた便器を眺めずにはゐられなかつた。それは大抵硝子の中にぎらぎらする血尿を透かし

たものだつた。

「かう云ふ體ぢやもう駄目だよ。到底牢獄生活も出來さうもないしね。」

彼はかう言つて苦笑するのだつた。

「バクニィンなどは寫眞で見ても、逞しい體をしてゐるからなあ。」

しかし彼を慰めるものはまだ全然ない訣ではなかつた。それは叔父さんの娘に對する、極めて純粹な戀愛だつた。彼は彼の戀愛を僕にも一度も話したことはなかつた。が、或日の午後、――或花曇りに曇つた午後、僕は突然彼の口から彼の戀愛を打ち明けられた。突然？――いや、必しも突然ではなかつた。僕はあらゆる青年のやうに彼の從妹を見かけた時から何か彼の戀愛に期待を持つてゐたのだつた。

「美代ちやんは今學校の連中と小田原へ行つてゐるんだがね、僕はこの間何氣なしに美代ちやんの日記を讀んで見たんだ。……」

僕はこの「何氣なしに」に多少の冷笑を加へたかつた。が、勿論何も言はずに彼の話の先を待つてゐた。

「すると電車の中で知り合になつた大學生のことが書いてあるんだよ。」
「それで？」
「それで僕は美代ちやんに忠告しようかと思つてゐるんだがね。……」
　僕はとうとう口を辷らし、こんな批評を加へてしまつた。
「それは矛盾してゐるぢやないか？　君は美代ちやんを愛しても善い、美代ちやんは他人を愛してはならん、――そんな理窟はありはしないよ。唯君の氣もちとしてならば、それは又別問題だけれども。」
　彼は明かに不快らしかつた。が、僕の言葉には何も反駁を加へなかつた。それから、――それから何を話したのであらう？　僕は唯僕自身も不快になつたことを覺えてゐる。それは勿論病人の彼を不快にしたことに對する不快だつた。
「ぢや僕は失敬するよ。」
「ああ、ぢや失敬。」
　彼はちよつと頷いた後、わざとらしく氣輕につけ加へた。

「何か本を貸してくれないか？　今度君が來る時で善いから。」
「どんな本を？」
「天才の傳記か何かが善い。」
「ぢやジアン・クリストフを持つて來ようか？」
「ああ、何でも旺盛な本が善い。」
僕は詮めに近い心を持ち、彌生町の寄宿舍へ歸つて來た。窓硝子の破れた自習室には生憎誰も居合せなかつた。僕は薄暗い電燈の下に獨逸文法を復習した。しかしどうも失戀した彼に、――たとひ失戀したにもせよ、兎に角叔父さんの娘のある彼に羨望を感じてならなかつた。

## 五

彼は彼是半年の後、或海岸へ轉地することになつた。それは轉地とは云ふものの、大抵は病院に暮らすものだつた。僕は學校の冬休みを利用し、はるばる彼を尋ねて行つた。彼の病室は日當りの悪い、透き間風の通る二階だつた。彼はベッドに腰かけたまま、不相變元氣に笑ひなどした。

が、文藝や社會科學のことは殆ど一言も話さなかつた。
「僕はあの棕櫚の木を見る度に妙に同情したくなるんだがね。そら、あの上の葉つぱが動いてゐるだらう。――」
棕櫚の木はつい硝子窓の外に木末の葉を吹かせてゐた。その葉は又全體も搖らぎながら、細かに裂けた葉の先々を殆ど神經的に震はせてゐた。それは實際近代的なもの哀れを帶びたものに違ひなかつた。が、僕はこの病室にたつた一人暮してゐる彼のことを考へ、出來るだけ陽氣に返事をした。
「動いてゐるね。何をくよくよ海べの棕櫚はさ。……」
「それから？」
「それでもうおしまひだよ。」
「何だつまらない。」
僕はかう云ふ對話の中にだんだん息苦しさを感じ出した。
「ジアン・クリストフは讀んだかい？」

「ああ、少し讀んだけれども、……」

「讀みつづける氣にはならなかつたの？」

「どうもあれは旺盛すぎてね。」

僕はもう一度一生懸命に沈み勝ちな話を引き戻した。

「この間Kが見舞ひに來たつてね。」

「ああ、日歸りでやつて來たよ。生體解剖の話や何かして行つたつけ。」

「不愉快なやつだね。」

「どうして？」

「どうしてつてこともないけれども。……」

僕等は夕飯をすませた後、丁度風の落ちたのを幸ひ、海岸へ散歩に出かけることにした。太陽はとうに沈んでゐた。しかしまだあたりは明るかつた。僕等は低い松の生えた砂丘の斜面に腰をおろし、海雀の二三羽飛んでゐるのを見ながら、いろいろのことを話し合つた。

「この砂はこんなに冷たいだらう。けれどもずつと手を入れて見給へ。」

僕は彼の言葉の通り、弘法麥の枯れ枯れになつた砂の中へ片手を差しこんで見た。するとそこには太陽の熱がまだかすかに殘つてゐた。

「うん、ちよつと氣味が惡いね。夜になつてもやつぱり溫いかしら。」

「何、すぐに冷たくなつてしまふ。」

僕はなぜかはつきりとかう云ふ對話を覺えてゐる。それから僕等の半町ほど向うに黑ぐろと和んでゐた太平洋も。……

## 六

彼の死んだ知らせを聞いたのは丁度翌年の舊正月だつた。何でも後に聞いた話によれば病院の醫者や看護婦たちは舊正月を祝ふ爲に夜更けまで歌留多會をつづけてゐた。彼はその騷ぎに眠られないのを怒り、ベッドの上に橫たはつたまま、おほ聲に彼等を叱りつけた、と同時に大喀血をし、すぐに死んだとか云ふことだつた。僕は黑い枠のついた一枚の葉書を眺めた時、悲しさよりも寧ろはかなさを感じた。

一、尚又故人の所持したる書籍は遺骸と共に焼き棄て候へども、萬一貴下より御貸與の書籍もその中にまじり居り候節は不惡御赦し下され度候。」

これはその葉書の隅に肉筆で書いてある文句だつた。僕はかう云ふ文句を讀み、何册かの本が焰になつて立ち昇る有様を想像した。勿論それ等の本の中にはいつか僕が彼に貸したジアン・クリストフの第一卷もまじつてゐるのに違ひなかつた。この事實は當時の感傷的な僕には妙に象徵らしい氣のするものだつた。

それから五六日たつた後、僕は偶然落ち合つたKと彼のことを話し合つた。Kは不相變冷然としてゐたのみならず、卷煙草を銜へたまま、こんなことを僕に尋ねたりした。

「Xは女を知つてゐたかしら?」

「さあ、どうだか……」

Kは僕を疑ふやうにぢつと僕の顏を眺めてゐた。

「まあ、それはどうでも好い。……しかしXが死んで見ると、何か君は勝利者らしい心もちも起つて來はしないか?」

僕はちよつと逡巡した。するとKは打ち切るやうに彼自身の問に返事をした。

「少くとも僕はそんな氣がするね。」

僕はそれ以來Kに會ふことに多少の不安を感ずるやうになつた。

（大正十五年十一月十三日）

# 彼

第二

# 一

彼は若い愛蘭土人だつた。彼の名前などは言はずとも好い。僕は唯彼の友だちだつた。彼の妹さんは僕のことを未だに My brother's best friend と書いたりしてゐる。僕は彼と初對面の時、何か前にも彼の顔を見たことのあるやうな心もちがした。いや、彼の顔ばかりではない。その部屋のカミンに燃えてゐる火も、火かげの映つた桃花心木の椅子も、カミンの上のプラトオン全集も確かに見たことのあるやうな氣がした。この氣もちは又彼と話してゐるうちにだんだん強まつて來るばかりだつた。僕はいつかかう云ふ光景は五六年前の夢の中にも見たことがあつたと思ふやうになつた。しかし勿論そんなことは一度も口に出したことはなかつた。彼は敷島をふかし乍ら、當然僕等の間に起る愛蘭土の作家たちの話をしてゐた。

「I detest Bernard Shaw.」

僕は彼が傍若無人にかう言つたことを覺えてゐる、それは二人とも數へ年にすれば、二十五になつた冬のことだつた。……

二

僕等は金の工面をしてはカッフエやお茶屋へ出入した。彼は僕よりも三割がた雄の特性を具へてゐた。或粉雪の烈しい夜、僕等はカッフエ・パウリスタの隅のテエブルに坐つてゐた。その頃のカッフエ・パウリスタは中央にグラノフォンが一臺あり、白銅を一つ入れさへすれば音樂の聞かれる設備になつてゐた。その夜もグラノフォンは僕等の話に殆ど伴奏を絶つたことはなかつた。

「ちよつとあの給仕に通譯してくれ給へ。――誰でも五錢出す度に僕はきつと十錢出すから、グラノフォンの鳴るのをやめさせてくれつて。」

「そんなことは賴まれないよ。第一他人の聞きたがつてゐる音樂を錢づくでやめさせるのは惡趣味ぢやないか？」

「それぢや他人の聞きたがらない音樂を金づくで聞かせるのも惡趣味だよ。」

グラノフォンは丁度この時に仕合せとぱつたり音を絕つてしまつた。が、忽ち鳥打帽をかぶつた、學生らしい男が一人、白銅を入れに立つて行つた。すると彼は腰を擡げるが早いか、ダム何とか言ひながら、クルウェットスタンドを投げつけようとした。

「よせよ。そんな莫迦なことをするのは。」

僕は彼を引きずるやうにし、粉雪のふる往來へ出ることにした。しかし何か興奮した氣もちは僕にも全然ない訣ではなかつた。僕等は腕を組みながら、傘もささずに步いて行つた。

「僕はかう云ふ雪の晚などはどこまでも步いて行きたくなるんだ。どこまでも足の續くかぎりは……」

彼は殆んど叱りつけるやうに僕の言葉を中斷した。

「ぢやなぜ步いて行かないんだ？　僕などはどこまでも步いて行きたくなれば、どこまでも步いて行くことにしてゐる。」

「それは餘りロマンティックだ。」

「ロマンティックなのがどこが悪い？　歩いて行きたいと思ひながら、歩いて行かないのは意氣地なしばかりだ。凍死しても何でも歩いて見ろ。……」

彼は突然口調を變へ Brother と僕に聲をかけた。

「僕はきのふ本國の政府へ從軍したいと云ふ電報を打つたんだよ。」

「それで？」

「まだ何とも返事は來ない。」

僕等はいつか教文館の飾り窓の前へ通りかかつた。半ば硝子に雪のつもつた、電燈の明るい飾り窓の中にはタンクや毒瓦斯の寫眞版を始め、戰爭ものが何冊も並んでゐた。僕等は腕を組んだまま、ちよつとこの飾り窓の前に立ち止まつた。

「Above the War——Romain Rolland……」

「ふむ、僕等には above ぢやない。」

彼は妙な表情をした。それは丁度雄鷄が頸の羽根を逆立てるのに似たものだつた。

「ロオランなどに何がわかる？　僕等は戰爭の amidst にゐるんだ。」

獨逸に對する彼の敵意は勿論僕には痛切ではなかつた。從つて僕は彼の言葉に多少の反感の起るのを感じた。同時に又醉の醒めて來るのも感じた。

「僕はもう歸る。」

「さうか？　ぢや僕は……」

「どこかこの近所へ沈んで行けよ。」

僕等は丁度京橋の擬寶珠の前に佇んでゐた。人氣のない夜更けの大根河岸には雪のつもつた枯れ柳が一株、黑ぐろと澱んだ掘割りの水へ枝を垂らしてゐるばかりだつた。

「日本だね、兎に角かう云ふ景色は。」

彼は僕と別れる前にしみじみこんなことを言つたものだつた。

## 三

彼は生憎希望通りに從軍することは出來なかつた。が、一度ロンドンへ歸つた後、二三年ぶりに日本に住むことになつた。しかし僕等は、――少くとも僕はいつかもうロマン主義を失つてゐ

た。尤もこの二三年は彼にも變化のない訣ではなかつた。彼は或素人下宿の二階に大島の羽織や着物を着、手あぶりに手をかざしたまま、かう云ふ愚痴などを洩らしてゐた。

「日本もだんだん亞米利加化するね。僕は時々日本よりも佛蘭西に住まうかと思ふことがある。」

「それは誰でも外國人はいつか一度は幻滅するね。ヘルンでも晩年はさうだつたんだらう。」

「いや、僕は幻滅したんぢやない。illusion を持たないものに disillusion のある筈はないからね。」

「そんなことは空論ぢやないか？　僕などは僕自身にさへ、——未だに illusion を持つてゐるだらう。」

彼は浮かない顔をしながら、どんよりと曇つた高臺の景色を硝子戸越しに眺めてゐた。

「それはさうかも知れないがね。……」

「僕は近々上海の通信員になるかも知れない。」

彼の言葉は咄嗟の間にいつか僕の忘れてゐた彼の職業を思ひ出させた。僕はいつも彼のことを唯藝術的な氣質を持つた僕等の一人に考へてゐた。しかし彼は衣食する上には或英字新聞の記者

を勸めてゐるのだつた。僕はどう云ふ藝術家も脫却出來ない「店」を考へ、努めて話を明るくしようとした。

「上海は東京よりも面白いだらう。」

「僕もさう思つてゐるがね。しかしその前にもう一度ロンドンへ行つて來なければならない。……時にこれを君に見せたかしら？」

彼は机の抽斗から白い天鵞絨の筐を出した。筐の中にはひつてゐるのは細いプラティナの指環だつた。僕はその指環を手にとつて見、內側に雕つてある「桃子へ」と云ふ字に頰笑まない訣には行かなかつた。

「僕はその「桃子へ」の下に僕の名を入れるやうに註文したんだけれど。」

それは或は職人の間違ひだつたかも知れなかつた。しかし又或はその職人が相手の女の商賣を考へ、故らに外國人の名前などは入れずに置いたかも知れなかつた。僕はそんなことを氣にしない彼に同情よりも寧ろ寂しさを感じた。

「この頃はどこへ行つてゐるんだい？」

「柳橋だよ。あすこは水の音が聞えるからね。」

　これもやはり東京人の僕には妙に氣の毒な言葉だつた。しかし彼はいつの間にか元氣らしい顔色に返り、彼の絶えず愛讀してゐる日本文學の話などをし出した。

「この間谷崎潤一郎の『惡魔』と云ふ小説を讀んだがね、あれは恐らく世界中で一番汚いことを書いた小説だらう。」

（何箇月かたつた後、僕は何かの話の次手に『惡魔』の作家に彼の言葉を話した。するとこの作家は笑ひながら、無造作に僕にかう言ふのだつた。――「世界一ならば何でも好い。」）

「『虞美人草』は？」

「あれは僕の日本語ぢや駄目だ。……けふは飯ぐらゐはつき合へるかね？」

「うん、僕もそのつもりで來たんだ。」

「ぢやちよつと待つてくれ。そこに雜誌が四五册あるから。」

　彼は口笛を吹きながら、早速洋服に着換へ出した。僕は彼に背を向けたまま、漫然とブック・マンなどを覗いてゐた。すると彼は口笛の合ひ間に突然短い笑ひ聲を洩らし、日本語でかう僕に

話しかけた。

「僕はもうきちりと坐ることが出來るよ。けれどもズボンがイタマシイですね。」

# 四

僕が最後に彼に會つたのは上海の或カッフェだつた。(彼はそれから半年ほど後、天然痘に罹つて死んでしまつた。)僕等は明るい瑠璃燈の下にウヰスキイ炭酸を前にしたまま、左右のテエブルに群つた大勢の男女を眺めてゐた。彼等は二三人の支那人を除けば、大抵は亞米利加人か露西亞人だつた。が、その中に青磁色のガウンをひつかけた女が一人、誰よりも興奮してしやべつてゐた。彼女は體こそ痩せてゐたものの、誰よりも美しい顏をしてゐた。僕は彼女の顏を見た時、砧手のギヤマンを思ひ出した。實際又彼女は美しいと云つても、どこか病的だつたのに違ひなかつた。

「何だい、あの女は?」

「あれか? あれは佛蘭西の……まあ、女優と云ふんだらう。ニニイと云ふ名で通つてゐるがね。

——それよりもあの爺さんを見ろよ」

「あの爺さん」は僕等の鄰に兩手に赤葡萄酒の杯を暖め、バンドの調子に合せては絶えず頭を動かしてゐた。それは滿足そのものと云つても、少しも差支へない姿だつた。僕は熱帶植物の中からしつきりなしに吹きつけて來るヂャッズには可なり興味を感じた。しかし勿論幸福らしい老人などには興味を感じなかつた。

「あの爺さんは猶太人だがね。上海に彼是三十年住んでゐる。あんな奴は一體どう云ふ量見なんだらう？」

「どう云ふ量見でも善いぢやないか？」

「いや、決して善くはないよ。僕などはもう支那に飽き飽きしてゐる。」

「支那にぢやない。上海にだらう。」

「支那にさ。北京にも暫く滯在したことがある。……」

僕はかう云ふ彼の不平をひやかさない訣には行かなかつた。

「支那もだんだん亞米利加化するかね？」

彼は肩を聳かし、暫くは何とも言はなかつた。僕は後悔に近いものを感じた。のみならず氣まづさを紛らす爲に何か言はなければならぬことも感じた。

「ぢやどこに住みたいんだ？」

「どこに住んでも、――ずゐぶん又方々に住んで見たんだがね。僕が今住んで見たいと思ふのはソヴィエット治下の露西亞ばかりだ。」

「それならば露西亞へ行けば好いのに。君などはどこへでも行かれるんだらう。」

彼はもう一度默つてしまつた。それから、――僕は未だにはつきりとその時の彼の顏を覺えてゐる。彼は目を細めるやうにし、突然僕も忘れてゐた萬葉集の歌をうたひ出した。

「世の中をうしとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば。」

僕は彼の日本語の調子に微笑しない訣には行かなかつた。が、妙に内心には感動しない訣にも行かなかつた。

「あの爺さんは勿論だがね。ニニイさへ僕よりは仕合せだよ。何しろ君も知つてゐる通り、……」

僕は咄嗟に快濶になつた。

「ああ、ああ、聞かないでもわかつてゐるよ。お前は『さまよへる猶太人』だらう。」

彼はウヰスキイ炭酸を一口飲み、もう一度ふだんの彼自身に返つた。

「僕はそんなに單純ぢやない。詩人、畫家、批評家、新聞記者、……まだある。息子、兄、獨身者、愛蘭土人、……それから氣質上のロマン主義者、人生觀上の現實主義者、政治上の共產主義者……」

僕等はいつか笑ひながら、椅子を押しのけて立ち上つてゐた。

「それから彼女には情人だらう。」

「うん、情人、……まだある。宗教上の無神論者、哲學上の物質主義者……」

夜更けの往來は靄と云ふよりも瘴氣に近いものにこもつてゐた。それは街燈の光のせゐか、妙に又黃色に見えるものだつた。僕等は腕を組んだまま、二十五の昔と同じやうに大股にアスフアルトを踏んで行つた。二十五の昔と同じやうに――しかし僕はもう今ではどこまでも步かうとは思はなかつた。

「まだ君には言はなかつたかしら、僕が聲帶を調べて貰つた話は？」

「上海でかい？」

「いや、ロンドンへ歸つた時に。――僕は聲帶を調べて貰つたら、世界的なバリトオンだつたんだよ。」

彼は僕の顏を覗きこむやうにし、何か皮肉に微笑してゐた。

「ぢや新聞記者などをしてゐるよりも、……」

「勿論オペラ役者にでもなつてゐれば、カルウソオぐらゐには行つてゐたんだ。しかし今からぢやどうにもならない。」

「それは君の一生の損だね。」

「何、損をしたのは僕ぢやない。世界中の人間が損をしたんだ。」

僕等はもう船の灯の多い黃浦江の岸を歩いてゐた。彼はちよつと歩みをとめ、顋で「見ろ」と云ふ合圖をした。靄の中に仄めいた水には白い小犬の死骸が一匹、緩い波に絶えず搖すられてゐた。その又小犬は誰の仕業か、頸のまはりに花を持つた一つづりの草をぶら下げてゐた。それは慘酷な氣がすると同時に美しい氣がするのにも違ひなかつた。のみならず僕は彼がうたつた萬葉集の

歌以來、多少感傷主義に傳染してゐた。

「ニイだね。」

「さもなければ僕の中の聲樂家だよ。」

彼はかう答へるが早いか、途方もなく大きい嚔めをした。

五

ニイスにゐる彼の妹さんから久しぶりに手紙の來た爲であらう。僕はつい二三日前の夜、夢の中に彼と話してゐた。それはどう考へても、初對面の時に違ひなかつた。カミンも赤あかと火を動かしてゐれば、その又火かげも桃花心木のテエブルや椅子に映つてゐた。僕は妙に疲勞しながら、當然僕等の間に起る愛蘭土の作家たちの話をしてゐた。しかし僕にのしかかつて來る眠氣と鬪ふのは容易ではなかつた。僕は覺束ない意識の中にかう云ふ彼の言葉を聞いたりした。

「I detest Bernard Shaw.」

しかし僕は腰かけたまま、いつかうとうと眠つてしまつた。すると、――おのづから目を醒ま

した。夜はまだ明け切らずにゐるのであらう。風呂敷に包んだ電燈は薄暗い光を落してゐる。僕は床の上に腹這ひになり、妙な興奮を鎭める爲に「敷島」に一本火をつけて見た。が、夢の中に眠つた僕が現在に目を醒ましてゐるのはどうも無氣味でならなかつた。

（大正十五年十一月二十九日）

# 玄鶴山房

## 一

……それは小ぢんまりと出來上つた、奥床しい門構への家だつた。尤もこの界隈にはかう云ふ家も珍しくはなかつた。が、「玄鶴山房」の額や塀越しに見える庭木などはどの家よりも數寄を凝らしてゐた。

この家の主人、堀越玄鶴は畫家としても多少は知られてゐた。しかし資産を作つたのはゴム印の特許を受けた爲だつた。或はゴム印の特許を受けてから地所の賣買をした爲だつた。現に彼が持つてゐた郊外の或地面などは生薑さへ碌に出來ないらしかつた。けれども今はもう赤瓦の家や青瓦の家の立ち並んだ所謂「文化村」に變つてゐた。……

しかし「玄鶴山房」は兎に角小ぢんまりと出來上つた、奥床しい門構への家だつた。殊に近頃は見越しの松に雪よけの繩がかかつたり、玄關の前に敷いた枯れ松葉に藪柑子の實が赤らんだり、

一層風流に見えるのだつた。のみならずこの家のある横町も殆ど人通りと云ふものはなかつた。豆腐屋さへそこを通る時には荷を大通りへおろしたなり、喇叭を吹いて通るだけだつた。

「玄鶴山房――玄鶴と云ふのは何だらう？」

たまたまこの家の前を通りかかつた、髪の毛の長い畫學生は細長い繪の具箱を小脇にしたまま、同じ金釦の制服を着たもう一人の畫學生にかう言つたりした。

「何だかな、まさか嚴格と云ふ洒落でもあるまい。」

彼等は二人とも笑ひながら、氣輕にこの家の前を通つて行つた。そのあとには唯凍て切つた道に彼等のどちらかが捨てて行つた「ゴルデン・バツト」の吸ひ殼が一本、かすかに青い一すぢの煙を細ぼそと立ててゐるばかりだつた。……

## 二

重吉は玄鶴の婿になる前から或銀行へ勤めてゐた。從つて家に歸つて來るのはいつも電燈のともる頃だつた。彼はこの數日以來、門の内へはひるが早いか、忽ち妙な臭氣を感じた。それは老

人には珍しい肺結核の床に就いてゐる玄鶴の息の匂だつた。が、勿論家の外にはそんな匂の出る筈はなかつた。冬の外套の腋の下に折鞄を抱へた重吉は玄關前の踏み石を歩きながら、かういふ彼の神經を怪まない訣には行かなかつた。

玄鶴は「離れ」に床をとり、横になつてゐない時には夜着の山によりかかつてゐた。重吉は外套や帽子をとると、必ずこの「離れ」へ顏を出し、「唯今」とか「けふは如何ですか」とか言葉をかけるのを常としてゐた。しかし「離れ」の閾の内へは滅多に足も入れたことはなかつた。それは舅の肺結核に感染するのを惧れる爲でもあり、又一つには息の匂を不快に思ふ爲でもあつた。玄鶴は彼の顏を見る度にいつも唯「ああ」とか「お歸り」とか答へた。その聲は又力の無い、聲よりも息に近いものだつた。重吉は舅にかう言はれると、時々彼の不人情に後ろめたい思ひもしない訣ではなかつた。けれども「離れ」へはひることはどうも彼には無氣味だつた。

それから重吉は茶の間の鄰りにやはり床に就いてゐる姑のお鳥を見舞ふのだつた。お鳥は玄鶴の寢こまない前から、——七八年前から腰拔けになり、便所へも通へない體になつてゐた。玄鶴が彼女を貰つたのは彼女が或大藩の家老の娘と云ふ外にも器量望みからだと云ふことだつた。彼

女はそれだけに年をとつても、どこか目などは美しかつた。しかしこれも床の上に坐り、丹念に白足袋などを繕つてゐるのは餘りミイラと變らなかつた。重吉はやはり彼女にも「お母さん、けふはどうですか？」と云ふ、手短な一語を殘したまま、六疊の茶の間へはひるのだつた。

妻のお鈴は茶の間にゐなければ、信州生まれの女中のお松と狹い臺所に働いてゐた。小綺麗に片づいた茶の間は勿論、文化竈を据ゑた臺所さへ舅や姑の居間よりも遙かに重吉には親しかつた。彼は一時は知事などにもなつた或政治家の次男だつた。が、豪傑肌の父親よりも昔の女流歌人だつた母親に近い秀才だつた。それは又彼の人懷こい目や細つそりした顎にも明らかだつた。重吉はこの茶の間へはひると、洋服を和服に着換へた上、樂々と長火鉢の前に坐り、安い葉卷を吹かしたり、今年やつと小學校にはひつた一人息子の武夫にからかつたりした。

重吉はいつもお鈴や武夫とチャブ臺を圍んで食事をした。彼等の食事は賑かだつた。が、近頃は「賑か」と云つても、どこか又窮屈にも違ひなかつた。それは唯玄鶴につき添ふ甲野と云ふ看護婦の來てゐる爲だつた。尤も武夫は「甲野さん」がゐても、ふざけるのに少しも變らなかつた。いや、或は「甲野さん」がゐる爲に餘計ふざける位だつた。お鈴は時々眉をひそめ、かう云ふ武夫を

睨んだりした。しかし武夫はきよとんとしたまま、わざと大仰に茶碗の飯を搔きこんで見せたりするだけだつた。重吉は小說などを讀んでゐるだけに武夫のはしやぐのにも「男」を感じ、不快になることもないではなかつた。が、大抵は微笑したぎり、默つて飯を食つてゐるのだつた。

「玄鶴山房」の夜は靜かだつた。朝早く家を出る武夫は勿論、重吉夫婦も大抵は十時には床に就くことにしてゐた。その後でもまだ起きてゐるのは九時前後から夜伽をする看護婦の甲野ばかりだつた。甲野は玄鶴の枕もとに赤あかと火の起つた火鉢を抱へ、居睡りもせずに坐つてゐた。玄鶴は、――玄鶴も時々は目を醒ましてゐた。が、湯たんぽが冷えたとか、濕布が乾いたとか云ふ以外に殆ど口を利いたことはなかつた。かう云ふ「離れ」に聞えて來るものは植ゑ込みの竹の戰ぎだけだつた。甲野は薄ら寒い靜かさの中にぢつと玄鶴を見守つたまま、いろいろのことを考へてゐた。この一家の人々の心もちや彼女自身の行く末などを。……

## 三

或雪の晴れ上つた午後、二十四五の女が一人、か細い男の子の手を引いたまま、引き窓越しに

青空の見える堀越家の臺所へ顏を出した。重吉は勿論家にゐなかつた。丁度ミシンをかけてゐたお鈴は多少豫期はしてゐたものの、ちよつと當惑に近いものを感じた。しかし兎に角この客を迎へに長火鉢の前を立つて行つた。客は臺所へ上つた後、彼女自身の履き物や男の子の靴を揃へ直した。(男の子は白いスウェエタアを着てゐた。)彼女がひけ目を感じてゐることはかう云ふ所作だけにも明らかだつた。が、それも無理はなかつた。彼女はこの五六年以來、東京の或近在に玄鶴が公然と圍つて置いた女中上りのお芳だつた。

お鈴はお芳の顏を見た時、存外彼女が老けたことを感じた。しかもそれは顏ばかりではなかつた。お芳は四五年以前には圓まると肥つた手をしてゐた。が、年は彼女の手さへ靜脈の見えるほど細らせてゐた。それから彼女が身につけたものも、――お鈴は彼女の安ものの指環に何か世帶じみた寂しさを感じた。

「これは兄が檀那樣に差し上げてくれと申しましたから。」

お芳は愈氣後れのしたやうに古い新聞紙の包みを一つ、茶の間へ膝を入れる前にそつと臺所の隅へ出した。折から洗ひものをしてゐたお松はせつせと手を動かしながら、水々しい銀杏返し

に結つたお芳を時々尻目に窺つたりしてゐた。が、この新聞紙の包みを見ると、更に悪意のある表情をした。それは又實際文化竈や華奢な皿小鉢と調和しない悪臭を放つてゐるのに違ひなかつた。お芳はお松を見なかつたものの、少くともお鈴の顔色に妙なけはひを感じたと見え、「これは、あの、大蒜でございます」と説明した。それから指を噛んでゐた子供に「さあ、坊ちやん、お時宜なさい」と聲をかけた。男の子は勿論玄鶴がお芳に生ませた文太郎だつた。この子供をお芳が「坊ちやん」と呼ぶのはお鈴には如何にも氣の毒だつた。けれども彼女の常識はすぐにそれもかう云ふ女には仕かたがないことと思ひ返した。お鈴はさりげない顔をしたまま、茶の間の隅に坐つた親子に有り合せの菓子や茶などをすすめ、玄鶴の容態を話したり、文太郎の機嫌をとつたりし出した。……

玄鶴はお芳を圍ひ出した後、省線電車の乘り換へも苦にせず、一週間に一二度づつは必ず妾宅へ通つて行つた。お鈴はかう云ふ父の氣もちに始めのうちは嫌悪を感じてゐた。「ちつとはお母さんの手前も考へれば善いのに、」——そんなことも度たび考へたりした。尤もお鳥は何ごとも詮め切つてゐるらしかつた。しかしお鈴はそれだけ一層母を氣の毒に思ひ、父が妾宅へ出かけた後

でも母にはけふは詩の會ですつて」などと白々しい譃をついたりしてゐた。その譃が役に立たないことは彼女自身も知らないのではなかつた。が、時々母の顏に冷笑に近い表情を見ると、譃をついたことを後悔する、――と云ふよりも寧ろ彼女の心も汲み分けてくれない腰ぬけの母に何か情無さを感じ勝ちだつた。

お鈴は父を送り出した後、一家のことを考へる爲にミシンの手をやめるのも度たびだつた。玄鶴はお芳を圍ひ出さない前にも彼女には「立派なお父さん」ではなかつた。しかし勿論そんなことは氣の優しい彼女にはどちらでも善かつた。唯彼女が氣がかりだつたのは父が書畫骨董までもずんずん妾宅へ運ぶことだつた。お鈴はお芳が女中だつた時から、彼女を惡人と思つたことはなかつた。いや、寧ろ人並みよりも內氣な女と思つてゐた。が、東京の或場末に肴屋をしてゐるお芳の兄は何をたくらんでゐるかわからなかつた。實際又彼は彼女の目には妙に惡賢い男らしかつた。お鈴は時々重吉をつかまへ、彼女の心配を打ち明けたりした。けれども彼は取り合はなかつた。「僕からお父さんに言ふ訣には行かない。」――お鈴は彼にかう言はれて見ると、默つてしまふより外はなかつた。

「まさかお父さんも羅雨峯の畫がお芳にわかるとも思つてゐないんでせうが。」
重吉も時たまお鳥にはそれとなしにこんなことも話したりしてゐた。が、お鳥は重吉を見上げ、いつも唯苦笑してかう言ふのだつた。
「あれがお父さんの性分なのさ。何しろお父さんはあたしにさへ『この硯はどうだ?』などと言ふ人なんだからね。」
しかしそんなことも今になつて見れば、誰にも莫迦莫迦しい心配だつた。玄鶴は今年の冬以來、どつと病の重つた爲に妾宅通ひも出來なくなると、重吉が持ち出した手切れ話に(尤もその話の條件などは事實上彼よりもお鳥やお鈴が拵へたと言ふのに近いものだつた。)存外素直に承諾した。それは又お鈴が恐れてゐたお芳の兄も同じことだつた。お芳は千圓の手切れ金を貰ひ、上總の或海岸にある兩親の家へ歸つた上、月々文太郎の養育料として若干の金を送つて貰ふ、――彼はかう云ふ條件に少しも異存を唱へなかつた。のみならず妾宅に置いてあつた玄鶴の秘藏の煎茶道具なども催促されぬうちに運んで來た。お鈴は前に疑つてゐただけに一層彼に好意を感じた。
「就きましては妹のやつが若しお手でも足りませんやうなら、御看病に上りたいと申してをりま

すんですが。」

お鈴はこの賴みに應じる前に腰ぬけの母に相談した。それは彼女の失策と云つても差し支へないものに違ひなかつた。お鳥は彼女の相談を受けると、あしたにもお芳に文太郎をつれて來て貰ふやうに勸め出した。お鈴は母の氣もちの外にも一家の空氣の擾されるのを惧れ、何度も母に考へ直させようとした（その癖又一面には父の玄鶴とお芳の兄との中間に立つてゐる關係上、いつか素氣なく先方の賴みを斷れない氣もちにも落ちこんでゐた）が、お鳥は彼女の言葉をどうしても素直には取り上げなかつた。

「これがまだあたしの耳へはひらない前ならば格別だけれども――お芳の手前も羞しいやね。」

お鈴はやむを得ずお芳の兄にお芳の來ることを承諾した。それも亦或は世間を知らない彼女の失策だつたかも知れなかつた。現に重吉は銀行から歸り、お鈴にこの話を聞いた時、女のやうに優しい眉の間にちよつと不快らしい表情を示した。「そりや人手が殖えることは難有いにも違ひないがね。……お父さんにも一應話して見れば善いのに。お父さんから斷るのならばお前にも責任のない訣なんだから。」――そんなことも口に出して言つたりした。お鈴はいつになく鬱ぎこん

だまま、「さうだつたわね」などと返事をしてゐた。しかし玄鶴に相談することは、――お芳に勿論未練のある瀕死の父に相談することは彼女には今になつて見ても出來ない相談に違ひなかつた。

……お鈴はお芳親子を相手にしながら、かう云ふ曲折を思ひ出したりした。お芳は長火鉢に手もかざさず、途絶え勝ちに彼女の兄のことや文太郎のことを話してゐた。彼女の言葉は四五年前のやうに「それは」をS-rya と發音する田舍訛りを改めなかつた。お鈴はこの田舍訛りにいつか彼女の心もちも或氣安さを持ち出したのを感じた。同時に又襖一重向うに咳一つしずにゐる母のお鳥に何か漠然とした不安も感じた。

「ぢや一週間位はゐてくれられるの？」

「はい、こちら樣さへお差支へございませんければ。」

「でも着換へ位なくちやいけなかないの？」

「それは兄が夜分にでも屆けると申してをりましたから。」

お芳はかう答へながら、退屈らしい文太郎に懷のキャラメルを出してやつたりした。

「ぢやお父さんにさう言つて來ませう。お父さんもすつかり弱つてしまつてね。障子の方へ向つ

てゐる耳だけ霜焼けが出來たりしてゐるのよ。」

お鈴は長火鉢の前を離れる前に何となしに鐵瓶をかけ直した。

「お母さん。」

お鳥は何か返事をした。それはやつと彼女の聲に目を醒ましたらしい粘り聲だつた。

「お母さん。お芳さんが見えましたよ。」

お鈴はほつとした氣もちになり、お芳の顏を見ないやうに早速長火鉢の前を立ち上つた。それから次の間を通りしなにもう一度「お芳さんが」と聲をかけた。お鳥は橫になつたまま、夜着の襟に口もとを埋めてゐた。が、彼女を見上げると、目だけに微笑に近いものを浮かべ、「おや、まあ、よく早く」と返事をした。お鈴ははつきりと彼女の背中にお芳の來ることを感じながら、雪のある庭に向つた廊下をそはそは「離れ」へ急いで行つた。

「離れ」は明るい廊下から突然はひつて來たお鈴の目には實際以上に薄暗かつた。玄鶴は丁度起き直つたまま、甲野に新聞を讀ませてゐた。が、お鈴の顏を見ると、いきなり「お芳か？」と聲をかけた。それは妙に切迫した、詰問に近い嗄れ聲だつた。お鈴は襖側に佇んだなり、反射的に「え

え」と返事をした。それから、――誰も口を利かなかつた。

「すぐにここへよこしますから。」

「うん。……お芳一人かい？」

「いいえ。……」

玄鶴は默つて頷いてゐた。

「ぢや甲野さん、ちよつとこちらへ。」

お鈴は甲野よりも一足先に小走りに廊下を急いで行つた。丁度雪の殘つた棕櫚の葉の上には鶺鴒が一羽尾を振つてゐた。しかし彼女はそんなことよりも病人臭い「離れ」の中から何か氣味の惡いものがついて來るやうに感じてならなかつた。

四

お芳が泊りこむやうになつてから、一家の空氣は目に見えて險惡になるばかりだつた。それはまづ武夫が文太郎をいぢめることから始まつてゐた。文太郎は父の玄鶴よりも母のお芳に似た子

供だつた。しかも氣の弱い所まで母のお芳に似た子供だつた。お鈴は勿論かう云ふ子供に同情しない訣ではないらしかつた。が時々は文太郎を意氣地なしと思ふこともあるらしかつた。
看護婦の甲野は職業がら、冷やかにこのありふれた家庭的悲劇を眺めてゐた、――と云ふよりも寧ろ享樂してゐた。彼女の過去は暗いものだつた。彼女は病家の主人だの病院の醫者だのとの關係上、何度一塊の青酸加里を嚥まうとしたことだか知れなかつた。この過去はいつか彼女の心に他人の苦痛を享樂する病的な興味を植ゑつけてゐた。彼女は堀越家へはひつて來た時、腰ぬけのお鳥が便をする度に手を洗はないのを發見した。「この家のお嫁さんは氣が利いてゐる。あたしたちにも氣づかないやうに水を持つて行つてやるやうだから。」――そんなことも一時は疑ひ深い彼女の心に影を落した。が、四五日ゐるうちにそれは全然お孃樣育ちのお鈴の手落ちだつたのを發見した。彼女はこの發見に何か滿足に近いものを感じ、お鳥の便をする度に洗面器の水を運んでやつた。
「甲野さん、あなたのおかげさまで人間並みに手が洗へます。」
お鳥は手を合せて涙をこぼした。甲野はお鳥の喜びには少しも心を動かさなかつた。しかしそ

れ以來三度に一度は水を持つて行かなければならぬお鈴を見ることは愉快だつた。從つてから云ふ彼女には子供たちの喧嘩も不快ではなかつた。彼女は玄鶴にはお芳親子に同情のあるらしい素振りを示した。同時に又お鳥にはお芳親子に惡意のあるらしい素振りを示した。それはたとひ徐ろにもせよ、確實に效果を與へるものだつた。

お芳が泊つてから一週間ほどの後、武夫は又文太郎と喧嘩をした。喧嘩は唯豚の尻つ尾は牛の尻つ尾よりも太いとか細いとか云ふことから始まつてゐた。武夫は彼の勉强部屋の隅に、――玄關の鄰の四疊半の隅にか細い文太郎を押しつけた上、さんざん打つたり蹴つたりした。そこへ丁度來合せたお芳は泣き聲も出ない文太郎を抱き上げ、かう武夫をたしなめにかかつた。

「坊ちやん、弱いものいぢめをなすつてはいけません。」

それは内氣な彼女には珍らしい棘のある言葉だつた。武夫はお芳の權幕に驚き、今度は彼自身泣きながら、お鈴のゐる茶の間へ逃げこもつた。するとお鈴もかつとしたと見え、手ミシンの仕事をやりかけたまま、お芳親子のゐる所へ無理八理に武夫を引きずつて行つた。

「お前が一體我儘なんです。さあ、お芳さんにおあやまりなさい、ちやんと手をついておあやま

りなさい。」

お芳はかう云ふお鈴の前に文太郎と一しよに涙を流し、平あやまりにあやまる外はなかつた。その又仲裁役を勤めるものは必ず看護婦の甲野だつた。甲野は顔を赤めたお鈴を一生懸命に押し戻しながら、いつももう一人の人間の、――ぢつとこの騒ぎを聞いてゐる玄鶴の心もちを想像し、内心には冷笑を浮かべてゐた。が、勿論そんな素ぶりは決して顔色にも見せたことはなかつた。

けれども一家を不安にしたものは必しも子供の喧嘩ばかりではなかつた。お芳は又いつの間にか何ごともあきらめ切つたらしいお鳥の嫉妬を煽つてゐた。尤もお鳥はお芳自身には一度も怨みなどを言つたことはなかつた。（これは又五六年前、お芳がまだ女中部屋に寝起きしてゐた頃も同じだつた。）が、全然關係のない重吉に何かと當り勝ちだつた。重吉は勿論とり合はなかつた。お鈴はそれを氣の毒に思ひ、時々母の代りに詫びたりした。しかし彼は苦笑したぎり、「お前までヒステリイになつては困る」と話を反らせるのを常としてゐた。

甲野はお鳥の嫉妬にもやはり興味を感じてゐた。お鳥の嫉妬それ自身は勿論、彼女が重吉に當る氣もちも甲野にははつきりとわかつてゐた。のみならず彼女はいつの間にか彼女自身も重吉夫

婦に嫉妬に近いものを感じてゐた。お鈴は彼女には「お孃樣」だつた。重吉も――重吉は兎に角世間並みに出來上つた男に違ひなかつた。が、彼女の輕蔑する一匹の雄にも違ひなかつた。かう云ふ彼等の幸福は彼女には殆ど不正だつた。彼女はこの不正を矯める爲に(!)重吉に馴れ馴れしい素振りを示した。それは或は重吉には何ともないものかも知れなかつた。けれどもお鳥を苛立たせるには絶好の機會を與へるものだつた。お鳥は膝頭も露はにしたまま、「重吉、お前はあたしの娘では――腰ぬけの娘では不足なのかい?」と毒々しい口をきいたりした。

しかしお鈴だけはその爲に重吉を疑つたりはしないらしかつた。いや、實際甲野にも氣の毒に思つてゐるらしかつた。甲野はそこに不滿を持つたばかりか、今更のやうに人の善いお鈴を輕蔑せずにはゐられなかつた。が、いつか重吉が彼女を避け出したのは愉快だつた。のみならず彼女を避けてゐるうちに反て彼女に男らしい好奇心を持ち出したのは愉快だつた。彼は前には甲野がゐる時でも、臺所の側の風呂へはひる爲に裸になることをかまはなかつた。けれども近頃ではそんな姿を一度も甲野に見せないやうになつた。それは彼が羽根を拔いた雄鷄に近い彼の體を羞ぢてゐる爲に違ひなかつた。甲野はかう云ふ彼を見ながら、(彼の顏も亦雀斑だらけだつた。)一體彼

はお鈴以外の誰に惚れられるつもりだらうなどと私かに彼を嘲つたりしてゐた。

或霜曇りに曇つた朝、甲野は彼女の部屋になつた玄關の三疊に鏡を据ゑ、いつも彼女が結びつけたオオル・バツクに髮を結びかけてゐた。それは丁度愈お芳が田舍へ歸らうと言ふ前日だつた。お芳がこの家を去ることは重吉夫婦には嬉しいらしかつた。が、反つてお鳥には一層苛立たしさを與へるらしかつた。甲野は髮を結びながら、甲高いお鳥の聲を聞き、いつか彼女の友だちが話した或女のことを思ひ出した。彼女はパリに住んでゐるうちにだんだん烈しい懷鄕病に落ちこみ、夫の友だちが歸朝するのを幸ひ、一しよに船へ乘りこむことにした。長い航海も彼女には存外苦痛ではないらしかつた。しかし彼女は紀州沖へかかると、急になぜか興奮しはじめ、とうとう海へ身を投げてしまつた。日本へ近づけば近づくほど、懷鄕病も逆に昂ぶつて來る、――甲野は靜かに油つ手を拭き、腰ぬけのお鳥の嫉妬は勿論、彼女自身の嫉妬にもやはりかう云ふ神祕な力が働いてゐることを考へたりしてゐた。

「まあ、お母さん、どうしたんです？　こんな所まで這ひ出して來て。お母さんつたら。――甲野さん、ちよつと來て下さい。」

お鈴の聲は「離れ」に近い緣側から響いて來るらしかつた。甲野はこの聲を聞いた時、澄み渡つた鏡に向つたまま、始めてにやりと冷笑を洩らした。それからさも驚いたやうに「はい唯今」と返事をした。

# 五

玄鶴はだんだん衰弱して行つた。彼の永年の病苦は勿論、彼の背中から腰へかけた床ずれの痛みも烈しかつた。彼は時々唸り聲を擧げ、僅かに苦しみを紛らせてゐた。しかし彼を惱ませたものは必しも肉體的苦痛ばかりではなかつた。彼はお芳の泊つてゐる間は多少の慰めを受けた代りにお鳥の嫉妬や子供たちの喧嘩にしつきりない苦しみを感じてゐた。けれどもそれはまだ善かつた。玄鶴はお芳の去つた後は恐しい孤獨を感じた上、長い彼の一生と向ひ合はない訣には行かなかつた。

玄鶴の一生はかう云ふ彼には如何にも淺ましい一生だつた。成程ゴム印の特許を受けた當座は――花札や酒に日を暮らした當座は比較的彼の一生でも明るい時代には違ひなかつた。しかしそ

こにも僻張の嫉妬や彼の利益を失ふまいとする彼自身の焦燥の念は絶えず彼を苦しめてゐた。ましてお芳を圍ひ出した後は、――彼は家庭のいざこざの外にも彼等の知らない金の工面にいつも重荷を背負ひつづけだつた。しかも更に淺ましいことには年の若いお芳に惹かれてゐたものの、少くともこの一二年は何度内心にお芳親子を死んでしまへと思つたか知れなかつた。

「淺ましい？――しかしそれも考へて見れば、格別わしだけに限つたことではない。」

彼は夜などはかう考へ、彼の親戚や知人のことを一々細かに思ひ出したりした。彼の婿の父親は唯「憲政を擁護する爲に」彼よりも腕の利かない敵を何人も社會的に殺してゐた。それから彼に一番親しい或年輩の骨董屋は先妻の娘に通じてゐた。それから或辯護士は供託金を費消してゐた。それから或篆刻家は、――しかし彼等の犯した罪は不思議にも彼の苦しみには何の變化も與へなかつた。のみならず逆に生そのものにも暗い影を擴げるばかりだつた。

「何、この苦しみも長いことはない。お目出度くなつてしまひさへすれば……」

これは玄鶴にも殘つてゐたたつた一つの慰めだつた。彼は心身に食ひこんで來るいろいろの苦しみを紛らす爲に樂しい記憶を思ひ起さうとした。けれども彼の一生は前にも言つたやうに淺ま

しかつた。若しそこに少しでも赫かしい一面があるとすれば、それは唯何も知らない幼年時代の記憶だけだつた。彼は度たび夢うつつの間に彼の兩親の住んでゐた信州の或山峽の村を、――殊に石を置いた板葺き屋根や蠶臭い桑ボヤを思ひ出した。が、その記憶もつづかなかつた。彼は時時唸り聲の間に觀音經を唱へて見たり、昔のはやり歌をうたつて見たりした。しかも「妙音觀世音、梵音海潮音、勝彼世間音」を唱へた後、「かつぽれ、かつぽれ」をうたふことは滑稽にも彼には勿體ない氣がした。

「寢るが極樂。寢るが極樂……」

玄鶴は何も彼も忘れる爲に唯ぐつすり眠りたかつた。實際又甲野は彼の爲に催眠藥を與へる外にもヘロインなどを注射してゐた。けれども彼には眠りさへいつも安らかには限らなかつた。彼は時々夢の中にお芳や文太郎に出合つたりした。それは彼には、――夢の中の彼には明るい心もちのするものだつた。(彼は或夜の夢の中にはまだ新しい花札の「櫻の二十」と話してゐた。しかもその又「櫻の二十」は四五年前のお芳の顏をしてゐた。)しかしそれだけに目の醒めた後は一層彼を見じめにした。玄鶴はいつか眠ることにも恐怖に近い不安を感ずるやうになつた。

大晦日もそろそろ近づいた或午後、玄鶴は仰向けに横たはつたなり、枕もとの甲野へ聲をかけた。

「甲野さん、わしはな、久しく褌をしめたことがないから、晒し木綿を六尺買はせて下さい。」

晒し木綿を手に入れることはわざわざ近所の呉服屋へお松を買ひにやるまでもなかつた。

「しめるのはわしが自分でしめます。ここへ疊んで置いて行つて下さい。」

玄鶴はこの褌を便りに、――この褌に縊れ死ぬことを便りにやつと短い半日を暮した。しかし床の上に起き直ることさへ人手を借りなければならぬ彼には容易にその機會も得られなかつた。のみならず死はいざとなつて見ると、玄鶴にもやはり恐しかつた。彼は薄暗い電燈の光に黄檗の一行ものを眺めたまま、未だに生を貪らずにはゐられぬ彼自身を嘲つたりした。

「甲野さん、ちよつと起して下さい。」

それはもう夜の十時頃だつた。

「わしはな、これからひと眠りします。あなたも御遠慮なくお休みなすつて下さい。」

甲野は妙に玄鶴を見つめ、かう素つ氣ない返事をした。

「いえ、わたくしは起きてをります。これがわたくしの勤めでございますから。」
玄鶴は彼の計畫も甲野の爲に看破られたのを感じた。が、ちよつと頷いたぎり、何も言はずに狸寢入りをした。甲野は彼の枕もとに婦人雜誌の新年號をひろげ、何か讀み耽けつてゐるらしかつた。玄鶴はやはり蒲團の側の褌のことを考へながら、薄目に甲野を見守つてゐた。すると――急に可笑しさを感じた。
「甲野さん。」
甲野も玄鶴の顏を見た時はさすがにぎよつとしたらしかつた。玄鶴は夜着によりかかつたまま、いつかとめどなしに笑つてゐた。
「なんでございます？」
「いや、何でもない。何にも可笑しいことはありません。――」
玄鶴はまだ笑ひながら、細い右手を振つて見せたりした。
「今度は……なぜかから可笑しうなつてな。……今度はどうか横にして下さい。」
一時間ばかりたつた後、玄鶴はいつか眠つてゐた。その晩は夢も恐しかつた。彼は樹木の茂つ

た中に立ち、腰の高い障子の隙から茶室めいた部屋を覗いてゐた。そこには又まる裸の子供が一人、こちらへ顔を向けて横になつてゐた。それは子供とは云ふものの、老人のやうに皺くちやだつた。玄鶴は聲を擧げようとし、寢汗だらけになつて目を醒ました。……

「離れ」には誰も來てゐなかつた。のみならずまだ薄暗かつた。まだ？――しかし玄鶴は置き時計を見、彼是正午に近いことを知つた。彼の心は一瞬間、ほつとしただけに明るかつた。けれども又いつものやうに忽ち陰鬱になつて行つた。彼は仰向けになつたまま、彼自身の呼吸を數へてゐた。それは丁度何ものかに「今だぞ」とせかれてゐる氣もちだつた。玄鶴はそつと褌を引き寄せ、彼の頭に卷きつけると、兩手でぐつと引つぱるやうにした。

そこへ丁度顔を出したのはまるまると着膨れた武夫だつた。

「やあ、お爺さんがあんなことをしてゐらあ。」

武夫はかう囃しながら、一散に茶の間へ走つて行つた。

# 六

一週間ばかりたつた後、玄鶴は家族たちに圍まれたまま、肺結核の爲に絶命した。彼の告別式は盛大（！）だつた。（唯、腰ぬけのお鳥だけはその式にも出る訣に行かなかつた。）彼の家に集まつた人々は重吉夫婦に悔みを述べた上、白い綸子に蔽はれた彼の柩の前に燒香した。が、門を出る時には大抵彼のことを忘れてゐた。尤も彼の故朋輩だけは例外だつたのに違ひなかつた。「あの爺さんも本望だつたらう。若い妾も持つてゐれば、小金もためてゐたんだから。」――彼等は誰も同じやうにこんなことばかり話し合つてゐた。

彼の柩をのせた葬用馬車は一輛の馬車を從へたまま、日の光も落ちない師走の町を或火葬場へ走つて行つた。薄汚い後の馬車に乘つてゐるのは重吉や彼の從弟だつた。彼の從弟の大學生は馬車の動搖を氣にしながら、重吉と餘り話もせずに小型の本に讀み耽つてゐた。それはLiebknechtの「追憶錄」の英譯本だつた。が、重吉は通夜疲れの爲にうとうと居睡りをしてゐなければ、窓の外の新開町を眺め、「この邊もすつかり變つたな」などと氣のない獨り語を洩らしてゐた。

二輛の馬車は霜どけの道をやつと火葬場へ辿り着いた。しかし豫め電話をかけて打ち合せて置いたのにも關らず、一等の竈は滿員になり、二等だけ殘つてゐると云ふことだつた。それは彼等

にはどちらでも善かつた。が、重吉は舅よりも寧ろお鈴の思惑を考へ、半月形の窓越しに熱心に事務員と交渉した。「實は手遲れになつた病人だしするから、せめて火葬にする時だけは一等にしたいと思ふんですがね。」——そんな譃もついて見たりした。それは彼の豫期したよりも效果の多い譃らしかつた。

「ではかうしませう。一等はもう滿員ですから、特別に一等の料金で特等で燒いて上げることにしませう。」

重吉は幾分か間の惡さを感じ、何度も事務員に禮を言つた。事務員は眞鍮の眼鏡をかけた好人物らしい老人だつた。

「いえ、何、お禮には及びません。」

彼等は竈に封印した後、薄汚い馬車に乘つて火葬場の門を出ようとした。すると意外にもお芳が一人、煉瓦塀の前に佇んだまま、彼等の馬車に目禮してゐた。重吉はちよつと狼狽し、彼の帽を上げようとした。しかし彼等を乘せた馬車はその時にはもう傾きながら、ポプラアの枯れた道を走つてゐた。

「あれですね？」

「うん、……俺たちの來た時もあすこにゐたかしら。」

「さあ、乞食ばかりゐたやうに思ひますがね。……あの女はこの先どうするでせう？」

重吉は一本の敷島に火をつけ、出來るだけ冷淡に返事をした。

「さあ、どう云ふことになるか。……」

彼の從弟は默つてゐた。が、彼の想像は上總の或海岸の漁師町を描いてゐた。それからその漁師町に住まなければならぬお芳親子も。――彼は急に險しい顏をし、いつかさしはじめた日の光の中にもう一度リイプクネヒトを讀みはじめた。

（昭和二年一月）

# 蜃氣樓

——或は「續海のほとり」——

一

或秋の午頃、僕は東京から遊びに來た大學生のK君と一しよに蜃氣樓を見に出かけて行つた。鵠沼の海岸に蜃氣樓の見えることは誰でももう知つてゐるであらう。現に僕の家の女中などは逆まに舟の映つたのを見、「この間の新聞に出てゐた寫眞とそつくりですよ。」などと感心してゐた。

僕等は東家の横を曲り、次手にO君も誘ふことにした。不相變赤シャツを着たO君は午飯の支度でもしてゐたのか、垣越しに見える井戸端にせつせとポンプを動かしてゐた。僕は秦皮樹のステッキを擧げ、O君にちよつと合圖をした。

「そつちから上つて下さい。――やあ、君も來てゐたのか？」

O君は僕がK君と一しよに遊びに來たものと思つたらしかつた。

「僕等は蜃氣樓を見に出て來たんだよ。君も一しよに行かないか？」

「蜃氣樓か?——」
O君は急に笑ひ出した。
「どうもこの頃は蜃氣樓ばやりだな。」
五分ばかりたつた後、僕等はもうO君と一しよに砂の深い路を歩いて行つた。路の左は砂原だつた。そこに牛車の轍が二すぢ、黑ぐろと斜めに通つてゐた。僕はこの深い轍に何か壓迫に近いものを感じた。逞しい天才の仕事の痕、——そんな氣も迫つて來ないのではなかつた。
「まだ僕は健全ぢやないね。ああ云ふ車の痕を見てさへ、妙に參つてしまふんだから。」
O君は眉をひそめたまま、何とも僕の言葉に答へなかつた。が、僕の心もちはO君にははつきり通じたらしかつた。
そのうちに僕等は松の間を、——疎らに低い松の間を通り、引地川の岸を歩いて行つた。海は廣い砂濱の向うに深い藍色に晴れ渡つてゐた。が、繪の島は家々や樹木も何か憂鬱に曇つてゐた。
「新時代ですね?」
K君の言葉は唐突だつた。のみならず微笑を含んでゐた。新時代?——しかも僕は咄嗟の間に

K君の「新時代」を發見した。それは砂止めの笹垣を後ろに海を眺めてゐる男女だつた。尤も薄いインバネスに中折帽をかぶつた男は新時代と呼ぶには當らなかつた。しかし女の斷髪は勿論、パラソルや踵の低い靴さへ確に新時代に出來上つてゐた。

「幸福らしいね。」

「君なんぞは羨しい仲間だらう。」

O君はK君をからかつたりした。

蜃氣樓の見える場所は彼等から一町ほど隔つてゐた。僕等はいづれも腹這ひになり、陽炎の立つた砂濱を川越しに透かして眺めたりした。砂濱の上には青いものが一すぢ、リボンほどの幅にゆらめいてゐた。それはどうしても海の色が陽炎に映つてゐるらしかつた。が、その外には砂濱にある船の影も何も見えなかつた。

「あれを蜃氣樓と云ふんですかね？」

K君は顋を砂だらけにしたなり、失望したやうにかう言つてゐた。そこへどこからか鴉が一羽、二三町隔つた砂濱の上を、藍色にゆらめいたものの上をかすめ、更に又向うへ舞ひ下つた。と同

時に鴉の影はその陽炎の帶の上へちらりと逆まに映つて行つた。
「これでもけふは上等の部だな。」
僕等はO君の言葉と一しよに砂の上から立ち上つた。するといつか僕等の前には僕等の殘して來た「新時代」が二人、こちらへ向いて歩いてゐた。
僕はちよつとびつくりし、僕等の後ろをふり返つた。しかし彼等は不相變一町ほど向うの笹垣を後ろに何か話してゐるらしかつた。僕等は、――殊にO君は拍子抜けのしたやうに笑ひ出した。
「この方が反つて蜃氣樓ぢやないか?」
僕等の前にゐる「新時代」は勿論彼等とは別人だつた。が、女の斷髮や男の中折帽をかぶつた姿は彼等と殆ど變らなかつた。
「僕は何だか氣味が惡かつた。」
「僕もいつの間に來たのかと思ひましたよ。」
僕等はこんなことを話しながら、今度は引地川の岸に沿はずに低い砂山を越えて行つた。砂山は砂止めの笹垣の裾にやはり低い松を黄ばませてゐた。O君はそこを通る時に「どつこいしよ」と

云ふやうに腰をかがめ、砂の上の何かを拾ひ上げた。それは瀝青らしい黑枠の中に横文字を並べた木札だつた。

「何だい、それは？ Sr. H. Tsuji……Unua……Aprilo……Jaro……1906……」

「何かしら？ dua……Majesta……ですか？ 1926 としてありますね。」

「これは、ほれ、水葬した死骸についてゐたんぢやないか？」

　O君はかう云ふ推測を下した。

「だつて死骸を水葬する時には帆布か何かに包むだけだらう？」

「だからそれへこの札をつけてさ。――ほれ、ここに釘が打つてある。これはもとは十字架の形をしてゐたんだな。」

　僕等はもうその時には別莊らしい篠垣や松林の間を歩いてゐた。木札はどうもO君の推測に近いものらしかつた。僕は又何か日の光の中に感じる筈のない無氣味さを感じた。

「緣起でもないものを拾つたな。」

「何、僕はマスコットにするよ。……しかし1906から1926とすると、二十位で死んだんだな。

二十位と――」

「男ですかしら？　女ですかしら？」

「さあね。……しかし兎に角この人は混血兒だつたかも知れないね。」

僕はK君に返事をしながら、船の中に死んで行つた混血兒の青年を想像した。彼は僕の想像によれば、日本人の母のある筈だつた。

「蜃氣樓か。」

O君はまつ直に前を見たまま、急にかう獨り語を言つた。それは或は何げなしに言つた言葉かも知れなかつた。が、僕の心もちには何か幽かに觸れるものだつた。

「ちよつと紅茶でも飲んで行くかな。」

僕等はいつか家の多い本通りの角に佇んでゐた。家の多い？――しかし砂の乾いた道には殆ど人通りは見えなかつた。

「K君はどうするの？」

「僕はどうでも、……」

そこへ眞白い犬が一匹、向うからぼんやり尾を垂れて來た。

## 二

K君の東京へ歸つた後、僕は又O君や妻と一しよに引地川の橋を渡つて行つた。今度は午後の七時頃、――夕飯をすませたばかりだつた。

その晩は星も見えなかつた。僕等は餘り話もせずに人げのない砂濱を歩いて行つた。砂濱には引地川の川口のあたりに火かげが一つ動いてゐた。それは沖へ漁に行つた船の目じるしになるものらしかつた。

浪の音は勿論絶えなかつた。が、浪打ち際へ近づくにつれ、だんだん磯臭さも強まり出した。それは海そのものよりも僕等の足もとに打ち上げられた海艸や汐木の匂らしかつた。僕はなぜかこの匂を鼻の外にも皮膚の上に感じた。

僕等は暫く浪打ち際に立ち、浪がしらの仄くのを眺めてゐた。海はどこを見てもまつ暗だつた。僕は彼是十年前、上總の或海岸に滯在してゐたことを思ひ出した。同時に又そこに一しよにゐた

或友だちのことを思ひ出した。彼は彼自身の勉強の外にも「芋粥」と云ふ僕の短篇の校正刷を讀んでくれたりした。……

そのうちにいつかO君は浪打ち際にしやがんだまま、一本のマッチをともしてゐた。

「何をしてゐるの?」

「何つてことはないけれど、……ちよつとかう火をつけただけでも、いろんなものが見えるでせう?」

O君は肩越しに僕等を見上げ、半ばは妻に話しかけたりした。成程一本のマッチの火は海松ふさや心太艸の散らかつた中にさまざまの貝殼を照らし出してゐた。O君はその火が消えてしまふと、又新たにマッチを摺り、そろそろ浪打ち際を歩いて行つた。

「やあ、氣味が惡いな。土左衛門の足かと思つた。」

それは半ば砂に埋まつた游泳靴の片つぽだつた。そこには又海艸の中に大きい海綿もころがつてゐた。しかしその火も消えてしまふと、あたりは前よりも暗くなつてしまつた。

「晝間ほどの獲物はなかつた訣だね。」

「獲物？　ああ、あの札か？　あんなものはざらにありはしない。」
僕等は絶え間ない浪の音を後に廣い砂濱を引き返すことにした。僕等の足は砂の外にも時々海艸を踏んだりした。
「ここいらにもいろんなものがあるんだらうなあ。」
「もう一度マッチをつけて見ようか？」
「好いよ。……おや、鈴の音がするね。」
僕はちよつと耳を澄ました。それはこの頃の僕に多い錯覺かと思つた爲だつた。が、實際鈴の音はどこかにしてゐるのに違ひなかつた。僕はもう一度Ｏ君にも聞えるかどうか尋ねようとした。するとニ三歩遲れてゐた妻は笑ひ聲に僕等へ話しかけた。
「あたしの木履の鈴が鳴るでせう。――」
しかし妻は振り返らずとも、草履をはいてゐるのに違ひなかつた。
「あたしは今夜は子供になつて木履をはいて歩いてゐるんです。」
「奥さんの袂の中で鳴つてゐるんだから、――ああ、Ｙちやんのおもちやだよ。鈴のついたセル

ロイドのおもちやだよ。」

O君もかう言つて笑ひ出した。そのうちに妻は僕等に追ひつき、三人一列になつて歩いて行つた。僕等は妻の常談を機會に前よりも元氣に話し出した。

僕はO君にゆうべの夢を話した。それは或文化住宅の前にトラック自動車の運轉手と話をしてゐる夢だつた。僕はその夢の中にも確かにこの運轉手には會つたことがあると思つてゐた。が、どこで會つたものかは目の醒めた後にもわからなかつた。

「それがふと思ひ出して見ると、三四年前にたつた一度談話筆記に來た婦人記者なんだがね。」

「ぢや女の運轉手だつたの？」

「いや、勿論男なんだよ。顔だけは唯その人になつてゐるんだ。やつぱり一度見たものは頭のどこかに殘つてゐるのかな。」

「さうだらうなあ。顔でも印象の強いやつは、……」

「けれども僕はその人の顔に興味も何もなかつたんだがね。それだけに反つて氣味が惡いんだ。何だか意識の閾の外にもいろんなものがあるやうな氣がして、……」

「つまりマッチへ火をつけて見ると、いろんなものが見えるやうなものだな。」
僕はこんなことを話しながら、偶然僕等の顔だけははつきり見えるのを發見した。しかし星明りさへ見えないことは前と少しも變らなかつた。僕は又何か無氣味になり、何度も空を仰いで見たりした。すると妻も氣づいたと見え、まだ何とも言はないうちに僕の疑問に返事をした。
「砂のせゐですね。さうでせう？」
妻は兩袖を合せるやうにし、廣い砂濱をふり返つてゐた。
「さうらしいね。」
「砂と云ふやつは惡戲ものだな。蜃氣樓もこいつが拵へるんだから。……奥さんはまだ蜃氣樓を見ないの？」
「いいえ、この間一度、――何だか青いものが見えたばかりですけれども。……」
「それだけですよ。けふ僕たちの見たのも。」
僕等は引地川の橋を渡り、東家の土手の外を歩いて行つた。松は皆いつか起り出した風にこうこうと梢を鳴らしてゐた。そこへ脊の低い男が一人、足早にこちらへ來るらしかつた。僕はふと

この夏見た或錯覺を思ひ出した。それはやはりかう云ふ晩にポプラアの枝にかかつた紙がヘルメット帽のやうに見えたのだつた。が、その男は錯覺ではなかつた。のみならず互に近づくのにつれ、ワイシャツの胸なども見えるやうになつた。

「何だらう、あのネクタイ・ピンは？」

僕は小聲にかう言つた後、忽ちピンだと思つたのは卷煙草の火だつたのを發見した。すると妻は袂を銜へ、誰よりも先に忍び笑ひをし出した。が、その男はわき目もふらずにさつさと僕等とすれ違つて行つた。

「ぢやおやすみなさい。」

「おやすみなさいまし。」

僕等は氣輕にO君に別れ、松風の音の中を歩いて行つた。その又松風の音の中には蟲の聲もかすかにまじつてゐた。

「おぢいさんの金婚式はいつになるんでせう？」

「おぢいさん」と云ふのは父のことだつた。

「いつになるかな。……東京からバタはとどいてゐるね？」
「バタはまだ。とどいてゐるのはソウセェヂだけ。」
そのうちに僕等は門の前へ――半開きになつた門の前へ來てゐた。

（昭和二年二月四日）

# 河童

どうか Kappa と發音して下さい。

# 序

これは或精神病院の患者、――第二十三號が誰にでもしやべる話である。彼はもう三十を越してゐるであらう。が、一見した所は如何にも若々しい狂人である。彼の半生の經驗は、――いや、そんなことはどうでも善い。彼は唯ぢつと兩膝をかかへ、時々窓の外へ目をやりながら、（鐵格子をはめた窓の外には枯れ葉さへ見えない樫の木が一本、雪曇りの空に枝を張つてゐた。）院長のS博士や僕を相手に長々とこの話をしやべりつづけた。尤も身ぶりはしなかつた訣ではない。彼はたとへば「驚いた」と言ふ時には急に顏をのけ反らせたりした。……

僕はかう云ふ彼の話を可なり正確に寫したつもりである。若し又誰か僕の筆記に飽き足りない人があるとすれば、東京市外××村のS精神病院を尋ねて見るが善い。年よりも若い第二十三號はまづ丁寧に頭を下げ、蒲團のない椅子を指さすであらう。それから憂鬱な微笑を浮かべ、靜か

にこの話を繰り返すであらう。最後に、――僕はこの話を終つた時の彼の顔色を覺えてゐる。彼は最後に身を起すが早いか、忽ち拳骨をふりまはしながら、誰にでもから怒鳴りつけるであらう。――「出て行け！　この悪黨めが！　貴樣も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、圖々しい、うぬ惚れきつた、殘酷な、蟲の善い動物なんだらう。出て行け！　この悪黨めが！」

一

三年前の夏のことです。僕は人並みにリュック・サックを背負ひ、あの上高地の温泉宿から穂高山へ登らうとしました。穂高山へ登るのには御承知の通り梓川を溯る外はありません。僕は前に穂高山は勿論、槍ケ岳にも登つてゐましたから、朝霧の下りた梓川の谷を案内者もつれずに登つて行きました。朝霧の下りた梓川の谷を――しかしその霧はいつまでたつても晴れる景色は見えません。のみならず反つて深くなるのです。僕は一時間ばかり歩いた後、一度は上高地の温泉宿へ引き返すことにしようかと思ひました。けれども上高地へ引き返すにしても、兎に角霧の晴れるのを待つた上にしなければなりません。と云つて霧は一刻毎にずんずん深くなるばかりなの

です。「ええ、一そ登つてしまへ。」――僕はかう考へましたから、梓川の谷を離れないやうに熊笹の中を分けて行きました。

しかし僕の目を遮るものはやはり深い霧ばかりです。尤も時々霧の中から太い毛生欅や樅の枝が青あをと葉を垂らしたのも見えなかつた訣ではありません。それから又放牧の馬や牛も突然僕の前へ顔を出しました。けれどもそれ等は見えたと思ふと、忽ち又濛々とした霧の中に隠れてしまふのです。そのうちに足もくたびれて來れば、腹もだんだん減りはじめる、――おまけに霧に濡れ透つた登山服や毛布なども並み大抵の重さではありません。僕はとうとう我を折りましたから、岩にせかれてゐる水の音を便りに梓川の谷へ下りることにしました。

僕は水ぎはの岩に腰かけ、とりあへず食事にとりかかりました。コオンド・ビイフの罐を切つたり、枯れ枝を集めて火をつけたり、――そんなことをしてゐるうちに彼是十分はたつたでせう。その間にどこまでも意地の悪い霧はいつかほのぼのと晴れかかりました。僕はパンを嚙じりながら、ちよつと腕時計を覗いて見ました。時刻はもう一時二十分過ぎです。が、それよりも驚いたのは何か氣味の悪い顔が一つ、圓い腕時計の硝子の上へちらりと影を落したことです。僕は驚い

てふり返りました。すると、――僕が河童と云ふものを見たのは實にこの時が始めてだつたのです。僕の後ろにある岩の上には畫にある通りの河童が一匹、片手は白樺の幹を抱へ、片手は目の上にかざしたなり、珍らしさうに僕を見おろしてゐました。

僕は呆つ氣にとられたまま、暫くは身動きもしずにゐました。河童もやはり驚いたと見え、目の上の手さへ動かしません。そのうちに僕は飛び立つが早いか、岩の上の河童へ躍りかかりました。同時に又河童も逃げ出しました。いや、恐らくは逃げ出したのでせう。實はひらりと身を反したと思ふと、忽ちどこかへ消えてしまつたのです。僕は愈驚きながら、熊笹の中を見まはしました。すると河童は逃げ腰をしたなり、二三メエトル隔つた向うに僕を振り返つて見てゐるのです。それは不思議でも何でもありません。しかし僕に意外だつたのは河童の體の色のことです。岩の上に僕を見てゐた河童は一面に灰色を帶びてゐました。けれども今は體中すつかり綠いろに變つてゐるのです。僕は「畜生！」とおほ聲を擧げ、もう一度河童へ飛びかかりました。河童が逃げ出したのは勿論です。それから僕は三十分ばかり、熊笹を突きぬけ、岩を飛び越え、遮二無二河童を追ひつづけました。

河童も亦足の早いことは決して猿などに劣りません。僕は夢中になつて追ひかける間に何度もその姿を見失はうとしました。のみならず足を辷らして轉がつたことも度たびです。が、大きい橡の木が一本、太ぶとと枝を張つた下へ來ると、幸ひにも放牧の牛が一匹、河童の往く先へ立ち塞がりました。しかもそれは角の太い、目を血走らせた牡牛なのです。河童はこの牡牛を見ると、何か悲鳴を擧げながら、一きは高い熊笹の中へもんどりを打つやうに飛び込みました。僕は、――――僕も「しめた」と思ひましたから、いきなりそのあとへ追ひすがりました。するとそこには僕の知らない穴でもあいてゐたのでせう。僕は滑かな河童の背中にやつと指先がさはつたと思ふと、忽ち深い闇の中へまつ逆さまに轉げ落ちました。が、我々人間の心はかう云ふ危機一髪の際にも途方もないことを考へるものです。僕は「あつ」と思ふ拍子にあの上高地の溫泉宿の側に「河童橋」と云ふ橋があるのを思ひ出しました。それから、――それから先のことは覺えてゐません。僕には唯目の前に稻妻に似たものを感じたぎり、いつの間にか正氣を失つてゐました。

## 二

そのうちにやつと氣がついて見ると、僕は仰向けに倒れたまま、大勢の河童にとり圍まれてゐました。のみならず太い嘴の上に鼻目金をかけた河童が一匹、僕の側へ跪きながら、僕の胸へ聽診器を當ててゐました。その河童は僕が目をあいたのを見ると、僕に「靜かに」と云ふ手眞似をし、それから誰か後ろにゐる河童へ Quax, quax と聲をかけました。するとどこからか河童が二匹、擔架を持つて歩いて來ました。僕はこの擔架にのせられたまま、大勢の河童の群がつた中を靜かに何町か進んで行きました。僕の兩側に並んでゐる町は少しも銀座通りと違ひありません。やはり毛生欅の並み木のかげにいろいろの店が日除けを並べ、その又並み木に挾まれた道を自動車が何臺も走つてゐるのです。

やがて僕を載せた擔架は細い横町を曲つたと思ふと、或家の中へ舁ぎこまれました。それは後に知つた所によれば、あの鼻目金をかけた河童の家、――チャックと云ふ醫者の家だつたのです。チャックは僕を小綺麗なベッドの上へ寢かせました。それから何か透明な水藥を一杯飮ませました。僕はベッドの上に横たはつたなり、チャックのするままになつてゐました。實際又僕の體は碌に身動きも出來ないほど、節々が痛んでゐたのですから。

チヤックは一日に二三度は必ず僕を診察に來ました。又三日に一度位は僕の最初に見かけた河童、――バッグと云ふ漁夫も尋ねて來ました。河童は我々人間が河童のことを知つてゐるよりも遙かに人間のことを知つてゐます。それは我々人間が河童を捕獲することよりもずつと河童が人間を捕獲することが多い爲でせう。捕獲と云ふのは當らないまでも、我々人間は僕の前にも度々河童の國へ來てゐるのです。のみならず一生河童の國に住んでゐたものも多かつたのです。なぜと言つて御覽なさい。僕等は唯河童ではない、人間であると云ふ特權の爲に働かずに食つてゐられるのです。現にバッグの話によれば、或若い道路工夫などはやはり偶然この國へ來た後、雌の河童を妻に娶り、死ぬまで住んでゐたと云ふことです。尤もその又雌の河童はこの國第一の美人だつた上、夫の道路工夫を護摩化すのにも妙を極めてゐたと云ふことです。

僕は一週間ばかりたつた後、この國の法律の定める所により、「特別保護住民」としてチヤックの隣に住むことになりました。僕の家は小さい割に如何にも瀟洒と出來上つてゐました。勿論この國の文明は我々人間の國の文明――少くとも日本の文明などと餘り大差はありません。往來に面した客間の隅には小さいピアノが一臺あり、それから又壁には額縁へ入れたエツティングなど

も懸つてゐました。唯肝腎の家をはじめ、テエブルや椅子の寸法も河童の身長に合はせてありますから、子供の部屋に入れられたやうにそれだけは不便に思ひました。

僕はいつも日暮れがたになると、この部屋にチヤツクやバツグを迎へ、河童の言葉を習ひました。いや、彼等ばかりではありません。特別保護住民だつた僕に誰も皆好奇心を持つてゐましたから、毎日血壓を調べて貰ひに、わざわざチヤツクを呼び寄せるゲエルと云ふ硝子會社の社長などもやはりこの部屋へ顔を出したものです。しかし最初の半月ほどの間に一番僕と親しくしたのはやはりあのバツグと云ふ漁夫だつたのです。

或生暖かい日の暮です。僕はこの部屋のテエブルを中に漁夫のバツグと向ひ合つてゐました。するとバツグはどう思つたか、急に默つてしまつた上、大きい目を一層大きくしてぢつと僕を見つめました。僕は勿論妙に思ひましたから「Quax, Bag, quo quel quan ?」と言ひました。これは日本語に飜譯すれば、「おい、バツグ、どうしたんだ」と云ふことです。が、バツグは返事をしません。のみならずいきなり立ち上ると、べろりと舌を出したなり、丁度蛙の跳ねるやうに飛びかかる氣色さへ示しました。僕は愈無氣味になり、そつと椅子から立ち上ると、一足飛びに戸

口へ飛び出さうとしました。丁度そこへ顏を出したのは幸ひにも醫者のチヤツクです。

「こら、バツグ、何をしてゐるのだ？」

チヤツクは鼻目金をかけたまま、かう云ふバツグを睨みつけました。するとバツグは恐れ入つたと見え、何度も頭へ手をやりながら、かう言つてチヤツクにあやまるのです。

「どうもまことに相すみません。實はこの旦那の氣味惡がるのが面白かつたものですから、つい調子に乘つて惡戲をしたのです。どうか旦那も堪忍して下さい。」

## 三

僕はこの先を話す前にちよつと河童と云ふものを説明して置かなければなりません。河童は未だに實在するかどうかも疑問になつてゐる動物です。が、それは僕自身が彼等の間に住んでゐた以上、少しも疑ふ餘地はない筈です。では又どう云ふ動物かと云へば、頭に短い毛のあるのは勿論、手足に水搔きのついてゐることも「水虎考略」などに出てゐるのと著しい違ひはありません。身長もざつと一メエトルを越えるか越えぬ位でせう。體重は醫者のチヤツクによれば、二十ポン

ドから三十ポンドまで、——稀には五十何ポンド位の大河童もゐると言つてゐました。それから頭のまん中には楕圓形の皿があり、その又皿は年齢により、だんだん固さを加へるやうです。現に年をとつたバッグの皿は若いチャックの皿などとは全然手ざはりも違ふのです。しかし一番不思議なのは河童の皮膚の色のことでせう。河童は我々人間のやうに一定の皮膚の色を持つてゐません。何でもその周圍の色と同じ色に變つてしまふ、——たとへば草の中にゐる時には草のやうに綠色に變り、岩の上にゐる時には岩のやうに灰色に變るのです。これは勿論河童に限らず、カメレオンにもあることです。或は河童は皮膚組織の上に何かカメレオンに近い所を持つてゐるのかも知れません。僕はこの事實を發見した時、西國の河童は綠色であり、東北の河童は赤いと云ふ民俗學上の記錄を思ひ出しました。のみならずバッグを追ひかける時、突然どこへ行つたのか、見えなくなつたことを思ひ出しました。しかも河童は皮膚の下に餘程厚い脂肪を持つてゐると見え、この地下の國の溫度は比較的低いのにも關らず、（平均華氏五十度前後です。）着物と云ふものを知らずにゐるのです。勿論どの河童も目金をかけたり、卷煙草の箱を携へたり、金入れを持つたりはしてゐるでせう。しかし河童はカンガルウのやうに腹に袋を持つてゐますから、それ等の

ものをしまふ時にも格別不便はしないのです。唯僕に可笑しかつたのは腰のまはりさへ蔽はないことです。僕は或時この習慣をなぜかとバッグに尋ねて見ました。するとバッグはのけぞつたま、いつまでもげらげら笑つてゐました。おまけに「わたしはお前さんの隠してゐるのが可笑しい」と返事をしました。

## 四

僕はだんだん河童の使ふ日常の言葉を覺えて來ました。從つて河童の風俗や習慣ものみこめるやうになつて來ました。その中でも一番不思議だつたのは河童は我々人間の眞面目に思ふことを可笑しがる、同時に我々人間の可笑しがることを眞面目に思ふ――かう云ふとんちんかんな習慣です。たとへば我々人間は正義とか人道とか云ふことを眞面目に思ふ、しかし河童はそんなことを聞くと、腹をかかへて笑ひ出すのです。つまり彼等の滑稽と云ふ觀念は我々の滑稽と云ふ觀念と全然標準を異にしてゐるのでせう。僕は或時醫者のチャックと産兒制限の話をしてゐました。するとチャックは大口をあいて、鼻目金の落ちるほど笑ひ出しました。僕は勿論腹が立ちました

から、何が可笑しいかと詰問しました。何でもチャックの返答は大體かうだつたやうに覺えてゐます。尤も多少細かい所は間違つてゐるかも知れません。何しろまだその頃は僕も河童の使ふ言葉をすつかり理解してゐなかつたのですから。

「しかし兩親の都合ばかり考へてゐるのは可笑しいですからね。どうも餘り手前勝手ですからね。」

その代りに我々人間から見れば、實際又河童のお産位、可笑しいものはありません。現に僕は暫くたつてから、バツグの細君のお産をする所をバツグの小屋へ見物に行きました。河童もお産をする時には我々人間と同じことです。やはり醫者や産婆などの助けを借りてお産をするのです。けれどもお産をするとなると、父親は電話でもかけるやうに母親の生殖器に口をつけ、「お前はこの世界へ生れて來るかどうか、よく考へた上で返事をしろ。」と大きな聲で尋ねるのです。バツグもやはり膝をつきながら、何度も繰り返してかう言ひました。それからテエブルの上にあつた消毒用の水藥で嗽ひをしました。すると細君の腹の中の子は多少氣兼でもしてゐると見え、かう小聲に返事をしました。

「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺傳は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を惡いと信じてゐますから。」

バツグはこの返事を聞いた時、てれたやうに頭を搔いてゐました。が、そこにゐ合せた產婆は忽ち細君の生殖器へ太い硝子の管を突きこみ、何か液體を注射しました。すると細君はほつとしたやうに太い息を洩らしました。同時に又今まで大きかつた腹は水素瓦斯を拔いた風船のやうにへたへたと縮んでしまひました。

かう云ふ返事をする位ですから、河童の子供は生れるが早いか、勿論歩いたりしやべつたりするのです。何でもチヤツクの話では出產後二十六日目に神の有無に就いて講演をした子供もあつたとか云ふことです。尤もその子供は二月目には死んでしまつたと云ふことですが。

お產の話をした次手ですから、僕がこの國へ來た三月目に偶然或街の角で見かけた、大きいポスタアの話をしませう。その大きいポスタアの下には喇叭を吹いてゐる河童だの劍を持つてゐる河童だのが十二三匹描いてありました。それから又上には河童の使ふ、丁度時計のゼンマイに似た螺旋文字が一面に並べてありました。この螺旋文字を飜譯すると、大體かう云ふ意味になるの

です。これも或は細かい所は間違つてゐるかも知れません。が、兎に角僕としては僕と一しよに歩いてゐた、ラツプと云ふ河童の學生が大聲に讀み上げてくれる言葉を一々ノオトにとつて置いたのです。

遺傳的義勇隊を募る!!!
健全なる男女の河童よ!!!
惡遺傳を撲滅する爲に
不健全なる男女の河童と結婚せよ!!!

僕は勿論その時にもそんなことの行はれないことをラツプに話して聞かせました。するとラツプばかりではない、ポスタアの近所にゐた河童は悉くげらげら笑ひ出しました。

「行はれない? だつてあなたの話ではあなたがたもやはり我々のやうに行つてゐると思ひますがね。あなたは令息が女中に惚れたり、令孃が運轉手に惚れたりするのは何の爲だと思つてゐるのです? あれは皆無意識的に惡遺傳を撲滅してゐるのですよ。第一この間あなたの話したあな

たがた人間の義勇隊よりも、――一本の鐵道を奪ふ爲に互に殺し合ふ義勇隊ですね、――ああ云ふ義勇隊に比べれば、ずつと僕たちの義勇隊は高尚ではないかと思ひますがね。」

ラツプは眞面目にかう言ひながら、しかも太い腹だけは可笑しさうに絶えず浪立たせてゐました。が、僕は笑ふどころか、慌てて或河童を掴まへようとしました。それは僕の油斷を見すまし、その河童が僕の萬年筆を盜んだことに氣がついたからです。しかし皮膚の滑かな河童は容易に我我には掴まりません。その河童もぬらりと辷り抜けるが早いか一散に逃げ出してしまひました。丁度蚊のやうに痩せた體を倒れるかと思ふ位のめらせながら。

## 五

僕はこのラツプと云ふ河童にバツグにも劣らぬ世話になりました。が、その中でも忘れられないのはトツクと云ふ河童に紹介されたことです。トツクは河童仲間の詩人です。詩人が髮を長くしてゐることは我々人間と變りません。僕は時々トツクの家へ退屈凌ぎに遊びに行きました。トツクはいつも狹い部屋に高山植物の鉢植ゑを並べ、詩を書いたり煙草をのんだり、如何にも氣樂

さうに暮らしてゐました。その又部屋の隅には雌の河童が一匹、(トックは自由戀愛家ですから、細君と云ふものは持たないのです。)編み物か何かしてゐました。トックは僕の顏を見ると、いつも微笑してから言ふのです。(尤も河童の微笑するのは餘り好いものではありません。少くとも僕は最初のうちは寧ろ無氣味に感じたものです。)

「やあ、よく來たね。まあ、その椅子にかけ給へ。」

トックはよく河童の生活だの河童の藝術だのの話をしました。トックの信ずる所によれば、當り前の河童の生活位、莫迦げてゐるものはありません。親子夫婦兄弟などと云ふのは悉く互に苦しめ合ふことを唯一の樂しみにして暮らしてゐるのです。殊に家族制度と云ふものは莫迦げてゐる以上にも莫迦げてゐるのです。トックは或時窓の外を指さし、「見給へ。あの莫迦げさ加減を!」と吐き出すやうに言ひました。窓の外の往來にはまだ年の若い河童が一匹、兩親らしい河童を始め、七八匹の雌雄の河童を頸のまはりへぶら下げながら、息も絶え絶えに歩いてゐました。しかし僕は年の若い河童の犧牲的精神に感心しましたから、反つてその健氣さを褒め立てました。

「ふん、君はこの國でも市民になる資格を持つてゐる。……時に君は社會主義者かね?」

僕は勿論qua（これは河童の使ふ言葉では「然り」と云ふ意味を現すのです。）と答へました。

「では百人の凡人の爲に甘んじて一人の天才を犠牲にすることも顧みない筈だ。」

「では君は何主義者だ？　誰かトック君の信條は無政府主義だと言つてゐたが、……」

「僕か？　僕は超人（直譯すれば超河童です。）だ。」

トックは昂然と言ひ放ちました。かう云ふトックは藝術の上にも獨特な考へを持つてゐます。トックの信ずる所によれば、藝術は何ものの支配をも受けない、藝術の爲の藝術である、從つて藝術家たるものは何よりも先に善惡を絶した超人でなければならぬと云ふのです。尤もこれは必しもトック一匹の意見ではありません。トックの仲間の詩人たちは大抵同意見を持つてゐるやうです。現に僕はトックと一しよに度たび超人倶樂部へ遊びに行きました。超人倶樂部に集まつて來るのは詩人、小說家、戲曲家、批評家、畫家、音樂家、彫刻家、藝術上の素人等です。しかしいづれも超人です。彼等は電燈の明るいサロンにいつも快活に話し合つてゐました。のみならず時には得々と彼等の超人ぶりを示し合つてゐました。たとへば或彫刻家などは大きい鬼羊齒の鉢植ゑの間に年の若い河童をつかまへながら、頻に男色を弄んでゐました。又或雌の小說家な

どはテエブルの上に立ち上つたなり、アブサントを六十本飲んで見せました。尤もこれは六十本目にテエブルの下へ轉げ落ちるが早いか、忽ち往生してしまひましたが。

僕は或月の好い晩、詩人のトツクと肘を組んだまま、超人倶樂部から歸つて來ました。トツクはいつになく沈みこんで一ことも口を利かずにゐました。そのうちに僕等は火かげのさした、小さい窓の前を通りかかりました。その又窓の向うには夫婦らしい雌雄の河童が二匹、三匹の子供の河童と一しよに晩餐のテエブルに向つてゐるのです。するとトツクはため息をしながら、突然から僕に話しかけました。

「僕は超人的戀愛家だと思つてゐるがね、ああ云ふ家庭の容子を見ると、やはり羨しさを感じるんだよ。」

「しかしそれはどう考へても、矛盾してゐるとは思はないかね？」

けれどもトツクは月明りの下にぢつと腕を組んだまま、あの小さい窓の向うを、――平和な五匹の河童たちの晩餐のテエブルを見守つてゐました。それから暫くしてから答へました。

「あすこにある玉子燒は何と言つても、戀愛などよりも衞生的だからね。」

## 六

實際又河童の戀愛は我々人間の戀愛とは餘程趣を異にしてゐます。雌の河童はこれぞと云ふ雄の河童を見つけるが早いか、雄の河童を捉へるのに如何なる手段も顧みません、一番正直な雌の河童は遮二無二雄の河童を追ひかけるのです。現に僕は氣違ひのやうに雄の河童を追ひかけてゐる雌の河童を見かけました。いや、そればかりではありません。若い雌の河童は勿論、その河童の兩親や兄弟まで一しよになつて追ひかけるのです。雄の河童こそ見じめです。何しろさんざん逃げまはつた揚句、運好くつかまらずにすんだとしても、二三箇月は床についてしまふのですから。僕は或時僕の家にトックの詩集を讀んでゐました。するとそこへ驅けこんで來たのはあのラップと云ふ學生です。ラップは僕の家へ轉げこむと、床の上へ倒れたなり、息も切れ切れにかう言ふのです。

「大變だ！　とうとう僕は抱きつかれてしまつた！」

僕は咄嗟に詩集を投げ出し、戸口の錠をおろしてしまひました。しかし鍵穴から覗いて見ると、

硫黄の粉末を顔に塗つた、脊の低い雌の河童が一匹、まだ戸口にうろついてゐるのです。ラップはその日から何週間か僕の床の上に寢てゐました。のみならずいつかラップの嘴はすつかり腐つて落ちてしまひました。

尤も又時には雌の河童を一生懸命に追ひかける雄の河童もないではありません。しかしそれもほんたうの所は追ひかけずにはゐられないやうに雌の河童が仕向けるのです。僕はやはり氣違ひのやうに雌の河童を追ひかけてゐる雄の河童も見かけました。雌の河童は逃げて行くうちにも、時々わざと立ち止まつて見たり、四つん這ひになつたりして見せるのです。おまけに丁度好い時分になると、さもがつかりしたやうに樂々とつかませてしまふのです。僕の見かけた雄の河童は雌の河童を抱いたなり、暫くそこに轉がつてゐました。が、やつと起き上つたのを見ると、失望と云ふか、後悔と云ふか、兎に角何とも形容出來ない、氣の毒な顔をしてゐました。しかしそれはまだ好いのです。これも僕の見かけた中に小さい雄の河童が一匹、雌の河童を追ひかけてゐました。雌の河童は例の通り、誘惑的遁走をしてゐるのです。するとそこへ向うの街から大きい雄の河童が一匹、鼻息を鳴らせて歩いて來ました。雌の河童は何かの拍子にふとこの雄の河童を見

ると「大變です！　助けて下さい！　あの河童はわたしを殺さうとするのです！」と金切り聲を出して叫びました。勿論大きい雄の河童は忽ち小さい河童をつかまへ、往來のまん中へねぢ伏せました。小さい河童は水搔きのある手に二三度空を摑んだなり、とうとう死んでしまひました。けれどももうその時には雌の河童はにやにやしながら、大きい河童の頸つ玉へしつかりしがみついてしまつてゐたのです。

僕の知つてゐた雄の河童は誰も皆言ひ合はせたやうに雌の河童に追ひかけられました。勿論妻子を持つてゐるバッグでもやはり追ひかけられたのです。のみならず二三度はつかまつたのです。唯マッグと云ふ哲學者だけは（これはあのトックと云ふ詩人の隣にゐる河童です。）一度もつかまつたことはありません。これは一つにはマッグ位、醜い河童も少ない爲でせう。しかし又一つにはマッグだけは餘り往來へ顏を出さずに家にばかりゐる爲です。僕はこのマッグの家へも時々話しに出かけました。マッグはいつも薄暗い部屋に七色の色硝子のランタアンをともし、脚の高い机に向ひながら、厚い本ばかり讀んでゐるのです。僕は或時かう云ふマッグと河童の戀愛を論じ合ひました。

「なぜ政府は雌の河童が雄の河童を追ひかけるのをもつと嚴重に取り締らないのです？」
「それは一つには官吏の中に雌の河童の少ない爲ですよ。雌の河童は雄の河童よりも一層嫉妬心は強いものですからね、雌の河童の官吏さへ殖えれば、きつと今よりも雄の河童は追ひかけられずに暮せるでせう。しかしその效力も知れたものですね。なぜと言つて御覧なさい。官吏同志でも雌の河童は雄の河童を追ひかけますからね。」
「ぢやあなたのやうに暮してゐるのは一番幸福な訣ですね。」
するとマッグは椅子を離れ、僕の兩手を握つたまま、ため息と一しよにかう言ひました。
「あなたは我々河童ではありませんから、おわかりにならないのも尤もです。しかしわたしもどうかすると、あの恐ろしい雌の河童に追ひかけられたい氣も起るのですよ。」

## 七

僕は又詩人のトックと度たび音樂會へも出かけました。が、未だに忘れられないのは三度目に聽きに行つた音樂會のことです。尤も會場の容子なども餘り日本と變つてゐません。やはりだん

だんせり上つた席に雌雄の河童が三四百匹、いづれもプログラムを手にしながら、一心に耳を澄ませてゐるのです。僕はこの三度目の音樂會の時にはトツクやトツクの雌の河童の外にも哲學者のマツグと一しよになり、一番前の席に坐つてゐました。するとセロの獨奏が終つた後、妙に目の細い河童が一匹、無造作に譜本を抱へたまま、壇の上へ上つて來ました。この河童はプログラムの敎へる通り、名高いクラバツクと云ふ作曲家です。プログラムの敎へる通り、――いや、プログラムを見るまでもありません。クラバツクはトツクが屬してゐる超人倶樂部の會員ですから、僕も亦顏だけは知つてゐるのです。

「Lied――Craback」（この國のプログラムも大抵は獨逸語を並べてゐました。）

クラバツクは盛んな拍手の中にちよつと我々へ一禮した後、靜にピアノの前へ歩み寄りました。それからやはり無造作に自作のリイドを彈きはじめました。クラバツクはトツクの言葉によれば、この國の生んだ音樂家中、前後に比類のない天才ださうです。僕はクラバツクの音樂は勿論、その又餘技の抒情詩にも興味を持つてゐましたから、大きい弓なりのピアノの音に熱心に耳を傾けてゐました。トツクやマツグも恍惚としてゐたことは或は僕よりも勝つてゐたでせう。が、あの

美しい(少くとも河童たちの話によれば)雌の河童だけはしつかりプログラムを握つたなり、時々さも苛ら立たしさうに長い舌をべろべろ出してゐました。これはマツグの話によれば、何でも彼是十年前にクラバツクを摑まへそこなつたものですから、未だにこの音樂家を目の敵にしてゐるのだとか云ふことです。

クラバツクは全身に情熱をこめ、戰ふやうにピアノを彈きつづけました。すると突然會場の中に神鳴りのやうに響渡つたのは「演奏禁止」と云ふ聲です。僕はこの聲にびつくりし、思はず後をふり返りました。聲の主は紛れもない、一番後の席にゐる身の丈拔群の巡査です、巡査は僕がふり向いた時、悠然と腰をおろしたまま、もう一度前よりもおほ聲に「演奏禁止」と怒鳴りました。それから、——

それから先は大混亂です。「警官横暴!」「クラバツク、彈け! 彈け!」「莫迦!」「畜生!」「ひつこめ!」「負けるな!」——かう云ふ聲の湧き上つた中に椅子は倒れる、プログラムは飛ぶ、おまけに誰が投げるのか、サイダアの空罎や石ころや嚙じりかけの胡瓜さへ降つて來るのです。僕は呆つ氣にとられましたから、トツクにその理由を尋ねようとしました。が、トツクも興奮した

と見え、椅子の上に突つ立ちながら、「クラバツク、彈け！　彈け！」と喚きつづけてゐます。のみならずトツクの雌の河童もいつの間に敵意を忘れたのか、「警官横暴」と叫んでゐることは少しもトツクに變りません。僕はやむを得ずマツグに向かひ、「どうしたのです？」と尋ねて見ました。

「これですか？　これはこの國ではよくあることですよ。元來畫だの文藝だのは……」

マツグは何か飛んで來る度にちよつと頸を縮めながら、不相變靜に說明しました。

「元來畫だの文藝だのは誰の目にも何を表はしてゐるかは兎に角ちやんとわかる筈ですから、この國では決して發賣禁止や展覽禁止は行はれません。その代りにあるのが演奏禁止です。何しろ音樂と云ふものだけはどんなに風俗を壞亂する曲でも、耳のない河童にはわかりませんからね。」

「しかしあの巡査は耳があるのですか？」

「さあ、それは疑問ですね。多分今の旋律を聞いてゐるうちに細君と一しよに寢てゐる時の心臟の鼓動でも思ひ出したのでせう。」

かう云ふ間にも大騷ぎは愈盛んになるばかりです。クラバツクはピアノに向つたまま、傲然と我々をふり返つてゐました。が、いくら傲然としてゐても、いろいろのものの飛んで來るのは

よけない訣に行きません。從つてつまり二三秒置きに折角の態度も變つた訣です。しかし兎に角、大體としては大音樂家の威嚴を保ちながら、細い目を凄まじく赫やかせてゐました。僕は――僕も勿論危險を避ける爲にトックを小楯にとつてゐたものです。が、やはり好奇心に驅られ、熱心にマッグと話しつづけました。

「そんな檢閲は亂暴ぢやありませんか？」

「何、どの國の檢閲よりも却つて進歩してゐる位ですよ。たとへば××を御覽なさい。現につい一月ばかり前にも、……」

丁度かう言ひかけた途端です。マッグは生憎腦天に空罎が落ちたものですから、quack（これは唯間投詞です）と一聲叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

## 八

僕は硝子會社の社長のゲエルに不思議にも好意を持つてゐました。ゲエルは資本家中の資本家です。恐らくはこの國の河童の中でも、ゲエルほど大きい腹をした河童は一匹もゐなかつたのに

違ひありません。しかし茘枝に似た細君や胡瓜に似た子供を左右にしながら、安樂椅子に坐つてゐる所は殆ど幸福そのものです。僕は時々裁判官のペツプや醫者のチヤツクにつれられてゲエル家の晩餐へ出かけました。又ゲエルの紹介状を持つてゲエルやゲエルの友人たちが多少の關係を持つてゐるいろいろの工場も見て歩きました。そのいろいろの工場の中でも殊に僕に面白かつたのは書籍製造會社の工場です。僕は年の若い河童の技師とこの工場の中へはひり、水力電氣を動力にした、大きい機械を眺めた時、今更のやうに河童の國の機械工業の進歩に驚嘆しました。何でもそこでは一年間に七百萬部の本を製造するさうです。が、僕を驚かしたのは本の部數ではありません。それだけの本を製造するのに少しも手數のかからないことです。何しろこの國では本を造るのに唯機械の漏斗形の口へ紙とインクと灰色をした粉末とを入れるだけなのですから。それ等の原料は機械の中へはひると、殆ど五分とたたないうちに菊版、四六版、菊半裁版などの無數の本になつて出て來るのです。僕は瀑のやうに流れ落ちるいろいろの本を眺めながら、反り身になつた河童の技師にその灰色の粉末は何と云ふものかと尋ねて見ました。すると技師は黑光りに光つた機械の前に佇んだまま、つまらなさうにかう返事をしました。

「これですか？　これは驢馬の腦髓ですよ。ええ、一度乾燥させてから、ざつと粉末にしただけのものです。時價は一噸二三錢ですがね。」

勿論かう云ふ工業上の奇蹟は書籍製造會社にばかり起つてゐる訣ではありません。繪畫製造會社にも、音樂製造會社にも、同じやうに起つてゐるのです。實際又ゲエルの話によれば、この國では平均一箇月に七八百種の機械が新案され、何でもずんずん人手を待たずに大量生産が行はれるさうです。從つて又職工の解雇されるのも四五萬匹を下らないさうです。その癖まだこの國では毎朝新聞を讀んでゐても、一度も罷業と云ふ字に出會ひません。僕はこれを妙に思ひましたから、或時又ペツプやチヤツクとゲエル家の晩餐に招かれた機會にこのことをなぜかと尋ねて見ました。

「それはみんな食つてしまふのですよ。」

食後の葉卷を啣へたゲエルは如何にも無造作にかう言ひました。しかし「食つてしまふ」と云ふのは何のことだかわかりません。すると鼻目金をかけたチヤツクは僕の不審を察したと見え、横あひから說明を加へてくれました。

「その職工をみんな殺してしまつて、肉を食料に使ふのです。ここにある新聞を御覧なさい。今月は丁度六萬四千七百六十九匹の職工が解雇されましたから、それだけ肉の値段も下つた訣ですよ。」

「職工は默つて殺されるのですか？」

「それは騒いでも仕かたはありません。職工屠殺法があるのですから。」

これは山桃の鉢植ゑを後に苦い顔をしてゐたペップの言葉です。僕は勿論不快を感じました。しかし主人公のゲエルは勿論、ペップやチャックもそんなことは當然と思つてゐるらしいのです。現にチャックは笑ひながら、嘲るやうに僕に話しかけました。

「つまり餓死したり自殺したりする手數を國家的に省略してやるのですね。ちよつと有毒瓦斯を嗅がせるだけですから、大した苦痛はありませんよ。」

「けれどもその肉を食ふと云ふのは、……」

「常談を言つてはいけません。あのマッグに聞かせたら、さぞ大笑ひに笑ふでせう。あなたの國でも第四階級の娘たちは賣笑婦になつてゐるではありませんか？　職工の肉を食ふことなどに憤

慨したりするのは感傷主義ですよ。」

かう云ふ問答を聞いてゐたゲエルは手近いテエブルの上にあつたサンドウイッチの皿を勸めながら、恬然と僕にかう言ひました。

「どうです? 一つとりませんか? これも職工の肉ですがね。」

僕は勿論辟易しました。いや、それぱかりではありません。ペップやチャックの笑ひ聲を後にゲエル家の客間を飛び出しました。それは丁度家々の空に星明りも見えない荒れ模樣の夜です。僕はその闇の中を僕の住居へ歸りながら、のべつ幕なしに嘔吐を吐きました。夜目にも白じらと流れる嘔吐を。

## 九

しかし硝子會社の社長のゲエルは人懷こい河童だつたのに違ひません。僕は度たびゲエルと一しよにゲエルの屬してゐる倶樂部へ行き、愉快に一晩を暮らしました。これは一つにはその倶樂部はトックの屬してゐる超人倶樂部よりも遙かに居心の善かつた爲です。のみならず又ゲエルの

話は哲學者のマッグの話のやうに深みを持つてゐなかつたにせよ、僕には全然新らしい世界を、——廣い世界を覗かせました。ゲエルは、いつも純金の匙に珈琲の茶碗をかきまはしながら、快活にいろいろの話をしたものです。

何でも或霧の深い晩、僕は冬薔薇を盛つた花瓶を中にゲエルの話を聞いてゐました。それは確か部屋全體は勿論、椅子やテエブルも白い上に細い金の縁をとつたセセツション風の部屋だつたやうに覺えてゐます。ゲエルはふだんよりも得意さうに顔中に微笑を漲らせたまま、丁度その頃天下を取つてゐたQuorax黨内閣のことなどを話しました。クオラツクスと云ふ言葉は唯意味のない間投詞ですから、「おや」とでも譯す外はありません。が、兎に角何よりも先に「河童全體の利益」と云ふことを標榜してゐた政黨だつたのです。

「クオラツクス黨を支配してゐるものは名高い政治家のロツペです。『正直は最良の外交である』とはビスマルクの言つた言葉でせう。しかしロツペは正直を内治の上にも及ぼしてゐるのです。……」

「けれどもロツペの演説は……」

「まあ、わたしの言ふことをお聞きなさい。あの演說は勿論悉く譃です。が、譃と云ふことは誰でも知つてゐますから、畢竟正直と變らないでせう、それを一概に譃と云ふのはあなたがただけの偏見ですよ。我々河童はあなたがたのやうに、……しかしそれはどうでもよろしい。わたしの話したいのはロツペのことです。ロツペはクオラツクス黨を支配してゐる、その又ロツペを支配してゐるものはPou-Fou新聞の（この『プウ・フウ』と云ふ言葉もやはり意味のない間投詞です。若し强ひて譯すれば、『ああ』とでも云ふ外はありません。）社長のクイクイです。が、クイクイも彼自身の主人と云ふ訣には行きません。クイクイを支配してゐるものはあなたの前にゐるゲエルです。」

「けれども――これは失禮かも知れませんけれども、プウ・フウ新聞は勞働者の味かたをする新聞でせう。その社長のクイクイもあなたの支配を受けてゐると云ふのは、……」

「プウ・フウ新聞の記者たちは勿論勞働者の味かたです。しかし記者たちを支配するものはクイクイの外はありますまい。しかもクイクイはこのゲエルの後援を受けずにはゐられないのです。」

ゲエルは不相變微笑しながら、純金の匙をおもちやにしてゐます。僕はかう云ふゲエルを見る

と、ゲエル自身を憎むよりも、プウ・フウ新聞の記者たちに同情の起るのを感じました。すると
ゲエルは僕の無言に忽ちこの同情を感じたと見え、大きい腹を膨ませてから言ふのです。
「何、プウ・フウ新聞の記者たちも全部勞働者の味かたではありませんよ。少くとも我々河童と
云ふものは誰の味かたをするよりも先に我々自身の味かたをしますからね。……しかし更に厄介
なことにはこのゲエル自身さへやはり他人の支配を受けてゐるのです。あなたはそれを誰だと思
ひますか？　それはわたしの妻ですよ。美しいゲエル夫人ですよ。」
　ゲエルはおほ聲に笑ひました。
「それは寧ろ仕合せでせう。」
「兎に角わたしは滿足してゐます。しかしこれもあなたの前だけに、――河童でないあなたの前
だけに手放しで吹聽出來るのです。」
「するとつまりクオラツクス內閣はゲエル夫人が支配してゐるのですね。」
「さあさうも言はれますかね。……しかし七年前の戰爭などは確かに或雌の河童の爲に始まつた
ものに違ひありません。」

「戰爭？　この國にも戰爭はあつたのですか？」

「ありましたとも。將來もいつあるかわかりません。何しろ隣國のある限りは、……」

僕は實際この時始めて河童の國も國家的に孤立してゐないことを知りました。ゲエルの說明する所によれば、河童はいつも獺を假設敵にしてゐると云ふことです。しかも獺は河童に負けない軍備を具へてゐると云ふことです。僕はこの獺を相手に河童の戰爭した話に少からず興味を感じました。（何しろ河童の强敵に獺のゐるなどと云ふことは「水虎考略」の著者は勿論、「山島民譚集」の著者柳田國男さんさへ知らずにゐたらしい新事實ですから。）

「あの戰爭の起る前には勿論兩國とも油斷せずにぢつと相手を窺つてゐました。と云ふのはどちらも同じやうに相手を恐怖してゐたからです。そこへこの國にゐた獺が一匹、或河童の夫婦を訪問しました。その又雌の河童と云ふのは亭主を殺すつもりでゐたのです。何しろ亭主は道樂者でしたからね。おまけに生命保險のついてゐたことも多少の誘惑になつたかも知れません。」

「あなたはその夫婦を御存じですか？」

「ええ、――いや、雄の河童だけは知つてゐます。わたしの妻などはこの河童を惡人のやうに言

つてゐますがね。しかしわたしに言はせれば、惡人よりも寧ろ雌の河童に摑まることを恐れてゐる被害妄想の多い狂人です。……そこでその雌の河童は亭主のココアの茶碗の中へ靑化加里を入れて置いたのです。それを又どう間違へたか、客の獺に飮ませてしまつたのです。獺は勿論死んでしまひました。それから……」

「それから戰爭になつたのですか？」

「ええ、生憎その獺は勳章を持つてゐたものですからね。」

「戰爭はどちらの勝になつたのですか？」

「勿論この國の勝になつたのです。三十六萬九千五百匹の河童たちはその爲に健氣にも戰死しました。しかし敵國に比べれば、その位の損害は何ともありません。この國にある毛皮と云ふ毛皮は大抵獺の毛皮です。わたしもあの戰爭の時には硝子を製造する外にも石炭殼を戰地へ送りました。」

「石炭殼を何にするのですか？」

「勿論食糧にするのです。我々は、河童は腹さへ減れば、何でも食ふのにきまつてゐますから

ね。」

「それは――どうか怒らずに下さい。それは戰地にゐる河童たちには……我々の國では醜聞ですがね。」

「この國でも醜聞には違ひありません。しかしわたし自身から言つてゐれば、誰も醜聞にはしないものです。哲學者のマッグも言つてゐるでせう。『汝の惡は汝自ら言へ。惡はおのづから消滅すべし。』……しかもわたしは利益の外にも愛國心に燃え立つてゐたのですからね。」

丁度そこへはひつて來たのはこの倶樂部の給仕です。給仕はゲエルにお時宜をした後、朗讀でもするやうにかう言ひました。

「お宅のお隣に火事がございます。」

「火――火事！」

ゲエルは驚いて立ち上りました。僕も立ち上つたのは勿論です。が、給仕は落ち着き拂つて次の言葉をつけ加へました。

「しかしもう消し止めました。」

ゲエルは給仕を見送りながら、泣き笑ひに近い表情をしました。僕はかう云ふ顏を見ると、いつかこの硝子會社の社長を憎んでゐたことに氣づきました。が、ゲエルはもう今では大資本家でも何でもない唯の河童になつて立つてゐるのです。僕は花瓶の中の冬薔薇の花を拔き、ゲエルの手へ渡しました。

「しかし火事は消えたと云つても、奥さんはさぞお驚きでせう。さあ、これを持つてお歸りなさい。」

「難有う。」

ゲエルは僕の手を握りました。それから急ににやりと笑ひ、小聲にかう僕に話しかけました。

「隣はわたしの家作ですからね。火災保險の金だけはとれるのですよ。」

僕はこの時のゲエルの微笑を——輕蔑することも出來なければ、憎惡することも出來ないゲエルの微笑を未だにありありと覺えてゐます。

「どうしたね？　けふは又妙にふさいでゐるぢやないか？」

その火事のあつた翌日です。僕は巻煙草を啣へながら、僕の客間の椅子に腰をおろした學生のラツプにかう言ひました。實際又ラツプは右の脚の上へ左の脚をのせたまま、腐つた嘴も見えないほど、ぼんやり床の上ばかり見てゐたのです。

「ラツプ君、どうしたねと言へば。」

「いや、何、つまらないことなのですよ。――」

ラツプはやつと頭を擧げ、悲しい鼻聲を出しました。

「僕はけふ窓の外を見ながら、『おや蟲取り菫が咲いた』と何氣なしに呟いたのです。すると僕の妹は急に顔色を變へたと思ふと、『どうせわたしは蟲取り菫よ』と當り散らすぢやありませんか？　おまけに又僕のおふくろも大の妹贔屓ですから、やはり僕に食つてかかるのです。」

「蟲取り菫が咲いたと云ふことはどうして妹さんには不快なのだね？」

「さあ、多分雄の河童を摑まへると云ふ意味にでもとつたのでせう。そこへおふくろと仲惡い叔母も喧嘩の仲間入りをしたのですから、愈大騷動になつてしまひました。しかも年中醉つ拂つ

てゐるおやぢはこの喧嘩を聞きつけると、誰彼の差別なしに毆り出したのです。それだけでも始末のつかない所へ僕の弟はその間におふくろの財布を盜むが早いか、キネマか何かを見に行つてしまひました。僕は……ほんたうに僕はもう、……」

ラツプは兩手に顏を埋め、何も言はずに泣いてしまひました。僕の同情したのは勿論です。同時に又家族制度に對する詩人のトツクの輕蔑を思ひ出したのも勿論です。僕はラツプの肩を叩き、一生懸命に慰めました。

「そんなことはどこでもあり勝ちだよ。まあ勇氣を出し給へ。」

「しかし……しかし嘴でも腐つてゐなければ、……」

「それはあきらめる外はないさ。さあ、トツク君の家へでも行かう。」

「トツクさんは僕を輕蔑してゐます。僕はトツクさんのやうに大膽に家族を捨てることが出來ませんから」

「ぢやクラバツク君の家へ行かう。」

僕はあの音樂會以來、クラバツクにも友だちになつてゐましたから、兎に角この大音樂家の家

ヘラップをつれ出すことにしました。クラバックはトックに比べれば、遙かに贅澤に暮らしてゐます。と云ふのは資本家のゲエルのやうに暮らしてゐると云ふ意味ではありません。唯いろいろの骨董を、――タナグラの人形やペルシアの陶器を部屋一ぱいに並べた中にトルコ風の長椅子を据ゑ、クラバック自身の肖像畫の下にいつも子供たちと遊んでゐるのです。が、けふはどうしたのか兩腕を胸へ組んだまま、苦い顏をして坐つてゐました。のみならずその又足もとには紙屑が一面に散らばつてゐました。ラップも詩人トックと一しよに度たびクラバックには會つてゐる筈です。しかしこの容子に恐れたと見え、けふは丁寧にお時宜をしたなり、默つて部屋の隅に腰をおろしました。

「どうしたね？　クラバック君。」

僕は殆ど挨拶の代りにかう大音樂家へ問かけました。

「どうするものか？　批評家の阿呆め！　僕の抒情詩はトックの抒情詩と比べものにならないと言やがるんだ。」

「しかし君は音樂家だし、……」

「それだけならば我慢も出來る。僕はロックに比べれば、音樂家の名に價しないと言やがるぢやないか？」

ロックと云ふのはクラバックと度たび比べられる音樂家です。が、生憎超人倶樂部の會員になつてゐない關係上、僕は一度も話したことはありません。尤も嘴の反り上つた、一癖あるらしい顏だけは度たび寫眞でも見かけてゐました。

「ロックも天才には違ひない。しかしロックの音樂は君の音樂に溢れてゐる近代的情熱を持つてゐない。」

「君はほんたうにさう思ふか？」

「さう思ふとも。」

するとクラバックは立ち上るが早いか、タナグラの人形をひつ摑み、いきなり床の上に叩きつけました。ラップは餘程驚いたと見え、何か聲を擧げて逃げようとしました。が、クラバックはラップや僕にはちよつと「驚くな」と云ふ手眞似をした上、今度は冷やかにかう言ふのです。

「それは君も亦俗人のやうに耳を持つてゐないからだ。僕はロックを恐れてゐる。……」

「君が？　謙遜家を氣どるのはやめ給へ。」

「誰が謙遜家を氣どるものか？　第一君たちに氣どつて見せる位ならば、批評家たちの前に氣どつて見せてゐる。僕は――クラバックは天才だ。その點ではロックを恐れてゐない。」

「では何を恐れてゐるのだ？」

「何か正體の知れないものを、――言はばロックを支配してゐる星を。」

「どうも僕には腑に落ちないがね。」

「ではかう言へばわかるだらう。ロックは僕の影響を受けない。が、僕はいつの間にかロックの影響を受けてしまふのだ。」

「それは君の感受性の……。」

「まあ、聞き給へ。感受性などの問題ではない。ロックはいつも安んじてあいつだけに出來る仕事をしてゐる。しかし僕は苛ら苛らするのだ。それはロックの目から見れば、或は一歩の差かも知れない。けれども僕には十哩も違ふのだ。」

「しかし先生の英雄曲は……」

クラバツクは細い目を一層細め、忌々しさうにラツプを睨みつけました。

「默り給へ。君などに何がわかる？　僕はロツクを知つてゐるのだ。ロツクに平身低頭する犬どもよりもロツクを知つてゐるのだ。」

「まあ少し靜かにし給へ。」

「若し靜かにしてゐられるならば、……僕はいつもかう思つてゐる。――僕等の知らない何ものかは僕を、――クラバツクを嘲る爲にロツクを僕の前に立たせたのだ。哲學者のマツグはかう云ふことを何も彼も承知してゐる。いつもあの色硝子のランタアンの下に古ぼけた本ばかり讀んでゐる癖に。」

「どうして？」

「この近頃マツグの書いた『阿呆の言葉』と云ふ本を見給へ――」

クラバツクは僕に一冊の本を渡す――と云ふよりも投げつけました。それから又腕を組んだまま、突けんどんにかう言ひ放ちました。

「ぢやけふは失敬しよう。」

僕は悄氣返つたラップと一しよにもう一度往來へ出ることにしました。人通りの多い往來は不相變らず毛生欅の並み木のかげにいろいろの店を並べてゐます。僕等は何と云ふこともなしに默つて歩いて行きました。するとそこへ通りかかつたのは髪の長い詩人のトックです。トックは僕等の顏を見ると、腹の袋から手巾を出し、何度も額を拭ひました。

「やあ、暫らく會はなかつたね。僕はけふは久しぶりにクラバックを尋ねようと思ふのだが、……
……」

僕はこの藝術家たちを喧嘩させては惡いと思ひ、クラバックの如何にも不機嫌だつたことを婉曲にトックに話しました。

「さうか。ぢややめにしよう。何しろクラバックは神經衰弱だからね。……僕もこの二三週間は眠られないのに弱つてゐるのだ。」

「どうだね、僕等と一しよに散歩をしては？」

「いや、けふはやめにしよう。おや！」

トックはかう叫ぶが早いか、しつかり僕の腕を掴みました。しかもいつか體中に冷や汗を流し

てゐるのです。

「どうしたのだ？」

「どうしたのです？」

「何あの自動車の窓の中から綠いろの猿が一匹首を出したやうに見えたのだよ。」

僕は多少心配になり、兎に角あの醫者のチャックに診察して貰ふやうに勸めました。しかしトックは何と言つても、承知する氣色さへ見せません。のみならず何か疑はしさうに僕等の顏を見比べながら、こんなことさへ言ひ出すのです。

「僕は決して無政府主義者ではないよ。それだけはきつと忘れずにゐてくれ給へ。――ではさやうなら。チャックなどは眞平御免だ。」

僕等はぼんやり佇んだまま、トックの後ろ姿を見送つてゐました。僕等は――いや、「僕等」ではありません。學生のラップはいつの間にか往來のまん中に脚をひろげ、しつきりない自動車や人通りを股目金に覗いてゐるのです。僕はこの河童も發狂したかと思ひ、驚いてラップを引き起しました。

「常談ぢやない。何をしてゐる？」

しかしラップは目をこすりながら、意外にも落ち着いて返事をしました。

「いえ、餘り憂鬱ですから、逆まに世の中を眺めて見たのです。けれどもやはり同じことですね。」

## 十一

これは哲學者のマッグの書いた「阿呆の言葉」の中の何章かです。——

×

阿呆はいつも彼以外のものを阿呆であると信じてゐる。

×

我々の自然を愛するのは自然は我々を憎んだり嫉妬したりしない爲もないことはない。

×

最も賢い生活は一時代の習慣を輕蔑しながら、しかもその又習慣を少しも破らないやうに暮ら

すことである。

×

我々の最も誇りたいものは我々の持つてゐないものだけである。

×

何びとも偶像を破壞することに異存を持つてゐるものはない。同時に又何びとも偶像になることに異存を持つてゐるものはない。しかし偶像の臺座の上に安んじて坐つてゐられるものは最も神々に惠まれたもの、——阿呆か、惡人か、英雄かである。(クラバツクはこの章の上へ爪の痕をつけてゐました。)

×

我々の生活に必要な思想は三千年前に盡きたかも知れない。我々は唯古い薪に新らしい炎を加へるだけであらう。

×

我々の特色は我々自身の意識を超越するのを常としてゐる。

×

幸福は苦痛を伴ひ、平和は倦怠を伴ふとすれば、――？

×

自己を辯護することは他人を辯護することよりも困難である。疑ふものは辯護士を見よ。

×

矜誇、愛慾、疑惑――あらゆる罪は三千年來、この三者から發してゐる。同時に又恐らくはあらゆる徳も。

×

物質的欲望を減ずることは必しも平和を齎さない。我々は平和を得る爲には精神的欲望も減じなければならぬ。（クラバックはこの章の上にも爪の痕を殘してゐました。）

×

我々は人間よりも不幸である。人間は河童ほど進化してゐない。（僕はこの章を讀んだ時思はず笑つてしまひました。）

×

成すことは成し得ることであり、成し得ることは成すことである。畢竟我々の生活はかう云ふ循環論法を脱することは出來ない。――即ち不合理に終始してゐる。

×

ボオドレエルは白痴になつた後、彼の人生觀をたつた一語に、――女陰の一語に表白した。しかし彼自身を語るものは必しもかう言つたことではない。寧ろ彼の天才に、――彼の生活を維持するに足る詩的天才に信賴した爲に胃袋の一語を忘れたことである。(この章にもやはりクラバツクの爪の痕は殘つてゐました。)

×

若し理性に終始するとすれば、我々は當然我々自身の存在を否定しなければならぬ。理性を神にしたヴォルテエルの幸福に一生を了つたのは卽ち人間の河童よりも進化してゐないことを示すものである。

## 十二

或割り合に寒い午後です。僕は「阿呆の言葉」も讀み飽きましたから、哲學者のマッグを尋ねに出かけました。すると或寂しい町の角に蚊のやうに瘦せた河童が一匹、ぼんやり壁によりかかつてゐました。しかもそれは紛れもない、いつか僕の萬年筆を盜んで行つた河童なのです。僕はしめたと思ひましたから、丁度そこへ通りかかつた、逞しい巡査を呼びとめました。

「ちよつとあの河童を取り調べて下さい。あの河童は丁度一月ばかり前にわたしの萬年筆を盜んだのですから。」

巡査は右手の棒をあげ、（この國の巡査は劍の代りに水松の棒を持つてゐるのです。）「おい、君」とその河童へ聲をかけました。僕は或はその河童は逃げ出しはしないかと思つてゐました。が、存外落ち着き拂つて巡査の前へ歩み寄りました。のみならず腕を組んだまま、如何にも傲然と僕の顏や巡査の顏をじろじろ見てゐるのです。しかし巡査は怒りもせず、腹の袋から手帳を出して早速尋問にとりかかりました。

「お前の名は？」
「グルック。」
「職業は？」
「つい二三日前までは郵便配達夫をしてゐました。」
「よろしい。そこでこの人の申し立てによれば、君はこの人の萬年筆を盗んで行つたと云ふことだがね。」
「ええ、一月ばかり前に盗みました。」
「何の爲に？」
「子供の玩具にしようと思つたのです。」
「その子供は？」
巡査は始めて相手の河童へ鋭い目を注ぎました。
「一週間前に死んでしまひました。」
「死亡證明書を持つてゐるかね？」

痩せた河童は腹の袋から一枚の紙をとり出しました。巡査はその紙へ目を通すと、急ににやにや笑ひながら、相手の肩を叩きました。

「よろしい。どうも御苦勞だつたね。」

僕は呆氣にとられたまま、巡査の顔を眺めてゐました。しかもそのうちに痩せた河童は何かぶつぶつ呟きながら、僕等を後ろにして行つてしまふのです。僕はやつと氣をとり直し、かう巡査に尋ねて見ました。

「どうしてあの河童を摑まへないのです？」

「あの河童は無罪ですよ。」

「しかし僕の萬年筆を盜んだのは……」

「子供の玩具にする爲だつたのでせう。けれどもその子供は死んでゐるのです。若し何か御不審だつたら、刑法千二百八十五條をお調べなさい。」

巡査はかう言ひすてたなり、さつさとどこかへ行つてしまひました。僕は仕かたがありませんから、「刑法千二百八十五條」を口の中に繰り返し、マッグの家へ急いで行きました。哲學者のマ

ツグは客好きです。現にけふも薄暗い部屋には裁判官のペツプや醫者のチヤツクや硝子會社の社長のゲエルなどが集り、七色の色硝子のランタアンの下に煙草の煙を立ち昇らせてゐました。そこに裁判官のペツプが來てゐたのは何よりも僕には好都合です。僕は椅子にかけるが早いか、刑法第千二百八十五條を検べる代りに早速ペツプへ問ひかけました。

「ペツプ君、甚だ失禮ですが、この國では罪人を罰しないのですか？」

ペツプは金口の煙草の煙をまづ悠々と吹き上げてから、如何にもつまらなさうに返事をしました。

「罰しますとも。死刑さへ行はれる位ですからね。」

「しかし僕は一月ばかり前に、……」

僕は委細を話した後、例の刑法千二百八十五條のことを尋ねて見ました。

「ふむ、それはかう云ふのです。――『如何なる犯罪を行ひたりと雖も、該犯罪を行はしめたる事情の消失したる後は該犯罪者を處罰することを得ず』つまりあなたの場合で言へば、その河童は嘗ては親だつたのですが、今はもう親ではありませんから、犯罪も自然と消滅するのです。」

「それはどうも不合理ですね。」

「常談を言つてはいけません。親だつた河童も親である河童も同一に見るのこそ不合理です。さうさう、日本の法律では同一に見ることになつてゐるのですね。それはどうも我々には滑稽です。ふふふふふふふふふふ。」

ペツプは巻煙草を抛り出しながら、氣のない薄笑ひを洩らしてゐました。そこへ口を出したのは法律には縁の遠いチヤツクです。チヤツクはちよつと鼻目金を直し、かう僕に質問しました。

「日本にも死刑はありますか？」

「ありますとも。日本では絞罪です。」

僕は冷然と構へこんだペツプに多少反感を感じてゐましたから、この機會に皮肉を浴せてやりました。

「この國の死刑は日本よりも文明的に出來てゐるでせうね？」

「それは勿論文明的です。」

ペツプはやはり落ち着いてゐました。

「この國では絞罪などは用ひません。稀には電氣を用ひることもあります。しかし大抵は電氣も用ひません。唯その犯罪の名を言つて聞かせるだけです。」
「それだけで河童は死ぬのですか？」
「死にますとも。我々河童の神經作用はあなたがたのよりも微妙ですからね。」
「それは死刑ばかりではありません。殺人にもその手を使ふのがあります――」
社長のゲエルは色硝子の光に顔中紫に染りながら、人懐つこい笑顔をして見せました。
「わたしはこの間も或社會主義者に『貴樣は盗人だ』と言はれた爲に心臓痲痺を起しかかつたものです。」
「それは案外多いやうですね。わたしの知つてゐた或辯護士などはやはりその爲に死んでしまつたのですからね。」
僕はかう口を入れた河童、――哲學者のマッグをふりかへりました。マッグはやはりいつものやうに皮肉な微笑を浮かべたまま、誰の顔も見ずにしやべつてゐるのです。
「その河童は誰かに蛙だと言はれ、――勿論あなたも御承知でせう、この國で蛙だと言はれるの

は人非人と云ふ意味になること位は。――己は蛙かな？　蛙ではないかな？　と毎日考へてゐるうちにとうとう死んでしまつたものです。」

「それはつまり自殺ですね。」

「尤もその河童を蛙だと言つたやつは殺すつもりで言つたのですがね。あなたがたの目から見れば、やはりそれも自殺と云ふ……」

丁度マツグがかう云つた時です。突然その部屋の壁の向うに、――確かに詩人のトツクの家に鋭いピストルの音が一發、空氣を反ね返へすやうに響き渡りました。

## 十三

僕等はトツクの家へ駈けつけました。トツクは右の手にピストルを握り、頭の皿から血を出したまま、高山植物の鉢植ゑの中に仰向けになつて倒れてゐました。その又側には雌の河童が一匹、トツクの胸に顔を埋め、大聲を擧げて泣いてゐました。僕は雌の河童を抱き起しながら、（一體僕はぬらぬらする河童の皮膚に手を觸れることを餘り好んではゐないのですが。）「どうしたいで

す？」と尋ねました。

「どうしたのだか、わかりません。唯何か書いてゐたと思ふと、いきなりピストルで頭を打つたのです。ああ、わたしはどうしませう？ qur-r-r-r-r, qur-r-r-r-r」（これは河童の泣き聲です。）

「何しろトツク君は我儘だつたからね。」

硝子會社の社長のゲエルは悲しさうに頭を振りながら、裁判官のペツプにかう言ひました。しかしペツプは何も言はずに金口の巻煙草に火をつけてゐました。すると今まで跪いて、トツクの創口などを調べてゐたチヤツクは如何にも醫者らしい態度をしたまま、僕等五人に宣言しました。（實は一人と四匹とです。）

「もう駄目です。トツク君は元來胃病でしたから、それだけでも憂鬱になり易かつたのです。」

「何か書いてゐたと云ふことですが。」

哲學者のマツグは辯解するやうにかう獨り語を洩らしながら、机の上の紙をとり上げました。僕等は皆頭をのばし、（尤も僕だけは例外です。）幅の廣いマツグの肩越しに一枚の紙を覗きこみました。

「いざ、立ちて行かん。娑婆界を隔つる谷へ。
　岩むらはこごしく、やま水は清く、
　藥草の花はにほへる谷へ。」

マッグは僕等をふり返りながら、微苦笑と一しよにかう言ひました。

「これはゲエテの『ミニヨンの歌』の剽竊ですよ。するとトック君の自殺したのは詩人としても疲れてゐたのですね。」

そこへ偶然自動車を乘りつけたのはあの音樂家のクラバックです。クラバックはかう云ふ光景を見ると、暫く戸口に佇んでゐました。が、僕等の前へ歩み寄ると、怒鳴りつけるやうにマッグに話しかけました。

「それはトックの遺言狀ですか？」

「いや、最後に書いてゐた詩です。」

「詩？」

やはり少しも騷がないマッグは髮を逆立てたクラバックにトックの詩稿を渡しました。クラバ

ツクはあたりには目もやらずに熱心にその詩稿を讀み出しました。しかもマッグの言葉には殆ど返事さへしないのです。

「あなたはトック君の死をどう思ひますか？」

「いざ、立ちて、……僕も亦いつ死ぬかわかりません。……娑婆界を隔つる谷へ。……」

「しかしあなたはトック君とはやはり親友の一人だつたのでせう？」

「親友？　トックはいつも孤獨だつたのです。……娑婆界を隔つる谷へ、……唯トックは不幸にも、……岩むらはこごしく……」

「不幸にも？」

「やま水は清く、……あなたがたは幸福です。……岩むらはこごしく。……」

僕は未だに泣き聲を絶たない雌の河童に同情しましたから、そつと肩を抱へるやうにし、部屋の隅の長椅子へつれて行きました。そこには二歳か三歳かの河童が一匹、何も知らずに笑つてゐるのです。僕は雌の河童の代りに子供の河童をあやしてやりました。するといつか僕の目にも涙のたまるのを感じました。僕が河童の國に住んでゐるうちに涙と云ふものをこぼしたのは前にも

後にもこの時だけです。

「しかしから云ふ我儘の河童と一しよになつた家族は氣の毒ですね。」

「何しろあとのことも考へないのですから。」

裁判官のペップは不相變、新しい卷煙草に火をつけながら、資本家のゲエルに返事をしてゐました。すると僕等を驚かせたのは音樂家のクラバックのおほ聲です。クラバックは詩稿を握つたまま、誰にともなしに呼びかけました。

「しめた！　すばらしい葬送曲が出來るぞ。」

　クラバックは細い目を赫やかせたまま、ちよつとマッグの手を握ると、いきなり戸口へ飛んで行きました。勿論もうこの時には隣近所の河童が大勢、トックの家の戸口に集まり、珍らしさうに家の中を覗いてゐるのです。しかしクラバックはこの河童たちを遮二無二左右へ押しのけるが早いか、ひらりと自動車へ飛び乗りました。同時に又自動車は爆音を立てて忽ちどこかへ行つてしまひました。

「こら、こら、さう覗いてはいかん。」

裁判官のペツプは巡査の代りに大勢の河童を押し出した後、トツクの家の戸をしめてしまひました。部屋の中はそのせゐか急にひつそりなつたものです。僕等はかう云ふ靜かさの中に――高山植物の花の香に交つたトツクの血の匂の中に後始末のことなどを相談しました。しかしあの哲學者のマツグだけはトツクの死骸を眺めたまま、ぼんやり何か考へてゐます。僕はマツグの肩を叩き、「何を考へてゐるのです？」と尋ねました。

「河童の生活と云ふものをね。」

「河童の生活がどうなるのです？」

「我々河童は何と云つても、河童の生活を完うする爲には、……」

マツグは多少羞しさうにかう小聲でつけ加へました。

「兎に角我々河童以外の何ものかの力を信ずることですね。」

## 十四

僕に宗教と云ふものを思ひ出させたのはかう云ふマツグの言葉です。僕は勿論物質主義者です

から、眞面目に宗教を考へたことは一度もなかつたのに違ひありません。が、この時はトックの死に或感動を受けてゐた爲に一體河童の宗教は何であるかと考へ出したのです。僕は早速學生のラップにこの問題を尋ねて見ました。

「それは基督教、佛教、モハメット教、拜火教なども行はれてゐます。まづ一番勢力のあるものは何と言つても近代教でせう。生活教とも言ひますがね。」（「生活教」と云ふ譯語は當つてゐないかも知れません。この原語は Quemoocha です。cha は英吉利語の ism と云ふ意味に當るでせう。quemoo の原形 quemal の譯は單に「生きる」と云ふよりも「飯を食つたり、酒を飲んだり、交合を行つたり」する意味です。）

「ぢやこの國にも教會だの寺院だのはある訣なのだね？」

「常談を言つてはいけません。近代教の大寺院などはこの國第一の大建築ですよ。どうです、ちよつと見物に行つては？」

或生溫い曇天の午後、ラップは得々と僕と一しよにこの大寺院へ出かけました。成程それはニコライ堂の十倍もある大建築です。のみならずあらゆる建築様式を一つに組み上げた大建築で

す。僕はこの大寺院の前に立ち、高い塔や圓屋根を眺めた時、何か無氣味にさへ感じました。實際それ等は天に向つて伸びた無數の觸手のやうに見えたものです。僕等は玄關の前に佇んだまま、（その又玄關に比べて見ても、どの位僕等は小さかつたのでせう！）暫らくこの建築よりも寧ろ途方もない怪物に近い稀代の大寺院を見上げてゐました。

大寺院の内部も亦廣大です。そのコリント風の圓柱の立つた中には參詣人が何人も歩いてゐました。しかしそれ等は僕等のやうに非常に小さく見えたものです。そのうちに僕等は腰の曲つた一匹の河童に出合ひました。するとラツプはこの河童にちよつと頭を下げた上、丁寧にかう話しかけました。

「長老、御達者なのは何よりもです。」

相手の河童もお時宜をした後、やはり丁寧に返事をしました。

「これはラツプさんですか？ あなたも不相變、――（と言ひかけながら、ちよつと言葉をつかなかつたのはラツプの嘴の腐つてゐるのにやつと氣がついた爲だつたでせう。）――ああ、兎に角御丈夫らしいやうですね。が、けふはどうして又……」

「けふはこの方のお伴をして來たのです。この方は多分御承知の通り、――」

それからラップは滔々と僕のことを話しました。どうも又それはこの大寺院へラップが滅多に來ないことの辯解にもなつてゐたらしいのです。

「就いてはどうかこの方の御案內を願ひたいと思ふのですが。」

長老は大樣に微笑しながら、まづ僕に挨拶をし、靜かに正面の祭壇を指さしました。

「御案內と申しても、何も御役に立つことは出來ません。我々信徒の禮拜するのは正面の祭壇にある『生命の樹』です。『生命の樹』には御覽の通り、金と綠との果がなつてゐます。あの金の果を『善の果』と云ひ、あの綠の果を『惡の果』と云ひます。……」

僕はかう云ふ說明のうちにもう退屈を感じ出しました。それは折角の長老の言葉も古い比喩のやうに聞えたからです。僕は勿論熱心に聞いてゐる容子を裝つてゐました。が、時々は大寺院の內部へそつと目をやるのを忘れずにゐました。

コリント風の柱、ゴシツク風の穹窿、アラビアじみた市松模樣の床、セセツシヨン紛ひの祈禱机、――かう云ふものの作つてゐる調和は妙に野蠻な美を具へてゐました。しかし僕の目を惹い

たのは何よりも兩側の龕の中にある大理石の半身像です。僕は何かそれ等の像を見知つてゐるやうに思ひました。それも亦不思議ではありません。あの腰の曲つた河童は「生命の樹」の說明を了ると、今度は僕やラップと一しよに右側の龕の前へ歩み寄り、その龕の中の半身像にかう云ふ說明を加へ出しました。

「これは我々の聖徒の一人、――あらゆるものに反逆した聖徒ストリントベリイです。この聖徒はさんざん苦しんだ揚句、スウエデンボルグの哲學の爲に救はれたやうに言はれてゐます。が、實は救はれなかつたのです。この聖徒は唯我々のやうに生活教を信じてゐました。――と云ふよりも信じる外はなかつたのでせう。この聖徒の我々に殘した『傳說』と云ふ本を讀んで御覽なさい。この聖徒も自殺未遂者だつたことは聖徒自身告白してゐます。」

僕はちよつと憂鬱になり、次の龕へ目をやりました。次の龕にある半身像は口髭の太い獨逸人です。

「これはツアラトストラの詩人ニイチエです。その聖徒は聖徒自身の造つた超人に救ひを求めました。が、やはり救はれずに氣違ひになつてしまつたのです。若し氣違ひにならなかつたとすれ

ば、或は聖徒の數へはひることも出來なかつたかも知れません。……」

長老はちよつと默つた後、第三の龕の前へ案內しました。

「三番目にあるのはトルストイです。この聖徒は誰よりも苦行をしました。それは元來貴族だつた爲に好奇心の多い公衆に苦しみを見せることを嫌つたからです。この聖徒は事實上信ぜられない基督を信じようと努力しました。いや、信じてゐるやうにさへ公言したこともあつたのです。しかしとうとう晚年には悲壯な譃つきだつたことに堪へられないやうになりました。この聖徒も時々書齋の梁に恐怖を感じたのは有名です。けれども聖徒の數にはひつてゐる位ですから、勿論自殺したのではありません。」

第四の龕の中の半身像は我々日本人の一人です。僕はこの日本人の顏を見た時、さすがに懷しさを感じました。

「これは國木田獨步です。轢死する人足の心もちをはつきり知つてゐた詩人です。しかしそれ以上の說明はあなたには不必要に違ひありません。では五番目の龕の中を御覽下さい。――」

「これはワグネルではありませんか？」

「さうです。國王の友だちだつた革命家です。聖徒ワグネルは晩年には食前に祈禱さへしてゐました。しかし勿論基督教よりも生活教の信徒の一人だつたのです。ワグネルの殘した手紙によれば、娑婆苦は何度この聖徒を死の前に驅りやつたかわかりません。」

僕等はもうその時には第六の龕の前に立つてゐました。

「これは聖徒ストリントベリイの友だちです。子供の大勢ある細君の代りに十三四のタイティの女を娶つた商賣人上りの佛蘭西の畫家です。この聖徒は太い血管の中に水夫の血を流してゐました。が、脣を御覽なさい。砒素か何かの痕が殘つてゐます。第七の龕の中にあるのは……もうあなたはお疲れでせう。ではどうかこちらへお出で下さい。」

僕は實際疲れてゐましたから、ラップと一しよに長老に從ひ、香の匂のする廊下傳ひに或部屋へはひりました。その又小さい部屋の隅には黑いヴェヌスの像の下に山葡萄が一ふさ獻じてあるのです。僕は何の装飾もない僧房を想像してゐただけにちよつと意外に感じました。すると長老は僕の容子にかう云ふ氣もちを感じたと見え、僕等に椅子を薦める前に半ば氣の毒さうに説明しました。

「どうか我々の宗教の生活教であることを忘れずに下さい。我々の神、――『生命の樹』の教へは『旺盛に生きよ』と云ふのですから。……ラップさん、あなたはこのかたに我々の聖書を御覧に入れましたか？」

「いえ、……實はわたし自身も殆ど讀んだことはないのです。」

ラップは頭の皿を掻きながら、正直にかう返事をしました。が、長老は不相變靜かに微笑して話しつづけました。

「それではおわかりなりますまい。我々の神は一日のうちにこの世界を造りました。（『生命の樹』は樹と云ふものの、成し能はないことはないのです。）のみならず雌の河童を造りました。すると雌の河童は退屈の餘り、雄の河童を求めました。我々の神はこの歎きを憐み、雌の河童の腦髓を取り、雄の河童を造りました。我々の神はこの二匹の河童に『食へよ、交合せよ、旺盛に生きよ』と云ふ祝福を與へました。……」

僕は長老の言葉のうちに詩人のトックを思ひ出しました。詩人のトックは不幸にも僕のやうに無神論者です。僕は河童ではありませんから、生活教を知らなかつたのも無理はありません。け

れども河童の國に生まれたトックは勿論「生命の樹」を知つてゐた筈です。僕はこの教へに從はなかつたトックの最後を憐みましたから、長老の言葉を遮るやうにトックのことを話し出しました。

「ああ、あの氣の毒な詩人ですね。」

長老は僕の話を聞き、深い息を洩らしました。

「我々の運命を定めるものは信仰と境遇と偶然とだけです。(尤もあなたがたはその外に遺傳をお數へなさるでせう。)トックさんは不幸にも信仰をお持ちにならなかつたのです。」

「トックはあなたを羨んでゐたでせう。いや、僕も羨んでゐます。ラップ君などは年も若いし、……」

「僕も嘴さへちやんとしてゐれば或は樂天的だつたかも知れません。」

長老は僕等にかう言はれると、もう一度深い息を洩らしました。しかもその目は涙ぐんだまま、ぢつと黑いヴエヌスを見つめてゐるのです。

「わたしも實は、——これはわたしの秘密ですから、どうか誰にも仰有らずに下さい。——わたしも實は我々の神を信ずる訣に行かないのです。しかしいつかわたしの祈禱は、——」

丁度長老のかう言つた時です。突然部屋の戸があいたと思ふと、大きい雌の河童が一匹、いきなり長老へ飛びかかりました。僕等がこの雌の河童を抱きとめようとしたのは勿論です。が、雌の河童は咄嗟の間に床の上へ長老を投げ倒しました。

「この爺め！　けふも又わたしの財布から一杯やる金を盗んで行つたな！」

十分ばかりたつた後、僕等は實際逃げ出さないばかりに長老夫婦をあとに殘し、大寺院の玄關を下りて行きました。

「あれではあの長老も『生命の樹』を信じない筈ですね。」

暫く默つて歩いた後、ラツプは僕にかう言ひました。が、僕は返事をするよりも思はず大寺院を振り返りました。大寺院はどんより曇つた空にやはり高い塔や圓屋根を無數の觸手のやうに伸ばしてゐます。何か沙漠の空に見える蜃氣樓の無氣味さを漂はせたまま。……

十五

それから彼是一週間の後、僕はふと醫者のチヤツクに珍らしい話を聞きました。と云ふのはあ

のトックの家に幽靈の出ると云ふ話なのです。その頃にはもう雌の河童はどこか外へ行つてしまひ、僕等の友だちの詩人の家も寫眞師のステュディオに變つてゐました。何でもチャックの話によれば、このステュディオでは寫眞をとると、トックの姿もいつの間にか必ず朦朧と客の後ろに映つてゐるとか云ふことです。尤もチャックは物質主義者ですから、死後の生命などを信じてゐません。現にその話をした時にも惡意のある微笑を浮べながら、「やはり靈魂と云ふものも物質的存在と見えますね」などと註釋めいたことをつけ加へてゐました。僕も幽靈を信じないことはチャックと餘り變りません。けれども詩人のトックには親しみを感じてゐましたから、早速本屋の店へ駈けつけ、トックの幽靈に關する記事やトックの幽靈の寫眞の出てゐる新聞や雜誌を買つて來ました。成程それ等の寫眞を見ると、どこかトックらしい河童が一匹、老若男女の河童の後にぼんやりと姿を現してゐました。しかし僕を驚かせたのはトックの幽靈の寫眞よりもトックの幽靈に關する記事、――殊にトックの幽靈に關する心靈學協會の報告です。僕は可也逐語的にその報告を譯して置きましたから、下に大略を揭げることにしませう。但し括弧の中にあるのは僕自身の加へた註釋なのです。――

詩人トツク君の幽靈に關する報告。（心靈學協會雜誌第八千二百七十四號所載）

わが心靈學協會は先般自殺したる詩人トツク君の舊居にして現在は××寫眞師のステュデイオなる□□街第二百五十一號に臨時調査會を開催せり。列席せる會員は下の如し。（氏名を略す。）

我等十七名の會員は心靈協會々長ペツク氏と共に九月十七日午前十時三十分、我等の最も信頼するメデイアム、ホツプ夫人を同伴し、該ステュデイオの一室に參集せり。ホツプ夫人は該ステュデイオに入るや、既に心靈的空氣を感じ、全身に痙攣を催しつつ、嘔吐すること數囘に及べり。夫人の語る所によれば、こは詩人トツク君の強烈なる煙草を愛したる結果、その心靈的空氣も亦ニコテインを含有する爲なりと云ふ。

我等會員はホツプ夫人と共に圓卓を繞りて默坐したり。夫人は三分二十五秒の後、極めて急劇なる夢遊狀態に陷り、且詩人トツク君の心靈の憑依する所となれり。我等會員は年齡順に從ひ、夫人に憑依せるトツク君の心靈と左の如き問答を開始したり。

問　君は何故に幽靈に出づるか？

答　死後の名聲を知らんが爲なり。

問　君――或は心靈諸君は死後も尚名聲を欲するや？
答　少くとも予は欲せざる能はず。然れども予の邂逅したる日本の一詩人の如きは死後の名聲を輕蔑し居たり。
問　君はその詩人の姓名を知れりや？
答　予は不幸にも忘れたり。唯彼の好んで作れる十七字詩の一章を記憶するのみ。
問　その詩は如何？
答　「古池や蛙飛びこむ水の音」。
問　君はその詩を佳作なりと做すや？
答　予は必しも惡作なりと做さず。唯「蛙」を「河童」とせん乎、更に光彩陸離たるべし。
問　然らばその理由は如何？
答　我等河童は如何なる藝術にも河童を求むること痛切なればなり。
會長ペック氏はこの時に當り、我等十七名の會員にこは心靈學協會の臨時調査會にして合評會にあらざるを注意したり。

問　心靈諸君の生活は如何？
答　諸君の生活と異ること無し。
問　然らば君は君自身の自殺せしを後悔するや？
答　必しも後悔せず。予は心靈的生活に倦まば、更にピストルを取りて自活すべし。
問　自活するは容易なりや否や？
トツク君の心靈はこの問に答ふるに更に問を以てしたり。こはトツク君を知れるものには頗る自然なる應酬なるべし。
答　自殺するは容易なりや否や？
問　諸君の生命は永遠なりや？
答　我等の生命に關しては諸說紛々として信ずべからず。幸ひに我等の間にも基督教、佛教、モハメツト教、拜火教等の諸宗あることを忘るる勿れ。
問　君自身の信ずる所は？
答　予は常に懷疑主義者なり。

問　然れども君は少くとも心靈の存在を疑はざるべし？
答　諸君の如く確信する能はず。
問　君の交友の多少は如何？
答　予の交友は古今東西に亙り、三百人を下らざるべし。その著名なるものを擧ぐれば、クライスト、マインレンデル、ワイニンゲル……
問　君の交友は自殺者のみなりや？
答　必しも然りとせず。自殺を辯護せるモンテエニュの如きは予が畏友の一人なり。唯予は自殺せざりし厭世主義者、――ショオペンハウエルの輩とは交際せず。
問　ショオペンハウエルは健在なりや？
答　彼は目下心靈的厭世主義を樹立し、自活する可否を論じつつあり。然れどもコレラも黴菌病なりしを知り、頗る安堵せるものの如し。
我等會員は相次いでナポレオン、孔子、ドストエフスキイ、ダアウイン、クレオパトラ、釋迦、デモステネス、ダンテ、千の利休等の心靈の消息を質問したり。然れどもトツク君は不幸にも詳

細に答ふることを做さず、反つてトツク君自身に關する種々のゴシツプを質問したり。

問　予の死後の名聲は如何？

答　或批評家は「群小詩人の一人」と言へり。

問　彼は予が詩集を贈らざりしに怨恨を含める一人なるべし。予の全集は出版せられしや？

答　君の全集は出版せられたれども、賣行甚だ振はざるが如し。

問　予の全集は三百年の後、——即ち著作權の失はれたる後、萬人の購ふ所となるべし。予の同棲せる女友だちは如何？

答　彼女は書肆ラツク君の夫人となれり。

問　彼女は未だ不幸にもラツクの義眼なるを知らざるなるべし。予が子は如何？

答　國立孤兒院にありと聞けり。

トツク君は暫く沈默せる後、新たに質問を開始したり。

問　予が家は如何？

答　某寫眞師のステュデイオとなれり。

問　予の机は如何になれるか？

答　如何なれるかを知るものなし。

問　予は予の机の抽斗に予の祕藏せる一束の手紙を――然れどもこは幸ひにも多忙なる諸君の關する所にあらず。今やわが心靈界は徐に薄暮に沈まんとす。予は諸君と訣別すべし。さらば。諸君。さらば。わが善良なる諸君。

ホップ夫人は最後の言葉と共に再び急劇に覺醒したり。我等十七名の會員はこの問答の眞なりしことを上天の神に誓つて保證せんとす。（尙又我等の信賴するホップ夫人に對する報酬は嘗て夫人が女優たりし時の日當に從ひて支辨したり。）

## 十六

僕はかう云ふ記事を讀んだ後、だんだんこの國にゐることも憂鬱になつて來ましたから、どうか我々人間の國へ歸ることにしたいと思ひました。しかしいくら探して歩いても、僕の落ちた穴は見つかりません。そのうちにあのバッグと云ふ漁夫の河童の話には、何でもこの國の街はづれ

に或年をとつた河童が一匹、本を讀んだり、笛を吹いたり、靜かに暮らしてゐると云ふことです。僕はこの河童に尋ねて見れば、或はこの國を逃げ出す途もわかりはしないかと思ひましたから、早速街はづれへ出かけて行きました。しかしそこへ行つて見ると、如何にも小さい家の中に年をとつた河童どころか、頭の皿も固まらない、やつと十二三の河童が一匹、悠々と笛を吹いてゐました。僕は勿論間違つた家へはひつたではないかと思ひました。が、念の爲に名をきいて見ると、やはりバッグの教へてくれた年よりの河童に違ひないのです。

「しかしあなたは子供のやうですが……」

「お前さんはまだ知らないのかい？　わたしはどう云ふ運命か、母親の腹を出た時には白髮頭をしてゐたのだよ。それからだんだん年が若くなり、今ではこんな子供になつたのだよ。けれども年を勘定すれば生まれる前を六十としても、彼是百十五六にはなるかも知れない。」

僕は部屋の中を見まはしました。そこには僕の氣のせゐか、質素な椅子やテエブルの間に何か清らかな幸福が漂つてゐるやうに見えるのです。

「あなたはどうもほかの河童よりも仕合せに暮らしてゐるやうですね？」

「さあ、それはさうかも知れない。わたしは若い時は年よりだつたし、年をとつた時は若いものになつてゐる。從つて年よりのやうに慾にも渇かず、若いもののやうに色にも溺れない。兎に角わたしの生涯はたとひ仕合せではないにもしろ、安らかだつたのには違ひあるまい。」

「成程それでは安らかでせう。」

「いや、まだそれだけでは安らかにはならない。わたしは體も丈夫だつたし、一生食ふに困らぬ位の財産を持つてゐたのだよ。しかし一番仕合せだつたのはやはり生まれて來た時に年よりだつたことだと思つてゐる。」

僕は暫くこの河童と自殺したトツクの話だの毎日醫者に見て貰つてゐるゲエルの話だのをしてゐました。が、なぜか年をとつた河童は餘り僕の話などに興味のないやうな顏をしてゐました。

「ではあなたはほかの河童のやうに格別生きてゐることに執着を持つてはゐないのですね？」

年をとつた河童は僕の顏を見ながら、靜かにかう返事をしました。

「わたしもほかの河童のやうにこの國へ生まれて來るかどうか、一應父親に尋ねられてから母親の胎内を離れたのだよ。」

「しかし僕はふとした拍子に、この國へ轉げ落ちてしまつたのです。どうか僕にこの國から出て行かれる路を敎へて下さい。」
「出て行かれる路は一つしかない。」
「と云ふのは？」
「それはお前さんのここへ來た路だ。」
僕はこの答を聞いた時になぜか身の毛がよだちました。
「その路が生憎見つからないのです。」
年をとつた河童は水々しい目にぢつと僕の顏を見つめました。それからやつと體を起し、部屋の隅へ歩み寄ると、天井からそこに下つてゐた一本の綱を引きました。すると今まで氣のつかなかつた天窓が一つ開きました。その又圓い天窓の外には松や檜が枝を張つた向うに大空が靑あをと晴れ渡つてゐます。いや、大きい鏃に似た槍ケ岳の峯も聳えてゐます。僕は飛行機を見た子供のやうに實際飛び上つて喜びました。
「さあ、あすこから出て行くが好い。」

年をとつた河童はかう言ひながら、さつきの綱を指さしました。今まで僕の綱と思つてゐたのは實は綱梯子に出來てゐたのです。

「ではあすこから出さして貰ひます。」

「唯わたしは前以て言ふがね。出て行つて後悔しないやうに。」

「大丈夫です。僕は後悔などはしません。」

僕はかう返事をするが早いか、もう綱梯子を攀ぢ登つてゐました。年をとつた河童の頭の皿を遙か下に眺めながら。

## 十七

僕は河童の國から歸つて來た後、暫くは我々人間の皮膚の匂に閉口しました。我々人間に比べれば、河童は實に清潔なものです。のみならず我々人間の頭は河童ばかり見てゐた僕には如何にも氣味の悪いものに見えました。これは或はあなたにはおわかりにならないかも知れません。しかし目や口は兎も角も、この鼻と云ふものは妙に恐しい氣を起させるものです。僕は勿論出來る

だけ、誰にも會はない算段をしました。が、我々人間にもいつか次第に慣れ出したと見え、半年ばかりたつうちにどこへでも出るやうになりました。唯それでも困つたことは何か話をしてゐるうちにうつかり河童の國の言葉を口に出してしまふことです。

「君はあしたは家にゐるかね？」

「Qua」

「何だつて？」

「いや、ゐると云ふことだよ。」

大體から云ふ調子だつたものです。

しかし河童の國から歸つて來た後、丁度一年ほどたつた時、僕は或事業の失敗した爲に……

（S博士は彼がかう言つた時、「その話はおよしなさい」と注意をした。何でも博士の話によれば、彼はこの話をする度に看護人の手にも了へない位、亂暴になるとか云ふことである。）

ではその話はやめませう。しかし或事業の失敗した爲に僕は又河童の國へ歸りたいと思ひ出しました。さうです。「行きたい」のではありません。「歸りたい」と思ひ出したのです。河童の國は

當時の僕には故郷のやうに感ぜられましたから。

僕はそつと家を脱け出し、中央線の汽車へ乘らうとしました。そこを生憎巡査につかまり、とうとう病院へ入れられたのです。僕はこの病院へはひつた當座も河童の國のことを想ひつづけました。醫者のチヤツクはどうしてゐるでせう? 哲學者のマツグも不相變七色の色硝子のランタアンの下に何か考へてゐるかも知れません。殊に僕の親友だつた、嘴の腐つた學生のラツプは、――或けふのやうに曇つた午後です。こんな追憶に耽つてゐた僕は思はず聲を擧げようとしました。それはいつの間にはひつて來たか、バツグと云ふ漁夫の河童が一匹、僕の前に佇みながら、何度も頭を下げてゐたからです。僕は心をとり直した後、――泣いたか笑つたかも覺えてゐません。が、兎に角久しぶりに河童の國の言葉を使ふことに感動してゐたことは確かです。

「おい、バツグ、どうして來た?」

「へい、お見舞ひに上つたのです。何でも御病氣だとか云ふことですから。」

「どうしてそんなことを知つてゐる?」

「ラデイオのニウスで知つたのです。」

バッグは得意さうに笑つてゐるのです。

「それにしてもよく來られたね?」

「何、造作はありません。東京の川や掘割りは河童には往來も同樣ですから。」

僕は河童も蛙のやうに水陸兩棲の動物だつたことに今更のやうに氣がつきました。

「しかしこの邊には川はないがね。」

「いえ、こちらへ上つたのは水道の鐵管を拔けて來たのです。それからちよつと消火栓をあけて……」

「消火栓をあけて?」

「旦那はお忘れなすつたのですか? 河童にも機械屋のゐると云ふことを。」

それから僕は二三日每にいろいろの河童の訪問を受けました。僕の病はS博士によれば早發性痴呆症と云ふことです。しかしあの醫者のチヤツクは(これは甚だあなたにも失禮に當るのに違ひありません。)僕は早發性痴呆症患者ではない、早發性痴呆症患者はS博士を始め、あなたがた自身だと言つてゐました。醫者のチヤツクも來る位ですから、學生のラツプや哲學者のマツグの

見舞ひに來たことは勿論です。が、あの漁夫のバッグの外に晝間は誰も尋ねて來ません。殊に三匹一しよに來るのは夜、――それも月のある夜です。僕はゆうべも月明りの中に硝子會社の社長のゲエルや哲學者のマッグと話をしました。のみならず音樂家のクラバックにもヴァイオリンを一曲彈いて貰ひました。そら、向うの机の上に黑百合の花束がのつてゐるでせう？　あれもゆうべクラバックが土産に持つて來てくれたものです。……

（僕は後を振り返つて見た。が、勿論机の上には花束も何ものつてゐなかつた。）

それからこの本も哲學者のマッグがわざわざ持つて來てくれたものです。ちよつと最初の詩を讀んで御覽なさい。いや、あなたは河童の國の言葉を御存知になる筈はありません。では代りに讀んで見ませう。これは近頃出版になつたトックの全集の一册です。――

（彼は古い電話帳をひろげ、かう云ふ詩をおほ聲に讀みはじめた。）

――椰子の花や竹の中に
佛陀はとうに眠つてゐる。

路ばたに枯れた無花果と一しよに
基督ももう死んだらしい。

しかし我々は休まなければならぬ
たとひ芝居の背景の前にも。

（その又背景の裏を見れば、繼ぎはぎだらけのカンヴアスばかりだ？）——

けれども僕はこの詩人のやうに厭世的ではありません。河童たちの時々來てくれる限りは、——

——ああ、このことは忘れてゐました。あなたは僕の友だちだつた裁判官のペツプを覺えてゐるでせう。あの河童は職を失つた後、ほんたうに發狂してしまひました。何でも今は河童の國の精神病院にゐると云ふことです。僕はS博士さへ承知してくれれば、見舞ひに行つてやりたいのです

がね……。

（昭和二年二月十一日）

# 誘惑

——或シナリオ——

1

天主教徒の古暦の一枚、その上に見えるのはかう云ふ文字である。——

御出生來千六百三十四年。せばすちあん記し奉る。

二月。小。

二十六日。さんたまりやの御つげの日。

二十七日。どみいご。

三月。大。

五日。どみいご、ふらんしすこ。

十二日。…………

2

日本の南部の或山みち。大きい樟の木の枝を張つた向うに洞穴の口が一つ見える。暫くたつてから木樵りが二人、この山みちを下つて來る。木樵りの一人は洞穴を指さし、もう一人に何か話しかける。それから二人とも十字を切り、はるかに洞穴を禮拜する。

3

この大きい樟の木の梢。尻つ尾の長い猿が一匹、或枝の上に坐つたまま、ぢつと遠い海を見守つてゐる。海の上には帆前船が一艘。帆前船はこちらへ進んで來るらしい。

4

海を走つてゐる帆前船が一艘。

5

この帆前船の内部。紅毛人の水夫が二人、檣の下に賽を轉がしてゐる。そのうちに勝負の爭ひを生じ、一人の水夫は飛び立つが早いか、もう一人の水夫の横腹へずぶりとナイフを突き立ててしまふ。大勢の水夫は二人のまはりへ四方八方から集まつて來る。

6

仰向けになつた水夫の死に顏。突然その鼻の穴から尻つ尾の長い猿が一匹、顋の上に這ひ出して來る。が、あたりを見まはしたと思ふと、忽ち又鼻の穴の中へはひつてしまふ。

7

上から斜めに見おろした海面。急にどこか空中から水夫の死骸が一つ落ちて來る。死骸は水けぶりの立つた中に忽ち姿を失つてしまふ。あとには唯浪の上に猿が一匹もがいてゐるばかり。

8

海の向うに見える半島。

9

前の山みちにある樟の木の梢。猿はやはり熱心に海の上の帆前船を眺めてゐる。が、やがて兩手を擧げ、顏中に喜びを漲らせる。すると猿がもう一匹、いつか同じ枝の上にゆらりと腰をおろしてゐる。二匹の猿は手眞似をしながら、暫く何か話しつづける。それから後に來た猿は長い尻つ尾を枝にまきつけ、ぶらりと宙に下つたまま、樟の木の枝や葉に遮られた向うを目の上に手をやつて眺めはじめる。

10

前の洞穴の外部。芭蕉や竹の茂つた外には何もそこに動いてゐない。そのうちにだんだん日の暮になる。すると洞穴の中から蝙蝠が一匹ひらひらと空へ舞ひ上つて行く。

11

この洞穴の内部。「さん・せばすちあん」がたつた一人岩の壁の上に懸けた十字架の前に祈つてゐる。「さん・せばすちあん」は黒い法服を着た、四十に近い日本人。火をともした一本の蠟燭は机だの水瓶だのを照らしてゐる。

12

蠟燭の火かげの落ちた岩の壁。そこには勿論はつきりと「さん・せばすちあん」の横顔も映つてゐる。その横顔の頸すぢを尻つ尾の長い猿の影が一つ靜かに頭の上へ登りはじめる。續いて又同じ猿の影が一つ。

13

「さん・せばすちあん」の組み合せた兩手。彼の兩手はいつの間にか紅毛人のパイプを握つてゐ

る。パイプは始めは火をつけてゐない。が、見る見る空中へ煙草の煙を擧げはじめる。……

14

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」は急に立ち上り、パイプを岩の上へ投げつけてしまふ。しかしパイプは不相變煙草の煙を立ち昇らせてゐる。彼は驚きを示したまま、二度とパイプに近よらない。

15

岩の上に落ちたパイプ。パイプは徐ろに酒を入れた「ふらすこ」の瓶に變つてしまふ。のみならずその又「ふらすこ」の瓶も一きれの「花かすていら」に變つてしまふ。最後にその「花かすていら」さへ今はもう食物ではない。そこには年の若い傾城が一人、艶しい膝を崩したまま、斜めに誰かの顏を見上げてゐる。……

16

17

「さん・せばすちあん」の上半身。彼は急に十字を切る。それからほつとした表情を浮かべる。

尻つ尾の長い猿が二匹、一本の蠟燭の下に蹲つてゐる。どちらも顔をしかめながら。

18

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」はもう一度十字架の前に祈つてゐる。そこへ大きい梟が一羽さつとどこかから舞ひ下つて來ると、一煽ぎに蠟燭の火を消してしまふ。が、一すぢの月の光はかすかに十字架を照らしてゐる。

19

岩の壁の上に懸けた十字架。十字架は又十字の格子を嵌めた長方形の窓に變りはじめる。長方形の窓の外は茅葺きの家が一つある風景。家のまはりには誰もゐない。そのうちに家はおのづから窓の前へ近よりはじめる。同時に又家の内部も見えはじめる。そこには「さん・せばすちあん」に似た婆さんが一人片手に糸車をまはしながら、片手に實のなつた櫻の枝を持ち、二三歳の子供を遊ばせてゐる。子供も亦彼の子に違ひない。が、家の内部は勿論、彼等もやはり霧のやうに長方形の窓を突きぬけてしまふ。今度見えるのは家の後ろの畠。畠には四十に近い女が一人せつせと穗麥を刈り干してゐる。……

20

長方形の窓を覗いてゐる「さん・せばすちあん」の上半身。但し斜めに後ろを見せてゐる。明るいのは窓の外ばかり。窓の外はもう畠ではない。大勢の老若男女の頭が一面にそこに動いてゐる。その又大勢の頭の上には十字架に懸つた男女が三人高だかと両腕を擴げてゐる。まん中の十字架に懸つた男は全然彼と變りはない。彼は窓の前を離れようとし、思はずよろよろと倒れかかる。

——

21

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」は十字架の下の岩の上へ倒れてゐる。が、やつと顔を起し、月明りの落ちた十字架を見上げる。十字架はいつか初ひ初ひしい降誕の釋迦に變つてしまふ。「さん・せばすちあん」は驚いたやうにかう云ふ釋迦を見守つた後、急に又立ち上つて十字を切る。月の光の中をかすめる、大きい一羽の梟の影。降誕の釋迦はもう一度もとの十字架に變つてしまふ。………

22

前の山みち。月の光の落ちた山みちは黒いテエブルに變つてしまふ。テエブルの上にはトランプが一組。そこへ男の手が二つ現れ、靜かにトランプを切つた上、左右へ札を配りはじめる。

23

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」は頭を垂れ、洞穴の中を歩いてゐる。すると彼の頭の上へ圓光が一つかがやきはじめる。同時に又洞穴の中も徐ろに明るくなりはじめる。彼はふとこの奇蹟に氣がつき、洞穴のまん中に足を止める。始めは驚きの表情。それから徐ろに喜びの表情。彼は十字架の前にひれ伏し、もう一度熱心に祈りを捧げる。

24

「さん・せばすちあん」の右の耳。耳たぶの中には樹木が一本、纍々と圓い實をみのらせてゐる。耳の穴の中は花の咲いた草原。草は皆そよ風に動いてゐる。

25

前の洞穴の内部。但し今度は外部に面してゐる。圓光を頂いた「さん・せばすちあん」は十字架の前から立ち上り、靜かに洞穴の外へ歩いて行く。彼の姿の見えなくなつた後、十字架はおのづ

から岩の上へ落ちる。同時に又水瓶の中から猿が一匹躍り出し、怖は怖は十字架に近づかうとする。それからすぐに又もう一匹。

26

この洞穴の外部。「さん・せばすちあん」は月の光の中に次第にこちらへ歩いて來る。彼の影には左には勿論、右にももう一つ落ちてゐる。しかもその又右の影は鍔の廣い帽子をかぶり、長いマントルをまとつてゐる。彼はその上半身に殆ど洞穴の外を塞いだ時、ちよつと立ち止まつて空を見上げる。

27

星ばかり點々とかがやいた空。突然大きい分度器が一つ上から大股に下つて來る。それは次第に下るのに從ひ、やはり次第に股を縮め、とうとう兩脚を揃へたと思ふと、徐ろに霞んで消えてしまふ。

28

廣い暗の中に懸つた幾つかの太陽。それ等の太陽のまはりには地球が又幾つもまはつてゐる。

29

前の山みち。圓光を頂いた「さん・せばすちあん」は二つの影を落したまま、靜かに山みちを下つて來る。それから樟の木の根もとに佇み、ぢつと彼の足もとを見つめる。

30

斜めに上から見おろした山みち。山みちには月の光の中に石ころが一つ轉がつてゐる。石ころは次第に石斧に變り、それから又短劍に變り、最後にピストルに變つてしまふ。しかしそれももうピストルではない。いつか又もとのやうに唯の石ころに變つてゐる。

31

前の山みち。「さん・せばすちあん」は立ち止まつたまま、やはり足もとを見つめてゐる。影の二つあることも變りはない。それから今度は頭を擧げ、樟の木の幹を眺めはじめる。……

32

月の光を受けた樟の木の幹。荒あらしい木の皮に鎧はれた幹は何も始めは現してゐない。が、次第にその上に世界に君臨した神々の顏が一つづつ鮮かに浮んで來る。最後には受難の基督の顏。

最後には？――いや、「最後には」ではない。それも見る見る四つ折りにした東京××新聞に變つてしまふ。

33

前の山みちの側面。鍔の廣い帽子にマントルを着た影はおのづから眞つすぐに立ち上る。尤も立ち上つてしまつた時はもう唯の影ではない。山羊のやうに髯を伸ばした、目の鋭い紅毛人の船長である。

34

この山みち。「さん・せばすちあん」は樟の木の下に船長と何か話してゐる。彼の顏いろは重おもしい。が、船長は唇に絶えず冷笑を浮かべてゐる。彼等は暫く話した後、一しよに横みちへはひつて行く。

35

海を見おろした岬の上。彼等はそこに佇んだまま、何か熱心に話してゐる。そのうちに船長はマントルの中から望遠鏡を一つ出し、「さん・せばすちあん」に「見ろ」と云ふ手眞似をする。彼は

ちよつとためらつた後、望遠鏡に海の上を覗いて見る。彼等のまはりの草木は勿論、「さん・せばすちあん」の法服は海風の爲にしつきりなしに搖らいでゐる。が、船長のマントルは動いてゐない。

36

望遠鏡に映つた第一の光景。何枚も畫を懸けた部屋の中に紅毛人の男女が二人テエブルを中に話してゐる。蠟燭の光の落ちたテエブルの上には酒杯やギタアや薔薇の花など。そこへ又紅毛人の男が一人突然この部屋の戸を押しあけ、劍を拔いてはひつて來る。もう一人の紅毛人の男も咄嗟にテエブルを離れるが早いか、劍を拔いて相手を迎へようとする。しかしもうその時には相手の劍を心臟に受け、仰向けに床の上へ倒れてしまふ。紅毛人の女は部屋の隅に飛びのき、兩手に頰を抑へたまま、ぢつとこの悲劇を眺めてゐる。

37

望遠鏡に映つた第二の光景。大きい書棚などの並んだ部屋の中に紅毛人の男が一人ぼんやりと机に向つてゐる。電燈の光の落ちた机の上には書類や帳簿や雜誌など。そこへ紅毛人の子供が一

人勢よく戸をあけてはひつて來る。紅毛人はこの子供を抱き、何度も顔へ接吻した後、「あちらへ行け」と云ふ手眞似をする。子供は素直に出て行つてしまふ。それから又紅毛人は机に向ひ、抽斗から何か取り出したと思ふと、急に頭のまはりに煙を生じる。

38

望遠鏡に映つた第三の光景。或露西亜人の半身像を据ゑた部屋の中に紅毛人の女が一人せつせとタイプライタアを叩いてゐる。そこへ紅毛人の婆さんが一人静かに戸をあけて女に近より、一封の手紙を出しながら、「讀んで見ろ」と云ふ手眞似をする。女は電燈の光の中にこの手紙へ目を通すが早いか、烈しいヒステリイを起してしまふ。婆さんは呆氣にとられたまま、あとずさりに戸口へ退いて行く。

39

望遠鏡に映つた第四の光景。表現派の畫に似た部屋の中に紅毛人の男女が二人テエブルを中に話してゐる。不思議な光の落ちたテエブルの上には試驗管や漏斗や吹皮など。そこへ彼等よりも脊の高い、紅毛人の男の人形が一つ無氣味にもそつと戸を押しあけ、人工の花束を持つてはひつ

て來る。が、花束を渡さないうちに機械に故障を生じたと見え、突然男に飛びかかり、無造作に床の上に押し倒してしまふ。紅毛人の女は部屋の隅に飛びのき、兩手に頬を抑へたまま、急にとめどなしに笑ひはじめる。——

40

望遠鏡に映つた第五の光景。今度も亦前の部屋と變りはない。唯前と變つてゐるのは誰もそこにゐないことである。そのうちに突然部屋全體は凄まじい煙の中に爆發してしまふ。あとは唯一面の燒野原ばかり。が、それも暫くすると、一本の柳が川のほとりに生えた、草の長い野原に變りはじめる。その又野原から舞ひ上る、何羽とも知れない白鷺の一群。……

41

前の岬の上。「さん・せばすちあん」は望遠鏡を持ち、何か船長と話してゐる。船長はちよつと頭を振り、空の星を一つとつて見せる。「さん・せばすちあん」は身をすさらせ、慌てて十字を切らうとする。が、今度は切れないらしい。船長は星を手の平にのせ、彼に「見ろ」と云ふ手眞似をする。

42

星をのせた船長の手の平。星は徐ろに石ころに變り、石ころは又馬鈴薯に變り、馬鈴薯は三度目に蝶に變り、蝶は最後に極く小さい軍服姿のナポレオンに變つてしまふ。ナポレオンは手の平のまん中に立ち、ちよつとあたりを眺めた後、くるりとこちらへ背中を向けると、手の平の外へ小便をする。

43

前の山みち。「さん・せばすちあん」は船長のあとからすごすごそこへ歸つて來る。船長はちよつと立ちどまり、丁度金の輪でもはづすやうに「さん・せばすちあん」の圓光をとつてしまふ。それから彼等は樟の木の下にもう一度何か話しはじめる。みちの上に落ちた圓光は徐ろに大きい懷中時計になる。時刻は二時三十分。

44

この山みちのうねつたあたり。但し今度は木や岩は勿論、山みちに立つた彼等自身も斜めに上から見おろしてゐる。月の光の中の風景はいつか無數の男女に滿ちた近代のカツフエに變つてし

まふ。彼等の後ろは樂器の森。尤もまん中に立つた彼等を始め、何も彼も鱗のやうに細かい。

45

このカッフェの内部。「さん・せばすちあん」は大勢の踊り子達にとり圍まれたまま、當惑さうにあたりを眺めてゐる。そこへ時々降つて來る花束。踊り子達は彼に酒をすすめたり、彼の頸にぶら下つたりする。が、顏をしかめた彼はどうすることも出來ないらしい。紅毛人の船長はかう云ふ彼の眞後ろに立ち、不相變冷笑を浮べた顏を丁度半分だけ覗かせてゐる。

46

前のカッフェの床。床の上には靴をはいた足が幾つも絶えず動いてゐる。それ等の足は又いつの間にか馬の足や鶴の足や鹿の足に變つてゐる。

47

前のカッフェの隅。金鈕の服を着た黑人が一人大きい太鼓を打つてゐる。この黑人も亦いつの間にか一本の樟の木に變つてしまふ。

48

前の山みち。船長は腕を組んだまま、樟の木の根もとに氣を失つた「さん・せばすちあん」を見おろしてゐる。それから彼を抱き起し、半ば彼を引きずるやうに向うの洞穴へ登つて行く。

49

前の洞穴の内部。但し今度も外部に面してゐる。月の光はもう落ちてゐない。が、彼等の歸つて來た時にはおのづからあたりも薄明るくなつてゐる。「さん・せばすちあん」は船長を捉へ、もう一度熱心に話しかける。船長はやはり冷笑したきり、何とも彼の言葉に答へないらしい。が、やつと二ことと三こととしやべると、未だに薄暗い岩のかげを指さし、彼に「見ろ」と云ふ手眞似をする。

50

洞穴の内部の隅。顋髯のある死骸が一つ岩の壁によりかかつてゐる。

51

彼等の上半身。「さん・せばすちあん」は驚きや恐れを示し、船長に何か話しかける。船長は一こと返事をする。「さん・せばすちあん」は身をすさらせ、慌てて十字を切らうとする。が、今度

も切ることは出來ない。

52

Judas……

53

前の死骸、――ユダの横顏。誰かの手はこの顏を捉へ、マッサアデをするやうに顏を撫でる。すると頭は透明になり、丁度一枚の解剖圖のやうにありありと腦髓を露してしまふ。腦髓は始めはぼんやりと三十枚の銀を映してゐる。が、その上にいつの間にかそれぞれ嘲りや憐みを帶びた使徒たちの顏も映つてゐる。のみならずそれ等の向うには家だの、湖だの、十字架だの、猥褻な形をした手だの、橄欖の枝だの、老人だの、――いろいろのものも映つてゐるらしい。……

54

前の洞穴の内部の隅。岩の壁によりかかつた死骸は徐ろに若くなりはじめ、とうとう赤兒に變つてしまふ。しかしこの赤兒の顋にも顋髯だけはちやんと殘つてゐる。

55

赤兒の死骸の足のうら。どちらの足のうらもまん中に一輪づつ薔薇の花を描いてゐる。けれどもそれ等は見る見るうちに岩の上へ花びらを落してしまふ。

56

彼等の上半身。「さん・せばすちあん」は愈興奮し、何か又船長に話しかける。船長は何とも返事をしない。が、殆ど嚴肅に「さん・せばすちあん」の顏を見つめてゐる。

57

半ば帽子のかげになつた、目の鋭い船長の顏。船長は徐ろに舌を出して見せる。舌の上にはスフィンクスが一匹。

58

前の洞穴の內部の隅。岩の壁によりかかつた赤兒の死骸は次第に又變りはじめ、とうとうちやんと肩車をした二匹の猿になつてしまふ。

59

前の洞穴の內部。船長は「さん・せばすちあん」に熱心に何か話しかけてゐる。が、「さん・せば

すちあん」は頭を垂れたまま、船長の言葉を聞かずにゐるらしい。船長は急に彼の腕を捉へ、洞穴の外部を指さしながら、彼に「見ろ」と云ふ手眞似をする。

60

月の光を受けた山中の風景。この風景はおのづから「磯ぎんちやく」の充滿した、嶮しい岩むらに變つてしまふ。空中に漂ふ海月の群。しかしそれも消えてしまひ、あとには小さい地球が一つ廣い暗の中にまはつてゐる。

61

廣い暗の中にまはつてゐる地球。地球はまはるのを緩めるのに從ひ、いつかオレンヂに變つてゐる。そこへナイフが一つ現れ、眞二つにオレンヂを截つてしまふ。白いオレンヂの截斷面は一本の磁針を現してゐる。

62

彼等の上半身。「さん・せばすちあん」は船長にすがつたまま、ぢつと空中を見つめてゐる。何か狂人に近い表情。船長はやはり冷笑したまま、睫毛一つ動かさない。のみならず又マントルの

中から髑髏を一つ出して見せる。

63

船長の手の上に載つた髑髏。髑髏の目からは火取蟲が一つひらひらと空中へ昇つて行く。それから又三つ、二つ、五つ。

64

前の洞穴の内部の空中。空中は前後左右に飛びかふ無數の火取蟲に充ち滿ちてゐる。

65

それ等の火取蟲の一つ。火取蟲は空中を飛んでゐるうちに一羽の鷲に變つてしまふ。

66

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」はやはり船長にすがり、いつか目をつぶつてゐる。のみならず船長の腕を離れると、岩の上へ倒れてしまふ。しかし又上半身を起し、もう一度船長の顔を見上げる。

67

岩の上に倒れてしまつた「さん・せばすちあん」の下半身。彼の手は體を支へながら、偶然岩の上の十字架を捉へる。始めは如何にも怯づ怯づと、それから又急にしつかりと。

68

十字架をかざした「さん・せばすちあん」の手。

69

後ろを向いた船長の上半身。船長は肩越しに何かを窺ひ、失望に滿ちた苦笑を浮べる。それから靜かに顋鬚を撫でる。

70

前の洞穴の内部。船長はさつさと洞穴を出、薄明るい山みちを下つて來る。從つて山みちの風景も次第に下へ移つて來る。船長の後ろからは猿が二匹。船長は樟の木の下へ來ると、ちよつと立ち止まつて帽をとり、誰か見えないものにお時宜をする。

71

前の洞穴の内部。但し今度も外部に面してゐる。しつかり十字架を握つたまま、岩の上に倒れし

てゐる、「さん・せばすちあん」。洞穴の外部は徐ろに朝日の光を仄かせはじめる。

72

斜めに上から見おろした岩の上の「さん・せばすちあん」の顔。彼の顔は頬の上へ徐ろに涙を流しはじめる、力のない朝日の光の中に。

73

前の山みち。朝日の光の落ちた山みちはおのづから又もとのやうに黒いテエブルに變つてしまふ。テエブルの左に並んでゐるのはスペイドの一や畫札ばかり。

74

朝日の光のさしこんだ部屋。主人は丁度戸をあけて誰かを送り出したばかりである。この部屋の隅のテエブルの上には酒の罎や酒杯やトランプなど。主人はテエブルの前に坐り、巻煙草に火をつける。それから大きい欠伸をする。顋髯を生やした主人の顔は紅毛人の船長と變りはない。

（昭和二年三月七日）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

後記。「さん・せばすちあん」は傳說的色彩を帶びた唯一の日本の天主教徒である。浦川和三郎氏著「日本に於ける公教會の復活」第十八章參照。

# 淺草公園

——或シナリオ——

1

浅草の仁王門の中に吊つた、火のともらない大提灯。提灯は次第に上へあがり、雑沓した仲店を見渡すやうになる。但し大提灯の下部だけは消え失せない。門の前に飛びかふ無数の鳩。

2

雷門から縦に見た仲店。正面にはるかに仁王門が見える。樹木は皆枯れ木ばかり。

3

仲店の片側。外套を着た男が一人、十二三歳の少年と一しよにぶらぶら仲店を歩いてゐる。少年は父親の手を離れ、時々玩具屋の前に立ち止まつたりする。父親は勿論かう云ふ少年を時々叱つたりしないことはない。が、稀には彼自身も少年のゐることを忘れたやうに帽子屋の飾り窓などを眺めてゐる。

4

かう云ふ親子の上半身。父親は如何にも田舎者らしい、無精髭を伸ばした男。少年は可愛いと云ふよりも寧ろ可憐な顔をしてゐる。彼等の後ろには雜沓した仲店。彼等はこちらへ歩いて來る。

5

斜めに見た或玩具屋の店。少年はこの店の前に佇んだまま、綱を上つたり下りたりする玩具の猿を眺めてゐる。玩具屋の店の中には誰も見えない。少年の姿は膝の上まで。

6

綱を上つたり下りたりしてゐる猿。猿は燕尾服の尾を垂れた上、シルク・ハットを仰向けにかぶつてゐる。この綱や猿の後ろは深い暗のあるばかり。

7

この玩具屋のある仲店の片側。猿を見てゐた少年は急に父親のゐないことに氣がつき、きよろきよろあたりを見まはしはじめる。それから向うに何か見つけ、その方へ一散に走つて行く。

8

父親らしい男の後ろ姿。但しこれも膝の上まで。少年はこの男に追ひすがり、しつかりと外套

の袖を捉へる。驚いてふり返つた男の顔は生憎田舍者らしい父親ではない。綺麗に口髭の手入れをした、都會人らしい紳士である。少年の顔に往來する失望や當惑に滿ちた表情。紳士は少年を殘したまま、さつさと向うへ行つてしまふ。少年は遠い雷門を後ろにぼんやり一人佇んでゐる。

9

もう一度父親らしい後ろ姿。但し今度は上半身。少年はこの男に追ひついて恐る恐るその顏を見上げる。彼等の向うには仁王門。

10

この男の前を向いた顏。彼は、マスクに口を蔽つた、人間よりも、動物に近い顏をしてゐる。何か惡意の感ぜられる微笑。

11

仲店の片側。少年はこの男を見送つたまま、途方に暮れたやうに佇んでゐる。父親の姿はどちらを眺めても、生憎目にははひらないらしい。少年はちよつと考へた後、當どもなしに歩きはじめる。いづれも洋裝をした少女が二人、彼をふり返つたのも知らないやうに。

12

目金屋の店の飾り窓。近眼鏡、遠眼鏡、双眼鏡、廓大鏡、顯微鏡、塵除け目金などの並んだ中に西洋人の人形の首が一つ、目金をかけて頬笑んでゐる。その窓の前に佇んだ少年の後姿。但し斜めに後ろから見た上半身。人形の首はおのづから人間の首に變つてしまふ。のみならずかう少年に話しかける。——

13

「目金を買つておかけなさい。お父さんを見付るには目金をかけるのに限りますからね。」
「僕の目は病氣ではないよ。」

14

斜めに見た造花屋の飾り窓。造花は皆竹籠だの、瀬戸物の鉢だのの中に開いてゐる。中でも一番大きいのは左にある鬼百合の花。飾り窓の板硝子は少年の上半身を映しはじめる。何か幽靈のやうにぼんやりと。

15

飾り窓の板硝子越しに造花を隔てた少年の上半身。少年は板硝子に手を當ててゐる。そのうちに息の當るせゐか、顔だけぼんやりと曇つてしまふ。

16

飾り窓の中の鬼百合の花。但し後ろは暗である。鬼百合の花の下に垂れてゐた莟もいつか次第に開きはじめる。

17

「わたしの美しさを御覧なさい。」

「だつてお前は造花ぢやないか?」

18

角から見た煙草屋の飾り窓。巻煙草の鑵、葉巻の箱、パイプなどの並んだ中に斜めに札が一枚懸つてゐる。この札に書いてあるのは、――「煙草の煙は天國の門です。」徐ろにパイプから立ち昇る煙。

19

煙の滿ち充ちた飾り窓の正面。少年はこの右に佇んでゐる。但しこれも膝の上まで。煙の中にはぼんやりと城が三つ浮かびはじめる。城は 'Three Castles' の商標を立體にしたものに近い。

20

それ等の城の一つ。この城の門には兵卒が一人銃を持つて佇んでゐる。その又鐵格子の門の向うには棕櫚が何本もそよいでゐる。

21

この城の門の上。そこには横にいつの間にかかう云ふ文句が浮かび始める。——

「この門に入るものは英雄となるべし。」

22

こちらへ歩いて來る少年の姿。前の煙草屋の飾り窓は斜めに少年の後ろに立つてゐる。少年はちよつとふり返つて見た後、さつさと又歩いて行つてしまふ。

23

吊り鐘だけ見える鐘樓の内部。撞木は誰かの手に綱を引かれ、徐ろに鐘を鳴らしはじめる。一

度、二度、三度、——鐘樓の外は松の木ばかり。

24

斜めに見た射撃屋の店。的は後ろに卷煙草の箱を積み、前に博多人形を並べてゐる。手前に並んだ空氣銃の一列。人形の一つはドレッスをつけ、扇を持つた西洋人の女である。少年は怯づ怯づこの店にはひり、空氣銃を一つとり上げて全然無分別に的を狙ふ。射撃屋の店には誰もゐない。少年の姿は膝の上まで。

25

西洋人の女の人形。人形は靜かに扇をひろげ、すつかり顏を隱してしまふ。それからこの人形に中るコルクの彈丸。人形は勿論仰向けに倒れる。人形の後ろにも暗のあるばかり。

26

前の射撃屋の店。少年は又空氣銃をとり上げ、今度は熱心に的を狙ふ。三發、四發、五發、——しかし的は一つも落ちない。少年は澁ぶ澁ぶ銀貨を出し、店の外へ行つてしまふ。

27

始めは唯薄暗い中に四角いもののの見えるばかり。その中にこの四角いものは突然電燈をともしたと見え、横にかう云ふ字を浮かび上らせる。――上に「公園六區」下に「夜警詰所」。上のは黒い中に白、下のは黒い中に赤である。

28

劇場の裏の上部。火のともつた窓が一つ見える。まつ直に雨樋をおろした壁にはいろいろのポスタアの剝がれた痕。

29

この劇場の裏の下部。少年はそこに佇んだまま、暫くはどちらへも行かうとしない。それから高い窓を見上げる。が、窓には誰も見えない。唯逞しいブルテリアが一匹、少年の足もとを通つて行く。少年の匂を嗅いで見ながら。

30

同じ劇場の裏の上部。火のともつた窓には踊り子が一人現れ、冷淡に目の下の往來を眺める。この姿は勿論逆光線の爲に顏などははつきりとわからない。が、いつか少年に似た、可憐な顏

を現してしまふ。踊り子は靜かに窓をあけ、小さい花束を下に投げる。

31

往來に立つた少年の足もと。小さい花束が一つ落ちて來る。少年の手はこれを拾ふ。花束は往來を離れるが早いか、いつか茨の束に變つてゐる。

32

黑い一枚の揭示板。揭示板は「北の風、晴」と云ふ字をチョオクに現してゐる。が、それはぼんやりとなり、「南の風強かるべし。雨模樣」と云ふ字に變つてしまふ。

33

斜に見た標札屋の露店、天幕の下に並んだ見本は德川家康、二宮尊德、渡邊崋山、近藤勇、近松門左衞門などの名を並べてゐる。かう云ふ名前もいつの間にか有り來りの名前に變つてしまふ。のみならずそれ等の標札の向うにかすかに浮んで來る南瓜畠……

34

池の向うに並んだ何軒かの映畫館。池には勿論電燈の影が幾つともなしに映つてゐる。池の左

に立つた少年の上半身。少年の帽は咄嗟の間に風の爲に池へ飛んでしまふ。少年はいろいろあせつた後、こちらを向いて歩きはじめる。殆ど絶望に近い表情。

35

カッフエの飾り窓。砂糖の塔、生菓子、麥藁のパイプを入れた曹達水のコップなどの向うに人かげが幾つも動いてゐる。少年はこの飾り窓の前へ通りかかり、飾り窓の左に足を止めてしまふ。少年の姿は膝の上まで。

36

このカッフエの外部。夫婦らしい中年の男女が二人硝子戸の中へはひつて行く。女はマントルを着た子供を抱いてゐる。そのうちにカッフエはおのづからまはり、コック部屋の裏を現はしてしまふ。コック部屋の裏には煙突が一本。そこには又勞働者が二人せつせとシャベルを動かしてゐる。カンテラを一つともしたまま。……

37

テエブルの前の子供椅子の上に上半身を見せた前の子供。子供はにこにこ笑ひながら、首を振

つたり手を擧げたりしてゐる。子供の後ろには何も見えない。そこへいつか薔薇の花が一つづつ靜かに落ちはじめる。

38

斜めに見える自動計算器。計算器の前には手が二つしきりなしに動いてゐる。勿論女の手に違ひない。それから絶えず開かれる抽斗。抽斗の中は錢ばかりである。

39

前のカッフエの飾り窓。少年の姿も變りはない。暫らくの後、少年は徐ろに振り返り、足早にこちらへ歩いて來る。が、顏ばかりになつた時、ちよつと立ちどまつて何かを見る。多少驚きに近い表情。

40

人だかりのまん中に立つた糶り商人。彼は吳服ものをひろげた中に立ち、一本の帶をふりながら、熱心に人だかりに呼びかけてゐる。

41

彼の手に持つた一本の帶。帶は前後左右に振られながら、片はしを二三尺現してゐる。帶の模様は廓大した雪片。雪片は次第にまはりながら、くるくる帶の外へも落ちはじめる。

42

メリヤス屋の露店。シャツやズボン下を吊つた下に婆さんが一人行火に當つてゐる。婆さんの前にもメリヤス類。毛絲の編みものも交つてゐないことはない。行火の裾には黑猫が一匹時々前足を嘗めてゐる。

43

行火の裾に坐つてゐる黑猫。左に少年の下半身も見える。黑猫も始めは變りはない。しかしいつか頭の上に流蘇の長いトルコ帽をかぶつてゐる。

44

「坊ちやん、スウェエタアを一つお買ひなさい。」

45

「僕は帽子さへ買へないんだよ。」

メリヤス屋の露店を後ろにした、疲れたらしい少年の上半身。少年は涙を流しはじめる。が、やつと氣をとり直し、高い空を見上げながら、もう一度こちらへ歩きはじめる。

46

かすかに星のかがやいた夕空。そこへ大きい顏が一つおのづからぼんやりと浮かんで來る。顏は少年の父親らしい。愛情はこもつてゐるものの、何か無限にもの悲しい表情。しかしこの顏も暫らくの後、霧のやうにどこかへ消えてしまふ。

47

縱に見た往來。少年はこちらへ後ろを見せたまま、この往來を歩いて行く。往來は餘り人通りはない。少年の後ろから歩いて行く男。この男はちよつと振り返り、マスクをかけた顏を見せる。少年は一度も後ろを見ない。

48

斜めに見た格子戸造りの家の外部。家の前には人力車が三臺後ろ向きに止まつてゐる。人通りはやはり澤山ない。角隱しをつけた花嫁が一人、何人かの人々と一しよに格子戸を出、靜かに前

の人力車に乘る。人力車は三臺とも人を乘せると、花嫁を先に走つて行く。そのあとから少年の後ろ姿。格子戸の家の前に立つた人々は勿論少年に目もやらない。

49

「ＸＹＺ會社特製品、迷ひ子、文藝的映畫」と書いた長方形の板。これもこの板を前後にしたサンドウィッチ・マンに變つてしまふ。サンドウィッチ・マンは年をとつてゐるものの、どこか仲店を歩いてゐた、都會人らしい紳士に似てゐる。後ろは前よりも人通りは多い、いろいろの店の並んだ往來。少年はそこを通りかかり、サンドウィッチ・マンの配つてゐる廣告を一枚貰つて行く。

50

縱に見た前の往來。松葉杖をついた癈兵が一人ゆつくりと向うへ歩いて行く。癈兵はいつか駝鳥に變つてゐる。が、暫らく歩いて行くうちに又癈兵になつてしまふ。横町の角にはポストが一つ。

51

「急げ。急げ。いつ何時死ぬかも知れない。」

52

往來の角に立つてゐるポスト。ポストはいつか透明になり、無數の手紙の折り重なつた圓筒の內部を現して見せる。が、見る見る前のやうに唯のポストに變つてしまふ。ポストの後ろには暗のあるばかり。

53

斜めに見た藝者屋町。お座敷へ出る藝者が二人或御神燈のともつた格子戸を出、靜かにこちらへ歩いて來る。どちらも何の表情も見せない。二人の藝者の通りすぎた後、向うへ歩いて行く少年の姿。少年はちよつとふり返つて見る。前よりも更に寂しい表情。少年はだんだん小さくなつて行く。そこへ向うに立つてゐた、脊の低い聲色遣ひが一人やはりこちらへ歩いて來る。彼の目のあたりへ近づいたのを見ると、どこか少年に似てゐないことはない。

54

大きい針金の環のまはりにぐるりと何本もぶら下げたかもじ。かもじの中には「すき毛入り前

髮立て」と書いた札も下つてゐる。これ等のかもじはいつの間にか理髮店の棒に變つてしまふ。棒の後ろにも暗のあるばかり。

55

理髮店の外部。大きい窓硝子の向うには男女が何人も動いてゐる。少年はそこへ通りかかり、ちよつと内部を覗いて見る。

56

頭を刈つてゐる男の横顏。これも暫らくたつた後、大きい針金の環にぶら下げた何本かのかもじに變つてしまふ。かもじの中に下つた札が一枚。札には今度は「入れ毛」と書いてある。

57

セセッション風に出來上つた病院。少年はこちらから歩み寄り、石の階段を登つて行く、しかし戸の中へはひつたと思ふと、すぐに又階段を下つて來る。少年の左へ行つた後、病院は靜かにこちらへ近づき、とうとう玄關だけになつてしまふ。その硝子戸を押しあけて外へ出て來る看護婦が一人。看護婦は玄關に佇んだまゝ、何か遠いものを眺めてゐる。

58

膝の上に組んだ看護婦の兩手。前になつた左の手には婚約の指環が一つはまつてゐる。が、指環はおのづから急に下へ落ちてしまふ。

59

僅かに空を殘したコンクリイトの塀。これもおのづから透明になり、鐵格子の中に群つた何匹かの猿を現して見せる。それから又塀全體は操り人形の舞臺に變つてしまふ。舞臺は兎に角西洋じみた室内。そこに西洋人の人形が一つ怯づ怯づあたりを窺つてゐる。覆面をかけてゐるのを見ると、この室へ忍びこんだ盜人らしい。室の隅には金庫が一つ。

60

金庫をこじあけてゐる西洋人の人形。但しこの人形の手足についた、細い絲も何本かははつきりと見える。……

61

斜めに見た前のコンクリイトの塀。塀はもう何も現してゐない。そこを通りすぎる少年の影。

そのあとから今度は背むしの影。

62

前から斜めに見おろした往來。往來の上には落ち葉が一枚風に吹かれてまはつてゐる。そこへ又舞ひ下つて來る前よりも小さい落葉が一枚。最後に雜誌の廣告らしい紙も一枚翻つて來る。紙は生憎引き裂かれてゐるらしい。が、はつきりと見えるのは「生活」、「正月號」と云ふ初號活字である。

63

大きい常磐木の下にあるベンチ。木々の向うに見えてゐるのは前の池の一部らしい。少年はそこへ歩みより、がつかりしたやうに腰をかける。それから涙を拭ひはじめる。すると前の背むしが一人やはりベンチへ來て腰をかける。時々風に搖れる後ろの常磐木。少年はふと背むしを見つめる。が、背むしは振り返りもしない。のみならず懷から燒き芋を出し、がつがつしてゐるやうに食ひはじめる。

64

焼き芋を食つてゐる背むしの顏。

65

前の常磐木のかげにあるベンチ。背むしはやはり焼き芋を食つてゐる。少年はやつと立ち上り、頭を垂れてどこかへ歩いて行く。

66

斜めに上から見おろしたベンチ。板を透かしたベンチの上には蟇口が一つ殘つてゐる。すると誰かの手が一つそつとその蟇口をとり上げてしまふ。

67

前の常磐木のかげにあるベンチ。但し今度は斜めになつてゐる。ベンチの上には背むしが一人蟇口の中を檢べてゐる。そのうちにいつか背むしの左右に背むしが何人も現れはじめ、とうとうしまひにはベンチの上は背むしばかりになつてしまふ。しかも彼等は同じやうにそれぞれ皆熱心に蟇口の中を檢べてゐる。互に何か話し合ひながら。

68

寫眞屋の飾り窓。男女の寫眞が何枚もそれぞれ額縁にはひつて懸つてゐる。が、それ等の男女の顏もいつか老人に變つてしまふ。しかしその中にたつた一枚、フロック・コオトに勲章をつけた、顋髭のある老人の半身だけは變らない。唯その顏はいつの間にか前の背むしの顏になつてゐる。

69

横から見た觀音堂。少年はその下を歩いて行く。觀音堂の上には三日月が一つ。

70

觀音堂の正面の一部。但し扉はしまつてゐる。その前に禮拜してゐる何人かの人々。少年はそこへ歩みより、こちらへ後ろを見せたまま、ちよつと觀音堂を仰いで見る。それから突然こちらを向き、さつさと斜めに歩いて行つてしまふ。

71

斜めに上から見おろした、大きい長方形の手水鉢。柄杓が何本も浮かんだ水には火かげもちらちら映つてゐる。そこへ又映つて來る、憔悴し切つた少年の顏。

72

大きい石燈籠の下部。少年はそこに腰をおろし、兩手に顏を隱して泣きはじめる。

73

前の石燈籠の下部の後ろ。男が一人佇んだまま、何かに耳を傾けてゐる。

74

この男の上半身。尤も顏だけはこちらを向いてゐない。が、靜かに振り返つたのを見ると、マスクをかけた前の男である。のみならずその顏も暫くの後、少年の父親に變つてしまふ。

75

前の石燈籠の上部。石燈籠は柱を殘したまま、おのづから炎になつて燃え上つてしまふ。炎の下火になつた後、そこに開き始める菊の花が一輪。菊の花は石燈籠の笠よりも大きい。

76

前の石燈籠の下部。少年は前と變りはない。そこへ帽を目深にかぶつた巡査が一人歩みより、少年の肩へ手をかける。少年は驚いて立ち上り、何か巡査と話をする。それから巡査に手を引か

れたまま、靜かに向うへ歩いて行く。

77

前の石燈籠の下部の後ろ。今度はもう誰もゐない。

78

前の仁王門の大提灯。大提灯は次第に上へあがり、前のやうに仲店を見渡すやうになる。但し大提灯の下部だけは消え失せない。

（昭和二年三月十四日）

# たね子の憂鬱

たね子は夫の先輩に當る或實業家の令孃の結婚披露式の通知を貰つた時、丁度勤め先へ出かかつた夫にかう熱心に話しかけた。

「あたしも出なければ惡いでせうか？」

「それは惡いさ。」

夫はタイを結びながら、鏡の中のたね子に返事をした。尤もそれは簞笥の上に立てた鏡に映つてゐた關係上、たね子よりも寧ろたね子の眉に返事をした――のに近いものだつた。

「だつて帝國ホテルでやるんでせう？」

「帝國ホテル――か？」

「あら、御存知なかつたの？」

「うん、……おい、チョツキ！」

たね子は急いでチヨツキをとり上げ、もう一度この披露式の話をし出した。

「帝國ホテルぢや洋食でせう？」

「當り前なことを言つてゐる。」

「それだからあたしは困つてしまふ。」

「なぜ？」

「なぜつて……あたしは洋食の食べかたを一度も敎はつたことはないんですもの。」

「誰でも敎はつたり何かするものか！……」

夫は上着をひつかけるが早いか、無造作に春の中折帽をかぶつた。それからちよつと箪笥の上の披露式の通知に目を通し「何だ、四月の十六日ぢやないか？」と言つた。

「そりや十六日だつて十七日だつて……」

「だからさ、まだ三日もある。そのうちに稽古をしろと言ふんだ。」

「ぢやあなた、あしたの日曜にでもきつとどこかへつれて行つて下さる！」

しかし夫は何とも言はずにさつさと會社へ出て行つてしまつた。たね子は夫を見送りながら、

ちよつと憂鬱にならずにはゐられなかつた。それは彼女の體の具合も手傳つてゐたことは確かだつた。子供のない彼女はひとりになると、長火鉢の前の新聞をとり上げ、何かさう云ふ記事にないかと一々欄外へも目を通した。が、「今日の獻立て」はあつても、洋食の食べかたなどと云ふものはなかつた。洋食の食べかたなどと云ふものは？――彼女はふと女學校の教科書にそんなことも書いてあつたやうに感じ、早速用箪笥の抽斗から古い家政讀本を二冊出した。それ等の本はいつの間にか手ずれの痕さへ煤けてゐた。のみならず又爭はれない過去の匂を放つてゐた。たね子は細い膝の上にそれ等の本を開いたまま、どう云ふ小說を讀む時よりも一生懸命に目次を辿つて行つた。

「木綿及び麻織物洗濯。ハンケチ、前掛、足袋、食卓掛、ナプキン、レエス、……

「敷物。疊、絨毯、リノリウム、コオクカアペト……

「臺所用具。陶磁器類、硝子器類、金銀製器具……」

一冊の本に失望したたね子はもう一冊の本を檢べ出した。

「繃帶法。卷軸帶、繃帶巾、……

「出產。生兒の衣服、產室、產具……

「收入及び支出。勞銀、利子、企業所得……

「一家の管理。家風、主婦の心得、勤勉と節儉、交際、趣味、……」

たね子はがつかりして本を投げ出し、大きい樅の鏡臺の前へ髮を結びに立つて行つた。が、洋食の食べかただけはどうしても氣にかかつてならなかつた。……

その次の午後、夫はたね子の心配を見かね、わざわざ彼女を銀座の裏の或レストオランへつれて行つた。たね子はテエブルに向かひながら、まづそこには彼等以外に誰もゐないのに安心した。しかしこの店もはやらないのかと思ふと、夫のボオナスにも影響した不景氣を感ぜずにはゐられなかつた。

「氣の毒だわね、こんなにお客がなくつては。」

「常談言つちやいけない。こつちはお客のない時間を選つて來たんだ。」

それから夫はナイフやフォオクをとり上げ、洋食の食べかたを教へ出した。それも亦實は必しも確かではないのに違ひなかつた。が、彼はアスパラガスに一々ナイフを入れながら、兎に角た

ね子を敎へるのに彼の全智識を傾けてゐた。彼女も勿論熱心だつた。しかし最後にオレンヂだのバナナだのの出て來た時にはおのづからかう云ふ果物の値段を考へない訣には行かなかつた。

彼等はこのレストオランをあとに銀座の裏を歩いて行つた。夫はやつと義務を果した滿足を感じてゐるらしかつた。が、たね子は心の中に何度もフォオクの使ひかただのカッフェの飲みかただのと思ひ返してゐた。のみならず萬一間違つた時には——と云ふ病的な不安も感じてゐた。銀座の裏は靜かだつた。アスファルトの上へ落ちた日あしもやはり靜かに春めかしかつた。しかしたね子は夫の言葉に好い加減な返事を與へながら、遲れ勝ちに足を運んでゐた。……

帝國ホテルの中へはひるのは勿論彼女には始めてだつた。たね子は紋服を着た夫を前に狹い階段を登りながら、大谷石や煉瓦を用ひた內部に何か無氣味に近いものを感じた。のみならず壁を傳はつて走る、大きい一匹の鼠さへ感じた。感じた？——それは實際「感じた」だつた。彼女は夫の袂を引き、「あら、あなた、鼠が」と言つた。が、夫はふり返ると、ちよつと當惑らしい表情を浮べ、「どこに？……氣のせゐだよ」と答へたばかりだつた。たね子は夫にかう言はれない前にも彼女の錯覺に氣づいてゐた。しかし氣づいてゐればゐるだけ益々彼女の神經にこだはらない訣には

行かなかつた。

彼等はテエブルの隅に坐り、ナイフやフォオクを動かし出した。たね子は角隠しをかけた花嫁にも時々目を注いでゐた。が、それよりも氣がかりだつたのは勿論皿の上の料理だつた。彼女はパンを口へ入れるのにも體中の神經の震へるのを感じた。ましてナイフを落した時には途方に暮れるより外はなかつた。けれども晩餐は幸ひにも徐ろに最後に近づいて行つた。たね子は皿の上のサラドを見た時、「サラドのついたものの出て來た時には食事もおしまひになつたと思へ」と云ふ夫の言葉を思ひ出した。しかしやつとひと息ついたと思ふと、今度は三鞭酒の杯を擧げて立ち上らなければならなかつた。それはこの晩餐の中でも最も苦しい何分かだつた。彼女は怯づ怯づ椅子を離れ、目八分に杯をさし上げたまま、いつか脊骨さへ震へ出したのを感じた。

彼等は或電車の終點から細い横町を曲つて行つた。夫は可也醉つてゐるらしかつた。たね子は夫の足もとに氣をつけながらはしやぎ氣味に何かと口を利いたりした。そのうちに彼等は電燈の明るい「食堂」の前へ通りかかつた。そこにはシャツ一枚の男が一人「食堂」の女中とふざけながら、章魚を肴に酒を飲んでゐた。それは勿論彼女の目にはちらりと見えたばかりだつた。が、彼女は

この男を、――この無精髭を伸ばした男を輕蔑しない訣には行かなかつた。同時に又自然と彼の自由を羨まない訣にも行かなかつた。この「食堂」を通り越した後はぢきにしいやた家ばかりになつた。從つてあたりも暗くなりはじめた。たね子はかう云ふ夜の中に何か木の芽の匂ふのを感じ、いつかしみじみと彼女の生まれた田舍のことを思ひ出してゐた。五十圓の債券を二三枚買つて「これでも不動産(!)が殖えたのだからね」などと得意になつてゐた母親のことも。……

次の日の朝、妙に元氣のない顏をしたたね子はかう夫に話しかけた。夫はやはり鏡の前にタイを結んでゐる所だつた。

「あなた、けさの新聞を讀んで?」

「うん。」

「本所かどこかのお辨當屋の娘の氣違ひになつたと云ふ記事を讀んで?」

「發狂した? 何で?」

夫はチョッキへ腕を通しながら、鏡の中のたね子へ目を移した。たね子と云ふよりもたね子の眉へ。――

「職工か何かにキスされたからですつて。」
「そんなこと位でも發狂するものかな。」
「そりやするわ。すると思つたわ。あたしもゆうべは怖い夢を見た。……」
「どんな夢を？——このタイはもう今年ぎりだね。」
「何か大へんな間違ひをしてね、——何をしたのだかわからないのよ。何か大へんな間違ひをして汽車の線路へとびこんだ夢なの。そこへ汽車が來たものだから、——」
「轢かれたと思つたら、目を醒ましたのだらう。」
夫はもう上衣をひつかけ、春の中折帽をかぶつてゐた。が、まだ鏡に向つたまま、タイの結びかたを氣にしてゐた。
「いいえ、轢かれてしまつてからも、夢の中ではちやんと生きてゐるの。唯體は滅茶滅茶にたつて眉毛だけ線路に殘つてゐるのだけれども、……やつぱりこの二三日洋食の食べかたばかり氣にしてゐたせゐね。」
「さうかも知れない。」

たね子は夫を見送りながら、半ば獨り語のやうに話しつづけた。

「もうゆうべ大しくじりをしたら、あたしでも何をしたかわからないのだから。」

しかし夫は何とも言はずにさつさと會社へ出て行つてしまつた。たね子はやつとひとりになると、その日も長火鉢の前に坐り、急須の湯飲みについであつた、ぬるい番茶を飲むことにした。が、彼女の心もちは何か落ち着きを失つてゐた。彼女の前にあつた新聞は花盛りの上野の寫眞を入れてゐた。彼女はぼんやりこの寫眞を見ながら、もう一度番茶を飲まうとした。すると番茶はいつの間にか雲母に似たあぶらを浮かせてゐた。しかもそれは氣のせゐか、彼女の眉にそつくりだつた。

「…………」

たね子は頬杖をついたまま、髪を結ふ元氣さへ起らずにぢつと番茶ばかり眺めてゐた。……

（昭和二年三月二十八日）

# 古千屋

樫井の戰ひのあつたのは元和元年四月二十九日だつた。大阪勢の中でも名を知られた塙團右衞門直之、淡輪六郎兵衞重政等はいづれもこの戰ひのために打ち死した。殊に塙團右衞門直之は金の御幣の指し物に十文字の槍をふりかざし、槍の柄の折れるまで戰つた後、樫井の町の中に打ち死した。

四月三十日の未の刻、彼等の軍勢を打ち破つた淺野但馬守長晟は大御所德川家康に戰ひの勝利を報じた上、直之の首を獻上した。（家康は四月十七日以來、二條の城にとどまつてゐた。それは將軍秀忠の江戶から上洛するのを待つた後、大阪の城をせめるためだつた。）この使に立つたのは長晟の家來、關宗兵衞、寺川左馬助の二人だつた。

家康は本多佐渡守正純に命じ、直之の首を實檢しようとした。正純は次ぎの間に退いて靜に首

桶の蓋をとり、直之の首を內見した。それから蓋の上に卍を書き、更に又矢の根を伏せた後、かう家康に返事をした。

「直之の首は暑中の折から、頰たれ首になつてをります。從つて臭氣も甚だしうございますゆゑ、御檢分はいかゞでございませうか？」

しかし家康は承知しなかつた。

「誰も死んだ上は變りはない。兎に角これへ持つて參るやうに。」

正純は又次ぎの間へ退き、母布をかけた首桶を前にいつまでもぢつと坐つてゐた。

「早うせぬか。」

家康は次ぎの間へ聲をかけた。遠州橫須賀の徒士のものだつた塙團右衞門直之はいつか天下に名を知られた物師の一人に數へられてゐた。のみならず家康の妾お萬の方も彼女の生んだ賴宣の爲に一時は彼に年ごとに二百兩の金を合力してゐた。最後に直之は武藝の外にも大龍和尚の會下に參じて一字不立の道を修めてゐた。家康のかういふ直之の首を實檢したいと思つたのも必ずしも偶然ではないのだつた。……

しかし正純は返事をせずに、やはり次ぎの間に控へてゐた成瀬隼人正正成や土井大炊頭利勝へ問はず語りに話しかけた。

「兎角人と申すものは年をとるに從つて情ばかり剛くなるものと聞いてをります。大御所ほどの弓取もやはりこれだけは下々のものと少しもお變りなさりませぬ。正純も弓矢の故實だけは聊かわきまへたつもりでをります。直之の首は一つ首でもあり、目を見開いてをればこそ、御實檢をお斷り申し上げました。それを強ひてお目通りへ持つて參れと御意なさるのはその好い證據ではございませぬか？」

家康は花鳥の襖越しに正純の言葉を聞いた後、もちろん二度と直之の首を實檢しようとは言はなかつた。

## 二

すると同じ三十日の夜、井伊掃部頭直孝の陣屋に召し使ひになつてゐた女が一人俄に氣の狂つたやうに叫び出した。彼女はやつと三十を越した、古千屋といふ名の女だつた。

「塙團右衞門ほどの侍の首も大御所の實檢には具へをらぬか？　某も一手の大將だつたものを。かういふ辱しめを受けた上は必ず祟りをせずにはおかぬぞ。……」

古千屋はつづけさまに叫びながら、その度に空中へ踊り上らうとした。それは又左右の男女たちの力も殆ど抑へることの出來ないものだつた。凄じい古千屋の叫び聲はもちろん、彼等の彼女を引据ゑようとする騷ぎも一かたならないのに違ひなかつた。

井伊の陣屋の騷がしいことはおのづから徳川家康の耳にもはひらない訣には行かなかつた。のみならず直孝は家康に謁し、古千屋に直之の惡靈の乘り移つた爲に誰も皆恐れてゐることを話した。

「直之の怨むのも不思議はない。では早速實檢しよう。」

家康は大蠟燭の光の中にかうきつぱり言葉を下した。

夜ふけの二條の城の廣間に直之の首を實檢するのは晝間よりも反つてものものしかつた。家康は茶色の羽織を着、下括りの袴をつけたまま、式通りに直之の首を實檢した。その又首の左右には具足をつけた旗本が二人いづれも太刀の柄に手をかけ、家康の實檢する間はぢつと首へ目を注

いでゐた。直之の首は頬たれ首ではなかつた。が、赤銅色を帶びた上、本多正純のいつたやうに大きい兩眼を見開いてゐた。
「これで塙團右衛門も定めし本望でございませう。」
旗本の一人、――横田甚右衛門はかう言つて家康に一禮した。
しかし家康は頷いたぎり、何ともこの言葉に答へなかつた。のみならず直孝を呼び寄せると、彼の耳へ口をつけるやうにし、「その女の素姓だけは檢べておけよ」と小聲に彼に命令した。

三

家康の實檢をすました話はもちろん井伊の陣屋にも傳はつて來ずにはゐなかつた。古千屋はこの話を耳にすると、「本望、本望」と聲をあげ、暫く微笑を浮かべてゐた。それからいかにも疲れはてたやうに深い眠りに沈んで行つた。井伊の陣屋の男女たちはやつと安堵の思ひをした。實際古千屋の男のやうに太い聲に罵り立てるのは氣味の惡いものだつたのに違ひなかつた。
そのうちに夜は明けて行つた。直孝は早速古千屋を召し、彼女の素姓を尋ねて見ることにした。

彼女はかういふ陣屋にゐるには餘りにか細い女だつた。殊に肩の落ちてゐるのはもの哀れよりも寧ろ痛々しかつた。

「そちはどこで産れたな？」

「藝州廣島の御城下でございます。」

直孝はぢつと古千屋を見つめ、かういふ問答を重ねた後、徐に最後の問を下した。

「そちは塙のゆかりのものであらうな？」

古千屋ははつとしたらしかつた。が、ちよつとためらつた後、存外はつきり返事をした。

「はい。お羞しうございますが……」

直之は古千屋の話によれば、彼女に子を一人生ませてゐた。

「そのせゐでございませうか、昨夜も御實檢下さらぬと聞き、女ながらも無念に存じますと、いつか正氣を失ひましたと見え、何やら口走つたやうに承はつてをります。もとよりわたくしの一存には覺えのないことばかりでございますが。……」

古千屋は兩手をついたまま、明かに興奮してゐるらしかつた。それは又彼女のやつれた姿に丁

度朝日に輝いてゐる薄ら氷に近いものを與へてゐた。
「善い。善い。もう下つて休息せい。」
直孝は古千屋を退けた後、もう一度家康の目通りへ出、一々彼女の身の上を話した。
「やはり塙團右衞門にゆかりのあるものでございました。」
家康は初めて微笑した。人生は彼には東海道の地圖のやうに明かだつた。家康は古千屋の狂亂の中にもいつか人生の彼に教へた、何ごとにも表裏のあるといふ事實を感じない訣には行かなかつた。この推測は今度も七十歳を越した彼の經驗に合してゐた。……
「さもあらう。」
「あの女はいかがいたしませう？」
「善いわ、やはり召使つておけ。」
直孝はやや苛立たしげだつた。
「けれども上を欺きました罪は……」
家康は暫くだまつてゐた。が、彼の心の目は人生の底にある闇黑に——その又闇黑の中にゐる

いろいろの怪物に向つてゐた。
「わたくしの一存にとり計らひましても、よろしいものでございませうか？」
「うむ、上を欺いた……」
それは實際直孝には疑ふ餘地などのないことだつた。しかし家康はいつの間にか人一倍大きい目をしたまま、何か敵勢にでも向ひ合つたやうにから堂々と返事をした。――
「いや、おれは欺かれはせぬ。」

（昭和二年五月七日）

# 冬と手紙と

## 一　冬

僕は重い外套にアストラカンの帽をかぶり、市ケ谷の刑務所へ歩いて行つた。僕の從兄は四五日前にその刑務所にはひつてゐた。僕は從兄を慰める親戚總代に外ならなかつた。が、僕の氣もちの中には刑務所に對する好奇心もまじつてゐることは確かだつた。

二月に近い往來は賣出しの旗などの殘つてゐたものの、どこの町全體も冬枯れてゐた。僕は坂を登りながら、僕自身も肉體的にしみじみ疲れてゐることを感じた。僕の叔父は去年の十一月に喉頭癌の爲に故人になつてゐた。それから僕の遠緣の少年はこの正月に家出してゐた。それから——しかし從兄の收監は僕には何よりも打擊だつた。僕は從兄の弟と一しよに最も僕には緣の遠い交渉を重ねなければならなかつた。のみならずそれ等の事件にからまる親戚同志の感情上の問

題は東京に生まれた人々以外に通じ惡いこだはりを生じ勝ちだつた。僕は從兄と面會した上、兎も角どこかに一週間でも靜養したいと思はずにはゐられなかつた。……

市ケ谷の刑務所は草の枯れた、高い土手をめぐらしてゐた。のみならずどこか中世紀じみた門には太い木の格子戸の向うに、霜に焦げた檜などのある、砂利を敷いた庭を透かしてゐた。僕はこの門の前に立ち、長い半白の髯を垂らした、好人物らしい看守に名刺を渡した。それから餘り門と離れてゐない、庇に厚い苔の乾いた面會人控室へつれて行つて貰つた。そこにはもう僕の外にも薄縁りを張つた腰かけの上に何人も腰をおろしてゐた。しかし一番目立つたのは黒縮緬の羽織をひつかけ、何か雜誌を讀んでゐる三十四五の女だつた。

妙に無愛想な一人の看守は時々かう云ふ控室へ來、少しも抑揚のない聲に丁度面會の順に當つた人々の番號を呼び上げて行つた。が、僕はいつまで待つても、容易に番號を呼ばれなかつた。いつまで待つても――僕の刑務所の門をくぐつたのは彼是十時になりかかつてゐた。けれども僕の腕時計はもう一時十分前だつた。

僕は勿論腹も減りはじめた。しかしそれよりもやり切れなかつたのは全然火の氣と云ふものの

ない控室の中の寒さだつた。僕は絶えず足踏みをしながら、苛々する心もちを抑へてゐた。が、大勢の面會人は誰も存外平氣らしかつた。殊に丹前を二枚重ねた、博奕打ちらしい男などは新聞一つ讀まうともせず、ゆつくり蜜柑ばかり食ひつづけてゐた。

しかし大勢の面會人も看守の呼び出しに來る度にだんだん數を減らして行つた。僕はとうとう控室の前へ出、砂利を敷いた庭を歩きはじめた。そこには冬らしい日の光も當つてゐるのに違ひなかつた。けれどもいつか立ち出した風も僕の顔へ薄い塵を吹きつけて來るのに違ひなかつた。僕は自然と依怙地になり、兎に角四時になるまでは控室へはひるまいと決心した。

僕は生憎四時になつても、まだ呼び出して貰はれなかつた。のみならず僕よりも後に來た人々もいつか呼び出しに遇つたと見え、大抵はもうゐなくなつてゐた。僕はとうとう控室へはひり、博奕打ちらしい男にお時宜をした上、僕の場合を相談した。が、彼はにこりともせず、浪花節語りに近い聲にかう云ふ返事をしただけだつた。

「一日に一人しか會はせませんからね。お前さんの前に誰か會つてゐるんでせう。」

勿論かう云ふ彼の言葉は僕を不安にしたのに違ひなかつた。僕は又番號を呼びに來た看守に一

體從兄に面會することは出來るかどうか尋ねることにした。しかし看守は僕の言葉に全然返事をしなかつた上、僕の顏も見ずに歩いて行つてしまつた。同時に又博奕打ちらしい男も二三人の面會人と一しよに看守のあとについて行つてしまつた。僕は土間のまん中に立ち、機械的に卷煙草に火をつけたりした。が、時間の移るにつれ、だんだん無愛想な看守に對する憎しみの深まるのを感じ出した。(僕はこの侮辱を受けた時に急に不快にならないことをいつも不思議に思つてゐる。)

看守のもう一度呼び出しに來たのは彼是五時になりかかつてゐた。僕は又アストラカンの帽をとつた上、看守に同じことを問ひかけようとした。すると看守は橫を向いたまま、僕の言葉を聞かないうちにさつさと向うへ行つてしまつた。「餘りと言へば餘り」とは實際かう云ふ瞬間の僕の感情に違ひなかつた。僕は卷煙草の吸ひさしを投げつけ、控室の向うにある刑務所の玄關へ歩いて行つた。

玄關の石段を登つた左には和服を着た人も何人か硝子窓の向うに事務を執つてゐた。僕はその硝子窓をあけ、黑い紬の紋つきを着た男に出來るだけ靜かに話しかけた。が、顏色の變つてゐる

ことは僕自身はつきり意識してゐた。

「僕はTの面會人です。Tには面會は出來ないんですか？」

「番號を呼びに來るのを待つて下さい。」

「僕は十時頃から待つてゐます。」

「そのうちに呼びに來るでせう。」

「呼びに來なければ待つてゐるんですか？　日が暮れても待つてゐるんですか？」

「まあ、兎に角待つて下さい。兎に角待つた上にして下さい。」

相手は僕のあばれでもするのを心配してゐるらしかつた。僕は腹の立つてゐる中にもちよつとこの男に同情した。「こつちは親戚總代になつてゐれば、向うは刑務所總代になつてゐる、」――そんな可笑しさも感じないのではなかつた。

「もう五時過ぎになつてゐます。面會だけは出來るやうに取り計つて下さい。」

僕はかう言ひ捨てたなり、ひとまづ控室へ歸ることにした。もう暮れかかつた控室の中にはあの丸髷の女が一人、今度は雜誌を膝の上に伏せ、ちやんと顏を起してゐた。まともに見た彼女の

顏はどこかゴシツクの彫刻らしかつた。僕はこの女の前に坐り、未だに刑務所全體に對する弱者の反感を感じてゐた。

　僕のやつと呼び出されたのは彼是六時になりかかつてゐた。僕は今度は目のくりくりした、機敏らしい看守に案内され、やつと面會室の中にはひることになつた。面會室は室と云ふものの、精々二三尺四方ぐらゐだつた。のみならず僕のはひつた外にもペンキ塗りの戸の幾つも並んでゐるのは共同便所にそつくりだつた。面會室の正面にこれも狹い廊下越しに半月形の窓が一つあり、面會人はこの窓の向うに顏を顯はす仕組みになつてゐた。

　從兄はこの窓の向うに、――光の乏しい硝子窓の向うに圓まると肥つた顏を出した。しかし存外變つてゐないことは幾分か僕を力丈夫にした。僕等は感傷主義を交へずに手短かに用事を話し合つた。が、僕の右隣りには兄に會ひに來たらしい十六七の女が一人とめどなしに泣き聲を洩らしてゐた。僕は從兄と話しながら、この右隣りの泣き聲に氣をとめない訣には行かなかつた。

「今度のことは全然寃罪ですから、どうか皆さんにさう言つて下さい。」

從兄は切り口上にかう言つたりした。僕は從兄を見つめたまま、この言葉には何とも答へなか

つた。しかし何とも答へなかつたことはそれ自身僕に息苦しさを與へない訣には行かなかつた。現に僕の左隣りには斑らに頭の禿げた老人が一人やはり半月形の窓越しに息子らしい男にかう言つてゐた。

「會はずにひとりでゐる時にはいろいろのことを思ひ出すのだが、どうも會ふとなると忘れてしまつてな。」

僕は面會室の外へ出た時、何か從兄にすまなかつたやうに感じた。が、それは僕等同志の連帶責任であるやうにも感じた。僕は又看守に案内され、寒さの身にしみる刑務所の廊下を大股に玄關へ歩いて行つた。

或山の手の從兄の家には僕の血を分けた從姉が一人僕を待ち暮らしてゐる筈だつた。僕はごみごみした町の中をやつと四谷見附の停留所へ出、滿員の電車に乘ることにした。「會はずにひとりでゐる時には」と言つた、妙に力のない老人の言葉は未だに僕の耳に殘つてゐた。それは女の泣き聲よりも一層僕には人間的だつた。僕は吊り革につかまつたまま、夕明りの中に電燈をともした麹町の家々を眺め、今更のやうに「人さまざま」と云ふ言葉を思ひ出さずにはゐられなかつた。

三十分ばかりたつた後、僕は從兄の家の前に立ち、コンクリイトの壁についたベルの釦へ指をやつてゐた。かすかに傳はつて來るベルの音は玄關の硝子戸の中に電燈をともした。それから年をとつた女中が一人細目に硝子戸をあけて見た後、「おや……」何とか間投詞を洩らし、すぐに僕を往來に向つた二階の部屋へ案内した。僕はそこのテエブルの上へ外套や帽子を投げ出した時、一時に今まで忘れてゐた疲れを感じずにはゐられなかつた。女中は瓦斯煖爐に火をともし、僕一人を部屋の中に殘して行つた。多少の蒐集癖を持つてゐた從兄はこの部屋の壁にも二三枚の油畫や水彩畫をかかげてゐた。僕はぼんやりそれらの畫を見比べ、今更のやうに有爲轉變などと云ふ昔の言葉を思ひ出してゐた。

そこへ前後してはひつて來たのは從姉や從兄の弟だつた。從姉も僕の豫期したよりもずつと落ち着いてゐるらしかつた。僕は出來るだけ正確に彼等に從兄の傳言を話し、今度の處置を相談し出した。從姉は格別積極的にどうしようと云ふ氣も持ち合せなかつた。のみならず話の相間にもアストラカンの帽をとり上げ、こんなことを僕に話しかけたりした。

「妙な帽子ね。日本で出來るもんぢやないでせう？」

「これ？　これはロシア人のかぶる帽子さ。」

しかし從兄の弟は從兄以上の「仕事師」だけにいろいろの障害を見越してゐた。

「何しろこの間も兄貴の友だちなどは××新聞の社會部の記者に名刺を持たせてよこすんです。その名刺には口止め料金のうち半金は自腹を切つて置いたから、殘金を渡してくれと書いてあるんです。それもこつちで檢べて見れば、その新聞記者に話したのは兄貴の友だち自身なんですからね。勿論半金などを渡したんぢやない。唯殘金をとらせによこしてゐるんです。その又新聞記者も新聞記者ですし、……」

「僕も兎に角新聞記者ですよ。耳の痛いことは御免蒙りますかね。」

僕は僕自身を引き立てる爲にも常談を言はずにはゐられなかつた。が、從兄の弟は酒氣を帶びた目を血走らせたまま、演說でもしてゐるやうに話しつづけた。それは實際常談さへうつかり言はれない權幕に違ひなかつた。

「おまけに豫審判事を怒らせる爲にわざと判事をつかまへては兄貴を辯護する手合ひもあるんですからね。」

「それはあなたからでも話して頂けば、……」

「いや、勿論さう言つてゐるんです。御厚意は重々感謝しますけれども、判事の感情を害すると、反つて御厚意に背きますからと頭を下げて頼んでゐるんです。」

從姉は瓦斯暖爐の前に坐つたまま、アストラカンの帽をおもちやにしてゐた。僕は正直に白狀すれば、從兄の弟と話しながら、この帽のことばかり氣にしてゐた。火の中にでも落されてはたまらない。――そんなことも時々考へてゐた。この帽は僕の友だちのベルリンのユダヤ人町を探がした上、偶然モスクワへ足を伸ばした時、やつと手に入れることの出來たものだつた。

「さう言つても駄目ですかね？」

「駄目どころぢやありません。僕は君たちの爲を思つて骨を折つてゐてやるのに失敬なことを言ふなと來るんですから。」

「成程それぢやどうすることも出來ない。」

「どうすることも出來ません。法律上の問題には勿論、道德上の問題にもならないんですからね。兎に角外見は友人の爲に時間や手數をつぶしてゐる、しかし事實は友人の爲に陷し穽を掘る手傳

ひをしてゐる、——あたしもずゐぶん奮闘主義ですが、ああ云ふやつにかかつては手も足も出すことは出來ません。」

かう云ふ僕等の話の中に俄かに僕等を驚かしたのは「T君萬歳」と云ふ聲だつた。僕は片手に窓かけを擧げ、窓越しに往來へ目を落した。狹い往來には人々が大勢道幅一ぱいに集つてゐた。のみならず××町青年團と書いた提灯が幾つも動いてゐた。僕は從姉たちと顏を見合せ、ふと從兄には××青年團々長と云ふ肩書もあつたのを思ひ出した。

「お禮を言ひに出なくつちやいけないでせうね。」

從姉はやつと「たまらない」と云ふ顏をし、僕等二人を見比べるやうにした。

「何、わたしが行つて來ます。」

從兄の弟は無造作にさつさと部屋を後ろにして行つた。僕は彼の奮闘主義に或羨しさを感じながら、從姉の顏を見ないやうに壁の上の畫などを眺めたりした。しかし何も言はずにゐることはそれ自身僕には苦しかつた。と云つて何か言つた爲に二人とも感傷的になつてしまふことはなほ更僕には苦しかつた。僕は默つて卷煙草に火をつけ、壁にかかげた畫の一枚に、——從兄自身

の肖像畫に遠近法の狂ひなどを見つけてゐた。

「こつちは萬歳どころぢやありはしない。そんなことを言つたつて仕かたはないけれども……」

從姉は妙に空ぞらしい聲にとうとう僕に話しかけた。

「町内ではまだ知らずにゐるのかしら？」

「ええ、……でも一體どうしたんでせう？」

「何が？」

「Tのことよ。お父さんのこと。」

「それはTさんの身になつて見れば、いろいろ事情もあつたらうしさ。」

「さうでせうか？」

僕はいつか苛立たしさを感じ、從姉に後ろを向けたまま、窓の前へ歩いて行つた。窓の下の人人は不相變萬歳の聲を擧げてゐた。それは又「萬歳、萬歳」と三度繰り返して唱へるものだつた。從兄の弟は玄關の前へ出、手ん手に提灯をさし上げた大勢の人々にお時宜をしてゐた。のみならず彼の左右には小さい從兄の娘たちも二人、彼に手をひかれたまま、時々取つてつけたやうにち

よつとお下げの頭を下げたりしてゐた。………

それからもう何年かたつた、或寒さの嚴しい夜、僕は從兄の家の茶の間に近頃始めた薄荷パイプを啣へ、從姉と差し向ひに話してゐた。初七日を越した家の中は氣味の惡いほどもの靜かだつた。從兄の白木の位牌の前には燈心が一本火を澄ましてゐた。その又位牌を据ゑた机の前には娘たちが二人夜着をかぶつてゐた。僕はめつきり年をとつた從姉の顏を眺めながら、ふとあの僕を苦しめた一日の出來事を思ひ出した。しかし僕の口に出したのはかう云ふ當り前の言葉だけだつた。

「薄荷パイプを吸つてゐると、餘計寒さも身にしみるやうだね。」

「さうを、あたしも手足が冷えてね。」

從姉は餘り氣のないやうに長火鉢の炭などを直してゐた。………

（昭和二年六月四日）

## 二　手紙

僕は今この溫泉宿に滯在してゐます。避暑する氣もちもないではありません。しかしまだその外にゆつくり讀んだり書いたりしたい氣もちもあることは確かです。ここは旅行案内の廣告によれば、神經衰弱に善いとか云ふことです。そのせゐか狂人も二人ばかりゐます。一人は二十七八の女です。この女は何も口を利かずに手風琴ばかり彈いてゐます。が、身なりはちやんとしてゐますから、どこか相當な家の奥さんでせう。のみならず二三度見かけた所ではどこかちよつと混血兒じみた、輪廓の正しい顏をしてゐます。もう一人の狂人は赤あかと額の禿げ上つた四十前後の男です。この男は確か左の腕に松葉の入れ墨をしてゐる所を見ると、まだ狂人にならない前には何か意氣な商賣でもしてゐたものかも知れません。僕は勿論この男とは度たび風呂の中でも一つしよになります。K君は（これはここに滯在してゐる或大學の學生です。）この男の入れ墨を指さし、いきなり「君の細君の名はお松さんだね」と言つたものです。するとこの男は湯に浸つたまま、

子供のやうに赤い顏をしました。……

K君は僕よりも十も若い人です。おまけに同じ宿のM子さん親子と可也懇意にしてゐる人です。M子さんは昔風に言へば、若衆顏をしてゐるとでも言ふのでせう。僕はM子さんの女學校時代にお下げに白い後ろ鉢巻をした上、薙刀を習つたと云ふことを聞き、定めしそれは牛若丸か何かに似てゐたことだらうと思ひました。尤もこのM子さん親子にはS君もやはり交際してゐます。S君はK君の友だちです。唯K君と違ふのは、——僕はいつも小說などを讀むと、二人の男性を差別する爲に一人を肥つた男にすれば、一人を瘦せた男にするのをちよつと滑稽に思つてゐます。それから又一人を豪放な男にすれば、一人を纖弱な男にするのにもやはり頰笑まずにはゐられません。現にK君やS君は二人とも肥つてはゐないのです。のみならず二人とも傷き易い神經を持つて生まれてゐるのです。が、K君はS君のやうに容易に弱みを見せません。實際又弱みを見せない修業を積まうともしてゐるらしいのです。

K君、S君、M子さん親子、——僕のつき合つてゐるのはこれだけです。尤もつき合ひと言つたにしろ、唯一しよに散步したり話したりする外はありません。何しろここには溫泉宿の外に

（それもたつた一軒だけです。）カッフエ一つないのです。僕はかう云ふ寂しさを少しも不足には思つてゐません。しかしK君やS君は時々「我等の都會に對する鄕愁」と云ふものを感じてゐます。M子さん親子も、——M子さん親子の場合は複雜です。M子さん親子は貴族主義者です。從つてかう云ふ山の中に滿足してゐる訣はありません。しかしその不滿の中に滿足を感じてゐるのです少くとも彼是一月だけの滿足を感じてゐるのです。

僕の部屋は二階の隅にあります。僕はこの部屋の隅の机に向かひ、午前だけはちやんと勉强します。午後はトタン屋根に日が當るものですから、その烈しい火照りだけでも到底本などは讀めません。では何をするかと言へば、K君やS君に來て貰つてトランプや將棊に閑をつぶしたり、組み立て細工の木枕をして（これはここの名產です。）晝寢をしたりするだけです。五六日前の午後のことです。僕はやはり木枕をしたまま、厚い澁紙の表紙をかけた「大久保武藏鐙」を讀んでゐました。するとそこへ襖をあけていきなり顏を出したのは下の部屋にゐるM子さんです。僕はちよつと狼狽し、莫迦莫迦しいほどちやんと坐り直しました。

「あら、皆さんはいらつしやいませんの？」

「ええ。けふは誰も、……まあ、どうかおはひりなさい。」
M子さんは襖をあけたまま、僕の部屋の縁先に佇みました。
「この部屋はお暑うございますわね。」
逆光線になつたM子さんの姿は耳だけ眞紅に透いて見えます。僕は何か義務に近いものを感じ、M子さんの隣に立つことにしました。
「あなたのお部屋は涼しいでせう。」
「ええ、……でも手風琴の音ばかりして。」
「ああ、あの氣違ひの部屋の向うでしたね。」
僕等はこんな話をしながら、暫く縁先に佇んでゐました。西日を受けたトタン屋根は波がたにぎらぎらかがやいてゐます。そこへ庭の葉櫻の枝から毛蟲が一匹轉げ落ちました。毛蟲は薄いトタン屋根の上にかすかな音を立てたと思ふと、二三度體をうねらせたぎり、すぐにぐつたり死んでしまひました。それは實に呆つ氣ない死です。同時にまた實に世話の無い死です。——
「フライ鍋の中へでも落ちたやうですね。」

「あたしは毛蟲は大嫌ひ。」

「僕は手でもつまめますがね。」

「Sさんもそんなことを言つていらつしやいました。」

M子さんは眞面目に僕の顏を見ました。

「S君もね。」

僕の返事はM子さんには氣乘りのしないやうに聞えたのでせう。（僕は實はM子さんに、――と云ふよりもM子さんと云ふ少女の心理に興味を持つてゐたのですが。）M子さんは幾分か拗ねたやうにかう言つて手すりを離れました。

「ぢや又後ほど。」

M子さんの歸つて行つた後、僕は又木枕をしながら、「大久保武藏鐙」を讀みつづけました。が、活字を追ふ間に時々あの毛蟲のことを思ひ出しました。……

僕の散歩に出かけるのはいつも大抵は夕飯前です。かう云ふ時にはM子さん親子をはじめ、K君やS君も一しよに出るのです。その又散歩する場所もこの村の前後二三町の松林より外にはあ

りません。これは毛蟲の落ちるのを見た時よりも或は前の出來事でせう。僕等はやはりはしやぎながら、松林の中を歩いてゐました。僕等は?——尤もM子さんのお母さんだけは例外です。この奥さんは年よりは少くとも十位はふけて見えるのでせう。僕はM子さんの一家のことは何も知らないものの一人です。しかしいつか讀んだ新聞記事によれば、この奥さんはM子さんやM子さんの兄さんを産んだ人ではない筈です。M子さんの兄さんはどこかの入學試驗に落第した爲にお父さんのピストルで自殺しました。僕の記憶を信ずるとすれば、新聞は皆兄さんの自殺したのもこの後妻に來た奥さんに責任のあるやうに書いてゐました。この奥さんの年をとつてゐるのも或はそんな爲ではないでせうか? 僕はまだ五十を越してゐないのに髮の白い奥さんを見る度にどうもそんなことを考へ易いのです。しかし僕等四人だけは兎に角しやべりつづけにしやべつてゐました。するとM子さんは何を見たのか、「あら、いや」と言つてK君の腕を抑へました。

「何です? 僕は蛇でも出たのかと思つた。」

それは實際何でもない、唯乾いた山砂の上に細かい蟻が何匹も半死半生の赤蜂を引きずつて行かうとしてゐたのです。赤蜂は仰けになつたなり、時々裂けかかつた翅を鳴らし、蟻の群を逐ひ

拂つてゐます。が、蟻の群は蹴散らされたと思ふと、すぐに又赤蜂の翅や脚にすがりついてしまふのです。僕等はそこに立ちどまり、暫くこの赤蜂のあがいてゐるのを眺めてゐました。現にM子さんも始めに似合はず、妙に眞劍な顏をしたまま、やはりK君の側に立つてゐたのです。

「時々劍を出しますわね。」

「蜂の劍は鉤のやうに曲つてゐるものですね。」

僕は誰も默つてゐるものですから、M子さんとこんな話をしてゐました。

「さあ、行きませう。あたしはこんなものを見るのは大嫌ひ。」

M子さんのお母さんは誰よりも先きに歩き出しました。僕等も歩き出したのは勿論です。松林は路をあましたまま、ひつそりと高い草を伸ばしてゐました。僕等の話し聲はこの松林の中に存外高い反響を起しました。殊にK君の笑ひ聲は——K君はS君やM子さんにK君の妹さんのことを話してゐました。この田舍にゐる妹さんは女學校を卒業したばかりらしいのです。が、何でも夫になる人は煙草ものまなければ酒ものまない、品行方正の紳士でなければならないと言つてゐると云ふことです。

「僕等は皆落第ですね？」

S君は僕にかう言ひました。が、僕の目にはいぢらしい位、妙にこれ切つた顔をしてゐました。

「煙草ものまなければ酒ものまないなんて、……つまり兄貴へ當てつけてゐるんだね。」

K君も咄嗟につけ加へました。僕は善い加減な返事をしながら、だんだんこの散歩を苦にし出しました。從つて突然M子さんの「もう歸りませう」と言つた時にはほつとひと息ついたものです。M子さんは晴れ晴れした顔をしたまま、僕等の何とも言はないうちにくるりと足を返しました。が、溫泉宿へ歸る途中はM子さんのお母さんとばかり話してゐました。僕等は勿論前と同じ松林の中を歩いて行つたのです。けれどもあの赤蜂はもうどこかへ行つてゐました。

それから半月ばかりたつた後です。僕はどんより曇つてゐるせゐか、何をする氣もなかつたものですから、池のある庭へおりて行きました。するとM子さんのお母さんが一人船底椅子に腰をおろし、東京の新聞を讀んでゐました。M子さんはけふはK君やS君と溫泉宿の後ろにあるY山へ登りに行つた筈です。この奧さんは僕を見ると、老眼鏡をはづして挨拶しました。

「こちらの椅子をさし上げませうか？」

「いいえ、これで結構です。」
僕は丁度そこにあつた、古い籐椅子にかけることにしました。
「昨晩はお休みになれなかつたでせう？」
「いいえ、……何かあつたのですか？」
「あの氣の違つた男の方がいきなり廊下へ駈け出したりなすつたものですから。」
「そんなことがあつたんですか？」
「ええ、どこかの銀行の取りつけ騷ぎを新聞でお讀みなすつたのが始まりなんですつて。」
僕はあの松葉の入れ墨をした氣違ひの一生を想像しました。それから、――笑はれても仕かたはありません、僕の弟の持つてゐる株券のことなどを思ひ出しました。
「Sさんなどはこぼしていらつしやいましたよ。……」
M子さんのお母さんはいつか僕に婉曲にS君のことを尋ね出しました。が、僕はどう云ふ返事にも「でせう」だの「と思ひます」だのとつけ加へました。(僕はいつも一人の人をその人としてだけしか考へられません。家族とか財産とか社會的地位とか云ふことには自然と冷淡になつてゐるの

です。おまけに一番惡いことはその人としてだけ考へる時でもいつか僕自身に似てゐる點だけその人の中から引き出した上、勝手に好惡を定めてゐるのです。)のみならずこの奧さんの氣もちに、――S君の身もとを調べる氣もちに或可笑しさを感じました。

「Sさんは神經質でいらつしやるでせう?」

「ええ、まあ神經質と云ふのでせう。」

「人ずれはちつともしていらつしやいませんね。」

「それは何しろ坊ちやんですから、……しかしもう一通りのことは心得てゐると思ひますが。」

僕はかう云ふ話の中にふと池の水際に澤蟹の這つてゐるのを見つけました。しかもその澤蟹はもう一匹の澤蟹を、――甲羅の半ば碎けかかつたもう一匹の澤蟹をじりじり引きずつて行く所なのです。僕はいつかクロポトキンの相互扶助論の中にあつた蟹の話を思ひ出しました。クロポトキンの敎へる所によれば、いつも蟹は怪我をした仲間を扶けて行つてやると云ふことです。しかし又或動物學者の實例を觀察した所によれば、それはいつも怪我をした仲間を食ふ爲にやつてゐると云ふことです。僕はだんだん石菖のかげに二匹の澤蟹の隱れるのを見ながら、M子さんのお

母さんと話してゐました。が、いつか僕等の話に全然興味を失つてゐました。
「みんなの歸つて來るのは夕がたでせう？」
僕はかう言つて立ち上りました。同時に又M子さんのお母さんの顏に或表情を感じました。それはちよつとした驚きと一しよに何か本能的な憎しみを閃かせてゐる表情です。けれどもこの奥さんはすぐにもの靜かに返事をしました。
「ええ、M子もそんなことを申してをりました。」
僕は僕の部屋へ歸つて來ると、又縁先の手すりにつかまり、松林の上に盛り上つたY山の頂を眺めました。山の頂は岩むらの上に薄い日の光をなすつてゐます。僕はかう云ふ景色を見ながら、ふと僕等人間を憐みたい氣もちを感じました。……
M子さん親子はS君と一しよに二三日前に東京へ歸りました。K君は何でもこの溫泉宿へ妹さんの來るのを待ち合せた上、（それは多分僕の歸るのよりも一週間ばかり遲れるでせう。）歸り仕度をするとか云ふことです。僕はK君と二人だけになつた時に幾分か寛ぎを感じました。尤もK君を劬りたい氣もちの反つてK君にこたへることを惧れてゐるのに違ひありません。が、兎に角K

君と一しよに比較的氣樂に暮らしてゐます。現にゆうべも風呂にはひりながら、一時間もセザアル・フランクを論じてゐました。

僕は今僕の部屋にこの手紙を書いてゐます。ここはもう初秋にはひつてゐます。僕はけさ目を醒ました時、僕の部屋の障子の上に小さいY山や松林の逆さまに映つてゐるのを見つけました。それは勿論戸の節穴からさして來る光の爲だつたのです。しかし僕は腹ばひになり、一本の卷煙草をふかしながら、この妙に澄み渡つた、小さい初秋の風景にいつにない靜かさを感じました。

……………

ではさやうなら。東京ももう朝晩は大分凌ぎよくなつてゐるでせう。どうかお子さんたちにもよろしく言つて下さい。

（昭和二年六月七日）

# 三つの窓

## 1 鼠

一等戰鬪艦××の横須賀軍港へはひつたのは六月にはひつたばかりだつた。軍港を圍んだ山々はどれも皆雨の爲に煙つてゐた。元來軍艦は碇泊したが最後、鼠の殖えなかつたと云ふためしはない。――××も亦同じことだつた。長雨の中に旗を垂らした二萬噸の××の甲板の下にも鼠はいつか手箱だの衣嚢だのにもつきはじめた。

かう云ふ鼠を狩る爲に鼠を一匹捉へたものには一日の上陸を許すと云ふ副長の命令の下つたのは碇泊後三日にならない頃だつた。勿論水兵や機關兵はこの命令の下つた時から熱心に鼠狩りにとりかかつた。鼠は彼等の力の爲に見る見る數を減らして行つた。從つて彼等は一匹の鼠も爭はない訣には行かなかつた。

「この頃みんなの持つて來る鼠は大抵八つ裂きになつてゐるぜ。寄つてたかつて引つぱり合ふも

のだから。」

ガンルウムに集つた將校たちはこんなことを話して笑つたりした。少年らしい顏をしたA中尉もやはり彼等の一人だつた。つゆ空に近い人生はのんびりと育つたA中尉にはほんたうには何もわからなかつた。が、水兵や機關兵の上陸したがる心もちは彼にもはつきりわかつてゐた。A中尉は卷煙草をふかしながら、彼等の話にまじる時にはいつもかう云ふ返事をしてゐた。

「さうだらうな。おれでも八つ裂きにし兼ねないから。」

彼の言葉は獨身者の彼だけに言はれるのに違ひなかつた。彼の友だちのY中尉は一年ほど前に妻帶してゐた爲に大抵水兵や機關兵の上にわざと冷笑を浴びせてゐた。それは又何ごとにも容易に弱みを見せまいとするふだんの彼の態度にも合してゐることは確かだつた。褐色の口髭の短い彼は一杯の麥酒に醉つた時さへ、テエブルの上に頰杖をつき、時々A中尉にかう言つたりしてゐた。

「どうだ、おれたちも鼠狩をしては？」

或雨の晴れ上つた朝、甲板士官だつたA中尉はSと云ふ水兵に上陸を許可した。それは彼の小

鼠を一匹、――しかも五體の整つた小鼠を一匹とつた爲だつた。人一倍體の逞しいSは珍しい日の光を浴びたまま、幅の狭い舷梯を下つて行つた。すると仲間の水兵が一人身輕に舷梯を登りながら、丁度彼とすれ違ふ拍子に常談のやうに彼に聲をかけた。

「おい、輸入か？」

「うん、輸入だ。」

彼等の問答はA中尉の耳にはひらずにはゐなかつた。彼はSを呼び戻し、甲板の上に立たせたまま、彼等の問答の意味を尋ね出した。

「輸入とは何か？」

Sはちやんと直立し、A中尉の顔を見てゐたものの、明らかにしよげ切つてゐるらしかつた。

「輸入とは外から持つて來たものであります。」

「何の爲に外から持つて來たか？」

A中尉は勿論何の爲に持つて來たかを承知してゐた。が、Sの返事をしないのを見ると、急に彼に忌々しさを感じ、力一ぱい彼の頬を擲りつけた。Sはちよつとよろめいたものの、すぐに又

不動の姿勢をした。

「誰が外から持つて來たか?」

Sは又何とも答へなかつた。A中尉は彼を見つめながら、もう一度彼の横顏を張りつける場合を想像してゐた。

「誰だ?」

「わたくしの家内であります。」

「面會に來たときに持つて來たのか?」

「はい。」

A中尉は何か心の中に微笑しずにはゐられなかつた。

「何に入れて持つて來たか?」

「菓子折に入れて持つて來ました。」

「お前の家はどこにあるのか?」

「平坂下であります。」

「お前の親は達者でゐるか？」
「いえ、家内と二人暮らしであります。」
「子供はないのか？」
「はい。」
Sはかう云ふ問答の中も不安らしい容子を改めなかつた。A中尉は彼を立たせて措いたまま、ちよつと横須賀の町へ目を移した。横須賀の町は山々の中にもごみごみと屋根を積み上げてゐた。それは日の光を浴びてゐたものの、妙に見すぼらしい景色だつた。
「お前の上陸は許可しないぞ。」
「はい。」
Sは A 中尉の默つてゐるのを見、どうしようかと迷つてゐるらしかつた。が、A 中尉は次に命令する言葉を心の中に用意してゐた。が、暫く何も言はずに甲板の上を歩いてゐた。――こいつは罰を受けるのを恐れてゐる。」――そんな氣もあらゆる上官のやうに A 中尉には愉快でないことはなかつた。

「もう善い。あつちへ行け。」
A中尉はやつとかう言つた。Sは擧手の禮をした後、くるりと彼に後ろを向け、ハッチの方へ歩いて行かうとした。彼は微笑しないやうに努力しながら、Sの五六歩隔つた後、俄かに又「おい待て」と聲をかけた。
「はい。」
Sは咄嗟にふり返つた。が、不安はもう一度體中に漲つて來たらしかつた。
「お前に言ひつける用がある。平坂下にはクラッカアを賣つてゐる店があるな?」
「はい。」
「あのクラッカアを一袋買つて來い。」
「今でありますか?」
「さうだ。今すぐに。」
A中尉は日に燒けたSの頰に涙の流れるのを見のがさなかつた。——
それから二三日たつた後、A中尉はガンルウムのテエブルに女名前の手紙に目を通してゐた。

手紙は桃色の書簡箋に覺束ないペンの字を並べたものだつた。彼は一通り讀んでしまふと、一本の巻煙草に火をつけながら、丁度前にゐたY中尉にこの手紙を投げ渡した。

「何だ、これは？ ……『昨日のことは夫の罪にては無之、皆淺はかなるわたくしの心より起りしこと故、何とぞ不悪御ゆるし下され度候。……尚又御志のほどは後のちまでも忘れまじく』……」

Y中尉は手紙を持つたまま、だんだん輕蔑の色を浮べ出した。それから無愛想にA中尉の顏を見、冷かすやうに話しかけた。

「善根を積んだと云ふ氣がするだらう？」

「ふん、多少しないこともない。」

A中尉は輕がると受け流したまま、圓窓の外を眺めてゐた。圓窓の外に見えるのは雨あしの長い海ばかりだつた。しかし彼は暫くすると、俄かに何かに羞ぢるやうにかうY中尉に聲をかけた。

「けれども妙に寂しいんだがね。あいつのビンタを張つた時には可哀さうだとも何とも思はなかつた癖に。……」

Y中尉はちよつと疑惑とも躊躇ともつかない表情を示した。それから何とも返事をしずにテエブルの上の新聞を讀みはじめた。ガンルウムの中には二人の外に丁度誰もゐ合はせなかつた。が、テエブルの上のコツプにはセロリイが何本もさしてあつた。A中尉もこの水々しいセロリイの葉を眺めたまま、やはり巻煙草ばかりふかしてゐた。かう云ふ素つけないY中尉に不思議にも親しみを感じながら。……

## 2 三人

一等戰闘艦××は或海戰を終つた後、五隻の軍艦を從へながら、靜かに鎭海灣へ向つて行つた。海はいつか夜になつてゐた。が、左舷の水平線の上には大きい鎌なりの月が一つ赤あかと空にかかつてゐた。二萬噸の××の中は勿論まだ落ち着かなかつた。しかしそれは勝利の後だけに活き活きとしてゐることは確かだつた。唯小心者のK中尉だけはかう云ふ中にも疲れ切つた顔をしながら、何か用を見つけてはわざとそこここを歩きまはつてゐた。

この海戰の始まる前夜、彼は甲板を歩いてゐるうちにかすかな角燈の光を見つけ、そつとそこ

へ歩いて行つた。するとそこには年の若い軍樂隊の樂手が一人甲板の上に腹ばひになり、敵の目を避けた角燈の光に聖書を讀んでゐるのであつた。K中尉は何か感動し、この樂手に優しい言葉をかけた。樂手はちよいと驚いたらしかつた。が、相手の上官の小言を言はないことを發見すると、忽ち女らしい微笑を浮かべ、怯づ怯づ彼の言葉に答へ出した。……しかしその若い樂手ももう今ではメエン・マストの根もとに中つた砲彈の爲に死骸になつて横になつてゐた。K中尉は彼の死骸を見た時、俄かに「死は人をして靜かならしむ」と云ふ文章を思ひ出した。若しK中尉自身も砲彈の爲に咄嗟に命を失つてゐたとすれば、――それは彼にはどう云ふ死よりも幸福のやうに思はれるのだつた。

けれどもこの海戰の前の出來事は感じ易いK中尉の心に未だにはつきり殘つてゐた。戰闘準備を整へた一等戰闘艦××はやはり五隻の軍艦を從へ、浪の高い海を進んで行つた。すると右舷の大砲が一門なぜか蓋を開かなかつた。しかももう水平線には敵の艦隊の擧げる煙も幾すぢかかすかにたなびいてゐた。この手ぬかりを見た水兵たちの一人は砲身の上へ跨るが早いか、身輕に砲口まで腹這つて行き、兩足で蓋を押しあけようとした。しかし蓋をあけることは存外容易には出

來ないらしかつた。水兵は海を下にしたまま、何度も兩足をあがくやうにしてゐた。が、時々顏を擧げては白い齒を見せて笑つたりもしてゐた。そのうちに××は大うねりに進路を右へ曲げはじめた。同時に又海は右舷全體へ凄まじい浪を浴びせかけた。それは勿論あつと言ふ間に大砲に跨つた水兵の姿をさらつてしまふのに足るものだつた。海の中に落ちた水兵は一生懸命に片手を擧げ、何かおほ聲に叫んでゐた。ブイは水兵たちの罵る聲と一しよに海の上へ飛んで行つた。しかし勿論××は敵の艦隊を前にした以上、ボオトをおろす訣には行かなかつた。水兵はブイにとりついたものの、見る見る遠ざかるばかりだつた。彼の運命は遲かれ早かれ溺死するのに定まつてゐた。のみならず鱶はこの海にも決して少いとは言はれなかつた。……

若い樂手の戰死に對するK中尉の心もちはこの海戰の前の出來事の記憶と對照を作らずにゐる訣はなかつた。彼は兵學校へはひつたものの、いつか一度は自然主義の作家になることを空想してゐた。のみならず兵學校を卒業してからもモオパスサンの小說などを愛讀してゐた。人生はかう云ふK中尉には薄暗い一面を示し勝ちだつた。彼は××に乘り組んだ後、エヂプトの石棺に書いてあつた「人生――戰鬪」と云ふ言葉を思ひ出し、××の將校や下士卒は勿論、××そのものこ

そ言葉通りにエヂプト人の格言を鋼鐵に組み上げてゐると思つたりした。從つて樂手の死骸の前には何かあらゆる戰ひを終つた靜かさを感じずにはゐられなかつた。しかしあの水兵のやうにどこまでも生きようとする苦しさもたまらないと思はずにはゐられなかつた。

K中尉は額の汗を拭きながら、せめては風にでも吹かれる爲に後部甲板のハツチを登つて行つた。すると十二吋の砲塔の前に綺麗に顏を剃つた甲板士官が一人兩手を後ろに組んだまま、ぶらぶら甲板を歩いてゐた。その又前には下士が一人頰骨の高い顏を半ば俯向け、砲塔を後ろに直立してゐた。K中尉はちよつと不快になり、そはそは甲板士官の側へ歩み寄つた。

「どうしたんだ？」

「何、副長の點檢前に便所へはひつてゐたもんだから。」

それは勿論軍艦の中では餘り珍らしくない出來事だつた。K中尉はそこに腰をおろし、スタンシヨンを取り拂つた左舷の海や赤い鎌なりの月を眺め出した。あたりは甲板士官の靴の音の外に人聲も何も聞えなかつた。K中尉は幾分か氣安さを感じ、やつとけふの海戰中の心もちなどを思ひ出してゐた。

「もう一度わたくしはお願ひ致します。善行賞はお取り上げになつても仕かたはありません。」

下士は俄に頭を擧げ、かう甲板士官に話しかけた。K中尉は思はず彼を見上げ、薄暗い彼の顏の上に何か眞劍な表情を感じた。しかし快活な甲板士官はやはり兩手を組んだまま、靜かに甲板を歩きつづけてゐた。

「莫迦なことを言ふな。」

「けれどもここに起立してゐてはわたくしの部下に顏も合はされません。進級の遲れるのも覺悟してをります。」

「進級の遲れるのは一大事だ。それよりもそこに起立してゐろ。」

甲板士官はかう言つた後、氣輕に又甲板を歩きはじめた。K中尉も理智的には甲板士官に同意見だつた。のみならずこの下士の名譽心を感傷的と思ふ氣もちもない訣ではなかつた。が、ぢつと頭を垂れた下士は妙にK中尉を不安にした。

「ここに起立してゐるのは恥辱であります。」

下士は低い聲に頼みつづけた。

「それはお前の招いたことだ。」
「罰は甘んじて受けるつもりでをります。唯どうか起立してゐることは……」
「唯恥辱と云ふ立てまへから見れば、どちらも畢竟同じことぢやないか？」
「しかし部下に威厳を失ふのはわたくしとしては苦しいのであります。」
甲板士官は何とも答へなかつた。下士は、――下士もあきらめたと見え、「あります」に力を入れたぎり、一言も言はずに佇んでゐた。K中尉はだんだん不安になり、（しかも又一面にはこの下士の感傷主義に欺されまいと云ふ氣もない訣ではなかつた。）何か彼の爲に言つてやりたいのを感じた。しかしその「何か」も口を出た時には特色のない言葉に變つてゐた。
「靜かだな。」
「うん。」
甲板士官はかう答へたなり、今度は顋をなでて歩いてゐた。海戰の前夜にK中尉に「昔、木村重成は……」などと言ひ、特に叮嚀に剃つてゐた顋を。……
この下士は罰をすました後、いつか行方不明になつてしまつた。が、投身することは勿論當直

のある限りは絶對に出來ないのに違ひなかつた。のみならず自殺の行はれ易い石炭庫の中にもゐないことは半日とたたないうちに明かになつた。しかし彼の行方不明になつたことは確かに彼の死んだことだつた。彼は母や弟にそれぞれ遺書を殘してゐた。彼に罰を加へた甲板士官は誰の目にも落ち着かなかつた。K中尉は小心ものだけに人一倍彼に同情し、K中尉自身の飲まない麥酒を何杯も強ひずにはゐられなかつた。が、同時に又相手の醉ふことを心配しずにもゐられなかつた。

「何しろあいつは意地つぱりだつたからなあ。しかし死ななくつても善いぢやないか？――」

相手は椅子からずり落ちかかつたなり、何度もこんな愚痴を繰り返してゐた。

「おれは唯立つてゐろと言つただけなんだ。それを何も死ななくつたつて、……」

××の鎭海灣へ碇泊した後、煙突の掃除にはひつた機關兵は偶然この下士を發見した。彼は煙突の中に垂れた一すぢの鎖に縊死してゐた。が、彼の水兵服は勿論、皮や肉も燒け落ちた爲に下つてゐるのは骸骨だけだつた。かう云ふ話はガンルウムにゐたK中尉にも傳はらない訣はなかつた。彼はこの下士の砲塔の前に佇んでゐた姿を思ひ出し、まだどこかに赤い月の鎌なりにかかつ

てゐるやうに感じた。

この三人の死はK中尉の心にいつまでも暗い影を投げてゐた。彼はいつか彼等の中に人生全體さへ感じ出した。しかし年月はこの厭世主義者をいつか部內でも評判の善い海軍少將の一人に數へはじめた。彼は揮毫を勸められても、滅多に筆をとり上げたことはなかつた。が、やむを得ない場合だけは必ず畫帖などにかう書いてゐた。――

君看双眼色
不語似無愁

3　一等戰鬪艦××

一等戰鬪艦××は橫須賀軍港のドツクにはひることになつた。修繕工事は容易に捗どらなかつた。二萬噸の××は高い兩舷の內外に無數の職工をたからせたまま、何度もいつにない苛立たしさを感じた。が、海に浮かんでゐることも蠣にとりつかれることを思へば、むづ痒い氣もするのに違ひなかつた。

横須賀軍港には××の友だちの△△も碇泊してゐた。一萬二千噸の△△は××よりも年の若い軍艦だつた。彼等は廣い海越しに時々聲のない話をした。△△は××の年齢には勿論、造船技師の手落ちから舵の狂ひ易いことに同情してゐた。が、××を劬る爲に一度もそんな問題を話し合つたことはなかつた。のみならず何度も海戰をして來た××に對する尊敬の爲にいつも敬語を用ひてゐた。

すると或曇つた午後、△△は火藥庫に火のはひつた爲に俄かに恐しい爆聲を擧げ、半ば海中に横になつてしまつた。××は勿論びつくりした。(尤も大勢の職工たちはこの××の震へたのを物理的に解釋したのに違ひなかつた。)海戰もしない△△の急に片輪になつてしまふ、――それは實際××には殆ど信じられない位だつた。彼は努めて驚きを隱し、はるかに△△を勵したりした。が、△△は傾いたまま、炎や煙の立ち昇る中に唯唸り聲を立てるだけだつた。

それから三四日たつた後、二萬噸の××は兩舷の水壓を失つてゐた爲にだんだん甲板も乾割れはじめた。この容子を見た職工たちは愈修繕工事を急ぎ出した。が、××はいつの間にか彼自身を見離してゐた。△△はまだ年も若いのに目の前の海に沈んでしまつた。かう云ふ△△の運命

を思へば、彼の生涯は少くとも喜びや苦しみを嘗め盡してゐた。××はもう昔になつた或海戰の時を思ひ出した。それは旗もずたずたに裂ければ、マストさへ折れてしまふ海戰だつた。……二萬噸の××は白じらと乾いたドツクの中に高だかと艦首を擡げてゐた。彼の前には巡洋艦や驅逐艇が何隻も出入してゐた。それから新らしい潛航艇や水上飛行機も見えないことはなかつた。しかしそれ等は××には果なさを感じさせるばかりだつた。××は照つたり曇つたりする横須賀軍港を見渡したまま、ぢつと彼の運命を待ちつづけてゐた。その間もやはりおのづから甲板のじりじり反り返つて來るのに幾分か不安を感じながら。……

（昭和二年六月十日）

# 歯車

## 一　レエン・コオト

僕は或知り人の結婚披露式につらなる爲に鞄を一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした。自動車の走る道の兩がはは大抵松ばかり茂つてゐた。上り列車に間に合ふかどうかは可也怪しいのに違ひなかつた。自動車には丁度僕の外に或理髪店の主人も乘り合せてゐた。彼は棗のやうにまるまると肥つた、短い顋髯の持ち主だつた。僕は時間を氣にしながら、時々彼と話をした。

「妙なこともありますね。××さんの屋敷には晝間でも幽靈が出るつて云ふんですが。」

「晝間でもね。」

僕は冬の西日の當つた向うの松山を眺めながら、善い加減に調子を合せてゐた。

「尤も天氣の善い日には出ないさうです。一番多いのは雨のふる日だつて云ふんですが。」

「雨のふる日に濡れに來るんぢやないか？」
「御常談で。……しかしレエン・コオトを着た幽靈だつて云ふんです。」
自動車はラツパを鳴らしながら、或停車場へ横着けになつた。僕は或理髮店の主人に別れ、停車場の中へはひつて行つた。すると果して上り列車は二三分前に出たばかりだつた。待合室のベンチにはレエン・コオトを着た男が一人ぼんやり外を眺めてゐた。僕は今聞いたばかりの幽靈の話を思ひ出した。が、ちよつと苦笑したぎり、兎に角次の列車を待つ爲に停車場前のカツフエへはひることにした。

それはカツフエと云ふ名を與へるのも考へものに近いカツフエだつた。僕は隅のテエブルに坐り、ココアを一杯註文した。テエブルにかけたオイル・クロオスは白地に細い青の線を荒い格子に引いたものだつた。しかしもう隅々には薄汚いカンヴアスを露してゐた。僕は膠臭いココアを飲みながら、人げのないカツフエの中を見まはした。埃じみたカツフエの壁には「親子丼」だの「カツレツ」だのと云ふ紙札が何枚も貼つてあつた。
「地玉子、オムレツ」

僕はかう云ふ紙札に東海道線に近い田舍を感じた。それは麥畠やキャベツ畠の間に電氣機關車の通る田舍だつた。……

次の上り列車に乘つたのはもう日暮に近い頃だつた。僕はいつも二等に乘つてゐた。が、何かの都合上、その時は三等に乘ることにした。

汽車の中は可也こみ合つてゐた。しかも僕の前後にゐるのは大礒かどこかへ遠足に行つたらしい小學校の女生徒ばかりだつた。僕は卷煙草に火をつけながら、かう云ふ女生徒の群れを眺めてゐた。彼等はいづれも快活だつた。のみならず殆どしやべり續けだつた。

「寫眞屋さん、ラヴ・シインつて何？」

やはり遠足について來たらしい、僕の前にゐた「寫眞屋さん」は何とかお茶を濁してゐた。しかし十四五の女生徒の一人はまだいろいろのことを問ひかけてゐた。僕はふと彼女の鼻に蓄膿症のあることを感じ、何か頰笑まずにはゐられなかつた。それから又僕の隣りにゐた十二三の女生徒の一人は若い女教師の膝の上に坐り、片手に彼女の頸を抱きながら、片手に彼女の頰をさすつてゐた。しかも誰かと話す合ひ間に時々かう女教師に話しかけてゐた。

「可愛いわね、先生は。可愛い目をしていらつしやるわね。」

彼等は僕には女生徒よりも一人前の女と云ふ感じを與へた。林檎を皮ごと嚙じつてゐたり、キヤラメルの紙を剝いてゐることを除けば。……しかし年かさらしい女生徒の一人は僕の側を通る時に誰かの足を踏んだと見え、「御免なさいまし」と聲をかけた。彼女だけは彼等よりもませてゐるだけに反つて僕には女生徒らしかつた。僕は卷煙草を啣へたまま、この矛盾を感じた僕自身を冷笑しない訣には行かなかつた。

いつか電燈をともした汽車はやつと或郊外の停車場へ着いた。僕は風の寒いプラツトフオオムへ下り、一度橋を渡つた上、省線電車の來るのを待つことにした。すると偶然顏を合せたのは或會社にゐるT君だつた。僕等は電車を待つてゐる間に不景氣のことなどを話し合つた。T君は勿論僕などよりもかう云ふ問題に通じてゐた。が、逞しい彼の指には餘り不景氣には緣のない土耳古石の指環も嵌まつてゐた。

「大したものを嵌めてゐるね。」

「これか？　これはハルビンへ商賣に行つてゐた友だちの指環を買はされたんだよ。そいつも今

は往生してゐる。コオペラティヴと取引きが出來なくなつたものだから。」

僕等の乘つた省線電車は幸ひにも汽車ほどこんでゐなかつた。僕等は並んで腰をおろし、いろいろのことを話してゐた。T君はついこの春に巴里にある勤め先から東京へ歸つたばかりだつた。從つて僕等の間には巴里の話も出勝ちだつた。カイヨオ夫人の話、蟹料理の話、御外遊中の或殿下の話、……

「佛蘭西は存外困つてはゐないよ。唯元來佛蘭西人と云ふやつは税を出したがらない國民だから、内閣はいつも倒れるがね。……」

「だつてフランは暴落するしさ。」

「それは新聞を讀んでゐればね。しかし向うにゐて見給へ。新聞紙上の日本なるものはのべつに大地震や大洪水があるから。」

するとレエン・コオトを着た男が一人僕等の向うへ來て腰をおろした。僕はちよつと無氣味になり、何か前に聞いた幽靈の話をT君に話したい心もちを感じた。が、T君はその前に杖の柄をくるりと左へ向け、顏は前を向いたまま、小聲に僕に話しかけた。

「あすこに女が一人ゐるだらう？　鼠色の毛糸のショオルをした、……」
「あの西洋髪に結つた女か？」
「うん、風呂敷包みを抱へてゐる女さ。あいつはこの夏は輕井澤にゐたよ。ちよつと洒落れた洋裝などをしてね」

しかし彼女は誰の目にも見すぼらしいなりをしてゐるのに違ひなかつた。僕はT君と話しながら、そつと彼女を眺めてゐた。彼女はどこか眉の間に氣違ひらしい感じのする顏をしてゐた。しかもその又風呂敷包みの中から豹に似た海綿をはみ出させてゐた。

「輕井澤にゐた時には若い亞米利加人と踊つたりしてゐたつけ。モダアン……何と云ふやつかね。」

レエン・コオトを着た男は僕のT君と別れる時にはいつかそこにゐなくなつてゐた。僕は省線電車の或停車場からやはり鞄をぶら下げたまま、或ホテルへ歩いて行つた。往來の兩側に立つてゐるのは大抵大きいビルディングだつた　僕はそこを歩いてゐるうちにふと松林を思ひ出した。のみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？——と云ふのは絶えずまは

つてゐる半透明の齒車だつた。僕はかう云ふ經驗を前にも何度か持ち合せてゐた。齒車は次第に數を殖やし、半ば僕の視野を塞いでしまふ、が、それも長いことではない、暫らくの後には消え失せる代りに今度は頭痛を感じはじめる、——それはいつも同じことだつた。眼科の醫者はこの錯覺(?)の爲に度々僕に節煙を命じた。しかしかう云ふ齒車は僕の煙草に親まない二十前にも見えないことはなかつた。僕は又はじまつたなと思ひ、左の目の視力をためす爲に片手に右の目を塞いで見た。左の目は果して何ともなかつた。しかし右の目の瞼の裏には齒車が幾つもまはつてゐた。僕は右側のビルディングの次第に消えてしまふのを見ながら、せつせと往來を歩いて行つた。

ホテルの玄關へはひつた時には齒車ももう消え失せてゐた。が、頭痛はまだ殘つてゐた。僕は外套や帽子を預ける次手に部屋を一つとつて貰ふことにした。それから或雜誌社へ電話をかけて金のことを相談した。

結婚披露式の晩餐はとうに始まつてゐたらしかつた。僕はテエブルの隅に坐り、ナイフやフオオクを動かし出した。正面の新郎や新婦をはじめ、白い凹字形のテエブルに就いた五十人あまり

の人びとは勿論いづれも陽氣だつた。が、僕の心もちは明るい電燈の光の下にだんだん憂鬱になるばかりだつた。僕はこの心もちを遁れる爲に隣にゐた客に話しかけた。彼は丁度獅子のやうに白い頬髯を伸ばした老人だつた。のみならず僕も名を知つてゐた或名高い漢學者だつた。從つて又僕等の話はいつか古典の上へ落ちて行つた。

「麒麟はつまり一角獸ですね。それから鳳凰もフエニツクスと云ふ鳥の、……」

この名高い漢學者はかう云ふ僕の話にも興味を感じてゐるらしかつた。僕は機械的にしやべつてゐるうちにだんだん病的な破壞慾を感じ、堯舜を架空の人物にしたのは勿論「春秋」の著者もずつと後の漢代の人だつたことを話し出した。するとこの漢學者は露骨に不快な表情を示し、少しも僕の顏を見ずに殆ど虎の唸るやうに僕の話を截り離した。

「もし堯舜もゐなかつたとすれば、孔子は譃をつかれたことになる。聖人の譃をつかれる筈はない。」

僕は勿論默つてしまつた。それから又皿の上の肉へナイフやフオクを加へようとした。すると小さい蛆が一匹靜かに肉の緣に蠢いてゐた。蛆は僕の頭の中に Worm と云ふ英語を呼び起し

た。それは又麒麟や鳳凰のやうに或傳說的動物を意味してゐる言葉にも違ひなかつた。僕はナイフやフオクを置き、いつか僕の杯にシャンパアニュのつがれるのを眺めてゐた。

やつと晩餐のすんだ後、僕は前にとつて置いた僕の部屋へこもる爲に人氣のない廊下を歩いて行つた。廊下は僕にはホテルよりも監獄らしい感じを與へるものだつた。しかし幸ひにも頭痛だけはいつの間にか薄らいでゐた。

僕の部屋には鞄は勿論、帽子や外套も持つて來てあつた。僕は壁にかけた外套に僕自身の立ち姿を感じ、急いでそれを部屋の隅の衣裳戸棚の中へ抛りこんだ。それから鏡臺の前へ行き、ぢつと鏡に僕の顏を映した。鏡に映つた僕の顏は皮膚の下の骨組みを露はしてゐた。蛆はかう云ふ僕の記憶に忽ちはつきり浮かび出した。

僕は戸をあけて廊下へ出、どこと云ふことなしに歩いて行つた。するとロツビイへ出る隅に綠いろの笠をかけた、脊の高いスタンドの電燈が一つ硝子戸に鮮かに映つてゐた。それは何か僕の心に平和な感じを與へるものだつた。僕はその前の椅子に坐り、いろいろのことを考へてゐた。が、そこにも五分とは坐つてゐる訣に行かなかつた。レエン・コオトは今度も亦僕の横にあつた

長椅子の背中に如何にもだらりと脱ぎかけてあつた。

「しかも今は寒中だと云ふのに。」

僕はこんなことを考へながら、もう一度廊下を引き返して行つた 廊下の隅の給仕だまりには一人も給仕は見えなかつた。しかし彼等の話し聲はちよつと僕の耳をかすめて行つた。それは何とか言はれたのに答へた All right と云ふ英語だつた。「オオル・ライト」?——僕はいつかこの對話の意味を正確に掴まうとあせつてゐた。「オオル・ライト」?「オオル・ライト」? 何が一體オオル・ライトなのであらう?

僕の部屋は勿論ひつそりしてゐた。が、戸をあけてはひることは妙に僕には無氣味だつた。僕はちよつとためらつた後、思ひ切つて部屋の中へはひつて行つた。それから鏡を見ないやうにし、机の前の椅子に腰をおろした。椅子は蜥蜴の皮に近い、青いマロツク皮の安樂椅子だつた。僕は鞄をあけて原稿用紙を出し、或短篇を續けようとした。けれどもインクをつけたペンはいつまでたつても動かなかつた。のみならずやつと動いたと思ふと、同じ言葉ばかり書きつづけてゐた。

All right……All right……All right, sir……All right……

そこへ突然鳴り出したのはベッドの側にある電話だつた。僕は驚いて立ち上り、受話器を耳へやつて返事をした。

「どなた?」

「あたしです。あたし……」

相手は僕の姉の娘だつた。

「何だい? どうかしたのかい?」

「ええ、あの大へんなことが起つたんです。ですから、……大へんなことが起つたもんですから、今叔母さんにも電話をかけたんです。」

「大へんなこと?」

「ええ、ですからすぐに來て下さい。すぐにですよ。」

電話はそれぎり切れてしまつた。僕はもとのやうに受話器をかけ、反射的にベルの鈕を押した。しかし僕の手の震へてゐることは僕自身はつきり意識してゐた。給仕は容易にやつて來なかつた。僕は苛立たしさよりも苦しさを感じ、何度もベルの鈕を押した、やつと運命の僕に教へた「オオ

ル・ライト」と云ふ言葉を了解しながら。

僕の姉の夫はその日の午後、東京から餘り離れてゐない或田舍に轢死してゐた。しかも季節に緣のないレエン・コオトをひつかけてゐた。僕はいまもそのホテルの部屋に前の短篇を書きつづけてゐる。眞夜中の廊下には誰も通らない。が、時々戶の外に翼の音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼つてあるのかも知れない。

## 二　復讐

僕はこのホテルの部屋に午前八時頃に目を醒ました。が、ベッドをおりようとすると、スリッパアは不思議にも片つぽしかなかつた。それはこの一二年の間、いつも僕に恐怖だの不安だのを與へる現象だつた。のみならずサンダアルを片つぽだけはいた希臘神話の中の王子を思ひ出させる現象だつた。僕はベルを押して給仕を呼び、スリッパアの片つぽを探して貰ふことにした。給仕はけげんな顏をしながら、狹い部屋の中を探しまはつた。

「ここにありました。このバスの部屋の中に。」

「どうして又そんな所に行つてゐたのだらう?」

「さあ、鼠かも知れません。」

僕は給仕の退いた後、牛乳を入れない珈琲を飲み、前の小説を仕上げにかかつた。凝灰岩を四角に組んだ窓は雪のある庭に向つてゐた。僕はペンを休める度にぼんやりとこの雪を眺めたりした。雪は莟を持つた沈丁花の下に都會の煤煙によごれてゐた。それは何か僕の心に傷ましさを與へる眺めだつた。僕は巻煙草をふかしながら、いつかペンを動かさずにいろいろのことを考へてゐた。妻のことを、子供たちのことを、就中姉の夫のことを。……

姉の夫は自殺する前に放火の嫌疑を蒙つてゐた。それも亦實際仕かたはなかつた。彼は家の焼ける前に家の價格に二倍する火災保險に加入してゐた。しかも僞證罪を犯した爲に執行猶豫中の體になつてゐた。けれども僕を不安にしたのは彼の自殺したことよりも僕の東京へ歸る度に必ず火の燃えるのを見たことだつた。僕は或は汽車の中から山を焼いてゐる火を見たり、或は又自動車の中から(その時は妻子とも一しよだつた。)常磐橋界隈の火事を見たりしてゐた。それは彼の家の焼けない前にもおのづから僕に火事のある豫感を與へない訣には行かなかつた。

「今年は家が火事になるかも知れないぜ。」

「そんな縁起の惡いことを。……それでも火事になつたら大變ですね。保險は碌についてゐないし、……」

僕等はそんなことを話し合つたりした。しかし僕の家は燒けずに、――僕は努めて妄想を押しのけ、もう一度ペンを動かさうとした。が、ペンはどうしても一行とは樂に動かなかつた。僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上に轉がつたまま、トルストイの Polikouchka を讀みはじめた。この小說の主人公は虛榮心や病的傾向や名譽心の入り交つた、複雜な性格の持ち主だつた。しかも彼の一生の悲喜劇は多少の修正を加へさへすれば、僕の一生のカリカテュアだつた。殊に彼の悲喜劇の中に運命の冷笑を感じるのは次第に僕を無氣味にし出した。僕は一時間とたたないうちにベッドの上から飛び起きるが早いか、窓かけの垂れた部屋の隅へ力一ぱい本を拋りつけた。

「くたばつてしまへ！」

すると大きい鼠が一匹窓かけの下からバスの部屋へ斜めに床の上を走つて行つた。僕は一足飛

びにバスの部屋へ行き、戸をあけて中を探しまはつた。が、白いタツブのかげにも鼠らしいものは見えなかつた。僕は急に無氣味になり、慌ててスリツパアを靴に換へると、人氣のない廊下を歩いて行つた。

廊下はけふも不相變牢獄のやうに憂鬱だつた。僕は頭を垂れたまま、階段を上つたり下りたりしてゐるうちにいつかコツク部屋へはひつてゐた。コツク部屋は存外明るかつた。が、片側に並んだ竈は幾つも炎を動かしてゐた。僕はそこを通りぬけながら、白い帽をかぶつたコツクたちの冷やかに僕を見てゐるのを感じた。同時に又僕の墮ちた地獄を感じた。「神よ、我を罰し給へ。怒り給ふこと勿れ。恐らくは我滅びん。」——かう云ふ祈禱もこの瞬間にはおのづから僕の脣にのぼらない訣には行かなかつた。

僕はこのホテルの外へ出ると、青ぞらの映つた雪解けの道をせつせと姉の家へ歩いて行つた。道に沿うた公園の樹木は皆枝や葉を黑ませてゐた。のみならずどれも一本ごとに丁度僕等人間のやうに前や後ろを具へてゐた。それも亦僕には不快よりも恐怖に近いものを運んで來た。僕はダンテの地獄の中にある、樹木になつた魂を思ひ出し、ビルディングばかり並んでゐる電車線路の

向うを歩くことにした。しかしそこも一町とは無事に歩くことは出來なかつた。
「ちよつと通りがかりに失禮ですが、……」
それは金鈕の制服を着た二十二三の青年だつた。僕は默つてこの青年を見つめ、彼の鼻の左の側に黑子のあることを發見した。彼は帽を脱いだまま、怯づ怯づかう僕に話しかけた。
「Aさんではいらつしやいませんか？」
「さうです。」
「どうもそんな氣がしたものですから、……」
「何か御用ですか？」
「いえ、唯お目にかかりたかつただけです。僕も先生の愛讀者の……」
僕はもうその時にはちよつと帽をとつたぎり、彼を後ろに歩き出してゐた。先生、A先生、――それは僕にはこの頃では最も不快な言葉だつた。僕はあらゆる罪惡を犯してゐることを信じてゐた。しかも彼等は何かの機會に僕を先生と呼びつづけてゐた。僕はそこに僕を嘲る何ものかを感じずにはゐられなかつた。何ものかを？――しかし僕の物質主義は神秘主義を拒絶せずにはゐ

られなかつた。僕はつい二三箇月前にも或小さい同人雜誌にかう云ふ言葉を發表してゐた。――「僕は藝術的良心を始め、どう云ふ良心も持つてゐない。僕の持つてゐるのは神經だけである。」

……………

姉は三人の子供たちと一しよに露地の奥のバラックに避難してゐた。褐色の紙を貼つたバラックの中は外よりも寒いくらゐだつた。僕等は火鉢に手をかざしながら、いろいろのことを話し合つた。體の逞しい姉の夫は人一倍痩せ細つた僕を本能的に輕蔑してゐた。のみならず僕の作品の不道徳であることを公言してゐた。僕はいつも冷やかにかう云ふ彼を見おろしたまま、一度も打ちとけて話したことはなかつた。しかし姉と話してゐるうちにだんだん彼も僕のやうに地獄に堕ちてゐたことを悟り出した。彼は現に寢臺車の中に幽靈を見たとか云ふことだつた。が、僕は卷煙草に火をつけ、努めて金のことばかり話しつづけた。

「何しろかう云ふ際だしするから、何も彼も賣つてしまはうと思ふの。」

「それはさうだ。タイプライタアなどは幾らかになるだらう。」

「ええ、それから畫などもあるし。」

「次手にＮさん（姉の夫）の肖像畫も賣るか？　しかしあれは…………」

僕はバラックの壁にかけた、額緣のない一枚のコンテ畫を見ると、迂闊に常談も言はれないのを感じた。轢死した彼は汽車の爲に顏もすつかり肉塊になり、僅かに唯口髭だけ殘つてゐたとか云ふことだつた。この話は勿論話自身も薄氣味惡いのに違ひなかつた。しかし彼の肖像畫はどこも完全に描いてあるものの、口髭だけはなぜかぼんやりしてゐた。僕は光線の加減かと思ひ、この一枚のコンテ畫をいろいろの位置から眺めるやうにした。

「何をしてゐるの？」

「何でもないよ。……唯あの肖像畫は口のまはりだけ、……」

姉はちよつと振り返りながら、何も氣づかないやうに返事をした。

「髭だけ妙に薄いやうでせう。」

僕の見たものは錯覺ではなかつた。しかし錯覺ではないとすれば、――僕は午飯の世話にならないうちに姉の家を出ることにした。

「まあ、善いでせう。」

「又あしたでも、……けふは青山まで出かけるのだから。」

「ああ、あすこ？　まだ體の具合は惡いの？」

「やつぱり藥ばかり嚥んでゐる。催眠藥だけでも大變だよ。ヴェロナアル、ノイロナアル、トリオナアル、ヌマアル……」

三十分ばかりたつた後、僕は或ビルディングへはひり、昇降機に乘つて三階へのぼつた。それから或レストオランの硝子戸を押してはひらうとした。が、硝子戸は動かなかつた。のみならずそこには「定休日」と書いた漆塗りの札も下つてゐた。僕は愈不快になり、硝子戸の向うのテエブルの上に林檎やバナナを盛つたのを見たまま、もう一度往來へ出ることにした。すると會社員らしい男が二人何か快活にしやべりながら、このビルディングへはひる爲に僕の肩をこすつて行つた。彼等の一人はその拍子に「イライラしてね」と言つたらしかつた。

僕は往來に佇んだなり、タクシイの通るのを待ち合せてゐた。タクシイは容易に通らなかつた。のみならずたまに通つたのは必ず黄いろい車だつた。（この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としてゐた。）そのうちに僕は緣起の好い綠いろの車を見つけ、兎に角青

山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした。

「イライラする、――tantalizing――Tantalus――Inferno……」

タンタルスは實際硝子戸越しに果物を眺めた僕自身だつた。僕は二度も僕の目に浮かんだダンテの地獄を詛ひながら、ぢつと運轉手の背中を眺めてゐた。そのうちに又あらゆるものの噓であることを感じ出した。政治、實業、藝術、科學、――いづれも皆かう云ふ僕にはこの恐しい人生を隱した雜色のエナメルに外ならなかつた。僕はだんだん息苦しさを感じ、タクシイの窓をあけ放つたりした。が、何か心臟をしめられる感じは去らなかつた。

綠いろのタクシイはやつと神宮前へ走りかかつた。そこには或精神病院へ曲る橫町が一つある筈だつた。しかしそれもけふだけはなぜか僕にはわからなかつた。僕は電車の線路に沿ひ、何度もタクシイを往復させた後、とうとうあきらめておりることにした。

僕はやつとその橫町を見つけ、ぬかるみの多い道を曲つて行つた。するといつか道を間違へ、青山齋場の前へ出てしまつた。それは彼是十年前にあつた夏目先生の告別式以來、一度も僕は門の前さへ通つたことのない建物だつた。十年前の僕も幸福ではなかつた。しかし少くとも平和だ

つた。僕は砂利を敷いた門の中を眺め、「漱石山房」の芭蕉を思ひ出しながら、何か僕の一生も一段落のついたことを感じない訣には行かなかつた。のみならずこの墓地の前へ十年目に僕をつれて來た何ものかを感じない訣にも行かなかつた。

或精神病院の門を出た後、僕は又自動車に乘り、前のホテルへ歸ることにした。が、このホテルの玄關へおりると、レエン・コオトを着た男が一人何か給仕と喧嘩をしてゐた。給仕と？――いや、それは給仕ではない、緑いろの服を着た自動車掛りだつた。僕はこのホテルへはひることに何か不吉な心もちを感じ、さつさともとの道を引き返して行つた。

僕の銀座通りへ出た時には彼是日の暮も近づいてゐた。僕は兩側に並んだ店や目まぐるしい人通りに一層憂鬱にならずにはゐられなかつた。殊に往來の人々の罪などと云ふものを知らないやうに輕快に歩いてゐるのは不快だつた。僕は薄明るい外光に電燈の光のまじつた中をどこまでも北へ歩いて行つた。そのうちに僕の目を捉へたのは雜誌などを積み上げた本屋だつた。僕はこの本屋の店へはひり、ぼんやりと何段かの書棚を見上げた。それから「希臘神話」と云ふ一册の本へ目を通すことにした。黄いろい表紙をした「希臘神話」は子供の爲に書かれたものらしかつた。け

れども偶然僕の讀んだ一行は忽ち僕を打ちのめした。

「一番偉いツォイスの神でも復讐の神にはかなひません。……」

僕はこの本屋の店を後ろに人ごみの中を歩いて行つた。いつか曲り出した僕の背中に絕えず僕をつけ狙つてゐる復讐の神を感じながら。……

## 三　夜

僕は丸善の二階の書棚にストリントベルグの「傳說」を見つけ、二三頁づつ目を通した。それは僕の經驗と大差のないことを書いたものだつた。のみならず黃いろい表紙をしてゐた。僕は「傳說」を書棚へ戾し、今度は殆ど手當り次第に厚い本を一冊引きずり出した。しかしこの本も插し畫の一枚に僕等人間と變りのない、目鼻のある齒車ばかり並べてゐた。(それは或獨逸人の集めた精神病者の畫集だつた。)僕はいつか憂鬱の中に反抗的精神の起るのを感じ、やぶれかぶれになつた賭博狂のやうにいろいろの本を開いて行つた。が、なぜかどの本も必ず文章か插し畫かの中に多少の針を隱してゐた。どの本も？——僕は何度も讀み返した「マダム・ボヴァリイ」を手にとつ

た時さへ、畢竟僕自身も中産階級のムッシウ・ボヴァリイに外ならないのを感じた。……

日の暮に近い丸善の二階には僕の外に客もないらしかつた。僕は電燈の光の中に書棚の間をさまよつて行つた。それから「宗教」と云ふ札を掲げた書棚の前に足を休め、緑いろの表紙をした一冊の本へ目を通した。この本は目次の第何章かに「恐しい四つの敵、——疑惑、恐怖、驕慢、官能的欲望」と云ふ言葉を並べてゐた。僕はかう云ふ言葉を見るが早いか、一層反抗的精神の起るのを感じた。それ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかつた。が、傳統的精神もやはり近代的精神のやうにやはり僕を不幸にするのは愈僕にはたまらなかつた。僕はこの本を手にしたまま、ふといつかペン・ネエムに用ひた「壽陵余子」と云ふ言葉を思ひ出した。それは邯鄲の歩みを學ばないうちに壽陵の歩みを忘れてしまひ、蛇行匍匐して歸郷したと云ふ「韓非子」中の青年だつた。今日の僕は誰の目にも「壽陵余子」であるのに違ひなかつた。しかしまだ地獄へ墮ちなかつた僕もこのペン・ネエムを用ひてゐたことは、——僕は大きい書棚を後ろに努めて妄想を拂ふやうにし、丁度僕の向うにあつたポスタアの展覧室へはひつて行つた。が、そこにも一枚のポスタアの中には聖ヂョオヂらしい騎士が一人翼のある龍を刺し殺してゐた。

しかもその騎士は兜の下に僕の敵の一人に近いしかめ面を半ば露してゐた。僕は又「韓非子」の中の屠龍の技の話を思ひ出し、展覧室へ通りぬけずに幅の廣い階段を下つて行つた。

僕はもう夜になつた日本橋通りを歩きながら、屠龍と云ふ言葉を考へつづけた。それは又僕の持つてゐる硯の銘にも違ひなかつた。この硯を僕に贈つたのは或若い事業家だつた。彼はいろいろの事業に失敗した揚句、とうとう去年の暮に破産してしまつた。僕は高い空を見上げ、無數の星の光の中にどのくらゐこの地球の小さいかと云ふことを、――従つてどのくらゐ僕自身の小さいかと云ふことを考へようとした。しかし晝間は晴れてゐた空もいつかもうすつかり曇つてゐた。僕は突然何ものかの僕に敵意を持つてゐるのを感じ、電車線路の向うにある或カッフェへ避難することにした。

それは「避難」に違ひなかつた。僕はこのカッフェの薔薇色の壁に何か平和に近いものを感じ、一番奥のテエブルの前にやつと樂々と腰をおろした。そこには幸ひ僕の外に二三人の客のあるだけだつた。僕は一杯のココアを啜り、ふだんのやうに巻煙草をふかし出した。巻煙草の煙は薔薇色の壁へかすかに青い煙を立ちのぼらせて行つた。この優しい色の調和もやはり僕には愉快だつ

た。けれども僕は暫らくの後、僕の左の壁にかけたナポレオンの肖像畫を見つけ、そろそろ又不安を感じ出した。ナポレオンはまだ學生だつた時、彼の地理のノオト・ブツクの最後に「セエント・ヘレナ、小さい島」と記してゐた。それは或は僕等の言ふやうに偶然だつたかも知れなかつた。しかしナポレオン自身にさへ恐怖を呼び起したのは確かだつた。……

僕はナポレオンを見つめたまま、僕自身の作品を考へ出した。するとまづ記憶に浮かんだのは「侏儒の言葉」の中のアフォリズムだつた。(殊に「人生は地獄よりも地獄的である」と云ふ言葉だつた。)それから「地獄變」の主人公、――良秀と云ふ畫師の運命だつた。それから……僕は卷煙草をふかしながら、かう云ふ記憶から逃れる爲にこのカッフエの中を眺めまはした。僕のここへ避難したのは五分もたたない前のことだつた。しかしこのカッフエは短時間の間にすつかり容子を改めてゐた。就中僕を不快にしたのはマホガニイまがひの椅子やテエブルの少しもあたりの薔薇色の壁と調和を保つてゐないことだつた。僕はもう一度人目に見えない苦しみの中に落ちこむのを恐れ、銀貨を一枚投げ出すが早いか、匆々このカッフエを出ようとした。

「もし、もし、二十錢頂きますが、……」

僕の投げ出したのは銅貨だつた。

僕は屈辱を感じながら、ひとり往來を歩いてゐるうちにふと遠い松林の中にある僕の家を思ひ出した。それは或郊外にある僕の養父母の家ではない、唯僕を中心にした家族の爲に借りた家だつた。僕は彼是十年前にもかう云ふ家に暮らしてゐた。しかし或事情の爲に輕率にも父母と同居し出した。同時に又奴隷に、暴君に、力のない利己主義者に變り出した。……

前のホテルに歸つたのはもう彼是十時だつた。ずつと長い途を歩いて來た僕は僕の部屋へ歸る力を失ひ、太い丸太の火を燃やした爐の前の椅子に腰をおろした。それから僕の計畫してゐた長篇のことを考へ出した。それは推古から明治に至る各時代の民を主人公にし、大體三十餘りの短篇を時代順に連ねた長篇だつた。僕は火の粉の舞ひ上るのを見ながら、ふと宮城の前にある或銅像を思ひ出した。この銅像は甲冑を着、忠義の心そのもののやうに高だかと馬の上に跨つてゐた。しかし彼の敵だつたのは、――

「譃！」

僕は又遠い過去から目近い現代へすべり落ちた。そこへ幸ひにも來合せたのは或先輩の彫刻家

だつた。彼は不相變天鵞絨の服を着、短い山羊髯を反らせてゐた。僕は椅子から立ち上り、彼のさし出した手を握つた。(それは僕の習慣ではない、パリやベルリンに半生を送つた彼の習慣に從つたのだつた。)が、彼の手は不思議にも爬蟲類の皮膚のやうに濕つてゐた。

「君はここに泊つてゐるのですか?」

「ええ、……」

「仕事をしに?」

「ええ、仕事もしてゐるのです。」

彼はぢつと僕の顏を見つめた。僕は彼の目の中に探偵に近い表情を感じた。

「どうです、僕の部屋へ話しに來ては?」

僕は挑戰的に話しかけた。(この勇氣に乏しい癖に忽ち挑戰的態度をとるのは僕の惡癖の一つだつた。)すると彼は微笑しながら、「どこ、君の部屋は?」と尋ね返した。

僕等は親友のやうに肩を並べ、靜かに話してゐる外國人たちの中を僕の部屋へ歸つて行つた。彼は僕の部屋へ來ると、鏡を後ろにして腰をおろした。それからいろいろのことを話し出した。

いろいろのことを？――しかし大抵は女の話だつた。僕は罪を犯した爲に地獄に墮ちた一人に違ひなかつた。が、それだけに惡德の話は愈僕を憂鬱にした。僕は一時的清教徒になり、それ等の女を嘲り出した。

「S子さんの脣を見給へ。あれは何人もの接吻の爲に……」

僕はふと口を噤み、鏡の中に彼の後ろ姿を見つめた。彼は丁度耳の下に黃いろい膏藥を貼りつけてゐた。

「何人もの接吻の爲に？」

「そんな人のやうに思ひますがね。」

彼は微笑して頷いてゐた。僕は彼の內心では僕の祕密を知る爲に絕えず僕を注意してゐるのを感じた。けれどもやはり僕等の話は女のことを離れなかつた。僕は彼を憎むよりも僕自身の氣の弱いのを恥ぢ、愈憂鬱にならずにはゐられなかつた。

やつと彼の歸つた後、僕はベツドの上に轉がつたまま、「暗夜行路」を讀みはじめた。主人公の精神的鬪爭は一々僕には痛切だつた。僕はこの主人公に比べると、どのくらゐ僕の阿呆だつたか

を感じ、いつか涙を流してゐた。同時に又涙は僕の氣もちにいつか平和を與へてゐた。が、それも長いことではなかつた。僕の右の目はもう一度半透明の齒車を感じ出した。齒車はやはりまはりながら、次第に數を殖やして行つた。僕は頭痛のはじまることを恐れ、枕もとに本を置いたまま、〇・八グラムのヴェロナアルを嚥み、兎に角ぐつすりと眠ることにした。

けれども僕は夢の中に或プウルを眺めてゐた。そこには又男女の子供たちが何人も泳いだりもぐつたりしてゐた。僕はこのプウルを後ろに向うの松林へ歩いて行つた。すると誰か後ろから「おとうさん」と僕に聲をかけた。僕はちよつとふり返り、プウルの前に立つた妻を見つけた。同時に又烈しい後悔を感じた。

「おとうさん、タオルは？」

「タオルは入らない。子供たちに氣をつけるのだよ。」

僕は又歩みをつづけ出した。が、僕の歩いてゐるのはいつかプラットフォオムに變つてゐた。それは田舍の停車場だつたと見え、長い生け垣のあるプラットフォオムだつた。そこには又Hと云ふ大學生や年をとつた女も佇んでゐた。彼等は僕の顔を見ると、僕の前に歩み寄り、口々に僕

へ話しかけた。

「大火事でしたわね。」

「僕もやつと逃げて來たの。」

僕はこの年をとつた女に何か見覺えのあるやうに感じた。のみならず彼女と話してゐることに或愉快な興奮を感じた。そこへ汽車は煙をあげながら、靜かにプラットフォオムへ横づけになつた。僕はひとりこの汽車に乘り、兩側に白い布を垂らした寢臺の間を歩いて行つた。すると或寢臺の上にミイラに近い裸體の女が一人こちらを向いて横になつてゐた。それは又僕の復讐の神、――或狂人の娘に違ひなかつた。……………

僕は目を醒ますが早いか、思はずベッドを飛び下りてゐた。僕の部屋は不相變電燈の光に明るかつた。が、どこかに翼の音や鼠のきしる音も聞えてゐた。僕は戸をあけて廊下へ出、前の爐の前へ急いで行つた。それから椅子に腰をおろしたまま、覺束ない炎を眺め出した。そこへ白い服を着た給仕が一人焚き木を加へに歩み寄つた。

「何時?」

「三時半ぐらゐでございます。」

しかし向うのロツビイの隅には亞米利加人らしい女が一人何か本を讀みつづけた。彼女の着てゐるのは遠目に見ても綠いろのドレツスに違ひなかつた。僕は何か救はれたのを感じ、ぢつと夜のあけるのを待つことにした。長年の病苦に惱み拔いた揚句、靜かに死を待つてゐる老人のやうに。……

## 四　まだ?

僕はこのホテルの部屋にやつと前の短篇を書き上げ、或雜誌に送ることにした。尤も僕の原稿料は一週間の滯在費にも足りないものだつた。が、僕は僕の仕事を片づけたことに滿足し、何か精神的强壯劑を求める爲に銀座の或本屋へ出かけることにした。

冬の日の當つたアスフアルトの上には紙屑が幾つもころがつてゐた。それ等の紙屑は光の加減か、いづれも薔薇の花にそつくりだつた。僕は何ものかの好意を感じ、その本屋の店へはひつて行つた。そこも亦ふだんよりも小綺麗だつた。唯目金をかけた小娘が一人何か店員と話してゐた

のは僕には氣がかりにならないこともなかつた。けれども僕は往來に落ちた紙屑の薔薇の花を思ひ出し、「アナトオル・フランスの對話集」や「メリメエの書簡集」を買ふことにした。

僕は二册の本を抱へ、或カッフェへはひつて行つた。それから一番奥のテエブルの前に珈琲の來るのを待つことにした。僕の向うには親子らしい男女が二人坐つてゐた。その息子は僕よりも若かつたものの、殆ど僕にそつくりだつた。のみならず彼等は戀人同志のやうに顏を近づけて話し合つてゐた。僕は彼等を見てゐるうちに少くとも息子は性的にも母親に慰めを與へてゐることを意識してゐるのに氣づき出した。それは僕にも覺えのある親和力の一例に違ひなかつた。同時に又現世を地獄にする或意志の一例にも違ひなかつた。しかし、――僕は又苦しみに陷るのを恐れ、丁度珈琲の來たのを幸ひ、「メリメエの書簡集」を讀みはじめた。彼はこの書簡集の中にも彼の小説の中のやうに鋭いアフォリズムを閃かせてゐた。それ等のアフォリズムは僕の氣もちをいつか鐵のやうに巖疊にし出した。（この影響を受け易いことも僕の弱點の一つだつた。）僕は一杯の珈琲を飲み了つた後、「何でも來い」と云ふ氣になり、さつさとこのカッフェを後ろにして行つた。

僕は往來を歩きながら、いろいろの飾り窓を覗いて行つた。或額縁屋の飾り窓はベエトオヴェ

ンの肖像畫を掲げてゐた。それは髮を逆立てた天才そのものらしい肖像畫だつた。僕はこのベエトオヴェンを滑稽に感ぜずにはゐられなかつた。……

そのうちにふと出合つたのは高等學校以來の舊友だつた。この應用化學の大學教授は大きい中折れ鞄を抱へ、片目だけまつ赤に血を流してゐた。

「どうした、君の目は？」

「これか？　これは唯の結膜炎さ。」

僕はふと十四五年以來、いつも親和力を感じる度に僕の目も彼の目のやうに結膜炎を起すのを思ひ出した。が、何とも言はなかつた。彼は僕の肩を叩き、僕等の友だちのことを話し出した。それから話をつづけたまま、或カッフェへ僕をつれて行つた。

「久しぶりだなあ。朱舜水の建碑式以來だらう。」

彼は葉卷に火をつけた後、大理石のテエブル越しにから僕に話しかけた。

「さうだ。あのシュシュン……」

僕はなぜか朱舜水と云ふ言葉を正確に發音出來なかつた。それは日本語だつただけにちよつと

僕を不安にした。しかし彼は無頓着にいろいろのことを話して行つた。Kと云ふ小説家のことを、彼の貰つたブル・ドッグのことを、リウイサイトと云ふ毒瓦斯のことを。……

「君はちつとも書かないやうだね。『點鬼簿』と云ふのは讀んだけれども。……あれは君の自敍傳かい？」

「うん、僕の自敍傳だ。」

「あれはちよつと病的だつたぜ。この頃は體は善いのかい？」

「不相變藥ばかり嚥んでゐる始末だ。」

「僕もこの頃は不眠症だがね。」

「僕も？——どうして君は『僕も』と言ふのだ？」

「だつて君も不眠症だつて言ふぢやないか？　不眠症は危險だぜ。……」

彼は左だけ充血した目に微笑に近いものを浮かべてゐた。僕は返事をする前に「不眠症」のシヤウの發音を正確に出來ないのを感じ出した。

「氣違ひの息子には當り前だ。」

僕は十分とたたないうちにひとり又往來を歩いて行つた。アスファルトの上に落ちた紙屑は時時僕等人間の顏のやうにも見えないことはなかつた。すると向うから斷髪にした女が一人通りかかつた。彼女は遠目には美しかつた。けれども目の前へ來たのを見ると、小皺のある上に醜い顏をしてゐた。のみならず姙娠してゐるらしかつた。僕は思はず顏をそむけ、廣い横町を曲つて行つた。が、暫らく歩いてゐるうちに痔の痛みを感じ出した。それは僕には坐浴より外に癒すことの出來ない痛みだつた。

「坐浴、――ベエトオヴェンもやはり坐浴をしてゐた。……」

坐浴に使ふ硫黄の匂ひは忽ち僕の鼻を襲ひ出した。しかし勿論往來にはどこにも硫黄は見えなかつた。僕はもう一度紙屑の薔薇の花を思ひ出しながら、努めてしつかりと歩いて行つた。

一時間ばかりたつた後、僕は僕の部屋にとぢこもつたまま、窓の前の机に向かひ、新らしい小說にとりかかつてゐた。ペンは僕にも不思議だつたくらゐ、ずんずん原稿用紙の上を走つて行つた。しかしそれも二三時間の後には誰か僕の目に見えないものに抑へられたやうにとまつてしまつた。僕はやむを得ず机の前を離れ、あちこちと部屋の中を歩きまはつた。僕の誇大妄想はかう

云ふ時に最も著しかつた。僕は野蠻な歡びの中に僕には兩親もなければ妻子もない、唯僕のペンから流れ出した命だけあると云ふ氣になつてゐた。

けれども僕は四五分の後、電話に向はなければならなかつた。電話は何度返事をしても、唯何か曖昧な言葉を繰り返して傳へるばかりだつた。が、それは兎も角もモオルと聞えたのに違ひなかつた。僕はとうとう電話を離れ、もう一度部屋の中を歩き出した。しかしモオルと云ふ言葉だけは妙に氣になつてならなかつた。

「モオル――Mole……」

モオルは鼴鼠と云ふ英語だつた。この聯想も僕には愉快ではなかつた。が、僕は二三秒の後、Mole を la mort に綴り直した。ラ・モオルは、――死と云ふ佛蘭西語は忽ち僕を不安にした。死は姉の夫に迫つてゐたやうに僕にも迫つてゐるらしかつた。けれども僕は不安の中にも何か可笑しさを感じてゐた。のみならずいつか微笑してゐた。この可笑しさは何の爲に起るか？――それは僕自身にもわからなかつた。僕は久しぶりに鏡の前に立ち、まともに僕の影と向ひ合つた。僕の影も勿論微笑してゐた。僕はこの影を見つめてゐるうちに第二の僕のことを思ひ出した。第

二の僕、——獨逸人の所謂 Doppelgaenger は仕合せにも僕自身に見えたことはなかつた。しかし亞米利加の映畫俳優になつたK君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけてゐた。(僕は突然K君の夫人に「先達はつい御挨拶もしませんで」と言はれ、當惑したことを覺えてゐる。)それからもう故人になつた或隻脚の飜譯家もやはり銀座の或煙草屋に第二の僕を見かけてゐた。死は或は僕よりも第二の僕に來るのかも知れなかつた。若し又僕に來たとしても、——僕は鏡に後ろを向け、窓の前の机へ歸つて行つた。

四角に凝灰岩を組んだ窓は枯芝や池を覗かせてゐた。僕はこの庭を眺めながら、遠い松林の中に焼いた何冊かのノオト・ブツクや未完成の戲曲を思ひ出した。それからペンをとり上げると、もう一度新らしい小說を書きはじめた。

## 五　赤光

日の光は僕を苦しめ出した。僕は實際鼴鼠のやうに窓の前へカアテンをおろし、晝間も電燈をともしたまま、せつせと前の小說をつづけて行つた。それから仕事に疲れると、テエヌの英吉利

文學史をひろげ、詩人たちの生涯に目を通した。彼等はいづれも不幸だつた。エリザベス朝の巨人たちさへ、――一代の學者だつたベン・ジョンソンさへ彼の足の親指の上に羅馬とカルセエヂとの軍勢の戰ひを始めるのを眺めたほど神經的疲勞に陷つてゐた。僕はかう云ふ彼等の不幸に殘酷な惡意に充ち滿ちた歡びを感じずにはゐられなかつた。

或東かぜの強い夜、(それは僕には善い徵だつた。)僕は地下室を拔けて往來へ出、或老人を尋ねることにした。彼は或聖書會社の屋根裏にたつた一人小使ひをしながら、祈禱や讀書に精進してゐた。僕等は火鉢に手をかざしながら、壁にかけた十字架の下にいろいろのことを話し合つた。なぜ僕の母は發狂したか？　なぜ僕の父の事業は失敗したか？　なぜ又僕は罰せられたか？――それ等の祕密を知つてゐる彼は妙に厳かな微笑を浮かべ、いつまでも僕の相手をした。のみならず時々短い言葉に人生のカリカテュアを描いたりした。僕はこの屋根裏の隱者を尊敬しない訣には行かなかつた。しかし彼と話してゐるうちに彼も亦親和力の爲に動かされてゐることを發見した。――

「その植木屋の娘と云ふのは器量も善いし、氣立ても善いし、――それはわたしに優しくしてく

れるのです。」
「いくつ？」
「ことしで十八です。」
それは彼には父らしい愛であるかも知れなかつた。しかし僕は彼の目の中に情熱を感じずにはおられなかつた。のみならず彼の勸めた林檎はいつか黄ばんだ皮の上へ一角獸の姿を現してゐた。（僕は木目や珈琲茶碗の龜裂に度たび神話的動物を發見してゐた。）一角獸は麒麟に違ひなかつた。僕は或敵意のある批評家の僕を「九百十年代の麒麟兒」と呼んだのを思ひ出し、この十字架のかかつた屋根裏も安全地帶ではないことを感じた。
「如何ですか、この頃は？」
「不相變神經ばかり苛々してね。」
「それは藥では駄目ですよ。信者になる氣はありませんか？」
「若し僕でもなれるものなら……」
「何もむづかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子の基督を信じ、基督の行つた奇蹟を信

じさへすれば……」

「惡魔を信じることは出來ますがね。……」

「ではなぜ神を信じないのです？　若し影を信じるならば、光も信じずにはゐられないでせう？」

「しかし光のない暗もあるでせう。」

「光のない暗とは？」

僕は默るより外はなかつた。彼も亦僕のやうに暗の中を歩いてゐた。が、暗のある以上は光もあると信じてゐた。僕等の論理の異るのは唯かう云ふ一點だけだつた。しかしそれは少くとも僕には越えられない溝に違ひなかつた。……

「けれども光は必ずあるのです。その證據には奇蹟があるのですから。……奇蹟などと云ふものは今でも度たび起つてゐるのですよ。」

「それは惡魔の行ふ奇蹟は。……」

「どうして又惡魔などと云ふのです？」

僕はこの一二年の間、僕自身の經驗したことを彼に話したい誘惑を感じた。が、彼から妻子に

傳はり、僕も亦母のやうに精神病院にはひることを恐れない訣にも行かなかつた。

「あすこにあるのは？」

この逞しい老人は古い書棚をふり返り、何か牧羊神らしい表情を示した。

「ドストエフスキイ全集です。『罪と罰』はお讀みですか？」

僕は勿論十年前にも四五冊のドストエフスキイに親しんでゐた。が、偶然（？）彼の言つた『罪と罰』と云ふ言葉に感動し、この本を貸して貰つた上、前のホテルへ歸ることにした。電燈の光に輝いた、人通りの多い往來はやはり僕には不快だつた。殊に知り人に遇ふことは到底堪へられないのに違ひなかつた。僕は努めて暗い往來を選び、盜人のやうに歩いて行つた。

しかし僕は暫らくの後、いつか胃の痛みを感じ出した。この痛みを止めるものは一杯のウイスキイのあるだけだつた。僕は或バアを見つけ、その戸を押してはひらうとした。けれども狹いバアの中には煙草の煙の立ちこめた中に藝術家らしい青年たちが何人も群がつて酒を飲んでゐた。のみならず彼等のまん中には耳隱しに結つた女が一人熱心にマンドリンを彈きつづけてゐた。僕は忽ち當惑を感じ、戸の中へはひらずに引き返した。するといつか僕の影の左右に搖れてゐるの

を發見した。しかも僕を照らしてゐるのは無氣味にも赤い光だつた。僕は往來に立ちどまつた。けれども僕の影は前のやうに絶えず左右に動いてゐた。僕は怯づ怯づふり返り、やつとこのバアの軒に吊つた色硝子のランタアンを發見した。ランタアンは烈しい風の爲に徐ろに空中に動いてゐた。……

僕の次にはひつたのは或地下室のレストオランだつた。僕はそこのバアの前に立ち、ウィスキイを一杯註文した。

「ウィスキイを？　Black and White ばかりでございますが、……」

僕は曹達水の中にウィスキイを入れ、默つて一口づつ飲みはじめた。僕の鄰には新聞記者らしい三十前後の男が二人何か小聲に話してゐた。のみならず佛蘭西語を使つてゐた。僕は彼等に背中を向けたまま、全身に彼等の視線を感じた。それは實際電波のやうに僕の體にこたへるものだつた。彼等は確かに僕の名を知り、僕の噂をしてゐるらしかつた。

「Bien……très mauvais……pourquoi ?……」

「Pourquoi ?……le diable est mort !……」

「Oui, oui……d'enfer……」

僕は銀貨を一枚投げ出し、(それは僕の持つてゐる最後の一枚の銀貨だつた。)この地下室の外へのがれることにした。夜風の吹き渡る往來は多少胃の痛みの薄らいだ僕の神經を丈夫にした。僕はラスコルニコフを思ひ出し、何ごとも懺悔したい欲望を感じた。が、それは僕自身の外にも、――いや、僕の家族の外にも悲劇を生じるのに違ひなかつた。のみならずこの欲望さへ眞實かどうかは疑はしかつた。若し僕の神經さへ常人のやうに丈夫になれば、――けれども僕はその爲にはどこかへ行かなければならなかつた。マドリツドへ、リオへ、サマルカンドへ、……

そのうちに或店の軒に吊つた、白い小型の看板は突然僕を不安にした。それは自動車のタイアに翼のある商標を描いたものだつた。僕はこの商標に人工の翼を手よりにした古代の希臘人を思ひ出した。彼は空中に舞ひ上つた揚句、太陽の光に翼を焼かれ、とうとう海中に溺死してゐた。マドリツドへ、リオへ、サマルカンドへ、――僕はかう云ふ僕の夢を嘲笑はない訣には行かなかつた。同時に又復讐の神に追はれたオレステスを考へない訣にも行かなかつた。

僕は運河に沿ひながら、暗い往來を歩いて行つた。そのうちに或郊外にある養父母の家を思ひ

出した。養父母は勿論僕の帰るのを待ち暮らしてゐるのに違ひなかつた。恐らくは僕の子供たちも、——しかし僕はそこへ帰ると、おのづから僕を束縛してしまふ或力を恐れずにはゐられなかつた。運河は波立つた水の上に達磨船を一艘横づけにしてゐた。その又達磨船は船の底から薄い光を洩らしてゐた。そこにも何人かの男女の家族は生活してゐるのに違ひなかつた。やはり愛し合ふ為に憎み合ひながら。……が、僕はもう一度戦闘的精神を呼び起し、ウイスキイの酔ひを感じたまま、前のホテルへ帰ることにした。

僕は又机に向ひ、「メリメエの書簡集」を読みつづけた。それは又いつの間にか僕に生活力を与へてゐた。しかし僕は晩年のメリメエの新教徒になつてゐたことを知ると、俄かに仮面のかげにあるメリメエの顔を感じ出した。彼も亦やはり僕等のやうに暗の中を歩いてゐる一人だつた。暗の中を？——「暗夜行路」はかう云ふ僕には恐しい本に変りはじめた。僕は憂鬱を忘れる為に「アナトオル・フランスの対話集」を読みはじめた。が、この近代の牧羊神もやはり十字架を荷つてゐた。……

一時間ばかりたつた後、給仕は僕に一束の郵便物を渡しに顔を出した。それ等の一つはライプ

ツィツヒの本屋から僕に「近代の日本の女」と云ふ小論文を書けと云ふものだつた。なぜ彼等は特に僕にかう云ふ小論文を書かせるのであらう？　のみならずこの英語の手紙は「我々は丁度日本畫のやうに黑と白の外に色彩のない女の肖像畫でも滿足である」と云ふ肉筆のP・Sを加へてゐた。僕はかう云ふ一行に Black and White と云ふウィスキイの名を思ひ出し、ずたずたにこの手紙を破つてしまつた。それから今度は手當り次第に一つの手紙の封を切り、黃いろい書簡箋に目を通した。この手紙を書いたのは僕の知らない青年だつた。しかし二三行も讀まないうちに「あなたの『地獄變』は……」と云ふ言葉は僕を苛立たせずには措かなかつた。三番目に封を切つた手紙は僕の甥から來たものだつた。僕はやつと一息つき、家事上の問題などを讀んで行つた。けれどもそれさへ最後へ來ると、いきなり僕を打ちのめした。

「歌集『赤光』の再版を送りますから……」

赤光！　僕は何ものかの冷笑を感じ、僕の部屋の外へ避難することにした。廊下には誰も人かげはなかつた。僕は片手に壁を抑へ、やつとロッビイへ歩いて行つた。それから椅子に腰をおろし、兎に角卷煙草に火を移すことにした。卷煙草はなぜかエエア・シップだつた。（僕はこのホテ

ルへ落ち着いてから、いつもスタアばかり吸ふことにしてゐた。）人工の翼はもう一度僕の目の前へ浮かび出した。僕は向うにゐる給仕を呼び、スタアを二箱貰ふことにした。しかし給仕を信用すれば、スタアだけは生憎品切れだつた。

「エア・シツプならばございますが、……」

僕は頭を振つたまま、廣いロツビイを眺めまはした。僕の向うには外國人が四五人テエブルを圍んで話してゐた。しかも彼等の中の一人、――赤いワン・ピイスを着た女は小聲に彼等と話しながら、時々僕を見てゐるらしかつた。

「Mrs. Townshead……」

何か僕の目に見えないものはかう僕に囁いて行つた。ミセス・タウンズヘツドなどと云ふ名は勿論僕の知らないものだつた。たとひ向うにゐる女の名にしても、――僕は又椅子から立ち上り、發狂することを恐れながら、僕の部屋へ歸ることにした。

僕は僕の部屋へ歸ると、すぐに或精神病院へ電話をかけるつもりだつた。が、そこへはひることは僕には死ぬことに變らなかつた。僕はさんざんためらつた後、この恐怖を紛らす爲に「罪と

罰」を讀みはじめた。しかし偶然開いた頁は「カラマゾフ兄弟」の一節だつた。僕は本を間違へたのかと思ひ、本の表紙へ目を落した。「罪と罰」――本は「罪と罰」に違ひなかつた。僕はこの製本屋の綴ぢ違へに、――その又綴ぢ違へた頁を開いたことに運命の指の動いてゐるのを感じ、やむを得ずそこを讀んで行つた。けれども一頁も讀まないうちに全身が震へるのを感じ出した。そこは惡魔に苦しめられるイヴァンを描いた一節だつた。イヴァンを、ストリントベルグを、モオパスサンを、或はこの部屋にゐる僕自身を。……

かう云ふ僕を救ふものは唯眠りのあるだけだつた。しかし催眠劑はいつの間にか一包みも殘らずになくなつてゐた。僕は到底眠らずに苦しみつづけるのに堪へなかつた。が、絶望的な勇氣を生じ、珈琲を持つて來て貰つた上、死にもの狂ひにペンを動かすことにした。二枚、五枚、七枚、十枚、――原稿は見る見る出來上つて行つた。僕はこの小說の世界を超自然の動物に滿たしてゐた。のみならずその動物の一匹に僕自身の肖像畫を描いてゐた。けれども疲勞は徐ろに僕の頭を曇らせはじめた。僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上へ仰向けになつた。それから四五十分間は眠つたらしかつた。しかし又誰か僕の耳にかう云ふ言葉を囁いたのを感じ、忽ち目を醒まし

て立ち上つた。

「Le diable est mort」

凝灰岩の窓の外はいつか冷えびえと明けかかつてゐた。僕は丁度戸の前に佇み、誰もゐない部屋の中を眺めまはした。すると向うの窓硝子は斑らに外氣に曇つた上に小さい風景を現してゐた。それは黄ばんだ松林の向うに海のある風景に違ひなかつた。僕は怯づ怯づ窓の前へ近づき、この風景を造つてゐるものは實は庭の枯芝や池だつたことを發見した。けれども僕の錯覺はいつか僕の家に對する鄉愁に近いものを呼び起してゐた。

僕は九時にでもなり次第、或雜誌社へ電話をかけ、兎に角金の都合をした上、僕の家へ歸る決心をした。机の上に置いた鞄の中へ本や原稿を押しこみながら。

## 六　飛行機

僕は東海道線の或停車場からその奧の或避暑地へ自動車を飛ばした。運轉手はなぜかこの寒さに古いレエン・コオトをひつかけてゐた。僕はこの暗合を無氣味に思ひ、努めて彼を見ないやう

に窓の外へ目をやることにした。すると低い松の生えた向うに、――恐らくは古い街道に葬式が一列通るのを見つけた。白張りの提灯や龍燈はその中に加はつてはゐないらしかつた。が、金銀の造花の蓮は靜かに輿の前後に搖いで行つた。……

やつと僕の家へ歸つた後、僕は妻子や催眠藥の力により、二三日は可也平和に暮らした。僕の二階は松林の上にかすかに海を覗かせてゐた。僕はこの二階の机に向かひ、鳩の聲を聞きながら、午前だけ仕事をすることにした。鳥は鳩や鴉の外に雀も緣側へ舞ひこんだりした。それも亦僕には愉快だつた。「喜雀堂に入る。」――僕はペンを持つたまま、その度にこんな言葉を思ひ出した。

或生暖かい曇天の午後、僕は或雜貨店へインクを買ひに出かけて行つた。するとその店に並んでゐるのはセピア色のインクばかりだつた。セピア色のインクはどのインクよりも僕を不快にするのを常としてゐた。僕はやむを得ずこの店を出、人通りの少ない往來をぶらぶらひとり歩いて行つた。そこへ向うから近眼らしい四十前後の外國人が一人肩を聳かせて通りかかつた。彼はここに住んでゐる被害妄想狂の瑞典人だつた。しかも彼の名はストリントベルクだつた。僕は彼とすれ違ふ時、肉體的に何かこたへるのを感じた。

この往來は僅かに二三町だつた。が、その二三町を通るうちに丁度半面だけ黑い犬は四度も僕の側を通つて行つた。僕は横町を曲りながら、ブラック・アンド・ホワイトのウイスキイを思ひ出した。のみならず今のストリントベルグのタイも黑と白だつたのを思ひ出した。それは僕にはどうしても偶然であるとは考へられなかつた。若し偶然でないとすれば、――僕は頭だけ歩いてゐるやうに感じ、ちよつと往來に立ち止まつた。道ばたには針金の柵の中にかすかに虹の色を帶びた硝子の鉢が一つ捨ててあつた。この鉢は又底のまはりに翼らしい模樣を浮き上らせてゐた。そこへ松の梢から雀が何羽も舞ひ下つて來た。が、この鉢のあたりへ來ると、どの雀も皆言ひ合はせたやうに一度に空中へ逃げのぼつて行つた。……

僕は妻の實家へ行き、庭先の籐椅子に腰をおろした。庭の隅の金網の中には白いレグホオン種の鷄が何羽も靜かに歩いてゐた。それから又僕の足もとには黑犬も一匹横になつてゐた。僕は誰にもわからない疑問を解かうとあせりながら、兎に角外見だけは冷やかに妻の母や弟と世間話をした。

「靜かですね、ここへ來ると。」

「それはまだ東京よりもね。」

「ここでもうるさいことはあるのですか？」

「だつてここも世の中ですもの。」

妻の母はかう言つて笑つてゐた。實際この避暑地も亦「世の中」であるのに違ひなかつた。僕は僅かに一年ばかりの間にどのくらゐここにも罪悪や悲劇の行はれてゐるかを知り悉してゐた。徐ろに患者を毒殺しようとした醫者、養子夫婦の家に放火した老婆、妹の資産を奪はうとした辯護士、――それ等の人々の家を見ることは僕にはいつも人生の中に地獄を見ることに異らなかつた。

「この町には氣違ひが一人ゐますね。」

「Hちやんでせう。あれは氣違ひぢやないのですよ。莫迦になつてしまつたのですよ。」

「早發性痴呆と云ふやつですね。僕はあいつを見る度に氣味が惡くつてたまりません。あいつはこの間もどう云ふ量見か、馬頭觀世音の前にお時宜をしてゐました。」

「氣味が惡くなるなんて、……もつと強くならなければ駄目ですよ。」

「兄さんは僕などよりも強いのだけれども、――」

無精髭を伸ばした妻の弟も寢床の上に起き直つたまま、いつもの通り遠慮勝ちに僕等の話に加はり出した。

「強い中に弱いところもあるから。……」

「おやおや、それは困りましたね。」

僕はかう言つた妻の母を見、苦笑しない訣には行かなかつた。すると弟も微笑しながら、遠い垣の外の松林を眺め、何かうつとりと話しつづけた。(この若い病後の弟は時々僕には肉體を脱した精神そのもののやうに見えるのだつた。)

「妙に人間離れをしてゐるかと思へば、人間的欲望もずゐぶん烈しいし、……」

「善人かと思へば、惡人でもあるしさ。」

「いや、善惡と云ふよりも何かもつと反對なものが、……」

「ぢや大人の中に子供もあるのだらう。」

「さうでもない。僕にははつきりと言へないけれど、……電氣の兩極に似てゐるのかな。何しろ反對なものを一しよに持つてゐる。」

そこへ僕等を驚かしたのは烈しい飛行機の響きだつた。僕は思はず空を見上げ、松の梢に觸れないばかりに舞ひ上つた飛行機を發見した。それは翼を黄いろに塗つた、珍らしい單葉の飛行機だつた。鷄や犬はこの響きに驚き、それぞれ八方へ逃げまはつた。殊に犬は吠え立てながら、尾を捲いて縁の下へはひつてしまつた。

「あの飛行機は落ちはしないか？」

「大丈夫。……兄さんは飛行機病と云ふ病氣を知つてゐる？」

僕は巻煙草に火をつけながら「いや」と云ふ代りに頭を振つた。

「ああ云ふ飛行機に乘つてゐる人は高空の空氣ばかり吸つてゐるものだから、だんだんこの地面の上の空氣に堪へられないやうになつてしまふのだつて。……」

妻の母の家を後ろにした後、僕は枝一つ動かさない松林の中を歩きながら、ぢりぢり憂鬱になつて行つた。なぜあの飛行機はほかへ行かずに僕の頭の上を通つたのであらう？　なぜ又あのホテルは巻煙草のエアア・シツプばかり賣つてゐたのであらう？　僕はいろいろの疑問に苦しみ、人氣のない道を選つて歩いて行つた。

海は低い砂山の向うに一面に灰色に曇つてゐた。その又砂山にはブランコのないブランコ臺が一つ突つ立つてゐた。僕はこのブランコ臺を眺め、忽ち絞首臺を思ひ出した。實際又ブランコ臺の上には鴉が二三羽とまつてゐた。鴉は皆僕を見ても、飛び立つ氣色さへ示さなかつた。のみならずまん中にとまつてゐた鴉は大きい嘴を空へ擧げながら、確かに四たび聲を出した。

僕は芝の枯れた砂土手に沿ひ、別荘の多い小みちを曲ることにした。この小みちの右側にはやはり高い松の中に二階のある木造の西洋家屋が一軒白じらと立つてゐる筈だつた。(僕の親友はこの家のことを「春のゐる家」と稱してゐた。)が、この家の前へ通りかかると、そこにはコンクリイトの土臺の上にバス・タツブが一つあるだけだつた。火事――僕はすぐにかう考へ、そちらを見ないやうに歩いて行つた。すると自轉車に乘つた男が一人まつすぐに向うから近づき出した。彼は焦茶いろの鳥打ち帽をかぶり、妙にぢつと目を据ゑたまま、ハンドルの上へ身をかがめてゐた。僕はふと彼の顔に姉の夫の顔を感じ、彼の目の前へ來ないうちに横の小みちへはひることにした。しかしこの小みちのまん中にも腐つた鼴鼠の死骸が一つ腹を上にして轉がつてゐた。

何ものかの僕を狙つてゐることは一足毎に僕を不安にし出した。そこへ半透明な齒車も一つづ

つ僕の視野を遮り出した。僕は愈最後の時の近づいたことを恐れながら、頸すぢをまつ直にして歩いて行つた。齒車は數の殖えるのにつれ、だんだん急にまはりはじめた。同時に又右の松林はひつそりと枝をかはしたまま、丁度細かい切子硝子を透かして見るやうになりはじめた。僕は動悸の高まるのを感じ、何度も道ばたに立ち止まらうとした。けれども誰かに押されるやうに立ち止まることさへ容易ではなかつた。……

三十分ばかりたつた後、僕は僕の二階に仰向けになり、ぢつと目をつぶつたまま、烈しい頭痛をこらへてゐた。すると僕の瞼の裏に銀色の羽根を鱗のやうに疊んだ翼が一つ見えはじめた。それは實際網膜の上にはつきりと映つてゐるものだつた。僕は目をあいて天井を見上げ、勿論何も天井にはそんなもののないことを確めた上、もう一度目をつぶることにした。しかしやはり銀色の翼はちやんと暗い中に映つてゐた。僕はふとこの間乘つた自動車のラディエエタア・キヤツプにも翼のついてゐたことを思ひ出した。……

そこへ誰か梯子段を慌しく昇つて來たかと思ふと、すぐに又ばたばた駈け下りて行つた。僕はその誰かの妻だつたことを知り、驚いて體を起すが早いか、丁度梯子段の前にある、薄暗い茶の

間へ顔を出した。すると妻は突つ伏したまま、息切れをこらへてゐると見え、絶えず肩を震はしてゐた。

「どうした？」

「いえ、どうもしないのです。……」

妻はやつと顔を擡げ、無理に微笑して話しつづけた。

「どうもした訣ではないのですけれどもね、唯何だかお父さんが死んでしまひさうな氣がしたものですから。……」

それは僕の一生の中でも最も恐しい經驗だつた。――僕はもうこの先を書きつづける力を持つてゐない。かう云ふ氣もちの中に生きてゐるのは何とも言はれない苦痛である。誰か僕の眠つてゐるうちにそつと絞め殺してくれるものはないか？

（昭和二年）

〔遺稿〕

# 闇中問答

或聲　お前は俺の思惑とは全然違つた人間だつた。

僕　それは僕の責任ではない。

或聲　しかしお前はその誤解にお前自身も協力してゐる。

僕　僕は一度も協力したことはない。

或聲　しかしお前は風流を愛した、――或は愛したやうに裝つたらう。

僕　僕は風流を愛してゐる。

或聲　お前はどちらかを愛してゐる？　風流か？　それとも一人の女か？

僕　僕はどちらも愛してゐる。

或聲　(冷笑)それを矛盾とは思はないと見えるな。

僕　誰が矛盾と思ふものか？　一人の女を愛するものは古瀬戸の茶碗を愛さないかも知れない。しかしそれは古瀬戸の茶碗を愛する感覺を持たないからだ。

或聲　風流人はどちらかを選ばなければならぬ。

僕　僕は生憎風流人よりもずつと多慾に生まれついてゐる。しかし將來は一人の女よりも古瀬戸の茶碗を選ぶかも知れない。

或聲　ではお前は不徹底だ。

僕　若しそれを不徹底と云ふならば、インフルエンザに罹つた後も冷水摩擦をやつてゐるものは誰よりも徹底してゐるだらう。

或聲　もう强がるのはやめにしてしまへ。お前は內心は弱つてゐる。しかし當然お前の受ける社會的非難をはね返す爲にそんなことを言つてゐるだけだらう。

僕　僕は勿論そのつもりだ。第一考へて見るが善い。はね返さなかつたが最後、押しつぶされてしまふ。

或聲　お前は何と云ふ圖々しい奴だ。

僕　僕は少しも圖々しくはない。僕の心臓は瑣細な事にあつても氷のさはつたやうにひやひやとしてゐる。

或聲　お前は多力者のつもりでゐるな？

僕　勿論僕は多力者の一人だ。しかし最大の多力者ではない。若し最大の多力者だつたとすれば、あのゲエテと云ふ男のやうに安んじて偶像になつてゐたであらう。

或聲　ゲエテの戀愛は純潔だつた。

僕　それは譃だ。文藝史家の譃だ。ゲエテは丁度三十五の年に突然伊太利へ逃走してゐる。さうだ。逃走と云ふ外はない。あの祕密を知つてゐるものはゲエテ自身を例外にすれば、シュタイン夫人一人だけだらう。

或聲　お前の言ふことは自己辯護だ。自己辯護位手易いものはない。

僕　自己辯護は容易ではない。若し手易いものとすれば、辯護士と云ふ職業は成り立たない筈だ。

或聲　口巧者な横着ものめ！　誰ももうお前を相手にしないぞ。

僕　僕はまだ僕に感激を與へる樹木や水を持つてゐる。それから和漢東西の本を三百冊以上持つてゐる。

或聲　しかしお前は永久にお前の讀者を失つてしまふぞ。

僕　僕は將來に讀者を持つてゐる。

或聲　將來の讀者はパンをくれるか？

僕　現世の讀者さへ碌にくれない。僕の最高の原稿料は一枚十圓に限つてゐた。

或聲　しかしお前は資産を持つてゐたらう？

僕　僕の資産は本所にある猫の額ほどの地面だけだ。僕の月收は最高の時でも三百圓を越えたことはない。

或聲　しかしお前は家を持つてゐる。それから近代文藝讀本の……

僕　あの家の棟木は僕には重たい。近代文藝讀本の印税はいつでもお前に用立ててやる。僕の貰つたのは四五百圓だから。

或聲　しかしお前はあの讀本の編者だ。それだけでもお前は恥ぢなければならぬ。

僕　何を僕に恥ぢろと云ふのだ？

或聲　お前は教育家の仲間入りをした。

僕　それは譃だ。教育家こそ僕等の仲間入りをしてゐる。僕はその仕事を取り戻したのだ。

或聲　お前はそれでも夏目先生の弟子か？

僕　僕は勿論夏目先生の弟子だ。お前は文墨に親しんだ漱石先生を知つてゐるかも知れない。しかしあの氣違ひじみた天才の夏目先生を知らないだらう。

或聲　お前には思想と云ふものはない。偶々あるのは矛盾だらけの思想だ。

僕　それは僕の進歩する證據だ。阿呆はいつまでも太陽は盥よりも小さいと思つてゐる。

或聲　お前の傲慢はお前を殺すぞ。

僕　僕は時々かう思つてゐる。——或は僕は疊の上では往生しない人間かも知れない。

或聲　お前は死を怖れないと見えるな？　な？

僕　僕は死ぬことを怖れてゐる。が、死ぬことは困難ではない。僕は二三度頸をくくつたものだ。しかし二十秒ばかり苦しんだ後は或快感さへ感じて來る。僕は死よりも不快なことに會へば、

いつでも死ぬのにためらはないつもりだ。

或聲　ではなぜお前は死なないのだ？　お前は誰の目から見ても、法律上の罪人ではないか？

僕　僕はそれも承知してゐる。ヴェルレエンのやうに、ワグナアのやうに、或は又大いなるストリントベリイのやうに。

或聲　しかしお前は贖はない。

僕　いや、僕は贖つてゐる。苦しみにまさる贖ひはない。

或聲　お前は仕かたのない惡人だ。

僕　僕は寧ろ善男子だ。若し惡人だつたとすれば、僕のやうに苦しみはしない。のみならず必ず戀愛を利用し、女から金を絞るだらう。

或聲　ではお前は阿呆かも知れない。

僕　さうだ。僕は阿呆かも知れない。あの「痴人の懺悔」などと云ふ本は僕に近い阿呆の書いたものだ。

或聲　その上お前は世間見ずだ。

僕　世間知りを最上とすれば、實業家は何よりも高等だらう。
或聲　お前は戀愛を輕蔑してゐた。しかし今になつて見れば、畢竟戀愛至上主義者だつた。
僕　いや、僕は今日でも斷じて戀愛至上主義者ではない。僕は詩人だ。藝術家だ。
或聲　しかしお前は戀愛の爲に父母妻子を抛つたではないか？
僕　謊をつけ。僕は唯僕自身の爲に父母妻子を抛つたのだ。
或聲　ではお前はエゴイストだ。
僕　僕は生憎エゴイストではない。しかしエゴイストになりたいのだ。
或聲　お前は不幸にも近代のエゴ崇拜にかぶれてゐる。
僕　それでこそ僕は近代人だ。
或聲　近代人は古人に若かない。
僕　古人も亦一度は近代人だつたのだ。
或聲　お前は妻子を憐まないのか？
僕　誰か憐まずにおられたものがあるか？　ゴオギヤアンの手紙を讀んで見ろ。

或聲　お前はお前のしたことをどこまでも是認するつもりだな。

僕　どこまでも是認してゐるとすれば、何もお前と問答などはしない。

或聲　ではやはり是認しずにゐるか？

僕　僕は唯あきらめてゐる。

或聲　しかしお前の責任はどうする？

僕　四分の一は僕の遺傳、四分の一は僕の境遇、四分の一は僕の偶然、――僕の責任は四分の一だけだ。

或聲　お前は何と云ふ下等な奴だ！

僕　誰でも僕位は下等だらう。

或聲　ではお前は悪魔主義者だ。

僕　僕は生憎悪魔主義者ではない。殊に安全地帯の悪魔主義者には常に輕蔑を感じてゐる。

或聲　（暫く無言）兎に角お前は苦しんでゐる。それだけは認めてやつても善い。

僕　いや、うつかり買ひ冠るな。僕は或は苦しんでゐることに誇りを持つてゐるかも知れない。

のみならず「得れば失ふを惧る」は多力者のすることではないだらう。

或聲　お前は或は正直者かも知れない。しかし又或は道化者かも知れない。

僕　僕も亦どちらかと思つてゐる。

或聲　お前はいつもお前自身を現實主義者と信じてゐた。

僕　僕はそれほど理想主義者だつたのだ。

或聲　お前は或は滅びるかも知れない。

僕　しかし僕を造つたものは第二の僕を造るだらう。

或聲　では勝手に苦しむが善い。俺はもうお前に別れるばかりだ。

僕　待て。どうかその前に聞かせて呉れ。絶えず僕に問ひかけるお前は、——目に見えないお前は何ものだ？

或聲　俺か？　俺は世界の夜明けにヤコブと力を爭つた天使だ。

## 二

或聲　お前は感心に勇氣を持つてゐる。

僕　いや、僕は勇氣を持つてゐない。若し勇氣を持つてゐるとすれば、僕は獅子の口に飛び込まずに獅子の食ふのを待つてゐただらう。

或聲　しかしお前のしたことは人間らしさを具へてゐる。

僕　最も人間らしいことは同時に又動物らしいことだ。

或聲　お前のしたことは惡いことではない。お前は唯現代の社會制度の爲に苦しんでゐるのだ。

僕　社會制度は變つたとしても、僕の行爲は何人かの人を不幸にするのに極まつてゐる。

或聲　しかしお前は自殺しなかつた。兎に角お前は力を持つてゐる。

僕　僕は度たび自殺しようとした。殊に自然らしい死にかたをする爲に一日に蠅を十匹づつ食つた。蠅を細かにむしつた上、のみこんでしまふのは何でもない。しかし嚙みつぶすのはきたない氣がした。

或聲　その代りにお前は偉大になるだらう。

僕　僕は偉大さなどを求めてゐない。欲しいのは唯平和だけだ。ワグネルの手紙を讀んで見ろ。

愛する妻と二三人の子供と暮らしに困らない金さへあれば、偉大な藝術などは作らずとも滿足すると書いてゐる。ワグネルでさへこの通りだ。あの我の強いワグネルでさへ。

或聲　お前は兎に角苦しんでゐる。お前は良心のない人間ではない。

僕　僕は良心などを持つてゐない。持つてゐるのは神經ばかりだ。

或聲　お前の家庭生活は不幸だつた。

僕　しかし僕の細君はいつも僕に忠實だつた。

或聲　お前の悲劇は他の人々よりも逞しい理智を持つてゐることだ。

僕　譃をつけ。僕の喜劇は他の人々よりも乏しい世間智を持つてゐることだ。

或聲　しかしお前は正直だ。お前は何ごとも露れないうちにお前の愛してゐる女の夫へ一切の事情を打ち明けてしまつた。

僕　それも譃だ。僕は打ち明けずにはゐられない氣もちになるまでは打ち明けなかつた。

或聲　お前は詩人だ。藝術家だ。お前には何ごとも許されてゐる。

僕　僕は詩人だ。藝術家だ。けれども又社會の一分子だ。僕の十字架を負ふのは不思議ではな

い。それでもまだ輕過ぎるだらう。

或聲　お前はお前のエゴを忘れてゐる。お前の個性を尊重し、俗惡な民衆を輕蔑しろ。

僕　僕はお前に言はれずとも僕の個性を尊重してゐる。しかし民衆を輕蔑しない。僕はいつかから言つた。――「玉は碎けても、瓦は碎けない。」シエクスピイアや、ゲエテや近松門左衞門はいつか一度は滅びるであらう。しかし彼等を生んだ胎は、――大いなる民衆は滅びない。あらゆる藝術は形を變へても、必ずそのうちから生まれるであらう。

或聲　お前の書いたものは獨創的だ。

僕　いや、決して獨創的ではない。第一誰が獨創的だつたのだ？　古今の天才の書いたものでもプロトタイプは至る所にある。就中僕は度たび盜んだ。

或聲　しかしお前は敎へてもゐる。

僕　僕の敎へたのは出來ないことだけだ。僕に出來ることだつたとすれば、敎へない前にしてしまつたであらう。

或聲　お前は超人だと確信しろ。

僕　いや、僕は超人ではない。僕等は皆超人ではない。超人は唯ツアラトストラだけだ。しかもそのツアラトストラのどう云ふ死を迎へたかはニイチェ自身も知らないのだ。

或聲　お前さへ社會を怖れるのか？

僕　誰が社會を怖れなかつたか？

或聲　牢獄に三年もゐたワイルドを見ろ。ワイルドは「妄りに自殺するのは社會に負けるのだ」と言つてゐる。

僕　ワイルドは牢獄にゐた時に何度も自殺を計つてゐる。しかも自殺しなかつたのは唯その方法のなかつたばかりだ。

或聲　お前は善惡を蹂躙してしまへ。

僕　僕は今後もいやが上にも善人にならうと思つてゐる。

或聲　お前は餘り單純過ぎる。

僕　いや、僕は複雜過ぎるのだ。

或聲　しかしお前は安心しろ。お前の讀者は絕えないだらう。

僕　それは著作權のなくなつた後だ。

或聲　お前は愛の爲に苦しんでゐるのだ。

僕　愛の爲に？　文學青年じみたお世辭は好い加減にしろ。僕は唯情事に躓いただけだ。

或聲　誰も情事には躓き易い。

僕　それは誰も金錢の慾に溺れ易いと云ふことだけだ。

或聲　お前は人生の十字架にかかつてゐる。

僕　それは僕の自慢にはならない。情婦殺しや拐帶犯人も人生の十字架にかかつてゐるのだ。

或聲　人生はそんなに暗いものではない。

僕　人生は「選ばれたる少數」を除けば、誰にも暗いのはわかつてゐる。しかも又「選ばれたる少數」とは阿呆と惡人との異名なのだ。

或聲　では勝手に苦しんでゐろ。お前は俺を知つてゐるか？　折角お前を慰めに來た俺を？

僕　お前は犬だ。昔あのフアウストの部屋へ犬になつてはひつて行つた惡魔だ。

## 三

或聲　お前は何をしてゐるのだ？
僕　僕は唯書いてゐるのだ。
或聲　なぜお前は書いてゐるのだ？
僕　唯書かずにはゐられないからだ。
或聲　では書け。死ぬまで書け。
僕　勿論、――第一その外に仕かたはない。
或聲　お前は存外落ち着いてゐる。
僕　いや、少しも落ち着いてはゐない。若し僕を知つてゐる人々ならば、僕の苦しみを知つてゐるだらう。
或聲　お前の微笑はどこへ行つた？
僕　天上の神々へ歸つてしまつた。人生に微笑を送る爲に第一には吊り合ひの取れた性格、第

二に金、第三に僕よりも逞しい神經を持つてゐなければならぬ。

或聲　しかしお前は氣輕になつたらう。

僕　うん、僕は氣輕になつた。その代りに裸の肩の上に一生の重荷を背負はなければならぬ。

或聲　お前はお前なりに生きる外はない。或は又お前なりに……

僕　さうだ。僕なりに死ぬ外はない。

或聲　お前は在來のお前とは違つた、新らしいお前になるだらう。

僕　僕はいつでも僕自身だ。唯皮は變るだらう。蛇の皮を脱ぎ變へるやうに。

或聲　お前は何も彼も承知してゐる。

僕　いや、僕は承知してゐない。僕の意識してゐるのは僕の魂の一部分だけだ。僕の意識してゐない部分は、——僕の魂のアフリカはどこまでも茫々と廣がつてゐる。僕はそれを恐れてゐるのだ。光の中には怪物は棲まない。しかし無邊の闇の中には何かがまだ眠つてゐる。

或聲　お前も亦俺の子供だつた。

僕　誰だ、僕に接吻したお前は？　いや、僕はお前を知つてゐる。

或聲　では俺を誰だと思ふ？

僕　僕の平和を奪つたものだ。僕のエピキユリアニズムを破つたものだ。僕の、――いや、僕ばかりではない。昔支那の聖人の教へた中庸の精神を失はせるものだ。お前の犧牲になつたものは至る所に橫はつてゐる。文學史の上にも、新聞記事の上にも。

或聲　それをお前は何と呼んでゐる？

僕　僕は――僕は何と呼ぶかは知らない。しかし他人の言葉を借りれば、お前は僕等を超えた力だ。僕等を支配する Daimôn だ。

或聲　お前はお前自身を祝福しろ。俺は誰にでも話しには來ない。

僕　いや、僕は誰よりもお前の來るのを警戒するつもりだ。お前の來る所に平和はない。しかもお前はレントゲンのやうにあらゆるものを滲透して來るのだ。

或聲　では今後も油斷するな。

僕　勿論今後は油斷しない。唯ペンを持つてゐる時には……

或聲　ペンを持つてゐる時には來いと云ふのだな。

僕　誰が來いと云ふものか！　僕は群小作家の一人だ。又群小作家の一人になりたいと思つてゐるものだ。平和はその外に得られるものではない。しかしペンを持つてゐる時にはお前の俘になるかも知れない。

或聲　ではいつも氣をつけてゐろよ。第一俺はお前の言葉を一々實行に移すかも知れない。ではさやうなら。いつか又お前に會ひに來るから。

僕（一人になる。）芥川龍之介！　芥川龍之介、お前の根をしつかりとおろせ。お前は風に吹かれてゐる葦だ。空模様はいつ何時變るかも知れない。唯しつかり踏んばつてゐろ。それはお前自身の爲だ。同時に又お前の子供たちの爲だ。うぬ惚れるな。同時に卑屈にもなるな。これからお前はやり直すのだ。

（昭和二年）

〔遺稿〕

# 或阿呆の一生

僕はこの原稿を發表する可否は勿論、發表する時や機關も君に一任したいと思つてゐる。君はこの原稿の中に出て來る大抵の人物を知つてゐるだらう。しかし僕は發表するとしても、インデキスをつけずに貰ひたいと思つてゐる。

僕は今最も不幸な幸福の中に暮らしてゐる。しかし不思議にも後悔してゐない。唯僕の如き惡夫、惡子、惡親を持つたものたちを如何にも氣の毒に感じてゐる。ではさやうなら。僕はこの原稿の中では少くとも意識的には自己辯護をしなかつたつもりだ。

最後に僕のこの原稿を特に君に托するのは君の恐らくは誰よりも僕を知つてゐると思ふからだ。（都會人と云ふ僕の皮を剝ぎさへすれば）どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑つてくれ給へ。

昭和二年六月二十日

芥川龍之介

久米正雄君

## 一 時代

それは或本屋の二階だつた。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新らしい本を探してゐた。モオパスサン、ボオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、ショウ、トルストイ、……

そのうちに日の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を讀みつづけた。そこに並んでゐるのは本といふよりも寧ろ世紀末それ自身だつた。ニイチエ、ヴェルレエン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベエル、……

彼は薄暗がりと戰ひながら、彼等の名前を數へて行つた。が、本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼はとうとう根氣も盡き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電燈が一つ、丁度彼の頭の上に突然ぽかりと火をともした。彼は梯子の上に佇んだまま、本の間に

動いてゐる店員や客を見下した。彼等は妙に小さかつた。のみならず如何にも見すぼらしかつた。

「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」

彼は暫く梯子の上からかう云ふ彼等を見渡してゐた。……

## 二　母

狂人たちは皆同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた。廣い部屋はその爲に一層憂鬱に見えるらしかつた。彼等の一人はオルガンに向ひ、熱心に讃美歌を彈きつづけてゐた。同時に又彼等の一人は丁度部屋のまん中に立ち、踊ると云ふよりも跳ねまはつてゐた。

彼は血色の善い醫者と一しよにかう云ふ光景を眺めてゐた。彼の母も十年前には少しも彼等と變らなかつた。少しも、——彼は實際彼等の臭氣に彼の母の臭氣を感じた。

「ぢや行かうか？」

醫者は彼の先に立ちながら、廊下傳ひに或部屋へ行つた。その部屋の隅にはアルコオルを滿した、大きい硝子の壺の中に腦髓が幾つも漬つてゐた。彼は或腦髓の上にかすかに白いものを發見

した。それは丁度卵の白味をちよつと滴らしたのに近いものだつた。彼は醫者と立ち話をしながら、もう一度彼の母を思ひ出した。

「この腦髓を持つてゐた男は××電燈會社の技師だつたがね。いつも自分を黑光りのする、大きいダイナモだと思つてゐたよ。」

彼は醫者の目を避ける爲に硝子窓の外を眺めてゐた。そこには空き罎の破片を植ゑた煉瓦塀の外に何もなかつた。しかしそれは薄い苔をまだらにぼんやりと白らませてゐた。

## 三　家

彼は或郊外の二階の部屋に寢起きしてゐた。それは地盤の緩い爲に妙に傾いた二階だつた。

彼の伯母はこの二階に度たび彼と喧嘩をした。それは彼の養父母の仲裁を受けることもないことはなかつた。しかし彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。一生獨身だつた彼の伯母はもう彼の二十歳の時にも六十に近い年よりだつた。

彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合ふものは苦しめ合ふのかを考へたりした。その間も何か

氣味の悪い二階の傾きを感じながら。

## 四　東京

隅田川はどんより曇つてゐた。彼は走つてゐる小蒸汽の窓から向う島の櫻を眺めてゐた。花を盛つた櫻は彼の目には一列の襤褸のやうに憂鬱だつた。が、彼はその櫻に、——江戸以來の向う島の櫻にいつか彼自身を見出してゐた。

## 五　我

彼は彼の先輩と一しよに或カツフェの卓子に向ひ、絶えず卷煙草をふかしてゐた。彼は餘り口をきかなかつた。が、彼の先輩の言葉には熱心に耳を傾けてゐた。

「けふは半日自動車に乘つてゐた。」

「何か用があつたのですか？」

彼の先輩は頬杖をしたまま、極めて無造作に返事をした。

「何、唯乗つてゐたかつたから。」

その言葉は彼の知らない世界へ、――神々に近い「我」の世界へ彼自身を解放した。彼は何か痛みを感じた。が、同時に又歡びも感じた。

そのカツフェは極小さかつた。しかしパンの神の額の下には赭い鉢に植ゑたゴムの樹が一本、肉の厚い葉をだらりと垂らしてゐた。

## 六 病

彼は絶え間ない潮風の中に大きい英吉利語の辭書をひろげ、指先に言葉を探してゐた。

Talaria 翼の生えた靴、或はサンダアル。

Tale 話。

Talipot 東印度に産する椰子。幹は五十呎より百呎の高さに至り、葉は傘、扇、帽等に用ひらる。七十年に一度花を開く。……

彼の想像ははつきりとこの椰子の花を描き出した。すると彼は喉もとに今までに知らない痒さ

を感じ、思はず辭書の上へ嘆を落した。嘆を？——しかしそれは嘆ではなかつた。彼は短い命を思ひ、もう一度この椰子の花を想像した。この遠い海の向うに高だかと聳えてゐる椰子の花を。

## 七　畫

彼は突然、——それは實際突然だつた。彼は或本屋の店先に立ち、ゴオグの畫集を見てゐるうちに突然畫と云ふものを了解した。勿論そのゴオグの畫集は寫眞版だつたのに違ひなかつた。が、彼は寫眞版の中にも鮮かに浮かび上る自然を感じた。

この畫に對する情熱は彼の視野を新たにした。彼はいつか木の枝のうねりや女の頬の膨らみに絶え間ない注意を配り出した。

或雨を持つた秋の日の暮、彼は或郊外のガアドの下を通りかかつた。ガアドの向うの土手の下には荷馬車が一臺止まつてゐた。彼はそこを通りながら、誰か前にこの道を通つたもののあるのを感じ出した。誰か？——それは彼自身に今更問ひかける必要もなかつた。二十三歳の彼の心の中には耳を切つた和蘭人が一人、長いパイプを啣へたまま、この憂鬱な風景畫の上へぢつと鋭い

目を注いでゐた。………

## 八　火花

彼は雨に濡れたまま、アスファルトの上を踏んで行つた。雨は可也烈しかつた。彼は水沫の滿ちた中にゴム引の外套の匂を感じた。

すると目の前の架空線が一本、紫いろの火花を發してゐた。彼は妙に感動した。彼の上着のポケットは彼等の同人雜誌へ發表する彼の原稿を隱してゐた。彼は雨の中を歩きながら、もう一度後ろの架空線を見上げた。

架空線は不相變鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。が、この紫色の火花だけは、――凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。

## 九　死體

死體は皆親指に針金のついた札をぶら下げてゐた。その又札は名前だの年齢だのを記してゐた。彼の友だちは腰をかがめ、器用にメスを動かしながら、或死體の顏の皮を剝ぎはじめた。皮の下に廣がつてゐるのは美しい黃いろの脂肪だつた。

彼はその死體を眺めてゐた。それは彼には或短篇を、――王朝時代に背景を求めた或短篇を仕上げる爲に必要だつたのに違ひなかつた。が、腐敗した杏の匂に近い死體の臭氣は不快だつた。彼の友だちは眉間をひそめ、靜かにメスを動かして行つた。

「この頃は死體も不足してね。」

彼の友だちはかう言つてゐた。すると彼はいつの間にか彼の答を用意してゐた。――「己は死體に不足すれば、何の惡意もなしに人殺しをするがね。」しかし勿論彼の答は心の中にあつただけだつた。

## 十　先生

彼は大きい檞の木の下に先生の本を讀んでゐた。檞の木は秋の日の光の中に一枚の葉さへ動さ

なかつた。どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤が一つ、丁度平衡を保つてゐる。――彼は先生の本を讀みながら、かう云ふ光景を感じてゐた。……

## 十一　夜明け

夜は次第に明けて行つた。彼はいつか或町の角に廣い市場を見渡してゐた。市場に群つた人々や車はいづれも薔薇色に染まり出した。

彼は一本の卷煙草に火をつけ、靜かに市場の中へ進んで行つた。するとか細い黒犬が一匹、いきなり彼に吠えかかつた。が、彼は驚かなかつた。のみならずその犬さへ愛してゐた。

市場のまん中には篠懸が一本、四方へ枝をひろげてゐた。彼はその根もとに立ち、枝越しに高い空を見上げた。空には丁度彼の眞上に星が一つ輝いてゐた。

それは彼の二十五の年、――先生に會つた三月目だつた。

## 十二　軍港

潜航艇の内部は薄暗かつた。彼は前後左右を蔽つた機械の中に腰をかがめ、小さい目金を覗いてゐた。その又目金に映つてゐるのは明るい軍港の風景だつた。

「あすこに『金剛』も見えるでせう。」

或海軍将校はかう彼に話しかけたりした。彼は四角いレンズの上に小さい軍艦を眺めながら、なぜかふと阿蘭陀芹を思ひ出した。一人前三十錢のビイフ・ステエクの上にもかすかに匂つてゐる阿蘭陀芹を。

## 十三　先生の死

彼は雨上りの風の中に或新らしい停車場のプラットフォオムを歩いてゐた。空はまだ薄暗かつた。プラットフォオムの向うには鐵道工夫が三四人、一齊に鶴嘴を上下させながら、何か高い聲にうたつてゐた。

雨上りの風は工夫の唄や彼の感情を吹きちぎつた。彼は巻煙草に火もつけずに歓びに近い苦しみを感じてゐた。「センセイキトク」の電報を外套のポケットへ押しこんだまま。……

そこへ向うの松山のかげから午前六時の上り列車が一列、薄い煙を靡かせながら、うねるやうにこちらへ近づきはじめた。

## 十四　結婚

彼は結婚した翌日に「來匆々無駄費ひをしては困る」と彼の妻に小言を言つた。しかしそれは彼の小言よりも彼の伯母の「言へ」と云ふ小言だつた。彼の妻は彼自身には勿論、彼の伯母にも詫びを言つてゐた。彼の爲に買つて來た黄水仙の鉢を前にしたまま。………

## 十五　彼等

彼等は平和に生活した。大きい芭蕉の葉の廣がつたかげに。――彼等の家は東京から汽車でもたつぷり一時間かかる或海岸の町にあつたから。

## 十六　枕

彼は薔薇の葉の匂のする懷疑主義を枕にしながら、アナトオル・フランスの本を讀んでゐた。が、いつかその枕の中にも半身半馬神のゐることには氣づかなかつた。

## 十七　蝶

藻の匂の滿ちた風の中に蝶が一羽ひらめいてゐた。彼はほんの一瞬間、乾いた彼の脣の上へこの蝶の翅の觸れるのを感じた。が、彼の脣の上へいつか捺つて行つた翅の粉だけは數年後にもまだきらめいてゐた。

## 十八　月

彼は或ホテルの階段の途中に偶然彼女に遭遇した。彼女の顏はかう云ふ晝にも月の光りの中にゐるやうだつた。彼は彼女を見送りながら、(彼等は一面識もない間がらだつた。)今まで知らなかつた寂しさを感じた。……

## 十九　人工の翼

　彼はアナトオル・フランスから十八世紀の哲學者たちに移つて行つた。が、ルツソオには近づかなかつた。それは或は彼自身の一面、――情熱に驅られ易い一面のルツソオに近い爲かも知れなかつた。彼は彼自身の他の一面、――冷かな理智に富んだ一面に近い「カンディイド」の哲學者に近づいて行つた。

　人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴォルテエルはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。

　彼はこの人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歡びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すぼらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまつ直に太陽へ登つて行つた。丁度かう云ふ人工の翼を太陽の光りに焼かれた爲にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……………

## 二十　械

彼等夫妻は彼の養父母と一つ家に住むことになつた。それは彼が或新聞社に入社することになつた爲だつた。彼は黄いろい紙に書いた一枚の契約書を力にしてゐた。が、その契約書は後になつて見ると、新聞社は何の義務も負はずに彼ばかり義務を負ふものだつた。

## 二十一　狂人の娘

二臺の人力車は人氣のない曇天の田舍道を走つて行つた。その道の海に向つてゐることは潮風の來るのでも明らかだつた。後の人力車に乘つてゐた彼は少しもこのランデ・ブウに興味のないことを怪みながら、彼自身をここへ導いたものの何であるかを考へてゐた。それは決して戀愛ではなかつた。若し戀愛でないとすれば、――彼はこの答を避ける爲に「兎に角我等は對等だ」と考へない訣には行かなかつた。

前の人力車に乘つてゐるのは或狂人の娘だつた。のみならず彼女の妹は嫉妬の爲に自殺してゐ

た。

「もうどうにも仕かたはない。」

彼はもうこの狂人の娘に、――動物的本能ばかり強い彼女に或憎悪を感じてゐた。

二臺の人力車はその間に磯臭い墓地の外へ通りかかつた。蠣殼のついた粗朶垣の中には石塔が幾つも黒んでゐた。彼はそれ等の石塔の向うにかすかにかがやいた海を眺め、何か急に彼女の夫を――彼女の心を捉へてゐない彼女の夫を輕蔑し出した。……

## 二十二　或畫家

それは或雜誌の插し畫だつた。が、一羽の雄鷄の墨畫は著しい個性を示してゐた。彼は或友だちにこの畫家のことを尋ねたりした。

一週間ばかりたつた後、この畫家は彼を訪問した。それは彼の一生のうちでも特に著しい事件だつた。彼はこの畫家の中に誰も知らない詩を發見した。のみならず彼自身も知らずにゐた彼の魂を發見した。

或薄ら寒い秋の日の暮、彼は一本の唐黍に忽ちこの畫家を思ひ出した。丈の高い唐黍は荒あらしい葉をよろつたまま、盛り土の上には神經のやうに細ぼそと根を露はしてゐた。それは又勿論傷き易い彼の自畫像にも違ひなかつた。しかしかう云ふ發見は彼を憂鬱にするだけだつた。

「もう遲い。しかしいざとなつた時には……」

## 二十三　彼女

或廣場の前は暮れかかつてゐた。彼はやや熱のある體にこの廣場を歩いて行つた。大きいビイルディングは幾棟もかすかに銀色に澄んだ空に窓々の電燈をきらめかせてゐた。

彼は道ばたに足を止め、彼女の來るのを待つことにした。五分ばかりたつた後、彼女は何かやつれたやうに彼の方へ歩み寄つた。が、彼の顏を見ると「疲れたわ」と言つて頰笑んだりした。彼等は肩を並べながら、薄明い廣場を歩いて行つた。それは彼等には始めてだつた。彼は彼女と一しよにゐる爲には何を捨てても善い氣もちだつた。

彼等の自動車に乘つた後、彼女はぢつと彼の顏を見つめ、「あなたは後悔なさらない？」と言つ

た。彼はきつぱり「後悔しない」と答へた。彼女は彼の手を抑へ、「あたしは後悔しないけれども」と言つた。彼女の顏はかう云ふ時にも月の光の中にゐるやうだつた。

## 二十四　出産

彼は襖側に佇んだまま、白い手術着を着た產婆が一人、赤兒を洗ふのを見下してゐた。赤兒は石鹼の目にしみる度にいぢらしい顰め顏を繰り返した。のみならず高い聲に啼きつづけた。彼は何か鼠の仔に近い赤兒の匂を感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。――

「何の爲にこいつも生まれて來たのだらう？　この娑婆苦の充ち滿ちた世界へ。――何の爲に又こいつも己のやうなものを父にする運命を荷つたのだらう？」

しかもそれは彼の妻が最初に出產した男の子だつた。

## 二十五　ストリントベリイ

彼は部屋の戶口に立ち、柘榴の花のさいた月明りの中に薄汚い支那人が何人か、麻雀戲をして

ゐるのを眺めてゐた。それから部屋の中へひき返すと、脊の低いランプの下に「痴人の告白」を讀みはじめた。が、二頁も讀まないうちにいつか苦笑を洩らしてゐた。――ストリントベリイも亦情人だつた伯爵夫人へ送る手紙の中に彼と大差のない譃を書いてゐる。……

## 二十六　古代

彩色の剝げた佛たちや天人や馬や蓮の華は殆ど彼を壓倒した。彼はそれ等を見上げたまま、あらゆることを忘れてゐた。狂人の娘の手を脱した彼自身の幸運さへ。……

## 二十七　スパルタ式訓練

彼は彼の友だちと或裏町を歩いてゐた。そこへ幌をかけた人力車が一臺、まつ直に向うから近づいて來た。しかもその上に乘つてゐるのは意外にも昨夜の彼女だつた。彼女の顏はかう云ふ晝にも月の光の中にゐるやうだつた。彼等は彼の友たちの手前、勿論挨拶さへ交さなかつた。

「美人ですね。」

彼の友だちはこんなことを言つた。彼は往來の突き當りにある春の山を眺めたまま、少しもためらはずに返事をした。

「ええ、中々美人ですね。」

## 二十八　殺人

田舍道は日の光りの中に牛の糞の臭氣を漂はせてゐた。彼は汗を拭ひながら、爪先き上りの道を登つて行つた。道の兩側に熟した麥は香ばしい匂を放つてゐた。

「殺せ、殺せ。……」

彼はいつか口の中にかう云ふ言葉を繰り返してゐた。誰を？——それは彼には明らかだつた。彼は如何にも卑屈らしい五分刈の男を思ひ出してゐた。

すると黄ばんだ麥の向うに羅馬カトリック教の伽藍が一宇、いつの間にか圓屋根を現し出した。

……

## 二十九　形

それは鐵の銚子だつた。彼はこの糸目のついた銚子にいつか「形」の美を教へられてゐた。

## 三十　雨

彼は大きいベッドの上に彼女といろいろの話をしてゐた。寢室の窓の外は雨ふりだつた。濱木棉の花はこの雨の中にいつか腐つて行くらしかつた。彼女の顔は不相變月の光の中にゐるやうだつた。が、彼女と話してゐることは彼には退屈でないこともなかつた。彼は腹這ひになつたまま、靜かに一本の巻煙草に火をつけ、彼女と一しよに日を暮らすのも七年になつてゐることを思ひ出した。

「おれはこの女を愛してゐるだらうか？」

彼は彼自身にかう質問した。この答は彼自身を見守りつけた彼自身にも意外だつた。

「おれは未だに愛してゐる。」

## 三十一　大地震

それはどこか熟し切つた杏の匂に近いものだつた。彼は燒けあとを歩きながら、かすかにこの匂を感じ、炎天に腐つた死骸の匂も存外惡くないと思つたりした。が、死骸の重なり重つた池の前に立つて見ると、「酸鼻」と云ふ言葉も感覺的に決して誇張でないことを發見した。殊に彼を動かしたのは十二三歳の子供の死骸だつた。彼はこの死骸を眺め、何か羨ましさに近いものを感じた。「神々に愛せらるるものは夭折す」――かう云ふ言葉なども思ひ出した。彼の姉や異母弟はいづれも家を燒かれてゐた。しかし彼の姉の夫は僞證罪を犯した爲に執行猶豫中の體だつた。……

「誰も彼も死んでしまへば善い。」

彼は燒け跡に佇んだまま、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。

## 三十二　喧嘩

彼は彼の異母弟と取り組み合ひの喧嘩をした。彼の弟は彼の爲に壓迫を受け易いのに違ひなか

つた。同時に又彼も彼の弟の爲に自由を失つてゐるのに違ひなかつた。彼の親戚は彼の弟に「彼を見慣へ」と言ひつづけてゐた。しかしそれは彼自身には手足を縛られるのも同じことだつた。彼等は取り組み合つたまま、とうとう縁先へ轉げて行つた。縁先の庭には百日紅が一本、――彼は未だに覺えてゐる。――雨を持つた空の下に赤光りに花を盛り上げてゐた。

## 三十三　英雄

彼はヴォルテェルの家の窓からいつか高い山を見上げてゐた。氷河の懸つた山の上には禿鷹の影さへ見えなかつた。が、脊の低い露西亞人が一人、執拗に山道を登りつづけてゐた。

ヴォルテェルの家も夜になつた後、彼は明るいランプの下にかう云ふ傾向詩を書いたりした。あの山道を登つて行つた露西亞人の姿を思ひ出しながら。……

――誰よりも十戒を守つた君は
誰よりも十戒を破つた君だ。

誰よりも民衆を愛した君は
誰よりも民衆を輕蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上つた君は
誰よりも現實を知つてゐた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ
草花の匂のする電氣機關車だ。——

## 三十四　色彩

三十歳の彼はいつの間か或空き地を愛してゐた。そこには唯苔の生へた上に煉瓦や瓦の缺片などが幾つも散らかつてゐるだけだつた。が、それは彼の目にはセザンヌの風景畫と變りはなかつた。

彼はふと七八年前の彼の情熱を思ひ出した。同時に又彼の七八年前には色彩を知らなかつたのを發見した。

## 三十五　道化人形

彼はいつ死んでも悔いないやうに烈しい生活をするつもりだつた。が、不相變養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけてゐた。それは彼の生活に明暗の兩面を造り出した。彼は或洋服屋の店に道化人形の立つてゐるのを見、どの位彼も道化人形に近いかと云ふことを考へたりした。が、意識の外の彼自身は、——言はば第二の彼自身はとうにかう云ふ心もちを或短篇の中に盛りこんでゐた。

## 三十六　倦怠

彼は或大學生と芒原の中を歩いてゐた。

「君たちはまだ生活慾を盛に持つてゐるだらうね？」

「ええ、――だつてあなたでも……」

「ところが僕は持つてゐないんだよ。制作慾だけは持つてゐるけれども。」

それは彼の眞情だつた。彼は實際いつの間にか生活に興味を失つてゐた。

「制作慾もやつぱり生活慾でせう。」

彼は何とも答へなかつた。芒原はいつか赤い穗の上にはつきりと噴火山を露し出した。彼はこの噴火山に何か羨望に近いものを感じた。しかしそれは彼自身にもなぜと云ふことはわからなかつた。……

## 三十七　越し人

彼は彼と才力の上にも格闘出來る女に遭遇した。が、「越し人」等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。それは何か木の幹に凍つた、かがやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだつた。

風に舞ひたるすげ笠の

何かは道に落ちざらん
わが名はいかで惜しむべき
惜しむは君が名のみとよ。

## 三十八　復讐

それは木の芽の中にある或ホテルの露臺だつた。彼はそこに畫を描きながら、一人の少年を遊ばせてゐた。七年前に絶緣した狂人の娘の一人息子と。
狂人の娘は卷煙草に火をつけ、彼等の遊ぶのを眺めてゐた。彼は重苦しい心もちの中に汽車や飛行機を描きつづけた。少年は幸ひにも彼の子ではなかつた。が、彼を「おぢさん」と呼ぶのは彼には何よりも苦しかつた。
少年のどこかへ行つた後、狂人の娘は卷煙草を吸ひながら、媚びるやうに彼に話しかけた。
「あの子はあなたに似てゐやしない?」
「似てゐません。第一……」

「たつて胎教と云ふこともあるでせう。」

彼は默つて目を反らした。が、彼の心の底にはかう云ふ彼女を絞め殺したい、殘虐な欲望さへない訣ではなかつた。……

## 三十九　鏡

彼は或カツフエの隅に彼の友だちと話してゐた。彼の友だちは燒林檎を食ひ、この頃の寒さの話などをした。彼はかう云ふ話の中に急に矛盾を感じ出した。

「君はまだ獨身だつたね。」

「いや、もう來月結婚する。」

彼は思はず默つてしまつた。カツフエの壁に嵌めこんだ鏡は無數の彼自身を映してゐた。冷えびえと、何か脅すやうに。……

## 四十　問答

なぜお前は現代の社會制度を攻撃するか？
資本主義の生んだ惡を見てゐるから。
惡を？　おれはお前は善惡の差を認めてゐないと思つてゐた。ではお前の生活は？
――彼はかう天使と問答した。尤も誰にも恥づる所のないシルクハツトをかぶつた天使と。……
……

## 四十一　病

彼は不眠症に襲はれ出した。のみならず體力も衰へはじめた。何人かの醫者は彼の病にそれぞれ二三の診斷を下した。――胃酸過多、胃アトニイ、乾性肋膜炎、神經衰弱、慢性結膜炎、腦疲勞、……

しかし彼は彼自身彼の病源を承知してゐた。それは彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もちだつた。彼等を、――彼の輕蔑してゐた社會を！

或雪曇りに曇つた午後、彼は或カツフエの隅に火のついた葉卷を啣へたまま、向うの蓄音機か

ら流れて來る音樂に耳を傾けてゐた。それは彼の心もちに妙にしみ渡る音樂だつた。彼はその音樂の了るのを待ち、蓄音機の前へ歩み寄つてレコオドの貼り札を檢べることにした。

Magic Flute —— Mozart

彼は咄嗟に了解した。十戒を破つたモッツアルトはやはり苦しんだのに違ひなかつた。しかしよもや彼のやうに、………彼は頭を垂れたまま、靜かに彼の卓子へ歸つて行つた。

## 四十二　神々の笑ひ聲

三十五歳の彼は春の日の當つた松林の中を歩いてゐた。二三年前に彼自身の書いた「神々は不幸にも我々のやうに自殺出來ない」と云ふ言葉を思ひ出しながら。………

## 四十三　夜

夜はもう一度迫り出した。荒れ模樣の海は薄明りの中に絶えず水沫を打ち上げてゐた。彼はかう云ふ空の下に彼の妻と二度目の結婚をした。それは彼等には歡びだつた。が、同時に又苦しみ

だつた。三人の子は彼等と一しよに沖の稻妻を眺めてゐた。彼の妻は一人の子を抱き、涙をこらへてゐるらしかつた。

「あすこに船が一つ見えるね？」

「ええ。」

「檣の二つに折れた船が。」

……

## 四十四　死

彼はひとり寢てゐるのを幸ひ、窓格子に帶をかけて縊死しようとした。が帶に頸を入れて見ると、俄かに死を恐れ出した。それは何も死ぬ刹那の苦しみの爲に恐れたのではなかつた。彼は二度目には懷中時計を持ち、試みに縊死を計ることにした。するとちよつと苦しかつた後、何も彼もぼんやりなりはじめた。そこを一度通り越しさへすれば、死にはひつてしまふのに違ひなかつた。彼は時計の針を檢べ、彼の苦しみを感じたのは一分二十何秒かだつたのを發見した。窓格子の外はまつ暗だつた。しかしその暗の中に荒あらしい鷄の聲もしてゐた。

## 四十五　Divan

Divan はもう一度彼の心に新しい力を與へようとした。それは彼の知らずにゐた「東洋的なゲエテ」だつた。彼はあらゆる善惡の彼岸に悠々と立つてゐるゲエテを見、絶望に近い羨ましさを感じた。詩人ゲエテは彼の目には詩人クリストよりも偉大だつた。この詩人の心の中にはアクロポリスやゴルゴタの外にアラビアの薔薇さへ花をひらいてゐた。若しこの詩人の足あとを辿る多少の力を持つてゐたらば、――彼はディヴァンを讀み了り、恐しい感動の靜まつた後、しみじみ生活的宦官に生まれた彼自身を輕蔑せずにはゐられなかつた。

## 四十六　譃

彼の姉の夫の自殺は俄かに彼を打ちのめした。彼は今度は姉の一家の面倒も見なければならなかつた。彼の將來は少くとも彼には日の暮のやうに薄暗かつた。彼は彼の精神的破産に冷笑に近いものを感じながら、(彼の惡德や弱點は一つ残らず彼にはわかつてゐた。)不相變いろいろの本を

讀みつづけた。しかしルッソオの懺悔錄さへ英雄的な譃に充ち滿ちてゐた。殊に「新生」に至つては、——彼は「新生」の主人公ほど老獪な僞善者に出會つたことはなかつた。が、フランソア・ヴィヨンだけは彼の心にしみ透つた。彼は何篇かの詩の中に「美しい牡」を發見した。

絞罪を待つてゐるヴィヨンの姿は彼の夢の中にも現れたりした。彼は何度もヴィヨンのやうに人生のどん底に落ちようとした。が、彼の境遇や肉體的エネルギイはかう云ふことを許す訣はなかつた。彼はだんだん衰へて行つた。丁度昔スウイフトの見た、木末から枯れて來る立ち木のやうに。……………

## 四十七　火あそび

彼女はかがやかしい顏をしてゐた。それは丁度朝日の光の薄氷にさしてゐるやうだつた。彼は彼女に好意を持つてゐた。しかし戀愛は感じてゐなかつた。のみならず彼女の體には指一つ觸らずにゐたのだつた。

「死にたがつていらつしやるのですつてね。」

「ええ。――いえ、死にたがつてゐるよりも生きることに飽きてゐるのです。」

彼等はかう云ふ問答から一しよに死ぬことを約束した。

「プラトニツク・スウイサイドですね。」

「ダブル・プラトニツク・スウイサイド。」

彼は彼自身の落ち着いてゐるのを不思議に思はずにはゐられなかつた。

## 四十八　死

彼は彼女とは死ななかつた。唯未だに彼女の體に指一つ觸つてゐないことは彼には何か滿足だつた。彼女は何ごともなかつたやうに時々彼と話したりした。のみならず彼に彼女の持つてゐた青酸加里を一罎渡し、「これさへあればお互に力強いでせう」とも言つたりした。

それは實際彼の心を丈夫にしたのに違ひなかつた。彼はひとり籐椅子に坐り、椎の若葉を眺めながら、度々死の彼に與へる平和を考へずにはゐられなかつた。

## 四十九　剝製の白鳥

彼は最後の力を盡し、彼の自敍傳を書いて見ようとした。が、それは彼自身には存外容易に出來なかつた。それは彼の自尊心や懷疑主義や利害の打算の未だに殘つてゐる爲だつた。彼はかう云ふ彼自身を輕蔑せずにはゐられなかつた。しかし又一面には「誰でも一皮剝いて見れば同じことだ」とも思はずにはゐられなかつた。「詩と眞實と」と云ふ本の名前は彼にはあらゆる自敍傳の名前のやうにも考へられ勝ちだつた。のみならず文藝上の作品に必しも誰も動かされないのは彼にははつきりわかつてゐた。彼の作品の訴へるものは彼に近い生涯を送つた彼に近い人々の外にある筈はない。――かう云ふ氣も彼には働いてゐた。彼はその爲に手短かに彼の「詩と眞實と」を書いて見ることにした。

彼は「或阿呆の一生」を書き上げた後、偶然或古道具屋の店に剝製の白鳥のあるのを見つけた。それは頸を擧げて立つてゐたものの、黃ばんだ羽根さへ蟲に食はれてゐた。彼は彼の一生を思ひ、淚や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯發狂か自殺かだけだつた。彼は日の暮

の往來をたつた一人歩きながら、徐ろに彼を滅しに來る運命を待つことに決心した。

## 五十　俘

彼の友だちの一人は發狂した。彼はこの友だちにいつも或親しみを感じてゐた。それは彼にはこの友だちの孤獨の、――輕快な假面の下にある孤獨の人一倍身にしみてわかる爲だつた。彼はこの友だちの發狂した後、二三度この友だちを訪問した。

「君や僕は惡鬼につかれてゐるんだね。世紀末の惡鬼と云ふやつにねえ。」

この友だちは聲をひそめながら、こんなことを彼に話したりした。が、それから二三日後には或溫泉宿へ出かける途中、薔薇の花さへ食つてゐたと云ふことだつた。彼はこの友だちの入院した後、いつか彼のこの友だちに贈つたテラコツタの半身像を思ひ出した。それはこの友だちの愛した「檢察官」の作者の半身像だつた。彼はゴオゴリイも狂死したのを思ひ、何か彼等を支配してゐる力を感じずにはゐられなかつた。

彼はすつかり疲れ切つた揚句、ふとラディゲの臨終の言葉を讀み、もう一度神々の笑ひ聲を感

じた。それは「神の兵卒たちは己をつかまへに來る」と云ふ言葉だつた。彼は彼の迷信や彼の感傷主義と闘はうとした。しかしどう云ふ闘ひも肉體的に彼には不可能だつた。「世紀末の悪鬼」は實際彼を虐んでゐるのに違ひなかつた。彼は神を力にした中世紀の人々に羨しさを感じた。しかし神を信ずることは――神の愛を信ずることは到底彼には出來なかつた。あのコクトオさへ信じた神を！

## 五十一　敗北

彼はペンを執る手も震へ出した。のみならず涎さへ流れ出した。彼の頭は〇・八のヴェロナアルを用ひて覺めた後の外は一度もはつきりしたことはなかつた。しかもはつきりしてゐるのはやつと半時間か一時間だつた。彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言はば刃のこぼれてしまつた、細い劍を杖にしながら。

（昭和二年六月）

〔遺稿〕

# 或舊友へ送る手記

誰もまだ自殺者自身の心理をありのままに書いたものはない。それは自殺者の自尊心や或は彼自身に對する心理的興味の不足によるものであらう。僕は君に送る最後の手紙の中に、はつきりこの心理を傳へたいと思つてゐる。尤も僕の自殺する動機は特に君に傳へずとも善い。レニエは彼の短篇の中に或自殺者を描いてゐる。この短篇の主人公は何の爲に自殺するかを彼自身も知つてゐない。君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を發見するであらう。しかし僕の經驗によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示してゐるだけである。自殺者は大抵レニエの描いたやうに何の爲に自殺するかを知らないであらう。それは我々の行爲するやうに複雜な動機を含んでゐる。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の將來に對する唯ぼんやりした不安である。君は或は僕の言葉を信用することは出來ないであらう。しかし十年間の僕の經驗は僕に近い

人々の僕に近い境遇にゐない限り、僕の言葉は風の中の歌のやうに消えることを教へてゐる。從つて僕は君を咎めない。……

僕はこの二年ばかりの間は死ぬことばかり考へつづけた。僕のしみじみした心もちになつてマインレンデルを讀んだのもこの間である。マインレンデルは抽象的な言葉に巧みに死に向ふ道程を描いてゐるのに違ひない。が、僕はもつと具體的に同じことを描きたいと思つてゐる。家族たちに對する同情などはかう云ふ欲望の前には何でもない。これも亦君には、Inhuman の言葉を與へずには措かないであらう。けれども若し非人間的とすれば、僕は一面には非人間的である。

僕は何ごとも正直に書かなければならぬ義務を持つてゐる。(僕は僕の將來に對するぼんやりした不安も解剖した。それは僕の「阿呆の一生」の中に大體は盡してゐるつもりである。唯僕に對する社會的條件、――僕の上に影を投げた封建時代のことだけは故意にその中にも書かなかつた。なぜ又故意に書かなかつたと言へば、我々人間は今日でも多少は封建時代の影の中にゐるからである。僕はそこにある舞臺の外に背景や照明や登場人物の――大抵は僕の所作を書かうとした。のみならず社會的條件などはその社會的條件の中にゐる僕自身に判然とわかるかどうかも疑はな

い訣には行かないであらう。)――僕の第一に考へたことはどうすれば苦まずに死ぬかと云ふことだつた。縊死は勿論この目的に最も合する手段である。が、僕は僕自身の縊死してゐる姿を想像し、贅澤にも美的嫌惡を感じた。(僕は或女人を愛した時も彼女の文字の下手だつた爲に急に愛を失つたのを覺えてゐる。)溺死も亦水泳の出來る僕には到底目的を達する筈はない。のみならず萬一成就するとしても縊死よりも苦痛は多いわけである。轢死も僕には何よりも先に美的嫌惡を與へずにはゐなかつた。ピストルやナイフを用ふる死は僕の手の震へる爲に失敗する可能性を持つてゐる。ビルデイングの上から飛び下りるのもやはり見苦しいのに相違ない。僕はこれ等の事情により、藥品を用ひて死ぬことにした。藥品を用ひて死ぬことは縊死することよりも苦しいであらう。しかし縊死することよりも美的嫌惡を與へない外に蘇生する危險のない利益を持つてゐる。唯この藥品を求めることは勿論僕には容易ではない。僕は内心自殺することに定め、あらゆる機會を利用してこの藥品を手に入れようとした。同時に又毒物學の知識を得ようとした。

それから僕の考へたのは僕の自殺する場所である。僕の家族たちは僕の死後には僕の遺産に手よらなければならぬ。僕の遺産は百坪の土地と僕の家と僕の著作權と僕の貯金二千圓のあるだけ

である。僕は僕の自殺した爲に僕の家の賣れないことを苦にした。從つて別莊の一つもあるブルヂョアたちに羨ましさを感じた。君はかう云ふ僕の言葉に或可笑しさを感じるであらう。僕も亦今は僕自身の言葉に或可笑しさを感じてゐる。が、このことを考へた時には事實上しみじみ不便を感じた。この不便は到底避けるわけに行かない。僕は唯家族たちの外に出來るだけ死體を見られないやうに自殺したいと思つてゐる。

　しかし僕は手段を定めた後も半ばは生に執着してゐた。從つて死に飛び入る爲のスプリング・ボオドを必要とした。（僕は紅毛人たちの信ずるやうに自殺することを罪惡とは思つてゐない。佛陀は現に阿含經の中に彼の弟子の自殺を肯定してゐる。曲學阿世の徒はこの肯定にも「やむを得ない」場合の外はなどと言ふであらう。しかし第三者の目から見て「やむを得ない」場合と云ふのは見す見すより悲慘に死ななければならぬ非常の變の時にあるものではない。誰でも皆自殺するのは彼自身に「やむを得ない場合」だけに行ふのである。その前に敢然と自殺するものは寧ろ勇氣に富んでゐなければならぬ。）このスプリング・ボオドの役に立つものは何と言つても女人である。クライストは彼の自殺する前に度たび彼の友だちに（男の）途づれになることを勸誘した。又ラシ

イヌもモリエエルやボアロオと一しよにセエヌ河に投身しようとしてゐる。しかし僕は不幸にもかう云ふ友だちを持つてゐない。唯僕の知つてゐる女人は僕と一しよに死なうとした。が、それは僕等の爲には出來ない相談になつてしまつた。そのうちに僕はスプリング・ボオドなしに死に得る自信を生じた。それは誰も一しよに死ぬもののないことに絶望した爲に起つた爲ではない。寧ろ次第に感傷的になつた僕はたとひ死別するにもしろ、僕の妻を劬りたいと思つたからである。同時に又僕一人自殺することは二人一しよに自殺するよりも容易であることを知つたからである。そこには又僕の自殺する時を自由に選ぶことの出來ると云ふ便宜もあつたのに違ひない。

最後に僕の工夫したのは家族たちに氣づかれないやうに巧みに自殺することである。これは數箇月準備した後、兎に角或自信に到達した。(それ等の細部に亙ることは僕に好意を持つてゐる人人の爲に書くわけに行かない。尤もここに書いたにしろ、法律上の自殺幇助罪(このくらゐ滑稽な罪名はない。若しこの法律を適用すれば、どの位犯罪人の數を殖やすことであらう。藥局や銃砲店や剃刀屋はたとひ「知らない」と言つたにもせよ、我々人間の言葉や表情に我々の意志の現れる限り、多少の嫌疑を受けなければならぬ。のみならず社會や法律はそれ等自身自殺幇助罪を構

成してゐる。最後にこの犯罪人たちは大抵は如何にもの優しい心臓を持つてゐることであらう。）を構成しないことは確かである。）僕は冷やかにこの準備を終り、今は唯死と遊んでゐる。この先の僕の心もちは大抵マインレンデルの言葉に近いであらう。

我々人間は人間獣である爲に動物的に死を怖れてゐる。所謂生活力と云ふものは實は動物力の異名に過ぎない。僕も亦人間獣の一匹である。しかし食色にも倦いた所を見ると、次第に動物力を失つてゐるであらう。僕の今住んでゐるのは氷のやうに透み渡つた、病的な神經の世界である。僕はゆうべ或賣笑婦と一しよに彼女の賃金（！）の話をし、しみじみ「生きる爲に生きてゐる」我々人間の哀れさを感じた。若しみづから甘んじて永久の眠りにはひることが出來れば、我々自身の爲に幸福でないまでも平和であるには違ひない。しかし僕のいつ敢然と自殺出來るかは疑問である。唯自然はかう云ふ僕にはいつもよりも一層美しい。君は自然の美しいのを愛し、しかも自殺しようとする僕の矛盾を笑ふであらう。けれども自然の美しいのは僕の末期の目に映るからである。僕は他人よりも見、愛し、且又理解した。それだけは苦しみを重ねた中にも多少僕には満足である。どうかこの手紙は僕の死後にも何年かは公表せずに措いてくれ給へ。僕は或は病死

のやうに自殺しないとも限らないのである。

附記。僕はエムペドクレスの傳を讀み、みづから神としたい欲望の如何に古いものかを感じた。僕の手記は意識してゐる限り、みづから神としないものである。いや、みづから大凡下の一人としてゐるものである。君はあの菩提樹の下に「エトナのエムペドクレス」を論じ合つた二十年前を覺えてゐるであらう。僕はあの時代にはみづから神にしたい一人だつた。

（昭和二年七月）

〔遺稿〕

昭和十年三月二十六日印刷
昭和十年四月　三　日發行

芥川龍之介全集第五卷

著作者　芥川龍之介

發行者　岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷所　精興社
東京市神田區錦町三丁目十一番地

發行所　岩波書店
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
電話九段(33)一一八七・一一八八番
　　　　　　二一八九・二一八〇番
振替口座東京七四四一六番

（大森製本）